
バカと天使と超能力者

JACK

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

バカと天使と超能力者

【Nコード】

N0301N

【作者名】

JACK

【あらすじ】

水野 真琴が文月学園に入学して1年がたった。

明久や雄二をはじめとするおなじみのメンバー達とのドタバタ学園生活が始まる。

真琴の妹も登場してさらにハチャメチャに!?

pv500000突破!ユニークも50000突破!

現在・勉強会編

第1問〜新学期の始まり〜（前書き）

バカテスト（科学）

問 以下の問いに答えなさい

「調理の為に火にかける鍋を製作する際、重量が軽いのでマグネシウムを材料に選んだのだが、調理を始めると問題が発生した。この時の問題点とマグネシウムの代わりに用いるべき金属合金の例を一つ挙げなさい。」

姫路瑞希の答え

『問題点：マグネシウムは火にかけると激しく酸素と反応する為危険であるという点。』

合金の例：ジュラルミン』

教師のコメント

正解です。合金なので『鉄』ではダメという引っ掛け問題なのですが、姫路さんは引っかかりませんでしたね。

2

水野真琴の答え

『問題点：火にかけると鍋が溶けてしまう点。』

土屋康太の答え

『問題点：ガス代を払っていなかったこと。』

教師のコメント

そこは問題じゃありません。それに、ガスコンロの火で溶けることはありません。

吉井明久の答え

『合金の例：未来合金（すごく強い）』

教師のコメント

すごく強いと言われても。

第1問〜新学期の始まり〜

今私は文月学園への道を走っていた。

「やばい、新学期早々遅刻しちゃう。」

「あ、おーい真琴。」

ん、この声は…

「あ、おはようバク…明久。急がないと遅刻するよ。」

こいつは吉井明久。世界一のバカで、私と同じ小学校に通っていました。

「ねえ、今バカって言いかけなかった？それに失礼なこと考えなかった？」

するどいですね。

「気のせいだよ。それより急がないと本当に遅刻しちゃうよ。」

「あ、うん。そうだね。」

やっぱりバカですね。

しばらく走っていると学園が見えてきました。

「おはようございます。鉄じ…西村先生」（鉄人先生）。「」

明久…ごまかしましたね。

「お前ら今鉄人って言わなかったか？」

「気のせいですよ。」

「はい、言いました。」

「全く…面と向かって俺を鉄人と呼ぶのは坂本と水野くらいだよ」

「ちゃんと先生って付けたからいいじゃないですか。明久も言いそ
うになりましたし。」

「ここで暴露しておきましょう。」

「ちょっと真琴、なんでバラすのさ!？」

嘘はいけませんよ、明久。

「まあいい、ほらお前らで最後だぞ。」

「「ありがとうございます。」」

「私は分ってるからいいとして、明久どうだった？」

私は振り分け試験前日に食べ過ぎて、次の日お腹を壊してしまったので、試験を受けられなかったのです。

「えーと、Fクラスだったよ。」

やっぱりですか。予想どおりです。

「でも真琴もFクラスだからいいか。」

どういふことでしょうか

「おい、お前ら早く行け。学園内で遅刻したいのか。」

「「分りました。」」

こうして私たちの最低クラスでの生活が始まりました。

第1問〜新学期の始まり〜（後書き）

J「第1問が終わりました。小説書くのって難しいですね。」

真「何言ってるの？まだまだ先は長いよ。」

J「分ってるよ。」

真「ホントかな？」

J「毎日更新するようになりたいと思います。変なところがあったら教えてください。」

次回『Let's 試召戦争』

J&真「お楽しみに!!!」

第2問〜Let's 試召戦争〜(前書き)

バカテスト(国語)

問 以下の意味を持つことわざを答えなさい。

- 『(1)得意なことでも失敗してしまうこと』
- 『(2)悪いことがあつたうえに更に悪いことがおきる喩え』

姫路瑞希の答え

- 『(1)弘法も筆の誤り』
- 『(2)泣きつ面に蜂』

教師のコメント

正解です。他にも(1)なら『河童の川流れ』や『猿も木から落ちる』、(2)なら『踏んだり蹴つたり』や『弱り目に祟り目』などがありますね。

土屋康太の答え

- 『(1)弘法の川流れ』
- 教師のコメント
- シユールな光景ですね。

水野真琴の答え

- 『(1)河童の川流れ』
- 教師のコメント
- 文字を書き間違えただけだと信じます。

吉井明久の答え

- 『(2)泣きつ面蹴つたり』
- 教師のコメント
- 君は鬼ですか。

第2問〜Let's 試召戦争〜

「「うわぁ〜」」

私たちは今Aクラスの前にいます。

「システムデスクにリクライニングシート、ノートパソコン支給か
〜」

うらやましそうですね。

「あ、フリードリンクサーバーだ！お菓子も食べ放題だ！」

それにしても…

「いいなあAクラス〜」

はしゃぎすぎです。

「落ち着いて明久、Fクラス行くよ」

「あ、そうだった。」

「「うわぁ」「

え、最初と台詞が同じだった？

いえ、違いますよ。こめられている感情が…

「じゃあ入ろうか、明久。」

「うん」

「すみません、ちょっと遅れちゃいました」

明久が愛嬌たつぷりに言い放ちます。

「早くすわ」…おう明久に真琴、遅かったじゃないか」

雄二が答えてくれましたが、何て言いかけたんでしょうか？

「おはよう雄二。さっきなんか言いかけなかった？」

「気のせいじゃないか？」

「そう？」

何かおかしい気がします、まあいいでしょう。

「雄二おはよう。何やってんの？」

「先生が遅れているらしいから、代わりに教壇に上がってみた。」

「ん？ということは雄二がFクラス代表なの？」

「ああ、そうだ。」

そうなんですか。ということは、雄二を説得すればこのクラス全体を動かせるってことですね。思わず顔がほころんでしまいます。

「「「つつ／＼／」」」

ん、どうしたんでしょうか？何で私から顔をそらすんでしょうかと、そんなことを考えていると

「すみません通してもらえますか？」

後から声がありました。クラスメイト……じゃなさそうですね。学生服を着てませんし

「それと席についてもらえますか？HRを始めますので。」

このクラスの担任のようですね。

「「はい、わかりました。」」

「うーっす。」

私と明久と雄二はそれぞれ返事をしてそこらの席(?)に座りました。

「えー、おはようございます。二年F組の担任の福原慎です。よろしく願います。」

福原先生は薄汚れた黒板に名前を書こうとして、やめました。

チヨークすら無いんですかこの教室は？

「皆さん全員に座布団と卓袱台は支給されてますか？不備があれば申し出てください。」

座布団に卓袱台？改めてみても酷い教室ですね。廃屋のようです。

「えー、では自己紹介でも始めましょうか。そうですね、廊下側の人からお願います。」

「木下秀吉じゃ。演劇部に所属しておる。」

最初は秀吉ですか。爺言葉が特徴で、一見女子のような顔立ちをしています。男子です。

ん？明久が少しにやついています。

一応確認しておきますか。

「明久、秀吉の性別は？」

「おん…いや、おと…第3の性別『秀吉』です。」

「何それ？2つめに言いかけたのでいいと思うんだけど…」

「 というわけじゃ。今年一年よろしく頼むぞい」

「……………土屋康太。」

ん？話をしているうちに次の人が名前を告げていました。

また知り合いですか。

それにしてもこの教室にはほとんど男子しか見当たりませんね。

「 です。海外育ちで、日本語は会話はできるけど読み書きが苦手です。

あ、でも英語も苦手です。育ちはドイツだったので。趣味は」

おお。女子の声になります。女子がもう1人いてよかったです。誰でしょう？

「趣味は吉井明久を殴ることです」

この恐ろしくピンポイントな趣味を持つのは…美波ですか。

「はろはろー」

やっぱり去年のクラスメイトの1人の島田美波さんです。笑顔で明久に手を振ってますが…

明久、震えていますよ？

えーと次の人は、私ですか。

「水野真琴です。腹痛で振り分け試験を受けられなかったので、Fクラスになりましたが、このクラスでも全力を尽くしたいと思っています。よろしくお願いします。(にこっ)」

最後に笑いかけてみました。あれ、何で皆さん顔を伏せるんですか？何か紅くなってるし…

「次は明久の番だよ。」

明久の方を見ると何かぶつぶつ言っていました。

「…たまに怒って殴ったりしなければ完璧なのに(ブツブツ)」

どうしたんでしょうか？

「明久？」

「ひゃいつ。え、あ、何？僕の番？

(コホン) 吉井明久です。気軽に『ダーリン』って呼んでください
ね。」

『『『『『ダーリン！』『』『』『』』』』』

「失礼。忘れてください。とにかくよろしくお願いします。」

うわあ、明久が本気で気持ち悪そうな顔をしています。まあ自業自得ですね。

そんな明久の気持ちとは無関係に自己紹介は進んでいきます。

「あの、遅れて、すいま、せん…」

『え??.?』

誰からというわけでもなく、教室全体から驚きの声が上がります。
まあ、仕方ないでしょう。

「おはよう、瑞希!」

「あ、おはようございます。まこちゃ…真琴ちゃん。」

「まこでいいのに…あ、瑞希自己紹介しなよ。皆してるよ。」

「は、はい!あの、姫路瑞希といます。よろしくおねがいます。」

「はいっ!質問です!何でここにいるんですか?」

「あ、はいっ。その、振り分け試験の時高熱を出してしましまして…」

突然の質問におどおどしながら瑞希が答えます。

そんな瑞希の言い分を聞いて、

『そういえば、俺も熱(の問題)が出たせいでFクラスに。』

『ああ。化学だろ?アレは難しかったな』

『俺は弟が事故に遭ったと聞いて実力を出し切れなくて』

『黙れ一人っ子』

『前の晩、彼女が寝かせてくれなくて』

『今年一番の大嘘をありがとう』

…想像以上にバカだらけですね。

「で、ではっ、一年間よろしくお願いしますっ。」

そう言っつて明久と雄二の間の席（私の斜め後ろの席）に座りました。

「緊張しましたあ〜」

瑞希が息をつきます。

ん？明久が話しかけようとしてますね。邪魔してやりましょう

「あのさ姫〜」「姫路（瑞希）」

雄二と声が重なりました。

「は、はいっ。何ですか？まこちゃんと、えーっ…」

「坂本雄二だ。よろしく頼む。」

「ところで瑞希、体調はもついいの？」

「あ、それは僕も気になる。」

明久が無理矢理会話に入ってきました。

「よ、吉井君!?!」

明久の顔を見て驚く瑞希。さて、フォローしてあげますか。

「「姫路（瑞希）。明久がブサイクですまん（ごめんね）。」」

また声が重なりました。考えることは一緒ですね。

「そ、そんな！目もパツチリしてるし、顔のラインも細くて綺麗だし、全然不細工なんかじゃないですよ！その、むしろ…」

「そう言われると確かに見てくれは悪くない顔をしているかもしれないな。」

「確かにね。そういえば私の知人にも明久に興味を持っている人がいた気がするし…」

「え、それは誰 「それって誰ですか!?!」」

お、2人とも食いついてきました。横で雄二が笑いをこらえています。

「確か、久保…」

「久保?」

「利光だったかな。」（久保利光 オス）

「……………」

「あれ、明久何で声を殺して泣いてんの？」

「（シクシク）僕もうお婿に行けない…」

明久はいじめがいらいますね。

「安心して明久。半分冗談だから…」

「え、残りの半ぶ　「ところで姫路。体は大丈夫なのか？」」

「あ、はい。もうすっかり平気です。」

「ねえ真琴！残りの半分は？」

明久、そんな大きい声出したら…

「はいはい。その人達、静かにしてくださいね。」

先生が机をバンバンと叩いて注意してきました。

「あ、すいませ…」

バキィツ　バラバラバラ…

あれ？先生そんなに強く叩いたんですか？机がごみ屑と化しましたよ。

「えゝ…替えを用意してきます。少し待っていてください。」

そう言つて、先生は足早に教室を去っていきました。

「「「「あ、あはは…」「」「」

皆で苦笑いします。

「…雄二、ちよつといい？」

「ん？なんだ？」

「「こじや話しにくいから廊下で。」

「別に構わんが」

そう言つて2人は廊下に行きました。まあ、何の話か予想はつきま
すけどね…

「どうしたんでしょうか？」

「さあね？」

しばらくして2人が先生と一緒に戻ってきました。

「さて、それでは自己紹介の続きをお願いします。」

「えー、須川亮です。趣味は」

再び淡々とした自己紹介がされます。

「坂本君、君が自己紹介最後の1人ですよ。」

「了解。」

先生に呼ばれて雄二が席を立ちます。

なんか、こういう姿は代表っぽく見えますね。

「坂本君はFクラスのクラス代表でしたよね？」

雄二が鷹揚に頷きます。

「Fクラス代表の坂本雄二だ。俺のことは代表でも坂本でも、好きなように呼んでくれ。」

「さて、みんなに一つ聞きたい。」

雄二がゆっくりと告げます。おお、うまいですね。みんな注目してますよ。

雄二は室内の各所に視線を移しました。つられて皆も視線を追います。

かび臭い教室 古く汚れた座布団 薄汚れた卓袱台を順番に眺めます。

「Aクラスは冷暖房完備の上、座席はリクライニングシートらしいが」

一呼吸置いて…こう言いました。

「不満はないか？」

『『『『大ありじゃあつ!!』』』』』

ああ、これが魂の叫びというものでしょうか？

「だろう？俺だってこの境遇は大いに不満だ。代表として、問題意識を抱いている。」

『そつだそつだ!』

『いくら学費が安いからと言って、この設備はあんまりだ!改善を要求する!』

『そもそもAクラスだって同じ学費だろ?あまりに差が大きすぎる!』

うわあ、皆の不満が爆発してます。どうするんですか?雄二?

「みんなの意見はもつともだ。そこで」

不敵な笑みを浮かべながら

「これは代表としての提案だが」

「FクラスはAクラスに『試召戦争』を仕掛けようと思う。」

雄二は戦争の引き金を引きました。

第2問〜Let's 試召戦争〜（後書き）

真「ねえ作者さん。」

」「何だい真琴。」

真「バランスって考えたことある？」

」「……………」

真「第1問とかなり長さが違うんだけど？見る人のこと考えなよ。」

」「すみません。反省してます。次からはちゃんとそのことも考えて書きます。」

真「うん。わかればいいよ。」

」「ところでさ、この話で君の本当の性格に気づいた人がいると思うよ。」

真「うっっ」

」「まあ、次の話でどうせ分かるからいいか。」

真「……………」

」「というわけで次回〜真琴の本性と作戦会議〜をお楽しみに」

真「次の話を書かれる前にあなたを殺すわ」

「…それでは次回もお楽しみに。ま、待て真琴。超能力は反則
ウギヤアアア」

第3問〜真琴の本性と作戦会議〜（前書き）

バカテスト（英語）

問 以下の英文を訳しなさい。

「This is the bookshelf that
my grandmother had used regularly.
」

姫路瑞希の答え

「これは私の祖母が愛用していた本棚です。」

教師のコメント

正解です。きちんと勉強していますね。

水野真琴の答え

「これは私の祖母が愛用していた本棚でした。」

教師のコメント

惜しいですね。最後が過去形になっています。あと、用紙が濡れているのはなぜでしょうか？

土屋康太の答え

「これは

」

教師のコメント

訳せたのはThisだけですか。

吉井明久の答え

「 * x 」

教師のコメント

できれば地球上の言語で。

第3問〜真琴の本性と作戦会議〜

『勝てるわけがない。』

『これ以上設備を落とされるなんて嫌だ。』

『姫路さんがいたら何もいらない。』

皆の人が言うことはもつともです。Aクラスへの宣戦布告なんて、無謀なだけだとも思っているんでしょう。

「そんなことはない。必ず勝てる。いや、俺が勝たせてみせる。」

おお、言い放ちました。すごい自信ですね。でも、

『何を馬鹿なことを。』

『できるわけないだろう。』

『何の根拠があつてそんなことを。』

反対意見多数ですよ。

「根拠ならあるさ。このクラスはに試験召喚戦争で勝つことのできる要素が揃っている。それを今から説明してやる」

お得意の不敵な笑みをうかべながら、壇上から皆を見おろす雄二。

「おい康太。畳に顔をつけて姫路のスカートを覗いてないで前に来

い。」

「……………！！（ブンブン）」

「は、はわっ」

必死になって顔と手を降って否定のポーズを取る康太。いや、豊のあとでバレバレですよ。でも、恥も外聞もなく低い姿勢から覗き込むなんて、流石としかいえません。

「土屋康太。こいつがああの有名な、寡黙なる性識者だ。」

「……………！！（ブンブン）。」

ムツツリーニという名前はこの学園で知らない人はいないくらい有名です。その名前は男子生徒には畏怖と畏敬を、女子生徒には軽蔑を持って挙げられます。

私ですか？別に軽蔑とかはしてませんよ。彼の仕事の手伝いもしますしね。

『ムツツリーニだと…？』

『馬鹿な、ヤツがそうだといいのか…？』

『だが見る。あそこまで明らか覗きの証拠を未だに隠そうとしているぞ…』

『ああ。ムツツリの名に恥じない姿だ…』

「……？」

瑞希が頭にクエスチョンマークを浮かべているようですが、ムツッリーニの由来がわからないのでしょうか？教えてあげたほうがいいのでしょうか？

「姫路のことは説明するまでもないだろう。皆もその力はよく知ってるはずだ。」

「えっ？わ、私ですかっ？」

「ああ。うちの主戦力の一人だ。期待している。」

確かに瑞希ほど頼りになる戦力はいないでしょう。

「そうだ。俺達には姫路さんがいるんだった。」

「彼女ならAクラスにも引けをとらない。」

「ああ。彼女さえいれば何もいらないな。」

さつきから瑞希にラブコールを送ってるのは誰ですか？

「木下秀吉だっている。」

彼は演劇部のホープだとか、双子のお姉さんのこととかで有名だったりします。

「おお…！！」

「ああ。アイツ確か、木下優子の。」

「当然俺も全力を尽くす。」

『確かになんだかやってくれそうな奴だ。』

気がついたらクラスの士気は最高潮に達していました。

「それに、吉井明久だっている。」

…シン

あ、一気に下がりました。

「ちょっと雄二！どうしてそこで僕の名前を呼ぶのさ！まったくそんな必要はないよね！　せつかく上がってきた士気に翳りが見えてるし！って、なんでで僕を睨むの？士気が下がったのは僕のせいじゃないでしょう！」

まあ、聞いたことがあったとしてもろくな話じゃないでしょうが…
教えてあげたほうがいいんじゃないですか？

「そうか。知らないようなら教えてやる。こいつの肩書きは《観察処分者》だ」

言っちゃいましたね…

『…それって、バカの代名詞じゃなかったっけ？』

その通りです！

「ち、違うよ。ちょっとお茶目な」「そうだ。バカの代名詞だ。」
16歳に……って肯定するなバカ雄二！」

《観察処分者》いかなければ教師の雑用係です。そのため、明久の召喚獣は物理干渉が可能です。

「あの、まこちゃん。それってどういうものなんですか？」

「簡単に言うと……召喚獣が物に触れられて、教師の手伝いをその召喚獣を使ってこなす……まあ、雑用係みたいなものだよ。」

「そうなんですか？それって凄いですね。試験召喚獣って見た目と違って力持ちって聞きましたから、そんなことができるなら、便利ですよ。」

「別にそんな凄いものじゃないよ。教師の承認なしでは自由に使えないし……」

しかも、その負担の何割かは明久にフィードバックされます。例えば、召喚獣が攻撃されたりすると自分にその痛みも返ってきます。まあメリットもありますけど

「それに、このクラスには自由天使フリーダムエンジェルだっている。」

瑞希と話していると、話が進んでいました。ん？自由天使って

『何？自由天使だと？』

『そいつってAクラス並の天才じゃないか。』

『それに噂では超能力者だっていうぞ。』

『いったい誰なんだ？』

「皆、落ち着け。今教えてやる。真琴、前に来てくれ。」

雄二に呼ばれて前に出ます。

「コイツが自由天使の二つ名を持ち、超能力者でもある。水野真琴だ。」

『アイツがそうだというのか？』

『ということはAクラスレベルの奴が3人もいるということか。』

『よくみたら超かわいいじゃないか！』

『ああ。流石、自由天使だ。』

私の肩書きを知って皆がいろいろな反応をします。最後の2人は違
う気がしますが

「真琴、お前もなんか言っただけ。」

「あ、うん。改めて自己紹介します。水野真琴です。今年一年間、
全力でがんばりたいと思っています。よろしくね！（ニコッ）」

最後にもう一回微笑んでみました。

『ウオオオオオー』

「「えっ！」」

私が使者になると聞いて、明久と雄二が驚く。あれ？どうしたんだろっ？

「だめだよ真琴。下位勢力の使者って大抵酷い目に遭うよ。」

そんな明久の心配に

「大丈夫。そんなのゲームやアニメの世界の話だよ。」

「しかし、お前がこのクラスにいることは隠しておきたいんだが…」

どうやら雄二に作戦があったようです。ですが

「嫌だよ。私は普通に試召戦争で戦いたいもん。それなら瑞希だけでも十分でしょ？」

「お前がそういうなら、頼んだぞ。俺はこいつらに作戦を話しておく。」

雄二の承諾がありました。

「うん。ありがとう。行ってくるね。」

そうやって私は教室を出た。

↳ side Akihisa

真琴が教室を出て行った後、教室ではこんなことが話されていた。

「おい、お前ら。自由天使のもうひとつのあだ名を知ってるか？」

「雄二！それって……」

まさか、あの事を知らせる気が？

「それって、悪魔天使のことか？」

誰かがそんなことを言ってしまった。

「ああ。そつだ。」

「悪魔天使だと？あいつが？」

「ありえない！」

「水野さんに謝れ！」

まあ、当然の反応だよ。あんな子がそんな残酷なふたつ名をもっているなんて、普通は思わない。でも、雄二やほかの一部の皆は去年一緒のクラスになって、真琴の本性を知ってしまっているんだ。

「ああ。ありえないとおもつかもしれない。だから今からそれを証明する。」

ムツツリーニ、Dクラスの映像を映してくれ。」

「……………了解。（ガタガタ）」

ムツツリーニもそのことを知っている。だからだろうか？少し震えているのは…

なぜDクラスにカメラが仕掛けられてるかは今は聞かないでほしい。今はそんな余裕が無い。

しばらくすると、小型TVにDクラスの映像が映った。皆がそのTVを覗いた瞬間、真琴が入ってきて宣戦布告が始まった。

『（ガラッ）こんにちは。宣戦布告に来ました。』

『ん？水野さんじゃないか？Aクラスの使者かい？』

おそらくDクラス代表である平賀君が答えた。

『違うよ？Fクラスからの使者だよ。』

『Fクラス？あのバカの集まりの？君はFクラスなのかい？』

驚く平賀君。無理は無いだろう。でも…

『…うん。腹痛で試験受けられなかったんだ。』

『そうなのか。大変だな。あのバカ達の中じゃ…水野さん？どうしたんだい？』

やばい！本気でやばい！やめるんだ平賀君。それ以上言ったら…

『もしかして、あんなクラスに振り分けられて悲しんでいるのかい？』

「ゆ、雄二…」

「ああ。始まるな…」

『あんたら、言わせておけば人のクラスをバカ呼ばわりして…』

TVの中の彼女からは、いつものかわいらしさが消えていて、口調も変わってしまった。

『そんなことを言うやつは全員…ブツコロス…コロスコロスコロスコロス…』

『お、落ち着くんだ水野さん。』

『リアライズ…マシンガン×2…』

どこからともなくマシンガンが現れ、真琴だった者の手におさまる。

『み、水野さん。そんな物どこから…ウギヤアアアアア』

銃声とともに、Dクラスの皆の断末魔の叫びが聞こえてきた。思わず目をふさいでしまう。

再び目を開けると、地獄絵図が広がっていた。TVを見ているFクラスの皆は、一人残らず震えていた。

「明久…行くぞ。」

「う、うん…」

僕は教室を飛び出し、Dクラスへと走った。

（side out）

「ん、ここは？」

気がつくと私は横たわっていました。

「あ、目が覚めた？」

目の前に明久がいました。

「ここはFクラスの教室だよ。宣戦布告の後突然倒れたから心配したんだよ。」

そういえば、Dクラスに宣戦布告に行つて…ダメです。思い出せません。

「まこちゃん、大丈夫ですか？」

瑞希が声をかけてくれました。

「うん。大丈夫。少し頭が痛いだけだよ。」

周りを見てみると、皆が少し震えているように見えます。

「ねえ、なんか皆が」

言いかけたところで、

「………」「……」「……」「……」「……」
「何でもないよ（）です（）のじゃ（）ぞ（）
わよ（）。」「」「」「」「」

康太、明久、瑞希、秀吉、雄二、美波の声がハモって、否定されま
した。

「…ならいいけど、試召戦争は？」

「ああ。明日の午後になった。」

雄二が答えてくれました。

「じゃあ、今日はもう帰る時間？」

今日は新学期最初の日なので、午前授業なのである。

「そうね。じゃあ真琴も復活したから、ウチも帰るね。」

「ワシも帰るとするかの？」

「……………同じく」

「じゃあ、俺も帰るぞ。お前らも今日はしっかり休めよ。」

美波、秀吉、康太、雄二は帰るようです。私が倒れたから残ってくれてたみたいですね。お礼を言っておきましょう。

「うん。皆ありがとう。」

「じゃあ僕達も帰ろうか。」

「そうですね。」

「うん。」

その後、瑞希と明久と一緒に家に帰りました。

次の日、いつもどおり3人で登校していつもどおりの午前の授業を

受け終わり、昼休み。

「皆、ご飯食べに行こう。」

美波が提案しました。

「そつだな。明久、今日の昼ぐらいはまともな物を食べるよ。」

「そつ思つならパンでもおごつてくれると嬉しいんだけど…」

「えっ？吉井君つてお昼食べない人なんですか？」

「いや、一応食べてるよ。」

「明久、水や塩や砂糖は舐めるつて言うんだよ。」

そんな明久に横槍を入れてみます。ほら、周りの皆もうなずいてますよ？

「ま、飯代まで遊びに使い込むお前が悪いよな。」

「仕送りが少ないんだよ！」

明久の両親は仕事の都合で海外にいるため、明久は1人暮らしをしています。まあ、私もですけど…もちろん生活費は貰っているようですが、ほとんどは趣味に消えています。

でも、流石にちょっと可哀想ですね。…そつだ、いいことを思いつきました。

「「ねえ(あの)、明久(君)。よかつたら私がお弁当作ってこようか(きましようか)?」」

あれ? 瑞希も同じことを考えていたようですね?

「え?」

明久、文字が違いますよ。

「「ごめんなさい瑞希。私はやめるから、瑞希が作ってきて。」

「いえ、こっちこそごめんなさい。まこちゃんを作ってきてください。」

お互いに譲り合う私と瑞希。

「それじゃったら、2人とも作ってくればよいではないか?」

と、秀吉の提案。

「そ、そうですね。じゃあ明日作ってきますね。」

「私も作ってくるわ。皆。」

私が言うと、

「じゃあ、私も皆さんに作ってきます。」

瑞希が慌てて付け足しました。そんなに慌てなくても...

皆が感激しています。

「それはたのしみだな。」

「……………（コクコク）」

「お手並み拝見ね。」

喜んでくれてよかったです。腕が鳴りますね。

「ありがとう2人と。僕、初めて会う前から君たちの事好き」「明久、今振られると弁当の話は無くなるぞ。」にしたいと思っていました。」

…とつさの判断で告白を回避したんでしょうが、悪化してます。

「明久。それでは欲望をカミングアウトした、ただの変態じゃぞ。」

「明久。お前はたまに俺の想像を超えた人間になるときがあるな。」

「だって…お弁当が…」

ドンマイです。明久。

「さて、本題に入るか。」

すっかり忘れていました。

「1つ気になっていたんじやが、どうしてDクラスなんじや？段階を踏んでEクラスではないのかの？」

「ああ。理由は簡単だ。戦うまでもない相手だからな。」

「え？でも僕らよりはクラスが上だよ。」

「明久、周りのメンバーを見てみて。」

「えーっと、美少女が3人とバカが2人とムツツリが1人いるね。」

へえ…

「明久にバカといわれるとは思わなかったわ。覚悟しなさい。」

「え？なんで真琴がバカに反応するの？」

「誰が美少女だと？」

「……………（ポツ）」

「ええっ？何で2人が美少女に反応するの？もう、僕だけじゃムツツ切れない！ま、真琴？落ち着いてよ。」

「落ち着くのじゃ代表にムツツリーニに真琴。」

「あ、あれ？私何してたんだっけ？」

おかしいです。また少し記憶が飛びました。

「そ、そうだな。」

（コホン）要するに、姫路や真琴に問題がない今、Eクラスには勝てる。だが、Dクラスだとそうは行かないかも知れない。」

「だったら、最初から目標のAクラスに挑もうよ。」

確かに、その意見はもっともです。

「初めての試召戦争なんだから、派手にやって景気付けにしたいでしょ?」

「ああ。真琴の言ったとおりだ。それに、さつき言いかけた打倒Aクラスに必要なプロセスだしな。」

やっぱりさつきのは試召戦争の話だったんですか。理由はたぶん…

「えっと、その。吉井君たちは前から試召戦争について話し合ってたんですか?」

「ああ、それね。自己紹介の途中で明久たちが廊下に行ったでしょ、そのと」「それはそうと!!」「…」

何ですか?これから明久の告白の手伝いをしようとしたのに…

「さつきの話、Dクラスに勝てないと意味ないよ。」

「負けるわけがないさ。お前らが協力してくれれば、絶対に勝てる。いいか、お前ら。うちのクラスは最強だ。」

おもしろいですね。根拠がないのに、本当にそう思えてきます。

「いいわね。面白そうじゃない。」

「そうじゃの。Aクラスの連中を引きずり落としてやるかの。」

「……………(グッ)」

「がんばろうー瑞希。」

「は、はいっ。」

「そうか。それじゃ、作戦を説明しよう。」

私たちは勝利のための作戦に耳を傾けました。

第3問〜真琴の本性と作戦会議〜（後書き）

「なんと、PV800 ユニーク200突破しました!!
皆さんありがとうございます!!」

?x6 「……………」ありがとう!!」「……………」

「今回のspゲストは本編でおなじみのこの6人です。」

明・雄・瑞・美・秀・土「……………」イエーイ「……………」

「さて皆?真琴の本性を知った感想は?」

明「悪魔モードになったのは僕達のためだから仕方ないと思う。」

姫「吉井君のいうとおりです。」

土「……………」同じく」

秀「ワシらのためにやってくれたことじゃ。むしろ感謝しておる。」

美「木下に同じよ」

雄「だからといって、Dクラスを皆殺しにしようとするか?普通?」

「皆ありがとう。死刑台に送るのは雄一だけだね。」

雄「は?」

J「皆部屋を出て。(ガチャッ)」

雄「は？何で閉じ込めるんだ？」

J「真琴。雄二が『真琴なんて最低だ』って言ってたよ。」

雄「作者てめえ。何を 真「雄二」？」
…ま、待て真琴。これは作者が勝手に…ウギアアアア」

J「…次回、怒りのDクラスの猛攻！？」を」

J・明・瑞・美・秀・土「お、お楽しみに」

J「ごめんね。雄二。」

Dクラス戦は2話に分けます。

第4問〜怒りのDクラスの猛攻!?!〜 (前書き)

バカテストはお休みです。

第4問〜怒りのDクラスの猛攻!〜

Side Akihisa

「吉井!木下たちがDクラスの連中と渡り廊下で交戦状態に入ったわよ。」

そう言いながらFクラスに駆け込んできたのは同じ部隊に配属された島田さん。こうして見ると、背は高くても綺麗なのに、どこか女性としての魅力に欠ける。一体何が足りないんだろう?

「ああ、胸か。」

「アンの指を折るわ。小指から順に、全部綺麗に。」

「マズい。何かのスイッチに触れたっぽい。」

「そ、それよりホラ、試召戦争に集中しないと!」

今、前線には秀吉率いる先行部隊がいる。僕が部隊長の中堅部隊は、いまだにFクラスにいる。

僕には部隊長として皆を導く義務がある。ここは気を引き締めていこう。

「明久。」

ん?後ろで補給テストを受けている真琴に呼ばれた。

「何?真琴?」

「あ、先生。次のテストください。…先行部隊、中堅部隊全員に
達。中堅部隊は全員突撃して。…先生、次ください。…先行部隊は
中堅部隊と入れ替わりながら戻って補給テストを受けに来て。…先
生、次のください。…補給テストが終わり次第、遊撃部隊も加勢す
るから。以上。…センサー。次ください。」

と、突撃部隊総合部隊長の真琴から指令が出た。それにしても、な
んて奴だ…補給テストを受けながら、的確な指令を出すなんて…
真琴の所属する遊撃部隊は、真琴たった一人のチームだ。雄二によ
ると、『アイツは1人でも十分』らしい。確かにそうかもしれない。
現に今、ものすごいスピードでテストを解いている。真琴の点数は
Aクラスをも超えているかもしれない。

「わかったよ、真琴。島田さん、行こう。」

「うん、了解。真琴もがんばってね。」

僕は教室を出ようとする。よし、全力で戦おう。もし無理だった
らすぐ帰ってくればいいんだ。それなら真琴もわかってくれるはず。

「あ、明久。逃げてきたら。チヨキでパンチするから。」

…前言撤回。死ぬまで戦えということらしい。チヨキでパンチって、
それは目潰しというのは？

「…じゃあ行ってくるよ。」

改めて、全力で戦おうと思った。

Side Out

「（カリカリカリ）」

明久たちが渡り廊下に駆けていきました。これで、逃げ帰ってくることはまずないでしょう。

「センサー。」

「はい、どうぞ。それで最後です。」

高橋女史がテストを渡してくれず。え？最後？

「最後つて？何ですか？」

「作ったテストが尽きてしまいました。でも、それだけ解けていれば、大丈夫だと思いますよ。採点しますので待っていてください。」

あ、全部やつちやっただんですか。超能力って便利ですね。アンサートーカーで問題がすらすらと解けます。

「真琴。戻ったぞい。」

秀吉が駆けて来ました。

「おかえり秀吉。状況はどう？」

「前線を維持するので精一杯じゃ。点数もかなり削られておる。召喚獣はもうへ口へ口じゃ。」

なるほど。これなら何とかいけそうですね。

「じゃあ、補給テストを受けて。私は採点が終わり次第行くから。」

「うむ。了解じゃ。」

「水野さん。終わりました。」

「あ、ありがとうございます。じゃあ皆、行ってくるね。」

「がんばってくるのじゃぞ。」

「まこちゃん。がんばってくださいね。」

瑞希まで声をかけてきてくれました。やさしいですね。やっぱり私はFクラスが大好きです。

「ありがとう。それじゃ…テレポート。」

＼Side Akihisa＼

「邪魔者は殺します！」

さつきまで、島田さんがDクラスの清水さんと戦っていた。でも、Dクラスの点数に島田さんがなうわけもなく、あっさりやられて（？）しまった。で、今美波が何故か保健室に連れて行かれそうになっている。

やばい。こっちに向かってきた。清水さんの召喚獣は消耗しているといえ、僕の点数ではかないそうにいない。

「明久、助けに来たよ。」

「真琴っ！」

どこからともなく真琴が現れた。おお、われらの天使よ。エンジェル

＼Side Out＼

「真琴っ」

レポートしてきたら、ちょうどDクラスの女の子に明久が襲われ
そうになっていました。

「っ！あなたどこか…ら…」

ん？どうしたんでしょうか。

「あなた、昨日の使者だった…」

どうしたんでしょう？少し顔が赤くなっている気がします…

「真琴お姉さまと呼んでもいいでしょうか？」

はい？今何て？

Side Minami

「>?」

真琴が驚いてる。でも仕方ないわ。いきなり『お姉さまと呼んでいいでしょうか』なんて言われたら、普通は驚く。でも、これ以上美春の犠牲者を増やしたくはない。

「ちょっと美春。何言ってるの？いきなりなんてことを……」

「いえ、昨日始めて見て感激しました。あの力強さ。あのペッタンコの胸。そして、クラスの男子を殲滅するときの容赦のなさ。一目ぼれました。」

昨日って、あの悪魔モードの真琴のこと？

「そして、その裏表のある性格……（ブツブツ）」

これは、かなりヤバイわね。

（Side Akihisa）

「……真琴逃げて。今の美春には何を言っても意味がないわ。」

島田さんの声を聞いて真琴は回れ右をして逃げ出した。

「逃がしません。真琴お姉さま。」

清水さんも後を追う。

えーっと、ちょっと整理してみよう。

「真琴が突然登場」

「真琴が清水さんにお姉さまって言われる」

「真琴は美波と似てる（？）」「+」清水さんは美波にいけないことをしようとしている」

「真琴もいけないことをされる」

「真琴が危ない!!」

大変だ！助けないと！

「邪魔をすれば殺します。」

でも、僕はやっぱり命が…

「明久助けて！助けてくれたらデートでもしてあげるから」

（明久の脳内）

清水さんによる死刑

真琴とデート

命

<

バラタイス
楽園

「今助けるよ真琴！試獣召喚っ！」

命なんて、惜しくはない！！

「邪魔です。本当に殺しますよ。」

『Fクラス	吉井明久	VS	Dクラス	清水美春
化学	27点	VS	41点	

』

くっ、やっぱり点数では負けている。でも…

「伊達に《観察処分者》なんてやってない！！」

清水さんの召喚獣が突進してきた。横にサイドステップ。そこからの

「くられ、ドロップキック。」

「くっっ」

横に吹っ飛んでいった召喚獣に渾身の一撃を入れる。

「たあああー！！」

清水さんの召喚獣は消えていった。

「っ、こんな豚野郎に…」

……………豚？

Side Out

「西村先生、この危険人物を早く補習室にお願いします。」

助かりました。明久がいなかったら私の人生は終わっていたでしょう。

「おお、清水か。たっぷり勉強づけにしてやる。こっちに来い。」

「お、お姉さま方！美春は絶対に諦めませんから！このまま無事に卒業できるなんて思わないでくださいね！」

「「諦めて!!」「」

美波と私の魂の叫び。きっと叶いませんけど…

「それとそこの豚野郎！」

「ぼ、僕？」

「あなたは必ず殺します。覚えておいてください。」

明久に死刑宣告していきました。

「明久ありがとう。」

そう言って今日一番の笑顔で笑います。

「っっ！／＼き、気にしないで。それより約束は守ってね。」

約束？ああ、デートのやつですか？

「分かってるよ。」

「ねえ吉井？何の約束してたの？」

この流れは…

「ああ、それは…（明久。言ったらできなくなるよ？）…」

ふう。セーフ。

（何で？）

（それを知った美波はどうすると思う？）

（…全身の関節を逆方向に曲げられ、マリオネットのようにな…）

…想像力が豊か過ぎます。

（まあ、そんな感じ。だから私に任せて。）

(うん。分かったよ。)

よし。小声で緊急3秒作戦会議成功です。

「じゃあ美波に明久。中堅部隊全員で補給テストを受けてきて。ここは私が引き受けるから」

「え、うん。でも約束って？」

「『明久達中堅部隊が点数を補充してくる間、ここを守ってほしい。』だよ。」

「え？そんな約束？本当なの？吉井？てっきり、デートの約束でもしてたのかと…」

「「…」」

読心術でも使えるんでしょうか？

「そ、そんなわけではないじゃん。ぼ、僕と真琴がデートなんてできるわけではないよ。」

「そうなの？」

「そうだよ。ほら、早く補給テスト受けてきて。」

「分かった。後でじっくり聞くからいいよ。ほら、部隊長殿？指令出して。」

…これ、嘘がバレてますね。

「あ、うん。中堅部隊の皆、いったん撤退するんだ。」

『何を言っているんだ？』

『ここを離れたら雄二に殺されるぞ。』

『それに、誰がここを守るんだ？』

おお、皆真面目ですね。

「皆、この場所は水野真琴が引き受けるよ。皆早く補給してきて。」

『おお、我らの天使エンジェルが降り立ったぞ。』

『あいつが引き受けてくれるなら、任せられるな。』

『水野さんサイコ〜〜〜』

…最後の人、殺しますよ？

『何？水野だと？』

『ついに出了な！』

『恨みをはらしてやる！！』

逆にクラスの皆に非難されています。恨み？恨まれる様なことしましたか？

『落ち着け！まとめてかかれればやる。』

その考え、甘すぎます。

「武装選択 日本刀。」

まず、突進してきた敵を一突きにします。そして、振り向きながら後ろから来た敵を両断します。

『『な、何だと？』』

『よし、4人で一気に行くぞ。』

並んできた敵に日本刀を投げ込んで、4人を串刺しにします。

『『『『そんなことが可能なのか？』』』』

「武装解除 超能力モード。」

「発動、大竜巻つ！！」
ハリケーン

『『『『ウワアアアア~~~~』』』』

残りの召喚獣を吹き飛ばしました。

「私の勝ちね。」

堂々の勝利宣言です。

『ありえねえ。』

『勝てる気がしねえよ。』

『アイツ、神なんじゃないか?』

「鉄人先生。こいつら全員補習室に送ってください!!!」

「ああ、分かった。それにしても、お前本当に滅茶苦茶だな。」

「それは、皮肉ですか?」

「いや。褒めてるんだ。」

これで一件落着です。あとは皆に任せましょう。

「おーい。真琴。」

ん?あれは明久たちの部隊と秀吉たちの部隊ですね。

「うわっ、凄いね。これ全員真琴がやったの?」

「うん。そうだよ。」

「へー。あ、そうだ。雄二が『お前は戻って休んでいいぞ。』だつてよ。」

「そうなの?じゃあお言葉に甘えちゃっね。」

お腹も空きましたし、雄二から何かもらいましょうかね。

「じゃあ、がんばってね。テレポートっ。」

「ただいま」

突然雄二の後ろに現れて、脅かしてみます。

「おわっ。何だ、水野か。お疲れさん。」

「どうも。」

「これ食うか？」

雄二はパンを10個位投げてきました。

「え？こんなにいいの？ありがとう。」

「いや、そんなに食うのか？お前？」

雄二が驚いています。

「ほっほおほほ。ぱいふひひゃったはらへ。ほっへほほはらへ。ほほ

んは〜。(超能力を使いすぎちゃったからね。とってもお腹空いてるんだ〜。)

「何言ってるか分からんが喜んでくれて何よりだ。」

「「ごちそうさまでした。」

「お粗末さ…って早っ。もう食ったのか。」

さっきから驚きすぎです。

「うん。私、眠くなっただから寝るね。」

「ああ。おやす…おい！お前自由すぎね…」

「…ZZZZ」

「まあ、いいか。」

第4問〜怒りのDクラスの猛攻!?!〜(後書き)

J「祝!奇跡のPV1500、ユニーク300突破!」

真「皆ありがとう!」

J「真琴、今回大活躍(?)だったね。」

真「(?)って何よ?」

J「美春のお姉さまになったたる。」

真「書いたのアンタでしょ!」

J「まあ落ち着け、フラグ立てといたから。」

真「えっ?…」

J「顔赤いぞ真琴。次回〜お弁当は天国の味〜をお楽しみに〜」

真「フシユウ」

J「真琴大丈夫か?お〜い返事しろ〜」

第5問／お弁当は天国の味／part1（前書き）

「誠に申し訳ありませんが、僕のちょっとした都合により、1つ
の話を幾つかに分けて書くスタイルにしたいとおもいます。見にく
くなると思いますが、よろしくお願いします。」

バカテスト（物理）

問 以下の文章の（ ）に正しい言葉を入れなさい。

「光は波であつて、（ ）である。」

姫路瑞希の答え

「粒子」

教師のコメント

よくできました。

土屋康太の答え

「寄せては返すの」

教師のコメント

君の解答はいつも先生の度肝を抜きます。

吉井明久の答え

「勇者の武器」

教師のコメント

先生もRPGは好きです。

水野真琴の答え

「力の根元」

教師のコメント

あなたの超能力の源は光なのですか？

第5問〜お弁当は天国の味〜part 1

『『『『『うおおーっ!』』』』』

目をさました私が最初に聞いたのは、耳をつんざくような大音量でした。

「明久、この様子だと勝ったの?」

「あ、おはよう真琴。もちろん、勝ったよ。」

周りを見てみると、皆雄二を褒め称えていました。

「あー、まあ。なんだ。そんな手放しで褒められると、なんっーか。」

意外にも、雄二が照れています。

『坂本、握手してくれ!』

『俺も。』

なんか雄二が英雄みたいですな。

あ、明久も皆の方に行きました。私も行きましょっかね。

「雄二!」

「ん、明久か。」

明久がさっそうと駆け寄っていきます。

〔Side Akihisa〕

「僕も雄二と握手を！」

僕は手を突き出して握手した。

「ん、どうしたんだ明久？」

「い、いや。」

おかしい。なんで僕は普通に握手してるんだろう？僕は雄二を暗殺しようとしていたはずだ。

「明久。捜し物って、これ？」

声のした方をみると、真琴が僕の暗殺兵器を持って笑っていた。

第5問 お弁当は天国の味 part 1 (後書き)

part 2 に続く

第5問〜お弁当は天国の味〜 part 2

Side Akihisa

「ま、真琴！どうしてそれを……………ぬおおっ！」

「雄二…！なんでいきなり強く握るのかな？これじゃあ握手できないよ。」

「てめえ。何をしようとした。」

「も、もちろん。喜びを…「真琴、ペンチ出してくれ。こいつの爪をはぐ。」…す、ストップ！僕が…「はいよ。リアライズ…ペンチ。」…悪かった。だからやめて！って真琴！？ふつうにペンチ出さないですよ！」

危なかった。

「「ちっ
「」

…もう二度と逆らうまい。

Side Out

「まさか姫路さんまでもがFクラスだなんて…信じられん。」

リアライズしたパンチを消すと、後ろから平賀君がヨタヨタと近づいてきました。

「Fクラスを甘く見すぎていた俺達の完敗だ。約束通りクラスを明け渡そう。」

敗戦の将ですか。なんだか可愛相ですね。ですが…

「その必要はない(よ)。」

雄二と声が重なりました。やっぱり同じことを考えてますね。

「え？真琴に雄二、何で？」

「明久。私達の目標はAクラスでしょ？」

「その通りだ。それとも、お前はこんな設備で満足なのか？」

第5問 お弁当は天国の味 part 2 (後書き)

part 3 に続く

第5問くお弁当は天国の味く part 3

「だったらなんで最初からAクラスを狙わないのさ。おかしいじゃないか。」

「少しは自分で考える。だからお前は近所の保育園児に『馬鹿なお兄ちゃん』って呼ばれるんだ。」

「それは明久に失礼だよ。せめて小学生ぐらいでしょ。」

「…人違いです。」

…まさか本当に言われたことがあったんですか？

「とにかく。条件をのんでくれさえすれば、Dクラスにはいっさい手を出さない。」

「一応聞かせてくれ。」

「なに。そんな大したことじゃない。俺が指示を出したら、窓の外にある室外機を動かなくしてほしい。次のBクラス戦に必要なだから。それだけだ。」

「…そうか。こちらはありがたくその提案を吞ませて貰おう。お前らがAクラスに勝てるよう願ってるよ。」

「無理しなくていいよ。どうせ社交辞令でしょ?。」

「ああ。そうなるな。がんばれよ。」

そう言つて平賀君は立ち去つていきました。おもしろいですね。その考えを改めさせてあげますよ。

「あ、あのつ、坂本君つ。」

「ん？姫路か。どうした？」

「実は、坂本君に聞きたいことがあるんです。」

胸に手を当てて興奮気味に話す瑞希。大事な話のようですし、私は先に帰るとしましょう。

第5問〜お弁当は天国の味〜 part 3 (後書き)

part 4 に続く

第5問〜お弁当は天国の味〜 part 4 (前書き)

「じゃあね、明久。瑞希に変な考え起こしちゃだめだよ。」

「わ、分かってるよ。じ、じゃあね、真琴。」

焦りすぎです。まさか本当に考えていたのでしょうか？
そんなことをかんがえながら、私は家に帰りました。

翌朝。私は約束していたお弁当を作り、学校までテレポートしました。

今日は補給テスト漬けでしたね。頑張りましょう。

「おはよー。」

「明久、おはよう。」

「おう明久。時間ぎりぎりだな…って真琴？お前いつからそこにいた？」

「え？ついさっきテレポートしてきたんだよ。」

そんな話をしながら周りを見渡します。やっぱりDクラスの設備、もったいない気がしますね。

「Dクラスの設備のこと、皆に何も言われなかったの？」

「ああ。皆にも説明していたからな、問題ない。」

「ふーん。あ、真琴。約束、忘れてないよね？」

「もちろん。お弁当でしょ？>デートの方も覚えてるよ。」

たぶん、もう一つの方だと思つので、テレパシーで付け足しておきました。

「本当？楽しみだな。真琴の料理っておいしいし。>よかった。覚えててくれてたんだね。」

やっぱりですか。

第5問くお弁当は天国の味く part 4

「え、そうなの？」

「はい。悔しいですけど、とてもおいしいですよ。」

瑞希、悔しいですけどって何ですか？

「お、そうなのか？」

「それは楽しみじゃ。」

「……………（コクコク）」

雄二、秀吉、康太も期待してくれています。昼休みが楽しみですね。

「そういえば吉井。1時間目の数学のテストの担任、船越先生だつてよ。」

「（だっ!）」

明久は教室から飛び出していきました。

気にはなりますが、忘れましょう。

「うあー…づがれだー。」

「よく分からないけど、お疲れさま。」

午前の4教科が終わりました。明久は朝から船越先生と鬼ごっこをしていたから余計に疲れたんでしょう。私は寝ていましたけどね。

「真琴〜ご飯〜。」

犬ですか？

「はいはい。瑞希もちゃんと作ってきた？」

「はい。あんまり自信はないですけど…。」

「それでは、せっかくのご馳走じゃし、こんな教室ではなくて屋上でも行くかのう。」

「そうだね。」

確かにここだと食欲がわきませんね。

第5問くお弁当は天国の味く part 4 (後書き)

「そうか。それならおまえらは先に行つててくれ。昨日の礼も兼ねて、ジューズでも買つてくる。」

「あ、それならウチも行く！一人じゃ持ちきれないでしょ？」

珍しいですね。どついつ風の吹き回しでしょうか？

「悪いな。それじゃあ頼む。」

「おっけー。」

気にすることなく受け入れる雄二。まあ、いいんですけどね。

「じゃあ、二人ともよろしくね。早くしないと無くなっちゃうかもよ。」

「そう遅くはないはずだ。じゃあ行つてくる。」

雄二たちは階段の方へ走つていきました。

「僕らも行こうか。」

「そうですね。」

私たちは教室を後にしました。

part 5に続く

第5問〜お弁当は天国の味〜 part 5 (前書き)

私達は、今屋上にいます。

「あの、あまり自信はないんですけど…」

「「「「「おおっ！」「「「「

瑞希の弁当を見て、皆一斉に歓声をあげました。さすが瑞希です。とても形が整っています。

「じゃあ、私も…」

「「「「「おおっ！」「「「「

今度は私の弁当を見て、再び歓声があがります。

「まこちゃんの凄いですね〜」

「瑞希のこそ。」

お互いに謙遜しあいます。

「二人とも凄いよ！じゃあ雄二には悪いけど、先にー」

「……………(「ヨイ)」

「あ、ずるいぞムツツリー二っ」

康太が瑞希の海老フライをつまみ取りました。そして、流れるように口に運んで―

「……………（パク）」

ボタン　ガタガタガタ

豪快に倒れ、小刻みに震えだしました。

「「「……………」」」

どうしたんでしょうか？あの弁当の中に毒物でも入っているのでしょうか？

おそろおそろサイコメトリーで内容物を調べてみます。すると―

硫酸、塩酸、硝酸、アンモニウム、メチルアルコール

毒物達が見えました。

第5問〜お弁当は天国の味〜 part 5

(秀吉、真琴。あれどう思う?)

明久が小声で話しかけてきます。

(二人とも、落ち着いて聞いて。さっきサイコメトリーで調べただけど、あれはかなりやばいよ!)

(やっぱり…どうする?)

(お主ら。胃は頑丈か?)

(正直自信はないよ。食事の回数が少なすぎて退化してるから。)

(私は頑丈な方だと思うよ。)

私達は終始笑顔のまま会話しています。

(ならば、ここはワシと真琴でいくとしよう。)

(OK!腹をくくるわ。)

(ダメだよ。危ないよ!)

(大丈夫だよ明久。私のお弁当でも食べて待ってて。)

(では、いくぞ。真琴。覚悟はいいかの?)

(いつでも「おう！待たせたな！へー、これは旨そつだ。どれどれ？」)

私が返事をしようとしたところで、雄二が戻ってきました。

「う、旨い！」

雄二が私の玉子焼きを食べました。

「え？雄二本当？じゃあ、僕も一口。」

「ほ、本当ですか？坂本君。じゃあ、私もいただきますね。」

「……………」

「「お、おいしい！」です。」

二人が雄二の感想を聞いて、私のお弁当を食べました。食べるのはいいですけど…瑞希の弁当の件は？

第5問くお弁当は天国の味く part 5 (後書き)

「真琴、わしも貰ってよいかのうっ？」

「…どござ。」

皆、忘れてるようですね。

こっぴなったらー

く Side Akihisa く

美味しい。その一言だった。それほど美味しかったのだ。真琴を見ると、赤くなっていた。照れてるのかな？

「じゃあ、瑞希のもらうね。」

そのせいか、僕は姫路さんの弁当のことを忘れてしまっていた。

「あつ真琴。」

僕の制止もむなしく、真琴は姫路さんの弁当をかき込み、全部食べ

てしまった。
そんなことしたら…

「み、瑞希。ごちそうさまでした。ね、眠くなったから…寝るね。
おやすみ…皆…」

パタッ

真琴は、文字通り。眠るように倒れた。

「」「」「」
……………「」「」「」

きつと、皆こっ思ってるだろう。

真琴…ありがとう。とー

part6に続く

第5問／お弁当は天国の味／part 6（前書き）

「―真琴。起きて。真琴！」

目が覚めると、私はFクラスの教室にいて、明久、雄二、秀吉、康太、美波に囲まれて横になっていました。

「ん？皆…どうしたの？」

「お、良かった。目を覚ましたか。」

「大丈夫？頭とか痛くない？」

「良かったのじゃ。お主が『おじいちゃん…』と言ったときにはもうダメかと…」

「……………無事でなにより。」

「真琴、良かった。本気で心配したんだよ。」

皆が私を泣きそうな顔で見えています。たしか、瑞希のお弁当を食べ
て…

「ありがとう。僕たちのために…うわああーん」

明久が泣き出してしまいました。

「明久、私は大丈夫だから。泣かないでよ…」

「うう、うん。」

良かったです。何とか泣き止んでくれました。
皆の話によると、私が倒れた後、皆で協力して私をここまで運んで
きてくれたそうです。皆、優しいです。

第5問くお弁当は天国の味く part 6

「そっだ、雄二。試召戦争は？」

「ああ、問題はない。俺と明久で宣戦布告してきた。お前はもう帰って休め。」

「え、いいの？」

「ああ。お前は明日の試召戦争で前線の指揮をとって貰う予定だ。体力を温存しておいてくれ。」

いつもの威厳はどこへ行ったのでしょうか？柄にもなく私を心配してくれています。

「じゃあ、僕が家まで送っていくよ。皆も帰っていいよ。」

「ああ。じゃあ後は任せるぞ明久。お前ら、家に帰るぞ。」

「あ、うん。じゃあね。真琴に吉井。また明日。」

「さよならじゃ二人とも。気を付けるのじゃぞ。」

「……………またな。」

「うん。じゃあね皆。」

「皆ありがとう。また明日。」

雄二たちを見送りながら、改めて皆優しいと感じました。

「じゃあ真琴。僕たちも帰ろう。」

「うん。そうだね。帰ろっか、明久。」

「ま、真琴！」

「ん？何？」

「僕、君のk……ち、力を信じてる。明日の試召戦争がんばろう！」

え？何を言ってるんでしょっか？なんか別のことを言おうとしましたか？

「うん。がんばろうね。」

まあ、いいでしょう。

第5問くお弁当は天国の味く part 6 (後書き)

J「3500pv、6000ユニーク突破！皆ありがとう！」

明「ありがとう！」

J「ところで明久。本当は真琴になんて言おうとしたんだ？」

明「え、それはね…君の…

J「嘘つくな！」

お弁当お

いし…って早いよ！」

J「お前、真琴のことがー」

明「じ、次回く本気の真琴と卑怯者の末路【前編】くお楽しみに！」

J「…まあいいか。お楽しみに！」

第6問く本気我真琴と卑怯者の末路【前編】くpart1（前書き）

「夏風邪を引いてしまい、更新できませんでした。すいませんでした。」

バカテスト（化学）

問 以下の問いに答えなさい。

『ベンゼンの化学式を書きなさい。』

姫路瑞希の答え

『 C_6H_6 』

教師のコメント

簡単でしたかね。

土屋康太の答え

『ベン+ゼン=ベンゼン』

教師のコメント

君は化学をなめていませんか？

吉井明久の答え

『B-E-N-Z-E-N』

教師のコメント

あとで土屋君と一緒に職員室に来るよつに。

水野真琴の答え

『BZENZ2』

教師のコメント

何ですかこの化学式は？ああ、そういうことですか。あなたも後で職員室に来てください。

「任せて!」

『『『『『うおおーっ!』』』』』

私や瑞希と一緒に戦えるとあって、前線部隊の士気は最高潮に達しています。

今回は廊下での戦闘で勝ちに行くそうで、Fクラスの50人中40人をつぎ込みます。その中には私や瑞希もいるので、大丈夫でしょう。

キーンコーンカーンコーン

昼休み終了のベルが鳴り響きます。さて、いよいよ始まりますね。

「よし、行ってこい! 目指すはシステムデスクだ!」

『『『『『サー、イエッサー!』』』』』

雄二の声で私達は一斉に廊下を駆け出します。

『いたぞ、Bクラスだ!』

『高橋先生を連れているぞ!』

ゆっくりと、十数人ほどのBクラスのメンバーが歩いてきます。あくまで様子見と言ったところでしょうか。

『生かして帰すなっ!』

物騒な台詞が皮切りとなって、Bクラス戦が始まりました。

『Fクラス 近藤吉宗 VS Bクラス 野中長男
総合 764点 VS 1943点
』

『Fクラス 武藤啓太 VS Bクラス 金田一祐子
数学 69点 VS 159点
』

『Fクラス 君島博 VS Bクラス 里井真由子
総合 77点 VS 152点
』

さすがBクラスですね。桁が違います。さて、私もやりますか。

『Bクラス山下亮。水野真琴に化学勝負を申し込む。』

「受けるよ。」

「「^{サモン}試獣召喚!」」

『Fクラス 水野真琴 VS Bクラス 山下亮
化学 1252点 VS 131点
』

『何だこの点数は?』

『1人じゃ無理だ。俺も手伝う。』

『私も。』

『Fクラス 水野真琴 VS Bクラス 山下亮&a
mp;佐藤蓮&和田里奈
化学 1252点 VS 合計438点
』

『くそ、3人がかりでもこの差か』

せつかくですし、腕輪使いますか。

「武装選択ー超電磁砲！」
レールガン

『『『何い？』』』

「発射!!」

『『『ウギヤアアア』』』』

「あ……」

Fクラスの皆も巻き込んでしまいました。

「明久。ここは任せるよ。雄二のところ行ってくる。」

「うん。了解！」

決して復讐されるのを恐れた訳じゃありませんよ！

「たっだいま」

「おう、真琴。戦況はどうだ？」

「今は五分五分って感じかな？」

「そうか。それは良かった。俺は協定を組むためにここを離れるから、教室を守っていてくれ。」

「協定？何の？」

「ああ。『今日の4時までには決着がつかなかったら、戦況をそのままにして続きは明日の9時まで持ち越し、ただしその間は試召戦争に関する一切の行為を禁止する』というやつだ。」

「受けるの？」

「ああ。姫路が万全な状態で戦えるようにな。」

「うん。分かった。」

「じゃあ、行ってくるぞ。」

でも、何か裏がありそうですね。そんなこちらにしかメリットがない提案をするなんて…
あ、メリットありましたね。

「だれ…いな…な」

「ああ…だい…はきよ…た」

『雄二が協定を結びに言ってる間にFクラスに侵入する』っていうね…
さて、隠れていますか。

「（ガラッ）さて、やるか。」

「（ボソッ）リアライズ…スタンガン。」

こっそりと、机に穴を開けようとしている2人に近づきます。

「何やってんの？Bクラスのお2人さん。」

『うわっ。まだ残っていやがったのか。』

『どうせ女だ。気絶させるぞ。』

「へえ、やる気ですか。」

舐めない方がいいですよ。

『…しめしめ』

「ていつ。」

『ギヤアアアア〜』

殴りかかってきたのをスタンガンで気絶させます。

『こいつめ。このっ』

「おっと、ヤケクソになっても当たらないよ。」

『この野郎。チヨコマカと。』

「しるせいっ」

『グオオオオッ』

同じようにもう一人を気絶させます。

「ふう、終わったあ。」

第6問〈本気の本真と卑怯者の末路【前編】〉part 1（後書き）

part 2に続く

第6問〜本気我真琴と卑怯者の末路【前編】〜part 2（前書き）

「戻ったぞ〜」

雄二が戻ってきました。

「お帰り〜雄二が居なくなつた途端にお客さんが来たよ。」

「客？ああ、そこで気絶してる奴か。どこのどいつだ？人の留守を狙うなんて…」

「Bクラスの方々だよ。分かってるでしょ？協定は建て前だよ。」

「やっぱりか。対等な立場の協定なんておかしいと思つたんだが、その通りだったな。」

やっぱり雄二も同じ考えでしたね。

さて、前線の方も心配ですしそろそろ戻りますか。

「じゃあ、私そろそろ「真琴と雄二」、大丈夫？」戻りますね。」

お帰りなさい明久。

「ああ、頼む。」

「了解！ほら、明久に秀吉、戻るよ！」

「え？真琴？何？何があつたの？」

走りながら（私に引つ張られながら）明久が質問してきます。

「雄二のいない時を狙ってBクラスの奴等が侵入してきたけど私がそれを阻止した。以上。」

「なるほど。お疲れさま真琴。Bクラスって本当に卑怯だね。」

「明久、お主今の説明で分かったのか？」

「うん。何とか。」

話しているうちに戦場が見えてきました。

「うーん。いまいち釈然とせんが、まあよいじやろつ。2人とも、くれぐれも用心するのじゃぞ。」

「「秀吉もね!」「」

第6問く本気の真琴と卑怯者の末路【前編】く part 2

お互いに警告し合い、それぞれの部隊に戻りました。
私は明久について行きましたよ。

「吉井、それに水野も戻ってきたか。」

須川君が出迎えてくれました。あれ？明久がいないなら、指揮をとるのは副官の美波じゃないんですか？

「おまたせ須川君。戦況は？」

「かなりマズいことになってる。」

マズいこと？

「え？どうして？」

「島田が人質にとられた。おかげで相手は残り2人なのに攻めあぐんでいる。」

「「なっ!?!」「」

侵入の次は人質ですか？

「…そうだね。とりあえず状況を見たい。」

「それなら前に行こう。そこで敵は道を塞いでいる。」

須川君に続いて前に行くと、そこには2人のBクラス生徒と捕らえられた美波と召喚獣の姿がありました。

「島田さん!」

「よ、吉井!」

何かのドラマでしょうか？

「そこで止まれ!それ以上近寄るなら、召喚獣に止めを刺して、この女を補修室送りにしてやるぞ!」

なるほど。数少ない女子を補修室に送って、こちらの士気をくじく作戦ですか。うまいですね。どうしましょうか。

「総員突撃用意いーっ!」

「隊長(明久)それでいいのか?(いいの?)」「」

「ま、待て、吉井!」

第6問く本気の実琴と卑怯者の末路【前編】くpart2（後書き）

part3に続く

第6問く本気の真琴と卑怯者の末路【前編】くpart3（前書き）

「コイツがどうして俺達に捕まったと思っている？」

「馬鹿だから。」

… 即答ですか？

「殺すわよ。」

否定できませんけど…

「コイツ、お前が怪我したって偽情報を流したら、部隊を離れて1人で保険室に向かったんだよ。」

何ですって？

「前線部隊に告ぐ。総員突撃！！」

「真琴？アンタまでどうしてよ？」

「黙りなさい偽美波。私の知っている美波は明久にそんな優しさはもっていない！」

「真琴の言うとおりで。突撃しろ！」

「おい待てって。コイツ本当に本物の島田だって。」

だいぶ狼狽していますね。見苦しいですよ。見破られた作戦に固執

するなんて。

『Fクラス 田中明 VS Bクラス 鈴木次郎

英語W 65点 VS

33点 『

『Fクラス 須川亮 VS Bクラス 吉田卓夫

英語W 59点 VS 18点

』

「ぎゃあああー…」

「たすけてえー…」

さて、残りはー

「皆気を付けて！変装を解いて襲いかかってくるよ！」

この偽美波です。

「よ、吉井に真琴、酷い…ウチ、本当にー」

第6問く本気の真琴と卑怯者の末路【前編】く part 3

「まだ白々しい演技を続けるか。この大根役者め。」

美波はそんなことを言いません！

「本当だよ！本当にー」皆包囲して。この人数ならやれる。」「吉井が瑞希のパンツ見て鼻血が止まらなくなった』って聞いて…」

「「包囲中止！これ本物の島田さん（美波）だ！」」

そんな嘘に騙されるなんて彼女だけです。

「美波、大丈夫だった？」

「……………」

「無事で良かったよ。心配したんだからね。」

「……………」

「教室で休んでなよ。疲れてるでしょ？」

「……………」

「それにしても、卑怯な連中だね。人として恥ずかしくないのかな？」

「……………」

無反応…やりにくいですね。

「えーっと、美波。ホントはねー」

「…何よ。」

私はできる限り最高の笑顔を作ります。

「私も明久も、本物の美波だって最初から気づいていたんだよ？」

殺されかけました。

第6問↳本気の実琴と卑怯者の末路【前編】↳part3（後書き）

part4に続く

第6問く本気の真琴と卑怯者の末路【前編】くpart 4（前書き）

「ん？ここは？」

「ここはどこ？」

横を見るとボロボロになった明久がいました。

「あ、気がつきましたか？心配しましたよ？吉井君つてば、まるで誰かに散々殴られた後に頭から廊下に叩きつけられたような怪我をしていましたし、まこちゃんに至っては日頃の恨みを込めて殴られた後に全身に間接技をかけられたみたいな怪我をしていましたよ。」

完璧に正解です。

「いくら試召『戦争』じゃからといって、本当に怪我をする必要はないんじゃないぞ？」

あれは虐殺というのが正しいと思いますよ。

「ちよつと色々あつてね。試召戦争はどうなったの？」

「今は協定通り休戦中だ。計画通り教室前に攻め込んだが、こちらの被害も大きい。」

「じゃあ、今のところは順調ってこと？」

「まあな。」………（トントン）「ん？ムツツリーニか。どうした？」

そういえば康太は情報係でしたね。

「Cクラスの様子が怪しいだと？」

「……………（コクリ）」

「漁夫の利を狙うつもりか。いやらしい連中だな。じゃあCクラスと協定でも」「ストップ雄二。」「どうした真琴？」

「Cクラス代表の小山さんって、根本と付き合ってるっていう噂があるの。」「

「何だと？」

第6問く本気の真琴と卑怯者の末路【前編】く part 4

「じゃあ、根本君の罠が仕掛けられてるかもしれないってこと？」

「その通りよ明久。安心して、考えがあるから。雄二も一緒に来て。」

「ああ。分かった。おまえの考えに賭けるぞ。」

私と雄二はDクラスに向かいました。

「Fクラス代表の坂本雄二だ。代表はいるか？」

雄二はCクラスに入るなり全員に告げました。

「私だけど、何か用かしら？」

「ああ。試召戦争のことで話がある。」

「ふうん…どうする？根本君？」

やっぱりここにいましたか。

「とうぜ」あ、ちなみに私達が用があるのは根本君の方だからね。「
…何だと？」

「あれ？何でここにいるのかな？長谷川先生もいるみたいだけど…」

「お、俺たちがどこにしようと思ったんだろ。」

「本当にここにいただけ？」

「何っ？」

「あなたは私達がCクラスと不可侵条約を結ぼうとしたところに出てきて協定違反を訴えるつもりだったんでしょ？でもおかしいな？ここにかくまってもらってる時点で協定違反してるのはそっちだと思っただけど…どう思いますか長谷川先生？」

私達の勝ちです。

「くそっ。こいつらを生かして返すな！」

第6問く本気の真琴と卑怯者の末路【前編】く part 4 (後書き)

「駄目です。話を聞けば、先に協定違反をしたのはBクラスのようにですし、それに時間外の戦闘は認められません。明日にしてください。」

先生も私達の味方のようですね。

「水野真琴め。覚えてろよ！」

こういうのを負け犬の遠吠えっていうんですかね？

「ありがとう真琴。正直助かった。」

「でもいいの？このままだと連戦だよ。」

「ああ、その辺は大丈夫だ。」

教室に戻ると明久と美波がお互いを名前で呼ぶようになっていました。何があったんでしょうか？

さて、早く帰ってアレを完成させるとしましょう。

J「PV5500、ユニーク950突破！」

真「イェーイ！」

J「平均評価ポイント共に5pt！」

真「パチパチパチ」

J「ふう。でも感想は0…皆感想ください！」

真「お願いします。」

真「ところで、風邪大丈夫なの？」

J「大丈夫！治った！」

真「よし。これからも小説書いてくれるかな？」

J「いいとも」 次回【後編】お楽しみに」

真「お楽しみに」

第7問く本気の真琴と卑怯者の末路【後編】くpart1（前書き）

バカテスト（英語）

問 以下の問いに答えなさい。

『goodおよびbadの比較級と最上級をそれぞれ書きなさい。』

姫路瑞希の答え

『good - better - best

bad - worse - worst』

教師のコメント

その通りです。

水野真琴の答え

『good - better - best

bad - worse - worst』

教師のコメント

真面目にやればできるじゃないですか。

吉井明久の答え

『good - gooder - goodest』

教師のコメント

まともな間違え方で先生驚いています。

goodやbadの比較級と最上級は語尾に - erや - estをつけるだけではダメです。覚えておきましょう。

土屋康太の答え

『bad - butter - bust』

教師のコメント

『悪い』 『乳製品』 『おっばい』

第7問く本気の真琴と卑怯者の末路【後編】くpart1

「（カチャカチャカチャ）」

「よし、こんなもんかな？」

実際に使うのが楽しみです。

「昨日言っていた作戦を実行する。」

教室に入るなり雄二がそういいました。

「作戦？でも、開戦時間はまだだよ。」

「Bクラス相手じゃない。Cクラスの方だ。秀吉、これを着てくれ。」

そう言って雄二はこの学校の女子の制服を取り出しました。
あえて、何で持ってるかは聞かないでおきましょう。

「じゃあ雄二、そっちは任せたよ。私は学園長のところに行く。」

「ああ。分かった。」

さて、学園長室に…ん？あれは瑞希でしょうか？何か探しているようです…

「おはよう瑞希。捜し物？」

「あ、まこちゃん。おはようございます。実は…なんですよ。」

「そうなの？手伝おうか？」

「いえ。まこちゃんは自分の作戦がありますし、そちらに集中してください。」

「うん。分かった。ちょっと行ってくるね。」

瑞希はやっぱり優しいですね。

第7問く本気の実琴と卑怯者の末路【後編】くpart1（後書き）

part2に続く

第7問く本気我真琴と卑怯者の末路【後編】くpart 2（前書き）

「（コンコン）失礼します。」

私は学園長室にいます。

「ん？誰さね？」

白髪の老人もとい学園長が迎えてくれました。

「これの使用許可をもらいに来ました。」

そういつて私が机に置いたのは―

「腕輪かい？」

「『黄昏の腕輪』です。今朝やっと完成しました。」

「ほう。」

何ですかその『ほう』って、はっきり言って腹立たしいです。おつと、つい本音が…

「能力をお見せしますね。アウェイクン起動。サモン試獣召喚。そしてダブル二重召喚。」

『Fクラス 水野真琴

数学 1359点』

私の足元に召喚獣が現れます。

「^{クロス}融合。」

『Fクラス 水野真琴

数学 2718点』

「なるほど。なかなかやるじゃないか。」

「あと1つ、複写^{トレス}というのがありますが、これは相手がいないときません。以上の4つが能力です。承認していただけますか？」

「そんなものなくても十分だろうにーまあいいだろう。承認してやるよ。」

「ありがとうございます。そろそろ時間なので失礼させていただきます。」

そういつて私はBクラスの方へ向かいました。

第7問く本気の真琴と卑怯者の末路【後編】く part 2

「ドアと壁をうまく使うんじゃない！戦線を拡大させるでないぞ！」

Bクラスの前に行ったら、秀吉の指示が飛んでいました。

「明久！作戦はどうだった？」

「あ、お帰り真琴。うまくいったよ。来たところで悪いんだけど、指揮をお願いできる？姫路さんの様子がおかしいんだ。」

「うん。了解。皆、なるべく単教科で勝負に挑んで！補給も念入りにして！」

「真琴、ありがとうなのじゃ。」

秀吉が駆け寄ってきました。

「気にしないで。」

『左側出入り口、押し戻されています！』

『古典の戦力が足りない！援軍を頼む！』

やっぱり敵は得意の文系で来ますか。

「瑞希、左側を援護して！」

こうなったら瑞希に任せましょう。

「あ、そ、そのっ…!」

瑞希、どうしたんですか?このままじゃ突破されますよ!

「>明久!<」

「>了解!<」

明久にテレパシーを送ると竹中先生の方にダッシュして行って―

「…ツラ、ずれてますよ。」

と脅迫(?)しました。よし、これで時間が稼げます。

「瑞希、どうしたの?」

「姫路さん、どうかしたの?」

明久も心配しているようですね。確かに様子がおかしいです。

第7問く本気の真琴と卑怯者の末路【後編】く part 2（後書き）

「な、何でもないです。」

「そうには見えないよ。何かあるなら話して。それによって今後の作戦も大きく変わるよ。」

「本当に何でもないんです。」

いや、じゃあ何でそんな泣きそうな顔をしてるんですか？

『右側出入り口、教科が現国に変わりました。数学教師は拉致された模様。』

右側まで文系科目になるなんて、ピンチですよ！

「私が行きますっ！ーあ……」

瑞希が駆け出そうとしましたが、何かを見て俯いてしまいました。いったい何が…

「なるほど。そういうことか。」

瑞希が見た先にあったもの。それは朝瑞希が探していたラブレターでした。これで辻褄があいましたね。

「瑞希。具合が悪いなら無理しないで。まだ先は長いよ。」

「…はい。」

「じゃあちよつと用があるから行くね。」

「あ…！」

横では明久も同じ考えに至ったらしく、同じ方向に歩き出しました。

「面白いことしてんじゃん（くれるじゃないか）、根本（君）。」

あの野郎、ブチ殺してやります。

part3に続く

第7問く本気の真琴と卑怯者の末路【後編】く part 3 (前書き)

「雄二っ!」

「どうした? 2人共。」

教室に飛び込むと、雄二がノートに何か書き込んでいるところでした。

「話がある。」

「とりあえず聞こうか。」

「根本君の着ている制服がほしいんだ。」「根本をこの世から抹殺したいんだ。」

「…おまえらに何があった?」

…これじゃあ変態と殺人鬼みたいじゃないですか。

「事情は話せないけど協力して!」

「ああ。抹殺は無理だが制服の方は何とかしてやる。それだけか?」

「瑞希を作戦から外して! 代わりにその作戦は私たちがやる。」

「そうか。それならいいだろう。」

「何をすればいい?」

「根本に奇襲を仕掛ける。方法はおまえらに任せるが、フォローはないぞ。」

「ずいぶん難しい仕事ですね。」

「失敗したら?」

「失敗するな、必ず成功させる。」

なるほど。失敗すれば私たちの負けということですか。

「それじゃあ俺はDクラスに行ってくる。うまくやれよ。」

「どうする真琴?」

「安心して、策はある。明久。あなたの長所は何?」

「僕の長所―――そうか。分かった。」

「その長所を生かして戦う。さあ、Dクラスに行くよ。」

第7問く本気我真琴と卑怯者の末路【後編】くpart3

私たちは今Dクラスにいます。

「いくよ！起動。」
アウェイクン

「試獣召喚！」
サモン

『Fクラス 水野真琴 & amp; 吉井明久

古典 1146点 17点』

「融合。」
クロス

手をつないだ私達の召喚獣は文字どおり1つになりました。

『Fクラス 水野真琴 + 吉井明久

古典 1163点』

「よし。融合成功！」

「凄いやー！」

「武装選択…超電磁砲」
レールガン

準備OKです。後は…

「>雄二、皆を教室から遠ざけて！<」

「>了解だ！<体勢を立て直す。一旦引くぞ。」

「逃がすか！追え！」

「さて明久。反動がものすごいと思うけど、覚悟はいい？」

「いつでもいいよ！真琴こそ飛ばされないようにね。」

「よし、行くよ！」

「ファイアー発射！」

明久との融合により物理干涉能力を持った超電磁砲レールガンは、Dクラスの壁を突き抜けてBクラスに入り、根本の召喚獣を直撃します。

「なっ？お前等どこから？ぐわあああゝ」

今ここに、Bクラス戦は終結しました。

第7問く本気の真琴と卑怯者の末路【後編】く part 3 (後書き)

J「7000pv、1100ユニーク達成!」

真・明「ありがとう!」

J「凄いな。昨日は5500pv、950ユニークだっただろ？」

明「そんなに人気なのかな？」

真「でも感想ないよ…」

明・J「……………」

J「感想をくれ〜!!!」

真・明「くださいっ」

J「ふう、さて2人とも。あんなことして大丈夫なのか？死傷者が
でるぞ。」

真・明「あ……………」

J「お前等、退学とかにならない？」

明「じ、次回く卑怯者へ送る狂詩曲くラブソングお楽しみに!」

真「お楽しみに!」

明「次回で出番最後かな？」

「……………」

第8問く卑怯者へ送る狂詩曲へラプソディーくpart1(前書き)

更新遅れてすいません！バカテストはお休みです。

「お主ら、随分と思いきった行動に出たのう。」

終戦後、滅茶苦茶になったBクラスを見た秀吉に、そんなことを言われしました。

「うう。。。痛いよう。。。」

「確かにやりすぎたかもね。」

私達も壊れた壁やら爆風やらでボロボロになっていました。

「何というか…真琴、お主馬鹿が移ってきておらぬか？」

「…気のせいよ。」

壁を壊した上に負傷者を出してしまうなんて、問題にならないわけ

がありません。私達の放課後の予定は職員室でのハートフルコミュニケーションで埋まってしまうました。まあ、退学とかにならないだけ良かったのかな？

「さて、それじゃ嬉し恥ずかし戦後対談と行くか。な、負け組代表？」

「……………」

床に座り込んでいる根本。さっきまでの強気はどこへ行ったのでしようか？

「本来なら設備を明け渡してもらい、お前らには素敵な卓袱台をプレゼントするところだが、特別に免除してやってもいい。」

「皆落ち着いて。私達の目標はAクラスでしょ？」

ざわざわと騒ぎ始めたので、フォローしてあげました。

「真琴の言つとおりだ。ここは通過点にすぎない。」

第8問〜卑怯者へ送る狂詩曲へラプソディー〜 part 1

一呼吸おいてー

「だからBクラスが条件を呑めば解放してやるつもりかと思う。」

その言葉で皆納得したような顔になります。雄二の性格がわかってきたようです。

「…条件は何だ。」

「それはお前だよ、負け組代表さん。」

「俺、だと?」

「ああ。お前には散々好き勝手やってもらったし、正直去年から目障りだったんだよな。」

誰もフォローしません。まあ当然ですかね?

「そこで、お前らBクラスに特別チャンスだ。」

私が話を繋ぎます。

「Aクラスに行って、試召戦争の準備ができていると宣言して来て。そうすれば今回は設備については見逃してあげる。ただし、宣戦布告はしないで、あくまでその意志があるって伝えて。」

「代表さんが、これを着てやってくれたらね。」

そう言いながら、私は女子用の制服を取り出します。先ほど秀吉が着てたものです。

「ば、馬鹿なことを言うな！俺がそんなふざけたことを…！」

『Bクラス生徒全員で必ず実行させよう！』

『任せて！必ずやらせるから！』

『それだけで教室を守れるなら、やらない手はないな！』

Bクラスの皆はやらせる気満々ですね。根本はやはり嫌われています。

第8問↳卑怯者へ送る狂詩曲へリプライデー↳part1(後書き)

part2に続く

第8問〜卑怯者へ送る狂詩曲へラプソディー〜 Part 2 (前書き)

「んじゃ、決定ね。雄二、後よろしく。」

「ああ。了解。」

「よ、寄るな！変態！黙れ！」ぐふうっ！

往生際が悪いですね。まあ黙らせましたけどー

「「真琴！」」まことちゃん

「ん？美波に瑞希、どうしたの？」

突然二人がつめよってきました。どうしたんでしょうか？

「「アキ（吉井君）と融合したって本当なの（なんですか）？」」

はい？

「え？あ、うん。一応ね。」

何かいけなかったでしょうか？

「抜け駆けなんてするいわよ真琴！ウチもいつかアキと…」

「そうですっ！卑怯ですっ！私もいつか吉井君と…」

「「（ポッ）」」

「……………」

どうシツ「めば…

「それに、吉井君とデートっ」「そ、それより瑞希！朝探してたあれ…」「あっ、忘れてました。ありがとうございます。」

危なかつたです。あのことがバレたら異端審問会の方々に邪魔をされちゃいます。

手紙の方は明久が何とかしているでしょう。

第8問く卑怯者へ送る狂詩曲へラプソディーくpart2

「こ、この服、ヤケにスカートが短いぞ！」

「ほら、いいからキビキビ歩きなさい！」

「み、水野め！よくも俺にこんなことを！」

「写真会も追加ね。」

「なっ！き、聞いてないぞ！」

「今決めたの。その後、その格好のまま町内を一周してー」

「ふざけるな！そんなことをしたら俺はもう町内を歩けなくなる！」

「じゃあ彼女さんの前で根本博覧会をー」

「町内を歩かせていただきます。」

「素直でよろしい。」

え？私酷い？そんなことないですよ。どうせ後で彼女さんにバレるでしょうしね。

「真琴。その腕輪なんだが…」

雄二が話しかけてきました。そりゃあ気になりますよね。

「ん？これ？これは『黄昏の腕輪』といってね、今朝完成したの。効果はーまあ後々教えるわ。」

「ああ。そんなものも作れるのか。お前すごいな。」

「まあね。ほかにも薬とか…「どんな薬ですか？」み、瑞希？手紙はもういいの？」

どこから来たんですか？

「はい。解決しました。それよりー」

「いろいろあるよ。睡眠薬とか、性転換薬とか、あと惚れ薬とか…」

あ…

『『『『何い？』』』』

『それ、売ってくれ！』

『俺にも！』

「……………俺も」

第8問〜卑怯者へ送る狂詩曲へリプソディー〜part2（後書き）

やっぱりややこしいことに…知ってる声もありましたけど…
こっぴなったらー

「あ、後でね。テレポートっ」

その場を大急ぎで脱出しました。

「8500PV、1300ユニーク達成いたしましたっ」

真「イエイー！」

真「ところでさ、何で皆薬を欲しがるの？」

「……………」

真「作者さん？」

「青春だからさっ」

真「は？」

J「次回く馬鹿VSエリート 頂上決戦！くお楽しみに」

真「テンションがウザい」

第9問〜馬鹿VSエリート 頂上決戦！〜 part 1 (前書き)

バカテスト(生物)

問 以下の問いに答えなさい。

『人が生きていく上で必要となる五大栄養素を全て書きなさい。』

↳

姫路瑞希の答え

『1 脂質 2 炭水化物 3 タンパク質 4 ビタミン 5 ミネラル』

↳

教師のコメント

流石は姫路さん。優秀ですね。

吉井明久の答え

『1 砂糖 2 塩 3 水道水 4 雨水 5 湧き水』

教師のコメント

それで生きていけるのは君だけです。

水野真琴の答え

『1 空気 2 水 3 適当な温度 4 日光 5 肥料』

教師のコメント

誰も植物のことを書けとは言っていないません。

土屋康太の答え

『初潮年齢が10歳未満の時は早発月経という。また、15歳になっても初潮がない時を遅発月経、さらに18になっても初潮がない時を原発性無月経といい...』

教師のコメント

保険体育のテストは1時間前に終わりました。

第9問〜馬鹿VSエリート 頂上決戦！〜part 1

翌朝。点数補充を終えた私達は、Fクラスで最後の作戦の説明を受けていました。

「まずは皆に礼を言いたい。周りの連中には不可能だと言われたにも関わらずここまで来れたのは、他でもない皆の協力があったのとだ。感謝している。」

壇上にたつ雄二が、柄にもなく礼を言いました。

「ゆ、雄二、どうしたのさ。らしくないよ?」

「ああ。自分でもそう思う。だが、これは偽らざる俺の気持ちだ。ここまで来れた以上、絶対にAクラスに勝ちたい。皆もそうだろう?」

『おおーっ!』

『そうだーっ!』

凄いです。最終決戦を前にして、皆の気持ちが一つになっています。

「皆ありがとう。そして残るAクラス戦だが、これは俺と翔子の一騎打ちで決着をつけたいと考えている。」

何ですって?雄二がAクラス代表と一騎打ち?初耳ですよ?

「馬鹿の雄二が勝てるわけなあっ!?」

明久をカッターがかすめます。怖い脅しですね。

「次は耳だ。」

訂正。本気のようにです。

「でも明久の言うとおりだよ。まともになり合っても勝てないよ。」

「ああ。だが、それはDクラス戦もBクラス戦も一緒だっただろう？」

確かにそうですね。

第9問〜馬鹿VSエリート 頂上決戦！〜part2（前書き）

さて、後は任せても大丈夫でしょう。眠いし、寝ますか。

「明久、皆で宣戦布告にいくときに起こして。」

「え？寝ちゃうの？」

「うん。昨日色々あったせいで寝不足なんだ〜んじゃ、おやすみ。」

「…うん。」

明久が苦笑いしているようですが気にしません。今はただ、眠りましょう。

「おい、真琴。宣戦布告行くよ。」

「ん、了解。」

私は眠い目をこすりながらAクラスへ向かいました。

「一騎討ち？」

「ああ。Fクラスは試召戦争として、Aクラス代表に一騎討ちを申し込む。」

所変わってAクラス。

今回は雄二を筆頭に明久、私、瑞希、秀吉に康太のフルメンバーで来ています。

「うーん、何が狙いな？」

現在雄二と話しているのは秀吉の双子の姉の優子、以前色々あって仲良くなりました。

「もちろん俺達Fクラスの勝利が狙いだ。」

優子が怪しむのも無理はないでしょう。最低クラスの私達が学年主席に一騎打ちで挑むなんて、普通裏があると考えますよね。

第9問〜馬鹿VSエリート 頂上決戦！〜part 2

「面倒な試召戦争を手軽に終わらせることができるのはありがたいけどね、だからと言ってわざわざリスクを犯す必要も無いかな。」

「賢明だな。」

「ここまでは予想通り、ここからが本番です。」

「>真琴、任せていいか？<」

「>うん。OK！<」

「>お前作戦分かるのか？<」

「>さつき雄二の考え読んだからバッチリ！<」

「>…じゃあ頼む。」<」

「>任せて。<そういえば優子、Cクラスとの試召戦争どうだった？<」

「時間は取られたけど、それだけだったよ？何の問題も無し。」

秀吉の挑発に乗り、昨日Aクラスに攻め込んだCクラスですが、たいした効果はなかったようですね。

「Bクラスと勝負する気は？」

「Bクラスって昨日来ていたあの…」

「そう。アレが代表のクラス。まだ宣戦布告はされてないみたいだけど、どうなるかな？」

「でも、BクラスはFクラスと戦争したから、3ヶ月の準備期間を取らない限り試召戦争はできないはずだよな？」

「んー、でもBクラスとの戦争は『和平交渉にて集結』ってなってるから、何の問題もないよ。あ、Dクラスもか。」

「…それって脅迫？」

「違うよ。ただのお願いだよ。」

第9問〜馬鹿VSエリート 頂上決戦！〜 part 2 (後書き)

何か私が悪者みたいです。

「うーん。じゃあこっちからも提案。お互い5人ずつ選んで、一騎討ち5回で3回勝った方の勝ち、っていうのならないよ。」

「う…」

さすが優子。きっちり警戒していますね。

「なるほど。こっちから私が出る可能性を警戒してるんだね。でも、こっちからは雄二が出るよ。」

「うん。真琴が出てきたら勝ち目がないしね。それに、その言葉を鵜呑みにはできないよ。」

「そうか。それならその条件を呑んでも良い。」

え？雄二？いいんですか？

「ホント？嬉しいな」

「けど、勝負する内容はこちらで決めさせて貰う。これくらいのハズレはあってもいいだろう。」

なるほど。科目の選択権を得るために呑んだんですか。雄二もなかなかやりますね。

「え？うーん…」

さあ、どうしますか？

「…受けてもいい。」

「うわっ」

「…雄二の提案を受けてもいい。」

何だ。霧島さんですか。気配が無かったから驚きましたよ。

「あれ？代表。いいの？」

「…その代わりに、条件がある。」

「条件って？」

「…負けた方は何でも1つ言うことを聞く。」

なるほど。何かだいたい予想はつきます。

part3に続く

第9問〜馬鹿VSエリート 頂上決戦！〜part3（前書き）

「じゃ、ごうしよう？勝負内容は5つの内3つそっちに決めさせてあげる。2つはうちで決めさせて？」

さすがに全部は無理でしたか。でも、まあいいでしょう。

「いいよ。交渉成立だね。」

「え？いいの真琴？もし負けたらー」

「何言ってるのか分からないけど、大丈夫だよ。ね？代表。」

「ああ。問題ない。皆に迷惑はかけない。」

「じゃあ勝負は10時からでもいい？」

「…分かった。」

「よし、よくやった真琴。皆、いったん帰るぞ。」

私達はAクラスを後にします。さて、最終決戦まで、もう少しです。

第9問〜馬鹿VSエリート 頂上決戦！〜part3

「では、両名共準備は良いですか？」

立会人はAクラス担任の高橋女史。最近よくお世話になってますね。

「ああ。」「…問題ない。」

「それでは、1人目の方、どうぞ。」

「アタシから行くよっ」

向こうは優子ですか。対するは—

「ワシがやるっ。」

双子の弟の秀吉。姉弟対決です。

「ところでさ、秀吉。」

「なんじゃ？姉上。」

「Cクラスの小山さんって知ってる？」

それって…

「優子ストップ！」

「黙りなさい。」

「…はい。」

殺気が尋常じゃないんですけど…

「秀吉、ちよつとこつちに来てくれる?」

「うん?ワシを廊下に連れ出してどうするんじゃ姉上?」

秀吉…さよなら。

「(ガラガラ) 秀吉は急用ができたから帰るってさっ。代わりの人を出してくれる?」

よし、それならー

「じゃあ、私が出るよ。」

「真琴!?!」

第9問〜馬鹿VSエリート 頂上決戦！〜part3（後書き）

J「はい、とつぜんスイマセン。今日はここまでです。」

真「え、何で？私の大活躍が…」

J「えー、宿題とかの関係もありまして、1つの話を2日に分けて書くことにしたいと思います。」

明「宿題やってないの？」

J「…うん。」

真「やっといてよ。」

J「面目ない。」

真・明「全く…」

J「明日も見てくださいっ！よろしくお願いします。」

真・明「お願いします!！」

第9問〜馬鹿VSエリート 頂上決戦！〜part 4（前書き）

「真琴!？」

勝負です優子。

「試験召サモー」待ってください。「…はい?」

召喚しようとしたところで、高橋女史に止められました。

「水野さんとは私が戦います。」

え?何言ってるんですか?

「何ですか?」

「あなたの召還獣に対抗できる生徒はAクラスにはいません。だから私が相手をします。」

「そんな勝手な…」いいよ、明久。「…でも。」

「いいですよ先生。勝負です。試験召喚サモン!」

「やる気になりましたか。試験召喚サモン。」

『Fクラス 水野真琴 VS 学年主任 高橋洋子
総合科目 14321点 VS 26816点』

何ですか?この点数は?

『2人共10000点をこえてるぞ!』

『ありえねえ…!』

「なっ!真琴の約2倍はある、どうするの真琴?」

「さあ、どうしますか水野さん?降参してもいいですよ。」

「降参?するわけないじゃないですか。」

本気でいきますよ。

「^{ダブル}二重召喚、そして融合^{クロス}」

『Fクラス 水野真琴×2』

総合科目 28642点』

「高橋先生を越えた!」

「これなら行ける!」

第9問〜馬鹿VSエリート 頂上決戦！〜part 4

「武装選択…斬鉄剣！」

「五門!？」

「はぁあっ!！」

突撃する私の召喚獣。これならあの鞭も切れるはずです。
剣を振りかざして…

「(バチーン)えっ?」

『水野真琴 21481点』

鞭が、消えた? いったいどこから…

「私の鞭は目で追っても見えませんよ。」

「腕輪ですか…だったら、^{トレス}複写っ!」

伸び縮みする能力ですか。『伸縮』といったところですかね。それ
にあの点数。早すぎて見えませんか。

「^{トレスオーバー}複写終了。武装変更…双剣。」

それなら、

「追わなければいいだけです。」

私は一気に近づいて切りつけます。

『高橋洋子 17905点』

「流石です。すぐに対処法を見つけましたか。ですがー」

「えっ?」

召喚獣が一瞬で遠ざかりました。

「この距離なら届かないでしょう?」

『水野真琴 12039点』

5000点差、ヤバいです。

「しょうがない。腕輪使います。」

私の第2の腕輪…その効果は、

「出よ!ドラゴン!焼き尽くせ!」

幻の生き物を召喚します!

第9問〜馬鹿VSエリート 頂上決戦！〜part 4（後書き）

「くっ！あなたも遠距離攻撃が…」

『水野真琴 7039点 VS 高橋洋子 3478点』

「1回5000点か…あんまり使えないな、これ。」

「なに言ってるんですかそんな威力で…」

あと1回なら…

「もう1回！出よ！ドラゴン」そこですっ「…えっ？」

『水野真琴 4798点』

ヤバイ。今ドラゴン出したから…

『水野真琴 0点』

「ふう。これでAクラスの1勝ですね。」

……

「…ゴメン皆。負けちゃった。」

「…真琴。」

「よくやった真琴。高橋先生をあそこまで追い込んだんだ。誇って

良いと思つぞ。」

「うん。ありがとう雄二。」

私、このクラスが大好きです。

part 4 に続く

第9問〜馬鹿VSエリート 頂上決戦！〜 part 5 (前書き)

「では、次の方どうぞ。」

「私が出ます。科目は物理でお願いします。」

Aクラスからは佐藤美穂さん。Fクラスからは、

「よし。頼んだぞ、明久。」

「え？僕？」

「大丈夫。私達は明久を信じてる。」

私は激励の言葉をかけます。

「ふう。やれやれ、僕に本気を出せてこと？」

ん？明久の本気？

「ああ。もう隠さなくてもいいだろう。この場にいる全員に、おまえの本気を見せてやれ。」

『おい、吉井って実は凄いヤツなのか？』

『いや、そんな話は聞いたことないが。』

『いつものジョークだろ。』

皆も同じ反応ですね。

「吉井君、でしたか？あなた、まさか…」

明久の相手の佐藤さんが戦きます。

「あれ、気づいた？ご名答。今までの僕はぜんぜん本気なんて出しちゃあいない。」

「それじゃ、あなたは…！」

「そうさ。君の想像通りだよ。今まで隠してきたけれど、実は僕——左利きなんだ。」

『Fクラス	吉井明久	V S	Aクラス	佐藤美穂
物理	62点	V S	389点	』

即死しました。

「この馬鹿！テストの点数に利き腕は関係ないでしょうが！」

「もっともです。」

第9問〜馬鹿VSエリート 頂上決戦！〜part 5

「み、美波！フィードバックで痛んでるのに、更に殴るのは勘弁して！」

「よし。勝負はここからだ。」

「ちょっと待った雄二！アンタ僕を全然信頼してなかったでしょう？」

「勝つ方に信頼していたわけじゃない！」

「そんな！真琴は違うよね？ちょっと、何で目をそらすのさ！」

「ごめんなさい。負けると思っていました。」

「では、3人目の方、どうぞ。」

「……………（スック）」

康太が立ち上がりました。この勝負は大丈夫でしょう。

「じゃ、ボクが行こうかな。1年の終わりに転入してきた工藤愛子です。よろしくね。」

転入生でしたか。どうりで見たことがないと思ったわけです。

「科目は何にしますか？」

「……………保健体育。」

康太の唯一の得意科目が選択されました。

「土屋君だっけ？ずいぶんと保健体育が得意みたいだね？」

ずいぶん余裕そうですね。まさか彼女も？

「でも、ボクだってかなり得意なんだよ？…君と違って、実技で、
ね。」

こら、爆弾落とさないでください。約2名が被害にあっています。

「そっちのキミ、吉井君だっけ？勉強苦手そうだし、保健体育で良かったらボクが教えてあげようか？もちろん実技で。」

第9問〜馬鹿VSエリート 頂上決戦！〜part5（後書き）

「フツ。望むところー」アキには永遠にそんな機会なんて来ないから、保健体育の勉強なんて要らないのよ！」「そうです！永遠に必要ありません！」「……………」

「2人共、明久が死ぬほど哀しそうな顔してるんだけど……」

……………ドンマイッ！

「そろそろ召喚を開始してください。」

「はい。試獣^{サモン}召喚つと。」「……………試獣^{サモン}召喚。」

康太の武器は小太刀の二刀流、対する工藤さんはー

『何だあの巨大な斧は？』

超巨大な斧、おまけに腕輪付きです。

「実践派と理論派、どっちが強いか見せてあげるよ。」

巨大な斧に雷をまとわせて突進します。

「それじゃ、バイバイ。ムッツリーニくん。」

そして、斧を振り、召喚獣を両断すると思った瞬間ー

「……………加速。」

康太の召喚獣の姿がブレて、一気に相手の射程外に移動します。

「……………加速、終了。」

と呟くと、工藤さんの召喚獣が全身から血を吹き出して倒れました。

『Fクラス 土屋康太 VS Aクラス 工藤愛子
保健体育 572点 VS 446点』

流石です。

part 6 に続く

第9問〜馬鹿VSエリート 頂上決戦！〜 part 6 (前書き)

「昨日は中途半端に終わってしまい、申し訳ありません。書いた文が消えてしまいました。完全に僕の不注意です。以後気をつけます。」

第9問〜馬鹿VSエリート 頂上決戦！〜part 6

「これで2対1ですね。次の方は？」

高橋女史が淡々と作業を進めます。

「あ、は、はいっ。私ですっ。」

こちらは当然瑞希、

「それなら僕が相手をしよう。」

Aクラスからは、久保利光！私や瑞希が振り分け試験をリタイアしたため、彼は学年次席の座についています。

「ここが一番の心配どころだ。」

確かに、瑞希と久保君の実力はほぼ互角でした《……》ね。でも、今の瑞希は…

「科目はどうしますか？」

「総合科目をお願いします。」

「ちょっと待った。何を勝手に「構いません。」…姫路さん？」

「明久、大丈夫。瑞希は負けないよ。」

「それでは…」

高橋女史が再び操作を行います。
それぞれの召喚獣が喚び出されて 一瞬で勝負がつかました。

『Fクラス	姫路瑞希	VS	Aクラス	久保利光
総合科目	4409点	VS		3997点

『マ、マジか？』

『いつの間にこんな実力を？』

『この点数、霧島翔子に匹敵するぞ…！』

至る所から驚きの声が上がります。

「ぐっ…！姫路さん、どうやってそんなに強くなったんだ…？」

久保君が悔しそうに瑞希に尋ねます。

「…私、このクラスの皆が好きなんです。人の為に一生懸命な皆の
いる、Fクラスが。」

「Fクラスが好き？」

「はい。だから、頑張れるんです。」

やっぱり瑞希も同じ意見でしたね。

「これで2対2です。」

高橋女史も驚きの表情を浮かべます。さて、最後は…

「最後の一人、どうぞ」

「…はい。」

「俺の出番だな。」

霧島翔子対坂本雄二。後は任せますよ、雄二。

「教科は日本史、内容は小学生レベルで方式は100点満点の上限ありだ！」

その宣言で、Aクラスにざわめきが生まれます。

『上限ありだつて？』

『しかも小学生レベル。満点確実じゃないか。』

『注意力と集中力の勝負になるぞ…』

これで私達にも勝ち目が見えてきました。

「分かりました。そうなると問題を用意しなくてはいけませんね。少しこのまま待っていてください。」

高橋女史が教室を出て行きます。すると、Fクラスの皆が雄二に近づいていきました。

「雄二、後は任せたよ。」

明久がぐつと雄二の手を握ります。

「ああ。任せられた。」

雄二が力強く握り返します。

「……………（ピッ）」

康太が歩み寄り、ピースサインを送ります。

「お前の力には随分助けられた。感謝している。」

「……………（フッ）」

口の端を軽く持ち上げ、元の位置に戻りました。

「坂本君、あのこと、教えてくれてありがとうございます。」

「ああ。明久のことか。気にするな。後は頑張れよ。」

「はいっ」

さて、私も行きますか。

「雄二、後は任せたわ。頑張っつて。」

そう言って拳を突き出します。

「ああ。ありがとう。」

そう言いながら、私の拳を押し返しました。

「では、最後の勝負、日本史を行います。参加者の霧島さんと坂本君は視聴覚室に向かってください。」

「…はい。」

「じゃ、行ってくるか。」

霧島さんに続き、雄二も教室を出ます。

「皆さんはここでモニターを見ていてください。」

これで決着です。雄二、頼みます。

—

『では、始めてください。』

《次の（ ）に正しい年号を記入しなさい。》

（ ）年 平城京に遷都

（ ）年 平安京に遷都

—

（ ）年 大化の改新

「あ…!」

ありました。

「これで、私達の卓袱台が」

『『『『『システムデスクに！』』』』』

「最下層に位置した僕らの、歴史的な勝利だ！」

『『『『『うおおおっ！』』』』』

教室を揺るがすような歓喜の声。

《日本史勝負 限定テスト 100点満点》

《Aクラス 霧島翔子 97点》

VS

《Fクラス 坂本雄二 53点》

Fクラスの卓袱台がみかん箱になりました。

第9問〜馬鹿VSエリート 頂上決戦！〜 part 6 (後書き)

J「15000pv、2000ユニーク！」

J・真・明「皆ありがとう！」

真「みかん箱になったね。」

明「…うん。」

真「雄二懲らしめなきゃね。」

明「だね。」

J「……………」

真「次回試召戦争編ラスト！〜決着とこれから〜」

真・明「お楽しみに！」

J「前々回と同じ気が…お楽しみに！」

明「まず、真琴が押さえて、そこを前から僕がー」

真「うんうん。」

J「……………」

第10問（試召戦争編ラスト）～決着とそれから～ part 1（前書き）

バカテスト～歴史～

問 次の（ ）に正しい年号を記入しなさい。

『（ ）年 キリスト教伝来』

霧島翔子の答え

『1549年』

教師のコメント

正解。特にコメントはありません。

坂本雄二の答え

『雪の降り積もる中、寒さに震える君の手を握った1993』

教師のコメント

ロマンチックな表現をしても間違いは間違いです。

水野真琴のコメント

ほう。あの大事なテストでふざけるなんて、良い度胸ですね。

覚悟してください。

第10問（試召戦争編ラスト）〜決着とそれから〜 part 1

「3対2でAクラスの勝利です。」

視聴覚室になだれ込んだ私達に対して、高橋女史が締めセリフの台詞を送ります。

ええ、分かっています。分かっていますとも。

「…雄二、私の勝ち。」

床に膝をついている雄二に霧島さんが歩み寄ります。

「…殺せ」

「良い覚悟だ、殺してやる！歯を食い縛れ！」

「安心して、一思いに殺してあげるから。」

「アキ、落ち着きなさい。」

「まこちゃんも落ち着いてください。」

「だいたい、53点ってなんだよ！0点なら名前の書き忘れとかも考えられるのに、この点数だと」

「いかにも、俺の全力だ」

「この阿呆があーっ！」「」

「アキ、落ち着きなさい！アンタだったら30点も取れないでしょうが！」

「それについては否定はしない！」

否定しようよ。

「それなら、坂本君を責めちゃダメですっ！」

「とめないで瑞希に美波、この馬鹿には喉笛を引き裂くという体罰が必要なの！」

「それって体罰じゃなくて処刑です！」

瑞希が必死に私たちを止めます。

雄二、瑞希の優しさに感謝しなさい。

「……でも、危なかった。雄二が所詮小学校の問題だと油断してなければ負けてた。」

「言い訳はしねえ」

凶星ですか。

「……ところで、約束。」

そういえば、何でも言うこと聞かって約束しましたね。

「……………！（カチャカチャカチャ！）」

康太は何をしてるんでしょうか？明久も手伝い始めましたけど…

「分かっている。なんでも言え。」

と、潔い雄二の返事。

「…それじゃ」

霧島さんが瑞希と私のほうを見てから、再び雄二を見つめます。そして、小さく息を吸って

「…雄二、私と付き合って。」

言い放ちました。やっぱりですか。

「やっぱりな。お前、まだ諦めてなかったのか？」

「…私は諦めない。ずっと、雄二のことが好き。」

「その話は何度も断っただろ？他の男と付き合う気はないのか？」

「…私には雄二しかいない。他の人なんて、興味ない。」

霧島さんは一途ですね。

「拒否権は？」

「…ない。約束だから。今からデートに行く。」

そうだ

「霧島さん。」

「…何？」

「私は水野真琴、真琴でいいよ。2人のお付き合いの記念にプレゼントあげる。」

「…スタンガンと手錠と薬 ありがとう。真琴は良い人。」

「真琴！お前なんて物を渡すんだ！」

復讐完了！まさか許されたとは思ってませんでしたよね？

「どういたしまして、霧島さん。」

「…翔子でいい。じゃあ行こう、雄二。」

「ぐあっ！放せ！やっぱこの約束はなかったことに」

ぐいっ つかつかつか

霧島さん…もとい翔子は、雄二の首根っこを掴み、教室を出て行きました。

「」「」……………」

教室に沈黙が訪れます。

「さて、Fクラスの皆。お遊びの時間は終わりだ。」

教室内に野太い声が響きます。

「あ、こんにちは。スネー…鉄人先生。」

「ん？鉄人というのは良いとして、今伝説の傭兵の名を呼ばなかったか？」

スネーク知ってるんですか？ていうか鉄人良いんですか？

「で、何か用ですか？」

「ああ。今から我がFクラスに補習についての説明をしようと思っ
てな。」

え？我が≫…≫Fクラス？

「おめでとつ。お前らは戦争に負けたおかげで、福原先生から俺に
担任が変わるそうだ。これから1年、死に物狂いで勉強できるぞ。」

『『『『『何いつ！』『』『』『』』』』』

クラスの男子全員が悲鳴を上げます。

「いいか。確かにお前らはよくやった。Fクラスがここまで来ると
は正直思わなかった。でもな、いくら『学力が全てではない』と言
つても、人生を渡っていく上では強力な武器の1つなんだ。全てで
はないからといって、ないがしろにしていいものじゃない。」

壮大な人生論お疲れ様です。

「吉井。お前と坂本、ついでに水野は特に念入りに監視してやる。なにせ、開校以来初の《観察処分者》とA級戦犯、水野は…とにかく、念入りに監視してやる。」

ついでですか？それに理由もないんですか？

「そうはいきませんよ！なんとしても監視の目をかくぐつて、今まで通りの楽しい学園生活を過ごして見せます！」

「…お前らにはお前には悔い改めると言う発想はないのか？」

「鉄人先生、明久にそんな発想あるわけないですよ。」

溜息交じりの鉄人先生の台詞に、私がフォローを入れます。^{セリフ}

第10問(試召戦争編ラスト)〜決着とそれから part 1 (後書き)

part 2 に続く

第10問（試召戦争編ラスト）～決着とそれから～ part 2

「とりあえず明日から授業とは別に補習の時間を2時間設けてやる
う」

明日から大変ですね。さて、高橋女史を倒すためにも、もっと頑張
ってみましょうか。

「さあ〜て、アキ。補習は明日からみただし、今日は約束通りク
レープでも食べに行きましょうか？」

「え？美波、それは週末って話じゃ…」

美波もなかなか積極的ですね。

「だ、ダメです！吉井君は私と映画を観に行くんです！」

「ええっ！？姫路さん、それは話題にすら上がってないよ！？」

瑞希もですか？これじゃあ明久が公園の水だけの生活になりますよ？

「2人共ー」「真琴^{まことちゃん}は黙ってなさい（いてください）！」「…はい。」

そんなに睨まなくても…

「さあアキ！行くわよー！」

「吉井君！その前に私と映画ですっ！」

「ま、真琴！HELP！」

英語で助けを求められても無理です。2人からの殺気かものすごいです！

「アキ！いいから来なさい！」

「あがあっ！美波、首は致命傷になるから優しくー」

「ほら、早くクレープ食べに行くわよ！」

「わ、私と映画に行くんですよね？」

「いやああっ！生活費が！僕の栄養があっ！」

明久、逝ってらっしやい！

第10問（試召戦争編ラスト）〜決着とそれから〜 part 2（後書き）

J「試召戦争編完結！」

真・明「イエーイ！」

J「そして、16000pv、2200ユニーク達成！」

明「おおっ！」

J「お気に入り登録7名！」

真「ありがとう！」

J「間に2、3話挟んで、清涼祭編に入ります！次回〜真琴と明久と吉井明久の純情を守る会〜です！いよいよデート！」

明「題名が怪しいんだけど？」

真「吉井明久の純情を守る会って何？」

J「それはお楽しみつて事で。ちなみに明日は宿題の追い込みをするため更新できません。明後日の更新になります。それではー」

A「ー」また次回！」

特別授業その1〜真琴と明久と吉井明久の純情を守る会〜（前書き）

「」ども、JACKです。宿題が終わりません。どうしようっ？」

特別授業その1〜真琴と明久と吉井明久の純情を守る会〜

P r r r ピッ

「もしもし明久？」

「真琴？どうしたの？」

「昨日のデートどうだった？」

「あれデートなの？Dクラスの清水さんに殺されそうになったんだけど…」

「…お疲れ様。で、今日の午後空いてる？」

「え？まさか…」

「約束してたでしょ？で、どう？」

「行く！絶対行く！」

「じゃあ午後1時に私の家に来て。」

「うん。分かった！それじゃあ。」

ピッ

さて、私も準備しますか。

午後1時

ピンポン

「真琴、来たよ」

あ、明久が来ましたね。

「（ガチャッ）はい、お待ちせ」

「じゃあ行こうか。」

「うん！」

明久が凄く笑顔なんですけど…

Side ???

P r r r ピッ

「もしもし　ちゃん？まこちゃんが吉井君とデートに出発しました。」

「分かったわ。今から行く。　　は尾行を続けて。」

「了解ですっ」

ピッ

まこちゃん、抜け駆けなんてさせませんよ。

Side Out

私達は映画館に来ています。

「さて、何見る？」

「うん。値段は同じだし、長い方がお得なのかな？」

「…雄二、今日は何見る？」

「えっ？」

「昨日も言ったが、俺の希望は、叶うのか？」

「…じゃあ、『戦争と平和』」

「おい、それ昨日も見ただろ！」

「2回見る。」

「いい加減に無駄だってことを覚える！」

「…嫌なら、寝てても良い。」

「それは気絶って言う」「…ずっと一緒にいるのは同じだから、大丈夫。」「ノ、ノーマア。」

「…学生2枚2回分。」

「はい。学生1枚気を失った学生1枚、無駄に2回分ですね。」

「……………」

「昨日も来てたの？」

「うん。全く同じ状況だった。」

「…雄二も大変だね。」

「で、何見ようか？」

「じゃあ、これ見る？1時間45分だよ。」

「あ、うん。それにしよう。」

「学生2枚ください。」

「はい。」

「あ、お金。」

「私が出すからいいよ。昨日いっぱい使ったでしょ？」

「真琴、ありがとう！」

「Side??」

「。お待たせ、状況は？」

「あ、ちゃん。映画を見に入りました。」

「OK。どうする？一緒に入る？」

「そうですね、入りましょうか。」

「学生2枚ください。」

「はい。」

「Side Out」

「面白かったね。」

「そうだね。」

「次はどこ行く？」

「うーん、じゃあ『ラ・ペティス』行く？」

「…清水さん出ないかな？」

「ははは、大丈夫だよ。」

「……………」

「奢るよ?」

「本当?じゃあ行こう!」

「(パクパク)クレープって美味しいね!」

やっぱり昨日食べて無いんですね。

「そんな慌てなくても良いのに。」

「お姉様」

「やっぱり、清水さんが出た！」

…何で？

「いけません！そんな豚とデートだなんて、するなら私と
？」「何ですかお姉様？」

「邪魔するなら、今度から清水さんって呼ぶよ？」

「……………分かりました。ここは退きます。」

「ええっ？いいの？」

いいんです。美春には美春の事情があるんですよ。たぶん。

「で、そこに隠れてるお2人さんは何してんの？」

「（ビクッ）」

「え？美波に姫路さん？何で？」

「いつから気づいたんですか？」

「映画館に入るころからかな？」

「（ガシィッ）」

「美波？なんで十字架に貼り付けにするのかな？」

「これから、吉井明久の純情を守る会。略して『明純会』を始めま

す。」

「え？2人共？」

何ですかこれ？異端審問会の真似ですか？

「罪状。被告、水野真琴は明純会の血の盟約に背き、こっそりと吉井明久とデートをするという大罪を犯しました。これは事実ですか？」

「事実よ。」

∴ 血の盟約？

「被告、何か遺言はありますか？」

「ちょっと、弁護は？」

「有罪、死刑。」

「ストップ2人共！」

あ、明久。今のうちに

「何ですか？吉井君？」

「…えーつと「逃げるよ明久！」う、うん！」

テレポートで逃げます。

「ちょっと真琴！明日、覚えておきなさいよ。」

……怖すぎますよ、美波。あと瑞希もFクラスに染まらないでください。

と、いうことで今は家の前にいます。

「ふう、疲れた」

「明純会って何？」

「知らないわよ、血の盟約なんてした覚えないし……」

「……とりあえず、今日は終わりだね。」

「うん。ありがとう。楽しかったよ」

「僕も楽しかった。」

「じゃあ、また明日ね。」

「うん。また明日。」

そう言って、明久と別れました。
さて、明日どうしましょう？

特別授業その1〜真琴と明久と吉井明久の純情を守る会〜（後書き）

J「デート編終了です。文才無い…欲しいよ。」

真「酷い目に遭った。」

明「短くない？」

J「だから、デートとかそういうの書くの苦手なの。分かる？」

明「…分かったよ。」

J「うわーん（シクシク）」

真「泣き出しちゃった。」

J「次回はラブレター編改です。〜デートがバレただけで殺されそうになるってどういふこと〜を」

A11「お楽しみに」

特別授業その2〜デートがバレただけで殺されそうになるってどういふ事〜

バカテスト(日本史)

問 以下の() に当てはまる歴史上の人物を答えなさい。

『楽市楽座や関所の撤廃を行い、商工業や経済の発展を促した

のは() である。』

姫路瑞希の答え

『織田信長』

教師のコメント

正解です。

島田美波の答え

『ちよんまげ』

教師のコメント

日本にはもう慣れましたか？

この解答を見て先生は少し不安になりました。

水野真琴の答え

『まげ』

教師のコメント

あなたは日本人のはずですよね？

吉井明久の答え

『ノブ』

教師のコメント

ちよっと慣れ慣れしいと思います。

特別授業その2のデートがバレただけで殺されそうになるってやじらしい事〜

キンコンカーンコン

「うわっ、間に合った〜」

「おはよう明久。」

チャイムが鳴ると同時に明久が駆け込んできました。

「うん。おはよう。」

「お前ら、出欠を取るぞ。」

鉄人先生が入ってきました。本当にギリギリでしたね…

「工藤。」 「はい。」 「久保。」 「はい。」

「近藤。」 「はい。」 「斉藤。」 「はい。」

淡々と出欠確認が進み、眠そうに返事をするクラスの皆。

ああ、今日もいつもと変わらない平和な日常が始まります。

「坂本。」 「……………明久がデートをしたそうだ。」

『『『『『殺せええっ!!』『』『』『』』』』』

そしてすぐ終わりました。知ってる人の声がしたような…

「ゆ、雄二！いきなりなんてことを言い出すのさ!」

小声だったのに良く聞こえましたね。皆本当におかしいですよ。

『どづいつことだ！？吉井がそんなことをするなんて！』

『相手は誰だ！！』

やばい雰囲気が…

「お前らっ！静かにしろっ！」

シン

良かった。落ち着きましたね。

「それでは出欠確認を続けるぞ。」

「土屋。」 「……………相手は真琴。」

「ちよつと康太！？」

『『『『何だとおおっ！！』』』』

何てことを言っんですか！！

『どづいつことだ！あの吉井が水野さんとっ。』

『まさか今なら誰でもOKなのか？』

『そついつことなら…』

『『『『水野さん、結婚してくれええええ!!』』』』』

「嫌だ!!」

なぜ結婚？康太、恨みますよ。

「お前ら！何回言ったら分かるんだ！」

シン

再び静寂に包まれます。

「では、続ける。」

「手塚。」 「吉井コロス。」 「藤堂。」 「吉井コロス。」

「戸沢。」 「吉井コロス。」

「皆落ち着くんだ！なぜだか返事が『吉井コロス』に変わっているよー！」

「吉井、静かにしろ！」

「先生、ここで注意するべき相手は僕じゃないでしょう!?このままだとクラスの皆は僕に殴る蹴るの暴行を加えてしまいますよ！」

「新田。」 「水野さん好きだ！」 「布田。」 「水野さん好きだ！」 「根岸。」 「水野さん好きだ！」

「ちょっと皆！だからって私に告白する必要は無いよね？」

「水野！お前も静かにしろ！さて、遅刻欠席は無いようだな。今日も1日勉強に励むように。」

先生、あなたは教室内に漂う怪しい気を感じないんですか？

「待つて先生！行かないで！可愛い生徒を見殺しにしないで！」

「明久の言うとおりです！このままだと私達はいろいろな意味で死んじゃいます！」

「吉井、お前は不細工だ！そして水野、彼氏が増えるのはいいことだと思っぞ。」

「不細工とまで言われるとは思わなかったよバカ！」 「そういう問題じゃないですよバカ！」

「授業はまじめに受けるように。」

「先生待つて（よ）！せんせーい！！」

私たちの叫びも空しく、鉄人先生は教室を出て行ってしまいました。

「真琴？ちよ〜とこっちに来てもらえる？」

「み、美波？何で肩を掴むの？痛いんだけど？」

「明純会の続きをしますよ。早く来てください、まこちゃん。」

「瑞希？笑ってるの？顔が怖いよ？」

「ヤバイです。私死んじゃいます。明久のほうは？」

「今問題なのは明久の追究じゃない。 どうグロテスクに殺すかだ！」

「前提条件が間違ってたんだよ畜生！」

「あちらも大変なようです。なら」

「明久、逃げるよ！」

「了解！」

「一緒にダッシュで逃げます！！」

「アイツ、また水野さんとお！」

「絶対に許さん！追えっ！」

「サーチ&デス！」

「そこはせめてデストロイで！」

「本当に嫌な団結力ですね。」

「待ちなさい真琴！今止まれば許してあげるから！」

「じゃあ何で鞭なんか持ってるの？」

全力で逃げ

特別授業その2のデータがバレただけで殺されそうになるってやじらしい事さ

「なんとか更新できました。明日からは本当に更新ペースが落ち
そうですが、よろしくお願いします。」

特別授業その2〜デートがバレただけで殺されそうになるってどういふ事〜

『いたぞ！吉井だ！空き教室に向かったぞ！水野さんも一緒だ！』

『了解だ！見逃さないように追ってくれ！こっちは全部隊に連絡を取る！』

『オーケー！B部隊は正面から、C部隊は逆側から回って挟み撃ちにするんだ！』

『応っ！』

廊下を走っていると後ろからそんな会話が聞こえてきました。本当に無駄な団結力ですね。

『吉井！観念しろ！』

『1人だけ幸せになろうなんて甘いんだよ！』

目の前に5人の生徒が立ちふさがります。さっきのC部隊の方々でしょう。後ろからも迫ってきています。

「真琴、こっち！」

明久に手を引かれて空き教室に入ります。

「どうするの？閉じこもられるよ？」

「じじするのわー！」

すると、入り口に固まった連中の頭上からネットが覆いかぶされます。

「そっか。明久、電気の出るものある？」

「スタンガンならー」

「それで十分。具現化リアライズー雨雲！」

「な、何だあれは？」

「明久。」

「了解！」

『離れる！全員ネットから離れる！』

「「おやすみ、皆。」」

明き久が雨雲にスタンガンを投げ入れると、少し濡れたネットに雷が…

『『『『ぎゃあああつ！』』』』

特別授業その2〜デートがバレただけで殺されそうになるってやじらしい事〜

断末魔の悲鳴が響きます。

次は瑞希と美波対策ですね。

「明久、これを着て！」

「つつ！女子用の制服じゃないか！こんなの着れないよ！」

「私たちが生き残る為よ！早く！」

「わ、分かったよ！あっち向いてて！」

「了解！」

（5分後）

「着替えたよ。」

「じゃあ…ゴメンね。」

私は明久の鳩尾を殴り、薬を飲ませます。

「ま、まこ…と…（パタッ）」

さよなら、明久…こんにちは、アキちゃん。

「真琴はどっよっ？」

「美波ちゃん、見てください。皆が倒れています。」

「じゃあ、行くわよ！瑞希！」

美波達が来ましたね。それじゃあー

「瞬間移動テレポートっ」

明久、本当にごめんなさい。

〈Side Akihisa〉

目が覚めたら、美波と姫路さんが目の前にいた。

「ああ。あこがれのアキちゃんが目の前にー」

「あ、目が覚めた。アキちゃーアキ、どうしたの？」

ん？アキちゃん？今女子の制服を着てるからかな？

特別授業その2〜デートがバレただけで殺されそうになるってやじらしい事〜

「2人共、僕はつつつつ!?!」

どういうことだ? 声が高い、まるで僕の声じゃないみたいだ。ちょっと整理してみよう。

「真琴に着替えさせられる」

「変な薬を飲まされて、気絶させられる」

「目が覚めたらアキちゃんって呼ばれる」

「女になった?」

「落ち着いて確認しよう〜僕って胸がこんなにあったっけ?」

「まさかあの薬は…」

性転換薬!?!

「まじとおおおおっ!?!」

〜Side Out〜

part3に続く

」「はい、今日はここまでです。感想ほしい…」

特別授業その2のデートがバレただけで殺されそうになるってやじらしい事さ

「まことおおおおつ!?!」

私は古書保管庫に瞬間移動テレポートしてきました。

明久の悲鳴が聞こえましたが気にしない気にしない。
ん?

「誰っ?」

「……………不覚。」

本棚の陰から康太が顔を出しました。

「ああ、康太か。えーと、そちらの要求は何?」

「……………明久のグロテストと真琴との実…何でもない」

…真琴との実技って言いかけましたよね?

「明久の方はともかく私のはダメーって違う!どっちもダメだよ!」
危なかったです。明久を売る所でした。

「……………交渉決裂。」

「じゃ、じゃあ現物支給でどう?」

「……………何だ?」

「今空き教室にアキちゃ」……………交渉成立。(ダッ)「…早っ!」

え?結局売ってるって?気にしない気にしない。

「じゃあ残る敵は、雄二だけね。」

アイツはー屋上かな?

私は走って屋上に向かうことにしました。

「……………え?」

何で空き教室にあんなに人が?でも気にしない気にしな

「まことおおおおっ!」

あ、明ひ…アキちゃん。

「待ってください!」「待ちなさい!」

「……………(パシヤパシヤ)」

『『『『『うおおおっ!アキちゃん!』『』『』『』

特別授業その2、デートがバレただけで殺されそうになるってやっかいな事〜
瑞希と美波、康太、それにいつの間にか復活したFクラスの皆に追
われています。
そうだった。

「皆よく聞いて！アキちゃんに免じて今回は許してちょうだい！」

『『『『『異議無し！』『』『』』』』』』

「な、真琴っ？」

ドンマイです明久。

さて、もう帰りますか。

「じゃあ後はご自由に。」

「真琴、裏切るの？」

「手を組んだ覚えはないけど？」

「あ、悪魔！」

「じゃあね！瞬間移動っ！」
レポート

「ま、まことおおおおお〜」

く真琴の日記く

今日はFクラスの皆に襲われたけど、性転換薬の実験もできたしア
キちゃんが誕生したりで楽しかった！
あの薬も早く完成させなきゃね。
そろそろ学園祭か、楽しみだな

特別授業その2〜デートがバレただけで殺されそうになるってやじらしい事〜

」「夏休みが終わってしまったあああつ!!!」

真「叫ぶな作者。ほら、報告。」

」「あああああ〜」

アキ「代わりに僕が、25000pv3200ユニーク突破!イエイ!

真「こらっ!今はアキちゃん何だよ!僕はダメ。」

アキ「解毒薬は?」

真「あるよ。」

アキ「ちょうだい。」

真「え〜っそのほうが アキ「ちょうだい」 ……はい。」

明「やっと戻れた。次回もお楽しみに!」

真「あれ?サブタイトルは?」

」「まだ考えてないんだよ!悪いか?」

明「お帰り作者さん。逆ギレ?」

」「感想くるとやる気が出るかもです。」

真・明「この(ダメ)(バカ)作者に感想をあげてくださいっ！
」

」「いま罵倒しなかった？」

明「気のせいだよ。それでは、」

A11「次回もお楽しみに！」

第11問（清涼祭編スタート！）〜中国？ヨーロッパ？どっち？

まあAクラ

清涼祭アンケート

学園祭の出し物を決める為のアンケートにご協力下さい。

『あなたが今欲しいものはなんですか？』

姫路瑞希の答え

『クラスメイトとの思い出』

教師のコメント

なるほど。お客さんの思い出になるような、そういった出し物も良いかもしれませぬ。写真館とかも候補になり得ると覚えておきます。

土屋康太の答え

『Hな本（取り消し）成人向けの写真集』

教師のコメント

取り消し線の意味があるのでしょうか。

吉井明久の答え

『カロリー』

教師のコメント

この解答に君の生命の危機が感じられます。

水野真琴の答え

『平穏な日々』

教師のコメント

きつと無理です。諦めて下さい。

第11問（清涼祭編スタート！）〜中国？ヨーロッパ？どっち？

まあAクラス

もう5月です。私が2年になってから1ヶ月もたちました。

私達の通う文月学園では、『清涼祭』の準備が始まりつつあります。我らがFクラスは―

「はい。やりたいものある人、挙手！」

「ねえ、やっぱりー」

「ワシらだけでは無理がないかのう？」

「あ、あはは。」

私、美波、秀吉、瑞希の4人で会議中です。

その他の皆は―

「おい、学園祭の出し物：他の奴等はどうした？」

私は窓の外を指さします。

そこではFクラスのほとんどの皆が野球をしていました。

「お前等、少し待っている。」

スタスタと校庭に出ていきます。

タイムースタート……………ストップ。

「32秒、新記録ね。さすが！」

「真琴、タイムなんて測ってないで助けてよ！」

お帰りなさい明久。

「私寝る。おやすみ」

「まさかの無視？酷いっ！」

「…zzz」

「寝るの早っ！」

何か言ってるけど気にしない×2

「真琴、おい。」

「何？」

「今ね、実行委員決めてるんだけど…」

第11問（清涼祭編スタート！）〜中国？ヨーロッパ？どっち？

まあAクラー

「私にやってほしいって？いいよ。」

「そっかゴメン。突然起こし…って良いの？」

「うん。ただし、副実行委員として2人選ぶからね。雄二、それでいい？」

「ああ。お前が良いならOKだ。」

私は雄二と入れ替わるように段に上がります。こら雄二、早速寝るな！

「さて皆、副実行委員は美波と明久です。反対の人は？」

『『『『』』』』異議無し！』『』『』『』

「「ちよつと待って（よ）！そんな勝手に「はい。無しね。じゃあ決定！」「…ちよつと真琴！？」」

「ウチは瑞希と召喚大会に出るんだけど…」

「だから？私もでるよ？」

「えっ？まこちゃんも出るんですか？」

「うん。」

優子に半強制的に決められました。

「ちなみに、明久は強制よ。」

「酷いつ！」

決して清純会の腹イセとか起こされた恨みとかじゃありませんよ！

「2人共、いいよね？」

「…うん。」

「しょうがないわね。」

明久はしぶしぶ、美波は少し楽しげ(?)に引き受けてくれました。

「よし、じゃあ後は任せた！私また寝るね。」

「丸投げ!?!」

「…zzzz」

「だから寝るの早いつて！」

part 2に続く

第11問（清涼祭編スタート！）〜中国？ヨーロッパ？どっち？

まあAクラー

「…何これ？」

明久達、副実行委員の2人に丸投…任せてからしばらくして目を覚ますと、早速黒板にかかっている候補を見て驚きました。

【候補1 写真館『秘密の覗き部屋』】

【候補2 ウエディング喫茶『人生の墓場』】

【候補3 中華喫茶『ヨーロッパ』】

「皆、これ何？」

私が聞くと―

『『『『吉井が書きました！』』』』

声をそろえて罪をなすりつけました。

「ちよつと皆？どうして僕を売るの？」

「あ、そつか。明久を選んだ私がバカだったね。ごめんなさい。」

「真琴！それも酷いよー！」

『『『『水野さんは悪くない！』』』』

「何この扱いの差…」

と、話しているところ

「（ガラツ）皆、清涼祭の出し物は決まったか？」

鉄人登場。

「今のところ、候補は黒板に書いてあるみっつです。」

「…補習の時間を倍にした方が良いかもしれんな。」

黒板を見るなり鉄人が言います。

『せ、先生！それは違うんです！』

『そうです！それは吉井が勝手に書いたんです！』

『僕らがバカなわけじゃありません！』

何か既視感デジャブが…

「馬鹿者！みつともない言い訳をするな！」

おお。さすが教師です。

第11問（清涼祭編スタート！）〜中国？ヨーロッパ？どっち？

まあAクラ

「先生はバカな吉井を選んだこと自体が頭の悪い行動だと言っているんだ！」

…さっき私も同じようなこと言ってましたね。あ、明久が泣きそう。

「まったくお前達は…。少しは真面目にやったらどうだ。稼ぎを出してクラスの設備を向上させようとか、そういった気持ちすらないのか？」

鉄人がため息混じりにそう言います。

『そうか！その手があったか！』

『なにも試召戦争だけが設備向上のチャンスじゃないよな！』

『いい加減この設備ぬも我慢の限界だ！』

わお。不満爆発パート2ですな。

「み、皆さんっ！頑張りましょう！」

あれ？瑞希がやる気です。そういえば召喚大会にも出るようですよ？どうしたんでしょう？

「よっし、じゃあこの中から多数決で決めるよ。はい、写真館。次、ウェディング喫茶。最後に中華喫茶。はい、中華喫茶に決まりました！皆で頑張りっ！」

「それなら、お茶と飲茶は俺が引き受けるよ。」

「……………（スクツ）」

須川君に続いて康太も立ち上がります。あれ？

「康太、料理できるの？」

「……………紳士の嗜み」

嘘です。チャイナドレス目的で中華喫茶に通ってたら覚えたんでし
よっ。

「じゃあ、厨房班は康太と須川君のところに、ホール班は明久のところに集まって！」

「それじゃ、私は厨房班にー」ダメだ姫路さん！キミはホール班じゃないとー！」

「>明久、ナイス！<」「>グツジヨブじゃ<」「>……………！」（ココク）<」

危ない危ない。食中毒の客が大量に出てしまつてところでした。

「あ、えーつと、ほら、姫路さんは可愛いから、ホールでお客様に接した方がお店として利益が痛あつ！美波、僕の背中サンドバツグじゃないよ！？」

「じゃあ私は厨房に入るよ。」

「なに言ってるの真琴？そんなに可愛いんだからホールに決まつてみぎゃああつ！み、美波様折れます！腰骨が！命に関わる大事な骨がっ！」

「…ウチもホールにするわ。」

「そ、そうですね…。それが、いいと、思います…。」

…こんなんで大丈夫なんでしょうか？

J「29500pv、38000ユーニク達成です！あと一歩で30000アクセス！」

真「ありがとうございます！」

J「ここでお知らせです。感想を誰でも書けるようにしました。ドンドン感想ください！」

真「ください」

J「明日は更新できません。また明後日です。」

A「また次回！」

第12問〜SYT作戦と突撃！学園長室！〜 part 1（前書き）

「昨日は更新できなくて申し訳ありません。それと、感想を誰でも書けるようにしましたって言ったのに感想を受け付けない設定になっていました。すいません、改めて感想ください！」
バカテストはおやすみです

「アキに真琴、ちょっといい？」

帰りのHRが終わった放課後、美波に呼び止められました。

「ん？どうしたの美波？」

「用って言うか、相談んだけどー坂本をなんとか学園祭に引っ張り出せないかな？」

と、珍しく真面目な顔の美波が言います。

「うーん、それは難しいなあ……。さっきも言ったけど、雄二は興味の無い事には徹底的に無関心だからね。」

「確かに。」

アイツ、学園祭で何をやるかも知らないでしょう。

「でも、アキが頼めばきつと動いてくれるよね？」

「美波、別に明久が頼んでも同じだと思っよ。」

「え？大丈夫でしょ？だってーアキと坂本って愛し合ってるんでしょ？」

「もう僕お婿に行けないっ！」

……………マジですか？

「誰が雄二なんかと！だったら僕は、断然秀吉の方がいいよ！」

と、叫んだところで運悪く《良く》近くにいた秀吉が―

第12問〜SYT作戦と突撃！学園長室！〜part 1

「そ、その、お主の気持ちは嬉しいが、歳のs「ストップ秀吉！」な、何じゃ？」

「何か言おうとしたのを止めました。」

「>真琴ありがとく秀吉、違うんだ！さっきの言葉のアヤで！というか、僕らの間には年の差なんて障害はないからね！」

「こら！秀吉、顔を赤くして俯かないで！どっかのバカが困ってますよ！」

「それじゃ、坂本は動いてくれないってこと？」

「え？あ、うん。そういうことになるかな。」

「なんとかできないの？このままじゃ喫茶店が失敗に終わるような…」

目を伏せて、沈んだ面持ちになる美波。確かに成功のためには雄二を引っ張り出すのが必要不可欠だとおもいますが…

「美波、何か隠してない？」

「ふえっ？な、何で？」

「だって、美波がクラスの為とはいえ、そんなこと普通は言わないもん。何か私達に言えないことがあるの？」

「う…。」

再び俯く美波。どうしたんでしょうか？

「実は、瑞希がー！ー転校しちゃうかもしれないの。」

「ほえ？」

転校？何で？

「む、マズい。明久が処理落ちしかけてるぞ。」

「このバカ！不測の事態に弱いんだから！」

「起きて！明久！」

明久の肩を揺すります。

第12問〜SYT作戦と突撃！学園長室！〜part1（後書き）

「真琴…、モヒカンになった僕でも、好きでいてくれるかい…？」

……………はい？

「（ペチペチ）お〜い。目を覚ませ〜」

往復ビンタ（弱）で現実に戻します。

「はっ！美波！姫路さんが転校って、どういふことぢー！」

「どっつてー！ー」

……………状況説明中……………

「よし！そついうことなら全力で協力させてもらつよ！」

「それなら何とかして雄二を焚き付けなとね！」

「ワシも協力するぞい！」

「でも、どっつするの？」

「皆、耳貸して。（ゴニョゴニョ）」

「」「」「了解！」

『SYT作戦』開始です！

part 2に続く

原稿が1回消えてしまった為、途中の説明の部分を省略させていただきます。

〜Aクラス〜

「（ガラガラ）失礼します！」

「あれ？君は？」

「え〜と、水野真琴です。翔子に用事があったて来ました。」

「翔子？ああ代表のことか。私は工藤愛子。愛子でいいよ。」

「よろしく愛子。じゃあ私も真琴でいいよ。」

「うん。よろしくね。呼んでくるから待ってて。」

「うん。ありがとう。」

愛子が行ってしばらくして―

「あれ？真琴？何してるの？」

優子がやってきました。

「ちょっと翔子に用事があったね。今愛子に呼んできてもらったんだ。」

「翔子に愛子って…アンタ、どこか行きたびに友達増やしていいってない？」

「あははは。そうかもね。」

と、そんな話をしていると愛子達が戻ってきました。

「…用って何？」

「ちょっと手伝って欲しいことが…今忙しい。」でね、やってくれたら雄二の秘密を教えろ…手伝う。何？「あ、ありがとう。」

変わり身早いですね。どこかのムツツリみたいです。

「え〜とね、雄二から電話がかかってくるからちょっと脅して欲しいんだ。」

「…何で？」

「いや、私達のクラスの成功のためにさ。」

「…分かった。」

「ありがとう。じゃあ『Prrrrr』あ、来た。」

ナイスタイミングです。明久。

「（ピッ）もしもし？雄二？」

『真琴か。いったい何の真似だ？』

「ちよつと待ってね。今替わるから。」

「（じゃあ翔子。お願い。（『替わる？誰とーおい。もしもし？』（…うん。））」

「…雄二。今どこ？」

『人違いです。（プツッ）』

…いや、雄二でしょう？

「…これで良かったの？」

「う、うん。ありがとう。」

「…約束。」

「あ、はい。雄二の写真集ね。」

「…ありがとう。」

「じゃあ、私はこれで。」

「うん。じゃあね真琴。また来なよ。」

「うん。Aクラスは何やるの?」

「メイド喫茶『ご主人様とお呼び!』よ。」

…どっちでしょうか?

「うん。分かった。またね。」

さて、何はともあれ翔子を使って《S》雄二を《Y》焚きつける《T》作戦成功です!!

第12問〈SYT作戦と突撃！学園長室！〉 part 2（後書き）

part 3に続く

」話的にはあんまり進んでませんね…感想ください。」

第12問〈SYT作戦と突撃！学園長室！〉part3（前書き）

「そうか。姫路の転校か…」

私はFクラスに戻ってきました。雄二に怒鳴られたけど気にしませんよ。

「そうになると、喫茶店の成功だけでは不十分だな。」

「そうね。」

「え？どうして？」

「あのね、瑞希のお父さんが転校を勧めた原因はたぶん3つあって……説明中……分かった？明久。」

「うん。道具と教室と僕達の学力が原因なんだね。」

「困ったのう。問題だらけじゃ。」

「それでもないさ。3つ目の方は既に姫路と島田で対策を練っているんだろ？」

そう言っつて雄二は美波の方を向きます。

「この前、瑞希に頼まれちゃったからね。『どうしても転校したくないから協力して下さい』って。召喚大会なんて見世物にされるだけみたいで嫌だったけど、あそこまで必死に頼まれたら、ね？」

「翔子が参加するようだと優勝は難しいが、アイツは「いや、翔子
は出るよ。」「…は？」

「優子から聞いたんだけど、私と参加が決まった後に『優勝商品が
欲しいから手伝って欲しい。』って言われたんだってさ。」

「優勝商品って、白金の腕輪と如月ハイランドのプレミアムチケット
だよな。」

「…今、悪寒が…」

翔子は一途ですね。

第12問〜SYT作戦と突撃！学園長室！〜 part 3

「それは置いていて、2つ目の問題は？」

置いていて良いんですか？

「あ、ああ。学園長に直訴すればいいだろう？」

「それだけ？僕らが学園長に言っただけで何とかなるかな？」

「明久、ここは教育機関なんだよ？言えば何とかしてくれるよ…たぶん。」

いろいろと心配なんですけどね。

「じゃあ早速会いに行こうよ。」

「そうだな。秀吉と島田は計画でも練っていてくれ。」

「ついでに翔子や鉄人に会ったら帰ったって伝えてくれる？」

「うむ。了解じゃ。しっかりやるのじゃぞ。」

「うん。任せて！」

私達は学園長室を目指して教室を後にしました。

く廊下

「真琴、サンキューな。」

「ん？ああ、さっきの事ね。気にしないで。原因作ったの私達だし。」

「ところで、あの作戦は誰が考えたんだ？」

「SYT作戦のこと？私だよ。」

「STY？」

「うん。翔子を使って雄二を焚きつける作戦。略してSTY作戦。」

「…で、どんな条件出したんだ？」

「僕も気になる。」

「協力してくれたら雄二の秘密写真集あげるってー」

「お前酷いな！」「真琴酷くない！？」

「ほ、ほら、学園長室着いたよ？」

第12問〜SYT作戦と突撃！学園長室！〜 part 3（後書き）

part 4に続く

J「今日は原作8巻の発売日だっ！買ったから早速読む！また明日！」

真「桐生さん、初感想ありがとうございます。作者に替わって感謝いたします。」

第12問〈SYT作戦と突撃！学園長室！〉part 4（前書き）

〈学園長室前〉

『…賞品の…として隠し…』

『…こそ…勝手に…如月ハイランドに…』

声がしますね。言い争いでしょうか？

「話してるみたいんだけど、どうする？」

「好都合じゃないか。ほら、さっさと入るぞ。」

良いんですか？

「失礼しまーす！」

「本当に失礼なガキどもだねえ。普通は返事を待つもんだよ。」

長髪白髪ババアもとい学園長が迎えてくれました。

「やれやれ。取り込み中だというのに、とんだ来客ですね。これでは話を続けることもできません。…まさか、貴女の差し金ですか？」

と、学園長を睨み付けたのは竹原教頭先生。私はこの人嫌いです。

「大事な話があるのでお引き取り願えますか？教頭先生？」

「…では、失礼させていただきます。」

そう言っつて、部屋の隅をちらつと見て、出ていきました。何かを確認したようですが、なんでしょうか？

「んで、ガキども。話つて何だい？それと、まず名前を名乗るのが礼儀つてもんじゃないのかい？」

「失礼しました。俺は2年F組代表の坂本雄二です。」

「私は1名乗る必要ないですね。で、こっちがー」

「2年を代表するバカです。」

あ、雄二と八モりましたね。

第12問〜SYT作戦と突撃！学園長室！〜 part 4

「ほう……。そうかい。アンタたちがFクラスの坂本と水野に吉井かい。」

「ちょっと待って学園長！僕はまだ名前を言っただけじゃないか？」

明久「バカは世界常識ですよ。」

「気が変わったよ。話を聞いてやるつもりじゃないか。」

学園長が映画の悪役のように口の端を吊り上げて笑います。

「ありがとうございます。」

「礼なんか言う暇があったらさっさと話しな、ウスノロ。」

「わかりました。」

珍しいですね。あんなにも罵倒されているのに、敬語を貫き通すなんて。天変地異の前触れでしょうか？

「Fクラスの設備について改善を要求してきました。」

「そうかい。それは暇そうで羨ましいことだね。」

「今のFクラスの教室は、まるで学園長の脳みそのように穴だらけで、隙間風が吹き込んでくるような酷い状態です。学園長のように戦国時代から生きている老いばねならともかく、今の普通の高校生

にはこの状態は危険です。健康に害を及ぼす可能性が非常に高いと思われれます。要するに、隙間風の吹き込むような教室のせいで体調を崩す生徒が出てくるから、さっさと直せクソババア、というワケです。」

…訂正、今日も学園は平和です。

「あの、学園長…?」

第12問〜SYT作戦と突撃！学園長室！〜 part 4（後書き）

「（ふむ、丁度いいタイミングさね。）」

何か言いましたか？

「よしよし。お前達の言いたいことはよくわかった。」

「じゃあ、直してもらえますね！」

「却下だね。」

「よし、このババアをコンクリに詰めて捨ててこよう。」

「いや。体を47個に切って各都道府県に捨ててこよう。」

「おお。いいね。それを探して組み立てる『第1回クソババア組立て大会』ってどう？」

「でも、こんなババアに時間使いたくねえって人が多いから無理だよ。」

「そうだね。残念。」

「「色々とツツコミたいところだが黙っておいて、」理由をお聞かせくださいババア。」

「そうですね。教えてくださいババア。」

「さつさと教えなさい妖怪ババア。」

「…お前達、本当に聞かせてもらいたいと思ってるのかい？」

何かおかしなこと言いましたか？

part 5へ続く

「」さて、今回の話の「」のところの雄二のツッコミを考えてみよう！考えたら感想に書いてください！一番良かった人には…秘密です。では、また明日「」

第12問〜SYT作戦と突撃！学園長室！〜 part 5（前書き）

「理由も何も、設備に差をつけるのはこの学園の教育方針だからね。ガタガタ抜かすんじゃないよ、なまっちろいガキども。」

「それは困ります！そうになると、僕らはともかく身体の弱い子が倒れて」と、いつもなら言ってるんだけどね。「…はい？」

「可愛い生徒の頼みだ。こちらの頼みも聞くななら、相談に乗ってやるんじゃないか。」

なるほど。交換条件ですか。何か引っかけありますね。雄二も何かを考えているようですし…

「その交換条件って何ですか？」

「清涼祭で行われる召喚大会は知ってるかい？」

「ええ、まあ。」

「その優勝賞品は知ってるかい？」

「ええと、賞状にトロフィーに『白金の腕輪』、副賞に『如月ハイランド プレミアムオープンチケット』でしたっけ？」

「ほう、よく知っているじゃないか。それなら話が早い。」

教えたの私ですけどね。

「この副賞のペアチケットなんだけど、ちょっと良からぬ噂を聞いてね。できれば回収したいのさ。」

「回収？それなら、賞品に出さなければいいじゃないですか。」

「…明久、さつきも言ってたでしょ、経営は教頭に一任してるって。それに、大事な契約なんだから、いまさら覆せないよ。ですよね？」

第12問〜SYT作戦と突撃！学園長室！〜 part 5

「なるほど。それで、悪い噂ってのは何ですか？」

「如月グループは如月ハイランドに『ここを訪れたカップルは幸せになれる』ってジंकウスを作ろうとしているのさ。結婚までコーディネートイトしてまでね。」

なるほど。雄二絶体絶命ですね。

「>雄二、取り乱しちゃだめだよ。あとで翔子に言っておくから。」
「<

雄二はとても行きたがっていたってね。

「>あ、ありがとう。よろしく頼む。」
「<

嘘は言ってますよね？

「じゃあ『召喚大会の景品』と交換で教室の改修をしてくださるんですね。」

「ちなみに、水野達は優勝しちゃだめだからね。」

え？

「優子と一緒にだからですか？」

「そうさね。分かってるじゃないか。」

私じゃダメってことは、やっぱり…

「分かりました。引き受けましょう。ただし、提案があります。1つ目、私達と雄二達は決勝で戦うようにさせていただきます。2つ目、科目の選択を私達にください。よろしいですか？」

「ふむ、それ位ならいいだろう。」

「ありがとうございます。」

やはり読み通りですね。

「それじゃあボウズども、任せたよ。」

「」「おうようっ！」

明久& amp ;雄二の文月学園最低コンビ、結成です。

第12問〜SYT作戦と突撃！学園長室！〜 part 5（後書き）

「雄二達は先に戻っててもらえる？まだ話があるから…」

「分かった。明久、いくぞ。」

「あ、うん。失礼します。（ガチャッ）」

「さて、学園長。話というのは、『白金の腕輪』についてなのですか…」

「そうかい。やはり気づいたかい。」

「あなたが回収したいのは腕輪の方ですよ？何か明久達じゃないといけない理由があるんですか？」

「そうさね。実はねこの腕輪はある一定の点数を越えた奴がつかうと暴走する恐れがあるのさ。」

「なるほど。だから明久達を利用したんですかーそれともう一つ、この部屋に盗聴機が仕掛けられていました。」

手を広げて小型マイクを見せます。

「ふむ。教頭の仕業かい？」

「恐らくはそうでしょう。目的は分かりませんが、警戒した方が良いかと思います。」

「そつちせてもらひつとよ。」

「では、私はこれで。（ボタン）」

……

「水野真琴、おもしろいじゃないか。」

J「第12問終了っ！長っ！」

明「原作にない話もあったからね。」

真「何か私の描写酷くない？」

J「近況報告。38000PV、50000ユーブ突破！」

真「無視!?!」

J&Amp;明「また次回！」

真「……………」

第13問 part1 廃屋から喫茶店へ天国から地獄へ (前書き)

「お知らせがあります。1つ目、琥珀さんのご指摘により言葉遣いを統一させていただきました。2つ目、1 partごとにタイトルをつけたと思います。最後に小説の紹介。琥珀さんが連載中の『俺はテストの召喚獣』、通称おしょうゆ。明久の召喚獣に転生してしまった柊^{ユキト}雪人とおなじみのメンバーがおりなす笑いあり涙ありの超大作！僕が一番好きなバカテス二次創作です。よろしくおねがいします！！

では、本編スタート！」

第13問 part1 廃屋から喫茶店へ天国から地獄へ

「とりあえず、装飾はこれでオーケーだね。」

清涼祭当日の朝。

私は中華風の喫茶店に変貌した元廃屋にいる。

「凄いよ！真琴が持ってきたテーブルに秀吉が作ったクロス、最高じゃないか！！」

「ホント、いつもとは大違いよね。」

「美波、それは教室の事だよね？」

「……………うん。」

「何？その間何？」

「気にしないで。」

「…まあいいわ。康太、飲茶の方はどう？」

「…味見用。」

そう言って康太が取り出したのはティーセットと胡麻団子の載ったお盆。

「土屋、これウチらが食べちゃっていいの？」

「……………（コクリ）」

「では、遠慮なく頂こうかの。」

瑞希、美波、秀吉の3人は、胡麻団子を頬張る。

「じゃあ私も…ん？康太がこっちを見てる。何だろう？サイコメトリ
ー発動！なにになにー」

「（……………食べたら死ぬ。）」

…なるほど。あの団子はメイドイン瑞希か。ならしょうがない。

「じゃあ僕も貰うね。」

「……………（コクコク）」

さらば明久。安らかに眠れ。

「ふむふむ。表面はゴリゴリでありながら中はネバナバ。甘すぎず、
辛すぎる味わいがとつてもーんゴバっ！」

明久、君のことは忘れるまで忘れないよ。

第13問 part1 廃屋から喫茶店へ天国から地獄へ (後書き)

「…………… (グイグイ!)」

「む、ムツツリーニ！無理だよ！食べられないよ！真琴も見えてないで助けて！」

うん。それ無理。

「うーっす。戻ってきたぞ！ーん？何だ、美味しそうじゃないか。どれどれ？」

戻ってくるなり、躊躇いなく生物兵器を口ににする雄二。

「…大した男じゃ。」

「雄二。キミは今最高に輝いてたよ。」

「ああ神よ…どうして彼らは命を無駄にするのでしょうか。(ミュー
ジカルっぽく)」

「お前らが何を言っているのか分からんが…。ふむふむ。表面はゴ
リゴリでありながら中はネバネバ。甘すぎず、辛すぎる味わいがと
ってもーんゴバっ！」

もうそれは美味しい食べ物感想じゃないよね？

「どう？美味しい？>雄二、大丈夫？<」

床に倒れた雄二にテレパシーを送りながら話す。

「ふつ。何の問題も無い。」

あ、良かった。無事

「あの川を渡ればいいんだろう？」

じゃないいい！雄二カムバック！！

part 2に続く

真「うわぁ前書きで他の小説の宣伝してるよこの作者。」

「いや、感想が嬉しかったから…つい。」

真「それに他の小説のネタ入ってるし…」

「また次回っ」

真「無理矢理!？」

第13問 part2 あれ？優子は？何で私一人なの？（前書き）

原作とはトーナメントの順番が異なっております。

「えー。それでは、試験召喚大会1回戦を始めます。」

校庭に作られた特設ステージ。そこに私はいます。

「3回戦までは一般公開はありませんので、リラックスして全力を出して下さい。」

今回の対戦科目は数学。立会人は木内先生です。

「いくぞ、蓮。」

「ああ。」

対戦相手はBクラス戦で戦った2人。

「では、召喚して「待ってください。」「どうしたのですか？水野さん。」

「いや、私のパートナーがいないんですけど…」

「あなたは1人での参加ではないのですか？」

え？私、優子とチームのはずだよ？

「木下優子さんが、あなたは1人で参加すると言っていましたよ。」

「…ちなみに優子は？」

「霧島さんと一緒に参加しています。」

つまり、どういふこと？

「優子に参加を勧められる。」

「優子に1人でエントリーさせられ、本人は翔子と参加。」

「…はめられた？」

「ゆづこおおおお!..?」

その叫びは学園中に響きわたったそうです。（明久後日談）

「えー、水野さん？始めてもよろしいでしょうか？」

「え、ええ。どうぞ。」

第13問 part 2 あれ？優子は？何で私一人なの？

「では、召喚して下さい。」

「『試^{サモン}獣召喚』」

それぞれが自分の召喚獣を召喚し

「幻^{フェニックス}獣召喚ー不死鳥！」

一瞬で終わった。

『Fクラス 水野真琴 VS Aクラス 山下亮& amp;

佐藤蓮

数学 2197点

VS

0点& a

mp:0点 『

「『一瞬だとおお!?!』」

「∴勝者、水野真琴。」

木内先生が勝者を告げる。

「先生、マイクを貸していただけますか？」

「は、はい。どうぞ。」

「えー。Aクラスの木下優子さん。至急、Fクラスの水野真琴のところまで来て下さい。今すぐ来れば全身複雑骨折にするだけで許し

てあげます。以上。ありがとうございました。」

「真琴、それは許しておらぬと思うのじゃが…」

ステージから降りると、秀吉がいた。

「どうしたの秀吉？喫茶店は？」

「明久達も召喚大会に行ってもうて、人手が足りんのじゃ。」

「うん。了解。じゃあ行こうか。」

「のう真琴よ。姉上のこ」「無理！」「…即答じゃのう。」

優子を許す？何で？何の為に？アイツには血で血を洗う処刑が…

「真琴、ブツブツと物騒なことを言うてない。」

私、何か言いましたか？

第13問 part2 あれ？優子は？何で私一人なの？（後書き）

part3に続く

」真琴黒いよ！！」

真「全ては私を裏切ったアイツが悪いの。だからコロコロコロコロ
……」

」「ああっ！真琴が悪魔^{デビル}サイドに！！」

真（？）「（ギロツ）」

」「ちょっと、何でこっち来るの？俺は悪くなギアアアア！！」

……

明「じ、次回もお楽しみに（ボソッ）。」

「中華喫茶『ヨーロッパ』へようこそ!」

今、私はFクラスで接客をしている。お客さんが多くて、確かに秀吉だけでは大変だろう。

「おう。真ん中辺りの席は空いてるか?」

「はい。こちらになります。」

モヒカンと坊主頭を席に案内する。

「それにしても、あんな汚い教室をよくこんなに装飾したな。」

教室ないに響きわたるような声で坊主の客が話す。嫌味?

「ええ。ありがとうございます。」

「それに、床の畳も汚ねえなあ。カビ生えてんじゃねえの?」

…なるほど。営業妨害か。

「>秀吉、雄二達を呼んで来て。」

「>了解じゃ。」

「こんなところで食べ物だして良いのかよぐわあっ」

「どうした夏川くおおっ」

二人の頭にテレパシーで怪電波を送る。

「お客様、どうしたんですか？」

「お、おさまったか。くそっ何だよ!!」

「あの…あまり大きな声を出されると周りの方々に迷惑が「うるせえっ!!」「ひゃあっ!!」

(ニヤリ) 第一段階クリア。

『ちよつと、常村に夏川。注意されただけで怒鳴るなんてその子が可愛そうよ!!』

『そつだ!謝れ!』

これで常村に夏川もとい常夏コンビは完全アウェー。よし、反撃開始!

第13問 part3 常夏コンビの妨害と大天使へミカエル 光臨!??

Side Akihisa

僕らが教室に戻ると、大天使^{ミカエル}がいた。

「す、すみません。私は…頭が悪いから、こんな教室になったけど…でも、この清涼祭で…たくさん思い出を作りたくて…(グスン)」

「ブシャアツツツ」「」「」「」「」

な、なんて破壊力だ。男子全員(明久、雄二、秀吉、常夏コンビを除く)が鼻血を吹き出して倒れるなんて。

「てめえコラ!泣かせてんじゃねえよ!」

「最低!すぐに謝りなさい。」

「」「」我らが^{ミカエル}大天使を泣かせるなど、万死に値する。「」「」

そして常夏コンビに対するブーイングの嵐。僕らの幕は無さそうだ。

「くそつ。常村、帰るぞ。」

「ああ。」

そして逃げるように立ち去る。真琴の完全勝利じゃないか。

「(グスッ) 皆さんありがとうございませす。」

『『『『『ウオオオオツ!』』』』』

…これ、むしろ客が増えるんじゃないの？

〈Side Out〉

「ん？あれ？」

また記憶が飛んだ…何だろっ？男子は皆鼻血を出して倒れてるし、女子も皆見てる。何で？

「真琴、お疲れ。」

「明久、皆どうしたの？」

「さあ？何だろう？」

「…あ、勝った？」

「もちろん!」

「おお。よく勝てたね。」

「酷くない？」

「瑞希達は？」

「勝つたらしいよ。今は掃除してる。」

おお。Fクラスは皆1回戦突破だ。

「あ、私も手伝わなきゃ。」

「じゃあ、いったん皆に出てって言うてくれる？」

「いいよ。――皆様、室内を掃除いたしますので、5分程廊下で待っていていただけますか？」

「サー、イエツサー」

…何で皆テンション高いの？

part5に続く

J「^{ミカエル}大天使キターツ！」

明「作者さんまでテンション高い。前回真琴にボコボコにされたばつかなのに…」

J「…忘れかけてたのに。忘れるように努力したのにい」

明「…ゴメン。」

J「次回も、見てほしい。」

明「さっきのテンションは!？」

第13問 part 4 ～何？ずるい？作戦だけど？～（前書き）

校庭にある特設ステージ、そこに再び私は立っている。
召喚大会2回戦、次の相手は―

「あれ？真琴が相手なの？」

「水野さんか。厳しい戦いになりそうだ。」

愛子 & amp・久保君ペア。珍しい組み合わせだ。

「愛子、出ないって言ってなかったっけ？」

「そのつもりだったんだけどね、久保君がどうしても賞品が欲しい
って言うから…」

「賞品？『白金の腕輪』のこと？」

「いや。『ペアチケット』の方さ。」

…まさか、明久と行くつもり？

「そういうことだから、本気で行かせてもらっよ。試獣召喚！」

「試獣召喚！」

この2人が相手だとすると―

「試獣召喚！」

『Fクラス 水野真琴 VS Aクラス 工藤愛子&a m
p・久保利光

英語W 1027点 VS 441点&a m
p・467点 『

やっぱりギリギリか。正攻法だと難しい、だったらー

「>久保君、明久の写真、欲しくない?<」

「>なっ!!!<」

「>私に協力してくれたらあげるけど、どうする?<」

「>…協力しよう。<」

テレテター まことはとしみつのせつとくにせいこうし、なかまに
した

第13問 part 4〜何？ずるい？作戦だけど？〜

「>じゃあ、愛子にバレないように負けて。<」

「>分かった。<行くぞ水野さん！（ダッ）」

「あつ、ダメだよ！無策で突っ込んだら…！」

「武装選択ークナイ！ていつ」

突撃してきた久保君の召喚獣にクナイを投げ込む。

『Aクラス 久保利光

英語W 0点 』

クナイが召喚獣の胸に突き刺さり、消滅した。

「くつ。負けてしまった。工藤さん、後は任せるよ。」

そう言つてステージを降りる久保君。残るは愛子ただ1人、これなら勝てる！

「…ねえ真琴？」

「ん？何？」

「久保君に何言つたの？」

…バレた？

「あの冷静な久保君が無策で突っ込むなんてことは無いからね。バレバレだよ。」

…どうしよう。

「どうしようかな？先生に言っちゃおっかな？」

考える真琴、考える。…あ。

「愛子、康太の秘密知りたくない。」

…「センス？」

あれ？失敗した？

「私たちの負けでいいです。」

テレテレーテーレーテッテレー まことはてきをたおした

第13問 part 4〜何？ずるい？作戦だけど〜（後書き）

J「第13問終了！現在45000pv、58000ユニーク！皆ありがとう！」

明「真琴、卑怯だよ…」

真「作戦だよ作戦。明久達だって同じようなことしたでしょ？」

明「根本君だから良いんだよ！それに、真琴と一緒にしないでよ！」

真「確かにアイツにはいいけどさ、一緒にしないでって何？私が卑怯者だとも？」

明「そうは言っていないだろ！」

真「何よ！」

明「何だよ！」

J「えーと、2人共？」

真・明「アンタ（作者）は黙っててなさい（て）！」

J「…次回もお楽しみに」

明「この卑怯者！」

真「ずる賢いって言いなさいよ！」

明「…ズルいのは認めるんだね。」

「何だろう？漫才に見えてきた…」

第14問 part 1) 誤解が誤解を生むって実際にあつたら恐ろしい) (前書き

「訳あつてバカテストはお休みです。今回は2人のサイドがクロスします。詳しくは本編で！」

再び特設ステージ。前回と始まり方同じだよね！？
とにかく3回戦。相手は

「真琴お姉様。やはり私達は戦う宿命なのですな。」

「お姉様？この人が？」

Dクラスの美春& amp・玉野さんペア。嫌な相手と当たったなあ。

「それじゃあ、早速……」

「『『試獣^{サモ}召喚！』』」

『Fクラス 水野真琴 VS Dクラス 清水美春& amp
p・玉野美紀

現代社会 1076点 VS 215点& amp・
196点 『

よし。これなら何とかなるかも。

「フフツ。お姉様、あまり見くびってはいけませんよ。」

「私達は一心同体なのよ。」

相手は2人、点数で劣っている分チームワークが良いってことか。

「そう。全てはー」

「アキちゃん（お姉様方）と如月ハイランドへ行くために！！」

…一心同体？

「………（睨み合い）」

「えーっと…良いんだよね？」

私は初期装備の剣で2人の召喚獣を切る。

「えー。勝者、水野真琴。」

「…じゃっー」

未だに睨み合ってる二人を背に私は校舎に入る。良かったのかなあ？

第14問 part1) 誤解が誤解を生むって実際にあつたら恐ろしい)

「お兄ちゃん。どこ？」

Fクラスへの廊下を歩いてみると小学生くらいの子に会った。

「どうしたの？迷子？」

「違います。葉月はお兄ちゃんを探してるです。」

…それを迷子と言うのでは？

「じゃあ、私の教室がすぐ近くにあるから行ってみようか。私は水野真琴、よろしくね。」

「よろしくです。優しいお姉ちゃん。」

…まあいいや。

「(ガラッ) そのお兄ちゃんの特徴は？」

「えーと…バカなお兄ちゃんでした。」

Side Cross Makoto & Akihisa

「バカなお兄ちゃん!？」

『『『何いつ!?!?』』』

「いっぱいいるんだけど…」

『バカな人をお兄ちゃんにするっ』

てことか？』

「えーと…。」

「それなら僕が一番だね。」

「とつてもバカなお兄ちゃんでした。」

『くそっ！否定できん。』

「それって…」

『ならば本人に聞こう。』

「明久？」

『『『『『殺せえええっ！！』』』』』

〔Side Cross Out〕

第14問 part 1) 誤解が誤解を生むって実際にあつたら恐ろしい) (後書き

part 2に続く

明「理不尽すぎるっ!」

J「でもサイドクロスって面白いだろ?」

明「内容を考えろっ! 予想外でびっくりだよ。」

J「一応サブタイトルに書いたぞ。」

明「分かるかああっ!」

J「まあまあ。」

明「次回はちゃんとフォローしてくれるよね?」

J「……………」

明「何か言えよっ!」

J「次回もお楽しみにっ!」

第14問 part 2 美波の妹と未だに懲りない常夏コンビ (前書き)

「ストオオオOPP!!」

突然明久が叫ぶ。何があつたんだらう？

「落ち着いて明久、お客さんみたいだよ。」

「えっ！？キミは誰？見たところ小学生だけど、僕にそんな歳の知り合いはいないよ？」

「え？お兄ちゃん…。知らないって、ひどい…」

葉月ちゃんの表情が歪む。明久、泣かせちゃダメでしょ。

「バカなお兄ちゃんのバカあつ！バカなお兄ちゃんに会いたくて、葉月、一生懸命『バカなお兄ちゃんを知りませんか？』って聞きながら来たのに！それに…」

それに？あ、明久まで泣きそう。

「葉月と結構の約束もしたのにー」

へえ。それを忘れたと…

「真琴！」 「瑞希！」 「美波ちゃん！」

「」「」「殺るわよ！」「」「」

「じぶあつ!?!」

3人で一斉攻撃!

こんな子の純情をもてあそぶなんて、許さない!

「姫路に島田か。どうやら勝ったようだな。」

雄二、珍しく冷静だね。

「瑞希はそのまま首を真後ろに捻って。真琴はコイツの脳内に怪電波。ウチは膝を逆方向に曲げるから。」

…そこまでする?

「ふえええん!酷いですっ!ファーストキスもあげたのに!っ!」

「そんなやくそくぎやあああつ!真琴やめて、頭が割れるうううっ」

第14問 part 2 美波の妹と未だに懲りない常夏コンビ

「あ、お姉ちゃん。遊びに来たよっ!」

私達が明久を処刑していると、ふいに葉月ちゃんが美波を見て泣き止みました。

「あ、あのときのぬいぐるみの子だ!」

「違います。葉月ですっ」

「そっか、久しぶりねえ、葉月とアキって知り合いなの?」：うん。去年ちよっとね。」

美波が明久の言葉を遮って聞く。ていうか、お姉ちゃんってー

「ねえ、葉月ちゃんって美波の妹なの?」

「そっよ。」

なるほど。どつりで似てるわけだ。

「ところで、この客の少なさはどついうことだ?」

そついえばそうだった。あれだけ騒いだのに店内はかなり静かだったし…

「そついえば葉月、ここに来る途中でね、『中華喫茶は汚いから行かない方が良い』とか聞いたよ。」

「常夏コンビの妨害がまだ続いてるってことだよな？」

「そうなるな。ひとまず様子を見に行くか。」

「よし。じゃあ早速行ってみようよ。葉月ちゃんも一緒に行く？」

「うんっ」

明久が葉月ちゃんを誘う。うん。ナイス判断。

「ならば姫路と雄二も一緒に行くといいじゃろ。昼を済ませてくると良い。」

「そうか。悪いな、秀吉。」

「ありがとうございます。」

これで5人。さて、行こうか

第14問 part 2 美波の妹と未だに懲りない常夏コンビ (後書き)

「それで、その話はどこで聞いたの？」

「えつとね。短いスカートを穿いた綺麗なお姉さんが一杯いるお店
「なんだって！？雄二、すぐに向かおう！」 「そうだな！（低いア
ングルから）綿密に調査しないとな！」 「」

答えを最後まで聞かずに全力ダツシユする2人。

「アキ、最低。」 「吉井君、酷いです…」 「お兄ちゃんのバカ
！」 「この変態ども…」 「」

皆で罵倒する。本当に最低だよ？

「葉月ちゃん、それって何年何組？」

「えーと。2年A組だったよ。」

… Aクラス？

「（ニヤリ）私先に行ってるね。」

全力ダツシユ開始！優子、イマスグアイニイクヨ

「ちよつと真琴！怖いよ！人殺しそうな勢いだよ。」

「クロス？アイツ二ハコロサレタハウガマシトオモエルホドノクツ
ウラアタエテヤルサ。ククク…」

「落ち着きなさい！いや、ホントに。」

真(?) 「ジカイガマチドオシイヨ。」

「うわぁ。まがましいオーラが見えるよ。」

真(?) 「ジカイモオタノシミニネ。ククク…」

「」どっしり。マジで怖い。」

第14問 part3 敵情視察(?)と優子の謝罪(前書き)

「…ね、落ち着いた？」

「うん。ありがとう。」

美波が私の暴走を止めてくれたらしい。暴走？記憶にないよ？

「…頼む。ここだけは、Aクラスだけは勘弁してくれ！」

そんなことをしているうちにAクラスに着いたようです。

「雄二、往生際がわる…えーと、康太？何してるの？」

「……………敵情視察。」

ローアングルから写真を撮ることを敵情視察と言っそうです。

「ムツツリーニ、ダメじゃないか。盗撮なんて……………一枚100

円。」「2ダース買おうー可愛そうだと思わないのかい？」

「明久、注文してるよ。」

「……………そろそろ当番だから戻る。」

康太は明久に写真を渡して走り去っていく。いつのまにプリントしたのかな？

「まったく、ムツツリー」それ、男の足しか写ってないよ。「何い

「いっしょ！」

「やっぱり見る気だったんですね。」

「う、ごめんなひゃい！くひをひっぱらないで！」

瑞希に頬を、葉月ちゃんに腿をつねられている。

「じゃあ、入りましょ。お邪魔します。」

「…おかえりなさいませ、お嬢様。」

翔子が出迎えてくれた。メイド服も似合うね。

「それじゃ、僕らも。」 「はい。失礼します。」 「お姉さん、
きれ〜」

第14問 part3 敵情視察(?)と優子の謝罪

明久、瑞希、葉月ちゃんが入ると

「おかえりなさいませ、ご主人様にお嬢様。」

と出迎えてくれる。

「おっじゃまっしま〜す！」

私が入ると

「…申し訳ありませんでした。」

謝られた。

「ああ。翔子は悪くないよ。気にしないで。」

と言って皆のところへ行く。

「…チッ」

「…おかえりなさいませ。今夜は帰らせません、ダーリン。」
最後に雄二が入ってくる。翔子、ちょっと変わってない？

「霧島さん、大胆です…？」 「うちも見習わないとね…」 「あ
のお姉さん、寝ないで一緒に遊ぶのかな？」

リアクションがおかしいと思う。

「お席にご案内いたします。

——では、メニューをどうぞ。」

流石Aクラス。メニューまで豪華だ。

「ウチは『ふわふわシフォンケーキ』で。」 「あ、私もそれが良いです。」 「葉月もー！」

女の子3人は仲良くシフォンケーキ。

「僕は『水』で。付け合わせに塩があると嬉しい。」

明久は塩水。

「私は優子に合いたい。」

「じゃあ俺は——」 「ご注文を繰り返します。『ふわふわシフォンケーキ』を3つ、『水』、『優子からの謝罪』、『メイドとの婚姻届』が1つずつですね。」 「」

第14問 part3 敵情視察(?)と優子の謝罪(後書き)

「OK!」「全然よろしくねえぞっ!?!?」

私と雄二の声が重なる。言ってること違うけどね…

「…では、食器をご用意いたします。真琴はこちらへ」

再び翔子についていく。ちらつと雄二の実印が見えた気が…

「…この中です。」

そして個室のようなところで止まる。

中に入るとー土下座している優子がいた。

「珍しいね優子。土下座なんて…」

あえて皮肉っぽく言う。

「勝手なことをしてしまい、申し訳ありませんでしたっ!」

全力の謝罪。

「うん。いいよ。」

「それじゃあー」

「条件その1、今度クレープ奢ること。その2、私にはもちろん秀吉、その他の皆にも暴行を加えないこと。OK?」

「それだけで、いいの?」

「うん。残りの恨みは召還大会で晴らすから。」

「…分かったわ。」

「んじゃね〜仕事頑張れよ!」

私は個室をでて皆のところへ戻る。さて、本来の目的を果たさないとね。

part 4 に続く

」」今日はもう1話できるかも…」

第14問 part 4 アキちゃんの再臨と現状確認 (前書き)

…目の前に女装した明久と秀吉がいた。

「明久、あーん。」

「ん？あーんってこの薬は…」

「性転換薬です」

「何してくれとんじゃあああ」

はい。アキちゃん誕生！

「では真琴にあきひ…アキちゃんよ。ワシは喫茶店に戻るぞい。」

「秀吉。明久で良いんだよ。ねえ、秀吉！」

「大丈夫。私も一緒に行つてあげるから。」

「そういう問題じゃない！」

再びAクラスに入る。皆こっち見てるよ。

『とにかく汚い教室だったよな。』

『ま、教室のある旧校舎自体も汚いし、当然だよな。』

常夏コンビ発見！

「お客様。」

ウェイトレスのように近づく。アキちゃんもついてきてるね。さて復習開始だっ！

「なんだ？ーって、てめえはぐおおおっ」

怪電波発信中。

もう片方にはアキちゃんがバックドロップを決めている。

「な、何するんですか。胸を触るなんて…」

ここで雄二が登場してー

『『『『『なんだとおおおっ！』『』『』『』』

あれ？多くない？

「ちょっと待て！明らかに『黙れえっ！その子はてめえに触れてもいねえぞ！むしろ触ったのはてめえだろうがっ！』『先輩だからって容赦はしねえ！』『死にさらせえっ！』『』」

第14問 part 4 アキちゃんの再臨と現状確認

「くそおつ！一日引くぞ！」

『『『『逃がすかあああつ！』』』』』

「くそつ、あきひーアキちゃん、追っぞ！」

「明久つて呼んで！」

教室内の男子がいなくなった。

「皆、戻ろつか。美波達はもうすぐ3回戦でしょ？」

「そうね。戻ろつか。」

「…お会計は夏目漱石を1枚か、坂本雄二を1名でお願いします。」

「坂本雄二で。」

「…ありがとうございます。」

売った！美波が雄二を1000円で売った！

「早く行こうよ！優しいお姉ちゃん。」

「うん。そうだね。」

何はともあれ、私達は教室に戻った。

（現在の状況）

Aブロック

水野真琴（4回戦進出決定）

Dブロック

???

常村& a m p・夏川

木下（姉）& a m p・霧島（4回戦進出決定）

???

???

Bブロック

??？（4回戦進出決定）

Cブロック

???

???

???

???

吉井& a m p・坂本

姫路& a m p・島田

只今3回戦。 ???は脇キャラです。

第14問 part 4〜アキちゃんの再臨と現状確認〜（後書き）

J「奇跡の2話投稿！そして第14問 end！520000pv65
00アクセスだっ！」

アキ「主要メンバー以外適当だね。」

真「お帰りアキちゃん。」

アキ「解毒薬は？」

真「in my house！」

アキ「本当？」

真「嘘。はいこれ。」

明「（ゴクツ）あ、戻った。」

J「では、次回も」

A11「お楽しみに！」

第15問 part1〜チャイナ服？着ないって言うってたじゃん〜（前書き）

J「小説の紹介コーナー。ウツソ・エヴィンさんが書いていらっしやる『ウツソとリリカル銀魂 G・StrikerS』です。ぜひ読んでみてください！」

明「久々にバカテストからスタートです。」

清涼祭アンケート

学園祭の出し物を決めるためのアンケートにご協力ください。

『喫茶店を経営する場合、ウェイトレスのリーダーはどのよう
に選ぶべきですか？』

【1可愛らしさ 2統率力 3行動力 4その他）（ ）】
また、その時のリーダーの候補も挙げてください。』

土屋康太の答え

『【1可愛らしさ】候補：姫路瑞希& amp・島田美波& amp
p・水野真琴』

教師のコメント

甲乙つけがたいといったところでしょうかね。

坂本雄二の答え

『【4（婚約者）】候補：霧島翔子』
教師のコメント

なぜ水野さんが用紙を持ってきてくれたのでしょうか？

水野真琴の答え

『【1&2&3】候補…アキちゃん』

教師のコメント

アキちゃん？そんな生徒はー

吉井明久の答え

『【4（アキちゃん以外）】候補…誰でも良いです。』

教師のコメント

申し訳ありませんでした。

第15問 part1〜チャイナ服？着ないって言ってたじゃん〜

「3回戦は不戦勝ね。」

「そうなんだよ。相手が食中毒で棄権しちゃったからね。」

…瑞希の失敗作の犠牲者？そんなわけないよね、うん。

「それにしても、かなり客が少ないな。何かインパクトのあることをやった方が良くもしれない。」

雄二が呟く。常夏コンビの噂のせいで空席が多い。どうしたら…

「落ち着け。考えはある。コレをー」

そう言っつてチャイナ服を取り出した。なるほど。コレをー

「明久に着せる（んだね）。」「」

ハモった。見事なまでに。

「勘弁してください！メイド服の次にチャイナまで着たら、ホンモノだつて認識されちゃう！」

「大丈夫。アキちゃんなら「そういう問題じゃない！」「…」

明久じゃなくてアキちゃんだから良いじゃん。

「冗談だ。これは秀吉と姫路と島田と真琴に着てもらう。」

「あ、なんだ。良かった」「ダウト!」「…どうしたの真琴?」

「私は着ないよ。」

「何で?真琴は可愛いから」「そういう問題じゃないの!」「」

「昔メイド服を着たら、大勢のお客から告白され、夜にはストーカーや毎晩同じ時間にかかってくる電話の被害にあった。」

「……………」
「ごめ」「真琴、もう観念しなさいよ」「あ、美波。」

第15問 party 1 〱 チャイナ服？着ないって言ってたじゃん！ 〱 (後書き)

3人娘が帰ってきた。

「私も、まこちゃんのチャイナ服姿見たいです。」

「瑞希に美波、アンタ達も着るんだからね？」

「え？前に須川がチャイナドレスを着ることはないって言ってたけど？」

「店の宣伝のためと明久の趣味だってさ。ね？明久。」

「大好ー愛してる。」

「ごまかせないほど好きだってさ。」

「し、仕方ないわね。店の売り上げのために着てあげるわ。」

「そ、そうですね！お店の為ですしね！」

「本音は？」

「私達が着て真琴まことちゃんにも着せる(着せます)。」

やっぱりか。

「…無理だよ。何言われても「真琴」何？」

「睡眠薬ってコレ？」

「そうだけど何に使っちゃったっ！」

瑞希達にホールドされた。明久が薬を持って近づいてくる。

「アーン。」 「ヤダ！」

「即答かよ真琴。明久泣きかけてるぞ。」

え？何で？眠ったら着替えさせられるでしょ？抵抗するの普通じゃない？

「…真琴はバカである。」

「何だとおおお、ってしまった！」

明久が私の口に薬を放り込み、美波に首の辺りをたたかれる。(ゴクツ) あ、飲んじゃった…そこで私の意識は途切れた。

part 2 に続く

第15問 part2 さあ、復讐開始といこうか (前書き)

「…やっぱりか。」

目が覚めたらチャイナ服を着ていました。

「あつ。おはようまこ」あゝきゝひゝさゝ?」「…何?」

「よくもこんな服を着せ」おい真琴、お前の出番そろそろじゃないのか?」「…あ。」

そつえば、そろそろ4回戦だった。

私はFクラスを駆け出した。自分の今の姿も忘れて…

「ま、間に合ったけど、チャイナ服のまま来ちゃったよ。」

『それでは4回戦を開始したいと思います。出場者は前へどうぞ。』

私はステージへと上がる。反対側からは優子と翔子が上ってきた。

「真琴、アンタ…」「…似合ってる。」

優子、私はやりたくてやってるわけじゃないの。そして翔子、そういう問題じゃないの。

…ヤバい。このままだと観客にコスプレイヤーだと思われかねない。

どうしよう？…あ。良いこと考えた。

「先生、マイクを貸していただけますか？」

マイクを受け取り

「えー。皆様こんにちは。2年Fクラスの水野真琴です。Fクラスでは中華喫茶を開いています。このようにチャイナ服に身を包んだ女子も働いておりますので、ぜひお越しください。」

名付けてチャイナ服を《T》店の《M》せいにする《S》作戦。結果はー

第15問 part2 さあ、復讐開始といこうか

「絶対行くぜ！」

「お姉たん。はあはあ」

「萌え〜」

大成功！でも最後の2人は来なくて良い。むしろ来ないで！

「では、改めて召喚大会4回戦を始めます。」

「『試獣^{サモ}召喚！』」

「Fクラス 水野真琴

VS

Aクラス 木下優子& a m

p・霧島翔子

古典 1294点

VS

427点& a m p ;

463点

流石学年成績2位と5位。普通に腕輪を持っている。

「真琴、本気で行くからね。」

「…負けない。」

2人そろって突撃してくる。

それをサイドステップでかわし

「サイコキャノン！」

エネルギー弾を放つ。

「代表！」 「リリース停止。」

優子の呼びかけに反応し、翔子がキーワードを口にしたらとたん、全ての動きが止まった。

「…覚悟。」

動けない私の召喚獣に、翔子の召喚獣の刀が刺さる。同時に翔子の召喚獣は消えていった。

『Fクラス 水野真琴 652点』 『Aクラス 霧島翔子
0点』

くっ。かなり点数が削られた。

「代表ありがとう！この点数なら…」

私の召喚獣に斬撃が叩き込まれる。

『Fクラス 水野真琴 243点』

これは…かなりヤバい状況だ。

第15問 part2 さあ、復讐開始といこうか (後書き)

「さあ、どうする真琴？降伏するなら今のうちだよ。」

「降伏？何言ってるの？」

1呼吸置いて

「私の辞書には『降伏』も『敗北』もない！」

言い放つ。

「さあ、復讐開始といこうか！」

「なっ！この状況で何をやる気なの？」

「武装覚醒、スーパードラグーン！」

私が叫ぶと、召喚獣の周りに青い物体が浮かぶ。

「そ、それって…」

「GO！」

すると、青い物体が優子の召喚獣を取り囲みながらビームを放つ。

『Fクラス	水野真琴	VS	Aクラス	木下優子
古典	3点	VS		0点

『勝者、水野真琴。』

私は、勝ったのだ。

part3に続く

「真琴格好良すぎない!?!」

真「書いたのアンタでしょ。ていうか、とどめがガンムって…」

「良いんだよ 格好良ければ 良いんだよ」

真「俳句みたいに言わない。」

「昨日は更新できず、申し訳ありませんでした。以後、気をつけます。」

真「ウツソ・エヴィンさん。連続で感想ありがとうございます。」

「他の方々にも書いていただければ嬉しいです。」

第15問 part3 VS 常夏コンビ 陰謀と策略と (前書き)

「そろそろ準決勝ね。」

美波が呟く。

「そうだった。行ってくるね。皆もがんばれ。」

「…う、うん。」

明久がつつかえながらも返事をする。

「次は私達4人で戦うんですよね。」

そうか。準決勝2回戦は明久チームVS瑞希チームか。

「真琴は常夏コンビと戦うんだっとな。」

「そっだよ。」

「大変だね。」

「大丈夫大丈夫。じゃあ行ってくる。」

私は再び校庭へと駆け出した。

『お待たせいたしました。これより準決勝を開始します。では選手入場。』

特設ステージに上る。向かい側には常夏コンビが立っていた。

「てめえ。2度も俺達を邪魔しやがって…」

「邪魔？私、アンタ達に何かした？」

「てめえのせいで俺達は変態扱いじゃねえか。」

え？

「止める！『違うの？』って目で見るな！」

「この野郎！許さねえ！」

「『『試^{サモン}獣召喚！』』」

『Aクラス 常村勇作 314点』

夏川俊平 298点』

へえ。流石はAクラス。でも、優子や翔子に及ばないね。

第15問 part3 VS 常夏コンビ 陰謀と策略と

『Fクラス 水野真琴 1018点』

「「なっ!!」」

私の点数を見て2人が驚きの声をあげる。
さあ、交渉開始だよ。

「さーて2人共、どうする?」

「何が言いたい。」

「ここで負けて恥をかくのと降参してこちらの要求を聞くの、どっちが良い?」

「…要求は何だ?」

「今回の妨害の目的とそれを指示した人を言うこと。」

「(どうする?)」「(恥をかくか教頭を裏切るかってことだよな。)」

ふむ。首謀者は教頭ね。

「(でも恥かくのは…)」「(よく考えろ!俺達の推薦がかかっているんだぞ!)」

大学への推薦を条件に協力させたと。

「（ま、待てよ！こいつが優勝すれば…）」 「（そうか。それなら腕輪が暴走して学園長を失脚させられるな！）」

目的は腕輪を暴走させて学園長を失脚させることね。

「決めたぜ！俺達は（キュボン）…は？」

常夏コンビの召喚獣が消える。

「うん。分かったよ。全てを洗いざらい話して恥もかくんだね。」

「「は？」」

「先輩方、小声で話してたじゃないですか。」

「まさか、聞こえてたのか？」

「大丈夫。私しか聞いてないから。でも…」

『勝者、2年Fクラス水野真琴。』

第15問 part3〜VS常夏コンビ 陰謀と策略と〜（後書き）

先生が勝利を告げる。

『おい。2年が3年を倒したぞ。』

『ああ。しかも3年の方はAクラスで、2年の方はFクラスだぞ。』

『下級生の、しかも最低クラスに負けるなんてな。』

観客席がざわめく。

「恥はかいちゃったね。」

「くそっ！帰るぞ常村。」 「ああ。」

逃げ帰る常夏コンビ。とりあえずは目的達成ね。さて、私も戻りますか。

私は教室へと帰っていった。

「真琴、何か凄いな。」

真「どついつ意味よ」

「（いや、卑怯だなー）」

真「…だから書いたのアンタでしょ。」

「しまった！サイコメトリーか！」

真「…で、報告は？」

「あ…えーと。60500PV、75000ユニークです。」

真「ありがとうございます！」

「それでは次回もお楽しみに！」

真「感想もドンドンください！」

第16問 part1 誘拐事件発生！ (前書き)

「ノウツソ・エヴィンさん、光闇雪さん。感想ありがとうございます。感想ありがとうございます。」

小説の紹介です。光闇雪さんが書いている『バカとテストと召喚獣〜ツインズ〜』です。ぜひどうぞ！」

バカテスト (化学)

以下の文章の () に入る正しい物質を答えなさい。

『ハーバー法と呼ばれる方法にてアンモニアを生成する場合、用いられる材料は塩化アンモニウムと () である。』

水野真琴の答え

『 あえて瑞希に任せます。』

教師のコメント

任せないでください。その姫路さんの答えは…

姫路瑞希の答え

『 任されたので空欄で出しました。』

教師のコメント

…仲良くしましょうね。

土屋康太の答え

『 塩化吸収剤』

教師のコメント

勝手に便利な物質を作らないように。

吉井明久の答え

『アンモニア』

教師のコメント

それは反則です。

『大変だあつ!!』

喫茶店で仕事をしていると、須川君が突然駆け込んできた。

『こ、校庭に…』

教室中が静まる。

『び、美女がいる。』

『『『『何だつてえっ!』』』』』

次の瞬間、教室の男子は皆駆け出していった。

第16問 part 1 誘拐事件発生！

「……………」

気がつくど、教室に残ったのは私、美波、瑞希、秀吉、そして客として来ていた優子だけになっていた。

「…ごめんね優子。」

「…うん。別にいいよ。」

「…美女って誰なんでしょうか？」

「…さあ？」

「…いつもこんな感じなの？」

「…そうじゃのう。」

「…苦労してるわね。」

そんな感じで話をしていると

「邪魔するぞー」

男の人が入ってきた。お客かな？

「いらっしゃいませ。お席へご案内しまぐっつ」

男に近づいた秀吉が倒れる。…殴られた？

「あの？何のご用でしょうか？」

私が近づいていく。

「おいおい。客にその態度は無いんじゃないのか？」

「いきなりウエイトレスを殴る方がおかしいと思うよ。」

「そういえば、お前どっかで見たことあるな。」

「だったら顔見せてくれないかな？そんなんじゃないってっ」

鳩尾を殴られた。やばい。意識が…

「ま、まこちゃん!？」

「ちょっとアンタ何してんのよ!」

「悪いが依頼なんだ。悪く思うなよ。」

そこで私の意識は途絶えた。

第16問 part 1 誘拐事件発生！ (後書き)

part 2に続く

明「ねえ！真琴達がさらわれたってどういうことさ!？」

雄「どういうことって…そのままの意味だろう。」

明「何でなのさ！」

雄「落ち着け明久。ただ1つ分かることは犯人は真琴を知っている人間だってことだ。」

明「そんなの分からないよ！」

雄「まあ、次回を待ってってことだろうな。」

明「くそっ！次回もお楽しみに！」

雄「…怒りながら締めるなよ。」

第16問 part2（過去の真相と王子様）（前書き）

「ウツソさん、雪さん。感想ありがとうございます。」

「じ、ここは…？」

目を覚ますと、私達は小部屋にいた。

『ボス！目え覚ましたよ。』

ボスと呼ばれた男を見る。コイツは…

「佐藤…怜…」

「おお。覚えてくれてたのか。水野真琴。」

「忘れるわけないでしょ！アンタが私達にしたこと…忘れられるもんか！」

「真琴。佐藤怜って、あの佐藤怜？」

美波の質問に小さく頷く。

「でも、捕まっただけですよー！」

瑞希が叫ぶ。

「いいだろう。全て話してやるよ。あの事件の全容を！」

「…幼女大量誘拐事件。」

優子が震えながら話す。

「そう。俺がその事件の主犯だ。そして、水野真琴、木下優子は被害者達だ！」

「「なっ！」」

美波と瑞希が驚きの声をあげる。

「何のために誘拐したのじゃ？」

ずっと黙っていた秀吉が口を開く。

「…欲望を満たす為。」

「ふざけないで！」

怜の答えに美波が怒声をあげる。

第16問 part 2 過去の真相と王子様

「ふざけてなんかいないさ。そして俺、いや俺達はこいつらをしたんだ。」

「黙れ！」

私は叫ぶ。

「真琴は上玉だったからな、最後の方にとっておいたんだが…でも優子はなかなか楽しめたぜ。」

「この外道め！」

優子は顔を伏せ、秀吉が叫ぶ。

「そしていよいよって時に、真琴の超能力が目覚めてな…逃げられてしまい、最後には逮捕されたよ。」

「もう…黙って…」

「だがこうしてまた戻ってきたわけだし、アイツらに復讐しようかなあと思ったときにこの依頼を受けたわけ。」

「もう…やめてよ…」

「おいおい泣いてんのか？あの真琴がねえ。珍しいこった。」

…またあの時と同じだ。このままじゃ、皆が…

「（ボタン）もう止める！」

「あき…ひさ？」

突然明久が入ってきた。

「ふざけるな。真琴達をこんな目に合わせて…」

「ったく。早いんだよ突入が。まあ間にあつたから良いが。」

「雄二、それじゃあ…」

「はっ！誰かと思えば吉井に坂本か！たった2人でこの「2人じゃない。」…は？」

ぞろぞろと小部屋に人がなだれ込む。

「Fクラス全員が相手だ！」

「何いつ！」

乱闘が始まる。

明久、来てくれたんだね。

第16問 part 2 過去の真相と王子様 (後書き)

Side Akihisa

よし。僕考案の人海戦術は成功だ！今の内に真琴達を…

「まこちゃん！」

姫路さんの声がした方を見ると、真琴が倒れていた。

「皆、大丈夫？」

「アキ、真琴が倒れたの。」

「ワシらは良いから、先に安全なところに出すのじゃ。」

「うん。」

僕は真琴をおぶって学園へ急ぐ。

もう少し早く行ければ…ごめんね真琴。

part 3 に続く

」「続きが気になるって感想多いし、僕も書きたくてつづつづして
たので書いちゃいました。」

明「真琴にそんな過去があったなんて……」

J「よく人海戦術とか思いついたな。」

明「それは……ムツツリーニから聞いて……とっさに思いついて……」

J「好きな人の為だからか？」

明「そ……そんな……」

J「さて、今回の話は賛否両論だと思います。どんどん意見を書いてください。では」

J・明「また次回！」

第16問 part3 復讐開始！ (前書き)

「(ガバツ) 明久!？」

「うわっ! !びっくりした。」

「あれ?ここは?」

「Fクラスの教室だよ。」

周りを見渡す。連れてきてくれたのか。

「皆は?」

「まだ帰ってきてないよ。」

「: なら、今の内に私達に出来ることをしとこうか。」

「え!でも大丈夫なの?」

「大丈夫! 明久は雄二を呼び戻して学園長室に行つて、全てを話してくれるはずだよ。」

「わ、分かつたけど真琴は?」

「私は一連の事件の真犯人に会つてくる!」

そう言つて私はFクラスを飛び出した。行き先は教頭室。絶対に許さない。

「（コンコン）失礼しますよ。」

「ん？水野さんですか。何の用です？」

「単刀直入に言います。常村・夏川先輩を使って妨害をし、佐藤怜に私達の誘拐を依頼したのは教頭先生ですね。」

「何の事を言っているのか分からないな。」

「これを見てもそんなことが言えますか？」

あるものを机に叩きつける。

「教頭先生と佐藤怜が会っているところを写した写真と、先輩方の会話が入ったMP3プレーヤーです。」

再生ボタンを押す。

第16問 part 3 復讐開始！

『くそっ！水野め！恥かかせやがって！』

『落ち着け常村。竹中は佐藤怜にも依頼したらしいぞ。』

『あの佐藤怜か？』

『そうだ。』

『くっくっく。どうやら次はアイツが恥をかく番だな。』

「（カチツ）まだ言い逃れを続けますか？」

「…何が目的だ。」

「目的？罪を認めさせ、あの事件の被害者達への援助をさせることです。」

「…何だとっ」

「この学園内にも私を含め2人、いやもっというかもしれませんが、無理ならこの学園内だけでもいいですよ。」

「…この学園にあのときの被害者が何人いると思ってるんだ！」

「かかった！」

「あなたもあの事件に関与していたんですね。じゃなきゃ何人いる

かなんて知ってるわけないですもん。」

「くっ」

「どうしますか？あの事件への関与をバラされて牢獄へ行くか援助をするか。選んでください。」

……沈黙

「…援助しよう。」

「ありがとうございます。ではこの契約書にサインしてください。」

「（サラサラ）これで良いかね？」

「はい。OKです。」

「ではこれで私の事件への関与は無かったことに「あ、無理です。」
な、何を言っている！この契約書にも全てを不問に帰すと…」

第16問 part3〜復讐開始〜（後書き）

「ええ。書いてますね。でも私が警察の方に伝えたのは契約前ですので、問題はないはずですよ。」

「くそつ。こんなことをしてただですむと思っっているのか！」

「あなたはもう教師ではありません。そんな権限は無いはずですよね？」

「…お前…」

「では、私はこれで。（パタン）」

私は教頭室を後にした。

「さて、帰るか。」

明日の決勝戦の為にね。

「真琴お帰り〜」

真「ただいま〜」

「今回も真琴凄かったね。」

真「うん。あの援助はほとんど優子の為だからね……」

「さて、次回はいいよ決勝戦だけど、どうするつもり？」

真「正々堂々戦うつもりだよ。」

「なるほど。では」

真「amp;」また次回！」

第17問 part1 私はマスコットじゃなああー！ (前書き)

「ウツソさん、雪さん。感想ありがとうございます。」

清涼祭2日目の朝。少し早起きして準備をしていると

テレーテレーテレー BAKAバカ ゴー ピッ

「もしもし？」

「あつ真琴？明久だけど…」

明久から電話がかかってきた。

「今日決勝戦だからさ。早めに行ってテスト受けようと思うんだ。一緒に行かない？」

「うん。いいよ。私も今行くことと思ってたところだしね。」

「じゃあ真琴の家に行くね。」 (ピ)

さて、準備の続きを…

「(ピン)ポーン」「はい。」

誰だろう？

「（ガチャッ）…もしかして、家の前から電話してた？」

「…うん。」

準備万端の明久が立っていた。

「おつ。真琴に明久、早いな。」

「あれ？雄二もテスト受けに来たの？」

「ああ。真琴には生半可な気持ちで行ったら負けは見えてるからな。」

「…確かに。」

「戦う前から絶望しないでよ。」

第17問 part1〜私はマスコットじゃなああ〜

「先生、次〜」

高橋女子監修のもと、私達はテストを受けている。

「相変わらず早いね真琴。」

「おい。お前もしゃべってる場合じゃないだろ。」

「そうだったそうだった。」

カリカリカリカリ

「よし。終わりっ!」

「ええっ!何そのテストの束!」

「ざっと30枚くらいやったかな?」

「10分で30枚って…凄いなお前。」

「さて、補給食補給食。」

「ええっ!さっき朝ご飯食べたばっかだよな?」

「ん?いつへなはっはっへ?ほうひょひふはっとおなはすふんはよ。」

(ん?言ってなかったっけ?能力使うとお腹空くんだよ。)

「…食べてから言おうよ。」

「(ゴクン)(ゴクン)馳走様でした。」

「早あっ！あの量を一瞬で!？」

「では、寝る。」

「そして自由だ！さすが自由天使！」

「真琴、寝るならチャイナ服に着替えてからにしてくれ。」

「…何する気？」

「何もしねえよ。な？明久。」

「も、もちろんだよ！僕のじっちゃんの名にかけて誓う!」

金　一さんですか？

「まあいいや。」

第17問 part1〜私はマスコットじゃなああい〜（後書き）

（5分後）

「じゃあ寝るね。決勝戦の1時間前には起こしてね。」

教室の脇で丸くなる。おやすみなさ〜い。

「ふああ〜よく寝…これ何？」

なぜか私の前に行列ができていた。

「……………真琴の寝顔。1回500円。大人気。」

「うん。そのぼったくりな値段と人気うんぬんは置いて…1つだけ言わせてくれる？」

「……………何だ？」

「私はマスコットじゃなああい！」

「……………明久が提案した。」

へえ。そうなんだ〜。ふーん。

「で、その明久はどこ？」

「アキならもう行ったわよ。」

美波が答えてくれる。逃げたね。絶対。

「じゃあ、私も行ってくるよ。」

「うん。いってらっしゃい。後で応援に行くから。」

「ありがとう！」

私はもう何度目か分からない校庭へ駆け出した。

part 2 に続く

「次回、最終決戦！さあ、勝のはどっち？」

明「どうするの？まともに行ったら勝ち目はないよ。」

雄「安心しろ。ちゃんと策はある。」

「さあ、勝利の女神はどちらに微笑むのか？次回をお楽しみに！」

第17問 part 2 決勝戦開始！ズルはダメだよズルは……（前書き）

『さて皆様。長らくお待たせ致しました！これより試験召喚システムによる召喚大会の決勝戦を行います！』

アナウンスが鳴り響く。

『出場選手の入場です！』

向こう側から明久と雄二が歩いてくる。

『2年Fクラス所属・坂本雄二君と、同じくFクラス所属・吉井明久君です！皆様拍手でお迎えてください！』

盛大な拍手。お客さん多いなあ。

『対するは、こちらもFクラス所属・水野真琴さんです！こちらも拍手でお迎えてください！』

拍手を受けながら入場。

『なんと、最高成績のAクラスを抑えてのFクラス同士の戦いになりました！これはFクラスが最下級という認識を改める必要があるかもしれません！』

おおっ！あの司会良いこと言うじゃん！

『それではルールを簡単に説明します。試験召喚獣とは』

ルール説明が流れる。私はそれを無視して明久達と話をすることにした。

「明久？何か言うことある？」

「ち、違っただ！あれは雄二が勝手に…」

「そうなの？」

「真琴！俺をやるならコイツをやれ！」

「わ、分かったよ！明久をつぶってなるかあっ！連帯責任で2人共やるよ！」

『それでは試合に入りましょう！選手の皆さん、どうぞ！』

第17問 part 2 決勝戦開始！ズルはダメだよズルは…

説明が終わり、審判の大島先生が私達の間立つ。保健体育ってことは…

「……サモン 試獣召喚（新巻鮭）！」「……」

…やっぱりか。

「Fクラス 坂本雄二 & amp; Fクラス 土……
保健体育 231点 & amp; 5……」

「……え？」「……」

「ほら、明久も早く召喚しなよ。」

「…真琴、まさか…」

分かりやすく説明すると、康太の召喚獣が出てくると同時に私の召喚獣が倒したのである。

「ま、真琴！これを見るんだ！」

そうやって掲げたのは私の寝顔写真である。

「これをばらまかれなくければ「いいよ。「え？」」

「その代わり…康太はMMネットワークって知ってるかな？」

明久が後ろを一瞬振り向いて

「それがどうしたの？」

「それ、私がやっててね…本気になればムツツリ商会を潰すことだつてできるんだけど…どうする？」

遠くからでも分かるよ。全力で土下座してるのが…

「さ、試^{サモン}獣召喚。」

明久が召喚する。これで全部出揃った。

『Fクラス	水野真琴	VS	坂本雄二&吉井明久
保健体育	1548点	VS	231点&1

96点』

第17問 part 2 決勝戦開始！ スルはダメだよスルは… (後書き)

「2人共、成長したじゃん。」

「お前が言つなああつ！」

「へ？」

「何だその点数は！ 試召戦争の時より500点くらい上がってんじやねえかつ！」

高橋女史を倒す為に勉強したからね…

「そんなに僕らが勝てるわけ無いじゃないかあつ！」

知らないよそんなの…

「じゃあ… 幻獣召喚、ドラゴンフェニックス 竜・不死鳥！」

「え？」

『Fクラス 水野真琴 548点』

「これならどう？」

そう言つて笑つてみる。

part3に続く

明「真琴、恐ろしや…」

康「……………MMネットワークの管理者が真琴だったとは…」

雄「それにしても、アイツは何が目的なんだ？」

明「さあ？」

」「次回もお楽しみに！」

第17問 part3 決着！

観察処分者VS超能力者

(前書き)

「…お前、何がしたいんだ？」

「何って…楽しみたいだけだけど？」

押し黙る雄二。さて、行かせてもらおうよ！

「じゃあ、いくよ！武装覚醒、Xグローブ！」

「ゆ、雄二！来るよ！」

手のグローブに灯した炎を推進力にして一気に突っ込む。

「ていつ！」

避けながら明久の召喚獣が木刀を叩き込む。でも…

「甘いよっ！」

片手で木刀を掴み、もう片方のグローブを明き久の召喚獣に向けて、炎を放つ。

「うわっ！」 「どけ明久！」

明久の召喚獣が間一髪で避け、その後ろから雄二の召喚獣が走ってくる。

「おらめっ！」

拳が私の召喚獣の腹に叩き込まれる。

「まだっ！」

吹き飛ばされながら炎を放つ。雄一の召喚獣が炎に包まれ、消えた。

『Fクラス 水野真琴 217点』

『Fクラス 坂本雄二 0点』

流石雄二、点数がかなり削られた。

「あとは明久だけだね。」

「くうっ！」

「これで最後だよ。」

そう言って一気に間合いを積める。

「零地点突破・初代エディション^{ファースト}。」

瞬間、明久の召喚獣が凍り付いた。

第17問 part 3 決着！ 観察処分者VS超能力者

「なっ！」

雄二と明久が驚きの声をあげる。

「勝負ありかな？」

私が聞くと

「まだだ。まだ僕はやれる！」

凍った召喚獣が少しずつ動き始める。

「ええっ！」

それ…死ぬ気の炎つてやつでしか溶けないはずだよ？何で？…まさか、勝利への執念が氷を溶かしてるとか？

「だあああっしやあああっ！」

氷が砕け、召喚獣が復活した。

「それなら…オペレーションX！」

私の召喚獣が構えをとる。

「つつ！明久！行け！」

雄二に気づかれた。明久の召喚獣が迫ってくる。でも、この威力なら…

「だあぁっ!」

「Xバーナー!」

私の放った炎と明久の召喚獣が重なる。

「いつけえええっ!」

炎が消えると、体の半分が消えた明久の召喚獣と喉に木刀を突き立てられている私の召喚獣があった。

『優勝、坂本・吉井ペア。』

「「いよっしやあぁっ!」」

召喚大会が終結した。

第17問 part 3 決着！ 観察処分者VS超能力者 (後書き)

「おめでとう。明久に雄二。」

受賞式の後、私は2人に駆け寄ってこう言った。

「真琴、何でわざわざ自分の点数を減らしたの？」

「言ったでしょ。決勝戦を楽しむ為だって。」

「お前、負けるつもりだったのか？」

「まさかー。そんな訳無いじゃん。」

「……………うーん。」

考え込む2人。

「ほら、教室戻ろっ！手伝わなきゃ。」

「うん。そうだね！」

教室へと駆け出した。

part 4 に続く

」「召喚大会終了！優勝は明久チーム！」

明「うーん。謎だなあ。」

」「いつまで考え込んでるんだよ。」

明「…まあいつか！次回もお楽しみに！」

」「ちょっと待て！開き直った勢いで終わらせるなあっ！」

第17問 part 4 花火を超至近距離で見れたら幸せ? (前書き)

『ただいまの時刻をもって、清涼祭の一般公開を終了しました。各生徒は速やかに撤収作業を行ってください。』

「お、終わった…」

「さすがに疲れたのう…」

「……………(コクコク)」

やっと終わったああ。優勝の効果でこんなに人が集まるとは…

「そう言えば、姫路さんのお父さんはどうしたんだろっ?」

「ん?お義父^{とっ}さんが気になるのか?」

「なっ!?!べ、べつにそういうわけじゃなくて!」

「後夜祭の後に話をしに行くと言っておったのう。結論はそのときじゃな」

皆頑張ったから大丈夫でしょ。たぶん…

「じゃ、ウチらは着替えてくるわ」

「ええっ!?!どうして!?!」

「どうして、って言われても…恥ずかしいからに決まってるでしょ

「？」

「すみません。すぐ戻りますので」

「待つて！2人共考え直すんだ！カムバアーツク！」

明久の説得も虚しく、2人は着替えに行つた。

「じゃあ私も着替えてくる。学園長には皆で会いに行つて！」

「ちよつと待つてよ！真琴まで行つちやったら「秀吉がいるじゃん」
…そうだね。」

皆が秀吉の方を見る。

「それじゃっ！」

私は駆けていった。

第17問 part 4 花火を超至近距離で見れたら幸せ？

「そろそろかな？」

着替え終わった私は学園長室へと走っている。きっと常夏コンビがまた何か…してたね。

「目標を見つけたら携帯に連絡を入れてくれ！」

ちょうど雄二達に分かれる直前だった。

「どうしたの？常夏コンビに盗聴でもされた？」

「…その通りだ。探すのを手伝ってくれ！」

と言いながら走っていった。

さて、考えてみよう。盗聴したテープはどうする？放送するのが早いだろうね。では、それを雄二達から隠れながらできる場所は？答えは1つ。新校舎の屋上！

私は走り出した。

「大正解！」

常夏コンビがいた。

「やつほー先輩方、何してるのかな？」

「げっ！てめえ！」

「動くな！動いたらスイッチを押すぞ！」

「いいけど…その放送機材壊れてるよ！」

「「何っ？」」

心理戦の常套手段その1、ハツタリ。ちなみに5つあるけどそれは後々

「ふん。押せば分かるさ。」

「それが教頭室の爆弾のスイッチになつてたとしても？」

その2、微妙に実話をまぜる。

「くそおっ！てめえ全部知つてえええっ！？」

「何だよ常村。そんなに驚いいいいっ！？」

ドオン！パラパラパラ

わあ〜花火だあ。って危ないよ！誰撃つ

第17問 part 4 花火を超至近距離で見れたら幸せ? (後書き)

「アイツらか…」

ヒュー ドオン!

スピーカーを破壊

ドゴオン!

放送機材にも命中。あれ?まだ撃つの?

ヒュー ドゴオン ドッガン

…教頭室に当たった花火の爆風で私の仕掛けた爆弾が爆発した。どうする?…そうだ!明き久達のせいになろう!
私は逃げるように走り去った。

366

」「第17問終了!」

真「イエーイ!」

明「ねえ真琴?」

真「…何?(汗)」

明「僕らに罪を擦り付けなかった？」

真「…（どうしよう？あっ！）明久、時空間テレポーター勝手に使わなかった？」

明「……………」

J「何だろっこの空気」

明・真「「ごめんなさいっ！」「」

J「次回もお楽しみに！」

第18問（清涼祭編ラスト）〜2人のキモチ〜（前書き）

」「今回はずっと明久のターン！」

）Side Akihisa（

「駄目れすっ！明久君は渡しません！」

「瑞希こそ放しなさいよっ！」

「痛たたたっ腕があっ！」

姫路さんと真琴に両腕を引っ張られてる。何でこんなことに…

- 5分前 -

「お待たせ！」

姫路さんがジュースを買いに行っている間に真琴がやってきた

「お疲れ真琴。はい、ジュース」

「ありがとっ」

美波から紙コップを受け取り、それを一気に飲む

「そついえばアキ。1つ言っておきたいことがあるんだけど…」

「ん？何？」

「昨日、変な連中から助け「明久あつ！」ま、真琴！何してるのよ！」

突然真琴に抱きつかれた

「んにゅ〜」

真琴が僕の胸に顔をうずめて気持ち良さそうにしてる。やばい…可愛い。

「まこちゃん！何をしてるんれすかつ！」

姫路さんがジューズを抱えながら走ってきた。ん？れすつて…まさか2人共酔ってる？

「放してくらさいまこちゃん！」

「いやらよ！引つ張らないれよ！」

第18問（清涼祭編ラスト）〜2人のキモチ〜

そんなこんなで今に至る。こういう時は…

「止めて2人共！僕の為に争わないで！」

これで…

『『『『『何だとおおっ！』『』『』『』』』』』

あれ？

『姫路さんと水野さんが吉井を巡って争ってるぞ！』

『くそおっ！堂々と二股かけやがって…異端審問会の準備をしろ！』

『『『Yes！！BOSS！！』『』『』』』』

逆効果だったようだ

「邪魔らあああっ！」

『『『『『みぎやあああっ！』『』『』『』』』』』

真琴が手を振りかざすと皆が断末魔の悲鳴をあげて倒れた。あれ？
美波と姫路さんまで倒れてる。これって…2人つきり？

「明久〜」

「ん？何？」

「私ね、ずっと…明久の…ことが…スウ」

「ま、真琴？何？僕が何？って寝てるうっつ！？」

寝ちゃったのか…せっかくこの機会に本当の気持ちを伝えようと思
ったのに…

あ…この後どうしよう？

〈Side Out〉

第18問（清涼祭編ラスト）〜2人のキモチ〜（後書き）

J「原作2巻終了！74000pv、90000ユニーク達成です！」

明「凄いなあ。」

J「雪さん、ウツソさん、maronさん、雲さん。感想ありがとうございます！」

明「清涼祭編で一気に感想来たね！」

J「感想がチャットみたいになってるけどね…」

明「あはは…」

J「ところで明久、本当の気持ちって何？」

明「…また次回」

J「強引に終わらすなあっ！」

「…たく…3巻に入る前に特別問題を3つ位入れる予定です。」

特別問題その3 part1〜真琴の薬品実験〜(前書き)

」この話は、ウツソ・エヴィンさんの意見も参考にしてお送りします」

「皆、ちょっと頼みがあるんだけど…」

ある日の放課後、私は教室にいる明久、雄二、康太、秀吉、瑞希、美波に声をかける

「どうしたの真琴？僕達で良ければ手伝うけど…」

「ありがとう。実は、作った薬を持ってきたんだけど…」

刹那、男子4人が逃亡を図ろうとして…

「…雄二、どこ行くの？」 「あれ？ムツツリーニ君は何で逃げようとしているのかな？」 「秀吉、アンタも何してるのよ」 「明久？手伝うって言わなかった？」

やってきた女子4人+私に阻止された

「うう。霧島さん達は何でここに？」

「…真琴に呼ばれた」

「他の皆も？」

「「そう(だ)よ」「」

男子皆に睨まれた

「じゃあ、くじ引いて生けに…実験台決めるからね！私も引くから」

「お前、今生け贖って言いかけたよな！」

え？聞こえないなあ？

「じゃあいくよ！最初は性転換薬！皆引いて」

皆がくじを引く

く性転換薬 実験者く吉井明久・坂本雄二

「「最悪だあああ」「」

悲鳴(?)をあげる2人

「はい。飲んで」

少し沈黙、そしてほぼ同時に飲んだ

特別問題その3 part1 真琴の薬品実験

「雄二、いやユウちゃん」

「ああ、アキちゃんですう」

「この上ない屈辱だ……」

うん。このことでは2人共気があうね

「よし。次、貧乳化薬と巨乳化薬。貧乳化薬は瑞希が飲むとして
…巨乳化薬は…」

言った瞬間手元からくじが消えて…

「やったああ！」

美波が喜んでいた

く巨乳化薬・貧乳化薬 実験者く島田美波・姫路瑞希

「あの…何で私が飲むのは確定なんですか？」

「私たちの気持ちを味わって欲しかったから…」

瑞希がしぶしぶ飲み、美波は喜んで飲んだ。すると…

「わあっ!」「」

美波の胸が膨らみ、瑞希の胸が縮んだ

「（ブシャアアッ）」

バカ2人が花血を吹き出しながら倒れた

「凄い！夢が叶った！」 「何か体が軽いですっ！」

よし、次行こう

「次、幼児化薬！はい引いて」

（幼児化薬 実験者）水野真琴

「あれ？私？」

「さあ。早く飲めよ！」

雄二に急かされる

「…（ゴクン）」

体が縮んだ

特別問題その3 part1〜真琴の薬品実験〜（後書き）

「…可愛い」「そうだね」

翔子と愛子が呟く

「何か話してみるのじゃ」

「…次行くよ。」

「」「」「」「」「」「」「」「」「」「」「」「」可愛い「」「」「」「」「」

皆に言われた

「今何歳でちゆか？まこちやみぎやああっ！ゴメン！許して！」

明久におちよくられたので怪電波を流してやった

「今は…6歳くらいかな？」

「……………（パシヤパシヤ）！」

康太、激写するなよ…後で奪わなきゃね…

「っ、次行くよおっ！」

part2へ続く

」「ウツソ・エヴィンさん。リクエスト叶えましたよ!」

康「……………」この写真どうする?」

明「奪われる前にツインズの世界に送ろっか」

康「……………」賛成」

」「雪おっさん。写真行っちゃいましたよ」

特別問題その3 part2 J r・真琴の薬品実験（前書き）

J「雪さん。薬、早速使わせていただきます。」

「次行くよっ！」

私はちよつと高くなつた声で叫ぶ

「次は超能力増強剤と阻止剤ね。飲むのは…「飲まないよ！」…私だけだね」

（超能力増強剤 実験者）水野真琴

「（ゴクン）じゃあ、サイコメトリーしてみるね」

『ちつちやい真琴可愛いなあ』 ……『良い写真が撮れた』
『まこちゃん、可愛いですう』 『良いかお前ら、この中には今ちつちやい水野さんにあの胸が無い姫路さん、巨乳になつた島田がいる。突入用意をしろっ！』

…うん。確かに能力上がつてるねお腹も減らないし…
トコトコと扉に向かって歩く

『総員突げ…』

私の姿を見て皆一瞬止まって

『『『『『眼福じゃああつ！』』』』』

と言いながら倒れた。やっぱりバカだね

「さあ、次行くよ！大人化薬！」

皆一斉に引く

〈大人化薬 実験者〉霧島翔子・木下秀吉

「（うぐん）」

体が一気に成長した

「ちなみに20歳ぐらいだよ」

「…雄二、未来の私…」

「あ、ああ」

予想外に綺麗なことに言葉が出ないみたいだね

「秀吉、アンタはいつまでもそんななのね…」

「酷いのじゃ！この薬はおかしいのじゃ！」

特別問題その3 part2 } Jr・真琴の薬品実験 }

「はい次！性格対立薬！」

「何それ？」

「性格が真逆になります！強制的に優子、愛子、康太が飲んでね」

（性格対立薬 実験者）土屋康太・工藤愛子・木下優子

「……（ゴクリ）……」

「何も変わった感じはしないな。」

おっ

「ムツツリーニが…ペラペラと話してる」

「何を言っている明久、いつもこんな感じだぞ」

「私、なんでこんな格好してるの？この制服…恥ずかしいよ…」

「…ありえない。愛子が恥ずかしかってる」

「ねえ。私、変わってないんだけど…」

「いや、変わっておるぞ」

「何が？」

「ズボ「秀吉？」…何でもないのじゃ」

「よし！まず皆リセット薬飲んで！元に戻るから」

（ゴクン）よし、戻った！

「最後！人体転換薬！体が入れ替わる！皆、適当に取るって飲んで
！」

（5分後）

「明久、手挙げて！」

と愛子（私）が言くと

「はい」

私（明久）が手を挙げた

「はい、リセット薬」

特別問題その3 part2 } Jr・真琴の薬品実験 } (後書き)

そんなこんなで結果

明久 真琴 雄二 康太 康太 翔子 秀吉 瑞希 瑞
希 明久 美波 優子 翔子 康太 愛子 秀吉 優子 雄
二 真琴 愛子 となった

「よし！皆ありがとう！解散！」

皆解散し始める

「あ、翔子。プレゼントだよ」

私はあるものを差し出す

「…いいの？」

「いいの！楽しんできて！」

そう言っつて私は走り去った。翔子の手にプレミアムチケットを握らせて…

」「特別問題その3終了！」

ウツソさん、雪さん。薬の案ありがとうございました！」

真「貴重なデータが撮れたよ」

明「あの計画は？」

真「順調だよ」

明・真「」（ニヤリ）「」

特別問題その4 part1〜プロジェクトU 開始〜(前書き)

ある日の朝

テレーテレーテテテテーBAKAバカ・ゴー ピッ

『キサマヲコロス』

「アキラメロオマエハモウニゲラレナイ」

『チッ(プツッ)』

携帯を無線機に持ち替えて

「《アルファ》より 《ガンマ》、 《シグマ》、 μ 《ミュー》、
《オメガ》へ。総員配置について!」

『『『『了解!』』』』

「よし、私も行くぞうか!」

私は家を出て、ある場所へ向かった

「ようこそ! 如月ハイランドへ!」

「真琴…何してんだよ」

「真琴？誰のことでしょうか？私は水 誠せいですよ」

「無理のある名前だな……」

私もそう思うよ

「プレミアムチケットはお持ちですか？」 「……はい」

翔子がチケットを出す。それを受け取りながら無線機を取り出し……

「プロジェクトU、スタート」

と通信してすぐになってしまう（この間2秒）

「では、まず記念写真を撮りましょう」

そう言うと、突然帽子を深く被った もとい明久が現れた

「どうぞ、カメラです」

「ありがとうございます。」

「何だそのギリシア文字の呼び名は！ていうかお前明久だろうがっ
「！」

特別問題その4 part1〜プロジェクトU 開始〜

「いいえ。僕は吉野 秋あきですよ」

「…翔子、ちよつと我慢してくれよ」

「…???」

雄二が翔子のスタートを掴み、軽くめくりあげる。ギリギリの高さまでスカートが持ち上がり

「……………っ!!!(ギラッ)」

康太が現れた

「やっぱりムツツリー」何してるんですか」「……………すまない」

…

「で、お前は?」

「……………土田 康こう」

「…はあ」

うん。分かるよその気持ち

「…雄二、えっち」

「なっ!?!ち、違つぞ翔子!俺はお前の下着になんか微塵も興味が

ないっ！」

「…それはそれで、困る」

「ぐあああっ！理不尽だあっ！」

あ、シャッターチャンス

「！」「……………はい、チーズ」 ピピッ

「では、すぐに現像しますのでそのまま待っていてください」

「…わかった。このまま待ってる」 「ぐあああっ！このままだと俺の頭蓋がっ！」

本当にそのまま待つんだ…

「……………どうぞ」

「…ありがとう」

康太が写真を渡すと、翔子は嬉しそうに受け取った

「…雄二、見て。私達の思い出」 「…なんだ、この写真は」

「サービスで加工も入れておきましたよ」

特別問題その4 part1〜プロジェクトU 開始!〜(後書き)

【写真の詳細は原作3・5巻を見てください】

「コレをパークの写真館に飾ってもいいですか?」

「お前正気か?」

part2へ続く

「あれ?妨害無いの?」と思っただ方、今回は妨害はありません!」

真「それで話成立するの?」

「頑張ります!」

特別問題その4 part2 ①はフィーで姫路で②(前書き)

「え？何か問題がありますか？」

「大ありだろっ！」

雄二が叫ぶ

「…雄二、照れてる？」

「すまない。どこからどう見てもこの写真には照れる要素が見当たらない」

「だろっね…」

ふと後ろを見ると

「……………(パシヤパシヤ)！」

康太は必死で道行く女の子達を撮っていた

「…？」 「……………はっ！」

ああ、無意識だったのか…
再び前を向くと

「あれ？」

雄二達は消えていた

「ああっ！まごじゃなくて！逃げられたじゃないか！」……
…何をしている」

「アンタ達のせいだよ…と叫びたい気持ちを押さえて、サイコメトリ
ーを始める

「よし分かった！μの近く！は変装して近づいて！は待機！」

「了解！」

私は雄二達の所へ急いだ
雄二、言ったはずだよ。もう逃げられないって

〈Side Yujii〉

真琴や明久達から逃げて

「さて。それじゃ、テキトーに回って帰るか」

「…楽しみ」

俺達は園内を回っている。アトラクションを探していると、ヒョコ
ヒョコとキツネの着ぐるみが近寄ってきた

『お兄さん達、フィーが面白いアトラクションを紹介してあげるよ
』？

特別問題その4 part2 } μはフィーで姫路で }

着ぐるみから若い女の声が聞こえてきた。…それにしても聞き覚えのある声だな。確認しておくか

「そついえば、さっき明久がバイトの女子大生に映画に誘われてたな」

『ええっ、明久君が！？それはどこで見たんですか！？』

……

「おい姫路、アルバイトか？」

『あ…っ！ち、違いますっ！私ーじゃなくてフィーは姫路なんて人じゃないよ？見ての通りキツネの女の子だよっ』

姫路、お前真面目だな

「じゃあフィーとやら。お前のオススメを教えてくださいか？」

『あ。う、うんっ。フィーのオススメはねっ、向こうに見えるお化け屋敷だよっ』

ふむ。それなら

「そつか。ありがとう」

『いえいえっ。楽しんできてねっ』

「よし翔子。お化け屋敷以外のアトラクションに行くぞ」

翔子の背中を押して歩き出すと

『まま待って下さいっ！どうしてオススメ以外のところに行くんですか！？』

慌てて腕を掴んできた

「どうしてもクソもあるか。お前の口ぶりから察するに、お化け屋敷に余計な仕掛けが施されているのは明白だろう。わざわざそんなところに行く気はない」

『そんなの困りますっ！お願いですからお化け屋敷に行ってください！』

特別問題その4 part2〜^uはフイーで姫路で〜（後書き）

「断る」

『お願いです〜っ！お化け屋敷はきつと楽しいですから〜っ！』

「い・や・だ！」

振り払おうと考えていると

『そこまでだ雄二ーじゃなくって、そこのブサイクな男っ！』

見るからに頭の悪そうなキツネが現れた

アンケートとお知らせ

突然ですがアンケートです

その1 明久はどうするべき？

1 原作通り

2 真琴とフラグ

3 その他

その2 新キャラについて

1 出すべき(案もお願いします)

2 いない

よろしくお願いします

期限は原作3巻突入の直前までとします。

お知らせ

知ってる方も多いと思いますが、僕は中学3年生です。

明後日は僕の部活の試合があります。その試合は僕の引退試合になるので、本気でやりたいと思うのです。そのため、明日から今週の土曜まで更新はお休みしたいと思います。感想へのコメントや感想を書くのは続けますので、よろしくお願いします。

特別問題その4 part3 ノインの災難と恐怖のお化け屋敷 (前書き)

「や、やっと追いついた…」

予定では今ごろ とμが引き留めてるはずだけど…何やってんだろ
うね？あの2人は

『明久君。さつき女子大生に声をかけられたって聞きましたけど…』

へえ。作戦の最中にそんなことを…

『え？なんのこと？僕は別に何もー「あゝきゝひゝさゝ？」…あ、
』

「何をしてたのかな？」

『ち、違っただ！あれは雄二がって姫路さん！なんで携帯電話を取
り出すの？』

『美波ちゃんが今すぐ来てくれるそうですよ。』

「ナイス瑞希！そっちは任せたよ。私は往生際の悪いバカを追っか
ら」

雄二達はなんだかんだしてるうちに逃げてしまったのだ

『了解ですっ！』

『了解じゃない！ああっ誰かが凄い勢いで走ってくるよ！？』

「え〜と、位置は…よし。テレポート！」

明久は無視してテレポートする。超能力増強剤（成分を分析して量産した物）のおかげでお腹も空かないし、提供してくれた人に感謝だね！（雪さんありがとうございませす！）

「（ヒュオン）よし、着地成功！」

「えっ!?!」

「てめえ、やっぱり真琴だろ？」

「違いますよ。さあ、お化け屋敷に行きませしよっ」

「断る！」

やっぱりか…それなら…

特別問題その4 part3 ノインの災難と恐怖のお化け屋敷

「坂本翔子さん」

「おい！勝手に入籍させるな！」 ……良いのそのうちそうなるから。それで、何？」

「お化け屋敷は抱きつき放題ですよ」

…少し沈黙

「…雄二、お化け屋敷に行く」

「汚ねえぞてめえ！翔子を使って畏にハメよ」では、誓約書にサインを「話を聞けえええ！」

うるさいなあ…

「何にせよ、面白そうではあるな」

そう言つて、書類に手をかける
ちなみに内容は

【誓約書】

お化け屋敷内で何があつても事故責任とします

実はその下には…

【婚約書】

私、坂本雄二は霧島翔子を妻として生涯愛することを誓います

うん。ナイスストラップだね

「…真琴？」

「ですから私は「何だこの下にあった紙は」…冗談です」

バレた…

「どんな冗談だよ！おい翔子、何で俺んちの実印を出してんだ！」

「…もちろん冗談」

「だからどんな冗談だ！」

「では、上の誓約書だけにサインをしてください」

「（サラサラ）これで良いか？」

「はい。ありがとうございます。お荷物を預かりますよ」

特別問題その4 part3 ノインの災難と恐怖のお化け屋敷 (後書き)

「…お願い。こぼれちゃうから、慎重にね」

「分かりました」

なるほど。中身はアレですか

「では、行ってらっしゃいませ」

2人を見送った後

「よりへ。ターゲットがポイントGに入った。考案の作戦を実行せよ」

『了解じゃー!』

しばらくして、雄二の悲鳴が響いたのは言うまでもないだろう

「復活!」

真「イエー」

明「無事引退できて良かったね」

「」
「ありがとう!」

明「何か新キャラの登場が待ち遠しいよ」

真「私の妹かぁ」

」「もうしばらくお待ちください！では」

A11「また次回！」

特別問題その4 part 4 逃走不能！ウエディング体験プレゼントクイズ

「お疲れ様でした。結婚する気になれたでしょうか？」

「アレと結婚はどつやっても結びつかないと思っぞ」

「だろっね」

「…そろそろお昼」

翔子が時計台を見ながら呟く。そろそろメインイベントの時間だね

「では、豪華なランチを用意しておりますので、こちらへどうぞ」

翔子には悪いけどね…

「では、こちらでランチをどうぞ」

私は2人をパーティ会場のようなところに入れる。あとは任せ
たよ

Side Yujii

真琴に連れられて入ったのは、クイズ会場だった

「いらっしゃいませ。坂本雄二様、翔子様」

ボーイが現れる。こいつも見覚えがある面だ

「秀吉。ボーイの真似事か？」

「秀吉？何のことでしょうか？」

くそつ。役者モードになってやがる。コイツにも道具を使って…ん？おかしい。携帯を取り出しても動かないぞ。そう思いながら携帯の液晶を見ると…

「圏外だっ！真琴の仕業か」

「それでは、こちらへどうぞ」

ボーイに連れられて会場を移動する

「お客様は未成年とのことなので、こちらをご用意させていただきました」

席につくと、ボーイがグラスにノンアルコールのシャンパンを注ぐ。凄い演技力だな

特別問題その4 part 4 逃走不能！ウエディング体験プレゼントクイズ

「オードブルでございます」

すかさず料理が運ばれてくる。俺達は慣れない手付きでゆっくりと食べ始めた

（Side Out）

「そろそろかな？」

雄二達が食事をしているのを見ながらそう呟く

《皆様、本日は如月ハイランドのプレオープンイベントにご参加頂き、誠にありがとうございます！》

始まったね

《なんと、本日はですが、この会場に結婚を前提としておつき合いを始めようとしている高校生のカップルがいらっしやっています！そこで、当如月グループとしてはそんなお2人を応援する為の催しを企画させていただきました！題して、【如月ハイランドウエディング体験】プレゼントクイズ！》

扉が閉まる重々しい音が響き、私は2人のところへ歩きだした

「それではクイズを始めます！」

雄二達を壇上に上げ、私は司会を始める

「では第1問！坂本雄二さんと翔子さんの結婚記念日はいつでしょうかっ？」

ピンポーン

雄二が訳の分からないといった顔をしているうちに翔子がボタンを押し

「…毎日が記念日」

と答えた。

「正解です！」

雄二に睨まれた。片目を瞑って返すと雄二は（そっぴいことか）というように前に向き直る。

特別問題その4 part 4 逃走不能！ウエディング体験プレゼントクイズ

「第2問！お2人の結婚式はどちらで挙げられるのでしょうか？」

ピンポン 「豚の角煮！」

雄二が答えた。甘いよ

「正解です！」 「なにいつ！」

「お2人の挙式は当園にある神龍シエンロンの間、別名【豚の角煮】で行われる予定です！」

「待ていつ！絶対その別名は「第3問！」話を聞けえっ！」

無視する

「お2人の出会いはどこでしょうか？」

「…させない」 ブスッ

雄二の目が潰された

ピンポン 「…小学校」

「正解です！なんとも仲睦まじいですねえ。では、第4問！」

「50音の「わ」正解です！」何っ！「問題は50音の44番目は？でした」

君に勝ち目は無いんだよ？

「それでは最終問題！最後はお手元のボタンを使います。質問にyesかnoのボタンを押して教えてください。答えが合えばウェディング体験をプレゼントいたします！

問題、あなたは横にいる人のことを愛していますか？」

会場内が静まり、翔子がボタンを押す。考えた後、雄二も押す

「回答オープン！」

雄二 翔子

yes yes

「見事に答えが合いましたのでウェディング体験をプレゼント！」

拍手に包まれながら、幕が降りた」

特別問題その4 part5（ウエディング体験と妨害と）（前書き）

「おめでとございます。ウエディング体験が当たりましたよ」

「…凄く嬉しい」

レストランを出た2人に話しかける

「それでは、翔子さん。ウエディング体験の準備があるので、このスタッフについてってください」

30歳位の女性スタッフが歩み出て頭を下げる。如月グループもよくやるね

「ん？じゃあ俺は待たされるのか？」

「大丈夫だよ雄…間違った大丈夫ですよ」

「もう隠さなくていいだろう。ていうか、最初から分かってたけどな」

「うん。じゃあもう止めるよ、敬語疲れたしね」

フウ、と1息つく

「で、何が大丈夫なんだ？」

「これを使うから…」

そう言いながらスタンガンを取り出す

「寝て起きたときには着替え終わってるよ」

「真琴てめえ！ぐあああつ！」

「じゃあ、着付け頼むよ」

気絶した雄二をスタッフに任せ、私は神龍の間【豚の角煮】に向かった

《それではいよいよ本日のメインイベント、ウェディング体験です！皆様、まずは新郎の入場を拍手でお迎え下さい！》

会場内に拍手が盛大に響く。しばらくすると、雄二がゆっくりと階段を昇ってきた

《それでは新郎のプロフィール紹介を――省略します》

特別問題その4 part5 ウェディング体験と妨害と

手抜きだねえと苦笑しつつ、主役の登場を待つ

《それでは、いよいよ新婦のご登場です》

会場の照明が消え、スモークが立ち込める。いい雰囲気になってきた

《本イベントの主役、霧島翔子さんです！》

翔子がスポットライトに照らされながら歩いてくる。これは…

『……………綺麗』

誰かが私の気持ちを代弁してくれた。凄く似合っている

「…雄二…」

翔子が雄二の前に来て、呼びかける

「翔子、か…？」 「…うん」

翔子が恥ずかしげに雄二に問いかける

「…どう…？私、お嫁さんに見えるかな…？」

「…ああ、大丈夫だ。少なくとも、婿には見えない」

答えるのがやっとらしかった。無理もない

「…雄二…」 「お、おい、翔子…？」

翔子の動きが止まり

「…嬉しい…」

と呟いた

《ど、どうしたのでしょうか？花嫁が泣いているように見えますが…？》

翔子は静かに泣いていた

「…ずっと…夢だったから…」

《夢、ですか？》

「…小さな頃からずっと…夢だった…。私と雄二、2人で結婚式を挙げること…。私が雄二のお嫁さんになること…。私1人だけじゃ、絶対に叶わない、小さな頃からの私の夢…」

特別問題その4 part5（ウエディング体験と妨害と）（後書き）

「…だから…本当に嬉しい…。他の誰でもなく、雄二と一緒にこうしていられることが…」

翔子が懸命に言葉を紡ぐ。

《どうやら嬉し泣きのようですね。花嫁は相当に一途な方のようです。さて、花婿はこの告白にどう答えるのでしょうか？》

雄二の答えを待っていると、何やら叫び声が聞こえてきた。何だろう？

「翔子。俺はお前の『』『坂本おおつ！』『』…は？」

やっぱりアイツらか…

（須川）『坂本てめえ！霧島さんと結婚だと！ふざけんな！』

（横田）『血の盟約についておい！皆倒れだしたぞ！』

「覚悟はできてるんだろうかね？」

須川君、横田君、主要メンバー、私以外の皆は一斉に倒れた

「…大事な時に邪魔するなああつ！」

その後の事はあまり覚えていない。

〈週明けの学校〉

「明久に真琴、如月ハイランドでは世話になったな」

「それがどうかしたの？」

「その礼にプレゼントをやるっ」

「なにになに？」

「映画のペアチケットだ。2人で行ってこい」

「「は？」」

『『『吉井を殺せえええっ！』』』

男子が叫び

「ちょっと真琴、どっいっこと？」

「抜け駆けは卑怯ですっ！」

私は瑞希と美波に殺されかけた

特別問題その5 part1〜いざプールへ〜（前書き）

「ってなことがあって、おかげで散々な週末だったよ」

再び週明けの教室。私はいつものメンバーと話をしていた

「それは災難じゃったのう…」

「うん。それにさ、今週末はプールの罰掃除だよ。はあ…」

「……………重労働」

「褒美というほどじゃないが、『掃除をするのならプールを自由に使ってもいい』と鉄人に言われたぞ」

「え？そうなの？」

「ああ。だから秀吉とムツツリーニ、それに真琴も今週末にプールに来ないか？」

プールねえ〜どうしよう？

「ただし、ムツツリーニにも掃除を手伝ってもらっぞ」

康太の動きが止まった

「ちなみに、姫路と島田にも声をかけるし、真琴も来るかもしれないぞ」

「……………ブラシと洗剤を用意しておけ」

現金な奴…

「うむ、そうじゃな。貸切のプールなぞ、こんな時でなければなかなか体験できんじやろうし、相伴させてもらうかの。無論、ワシも掃除を手伝おう」

「え？結構大変だと思うけど、いいの？」

「うむ。お安い御用じゃ」

「で、真琴は？」

「うーん。あっちの2人の話を聞いてからかな？おい、瑞希、美波」

「どうしたの真琴？」 「呼びましたか、まこちゃん？」

特別問題その5 part1 いざプールへ！

「あのね、今週末プールが貸し切りで使えるみたいだけど、2人は来る？」

「え…？」

2人が一瞬ビクンと反応する

「プールって…水着だし…」

「プールって…水着ですよね？」

2人は自分の体の一部を見ながら呟く。なるほどね

「決めた！私も行く！」

「ええっ！突然どうしたの？」

「行きたくなっただ！」

決して良くも悪くもない胸や腹部を自慢する為じゃない！

「じゃ、じゃあ私も行くわ！いろいろと準備をして…」

「そ、そうですね。準備は大事ですよ」

2人もOKしたようだね。あ、そうだ！

「2人共ちよつと来て」

2人を脇に連れていく

「（…ケットを賭…レーで勝…い？）」

「（…いですね。賛…よ）」

「（じゃ…たらキツ…らめること…ね？）」

「（OK）」

3人で手を握り合う

「おい、お前ら。土曜日の朝10時に校門前に集合な」

雄二がそう言うと同時に鉄人が入ってきた

特別問題その5 part1〜いざプールへ〜（後書き）

J「久々の後書きだあ」

明「今回短かったね」

J「1日に3話も書くの大変なんだよ…」

明「なるほど。ところで、真琴達は何を話してたのかな？」

J「えーと、2話か3話後に分かるよ」

明「何だったんだろう?」

J「さて、アンケートですが、たくさんのお返事感謝です。プール編はあと2日（明日も何話か一気に書く）位で終わりです。新キャラもまとまってきました。プール編と強化合宿編の間に初登場です」

明「では、また次回」

特別問題その5 part2〜プールは天国？地獄？〜（前書き）

この小説の名前は『バカと天使と超能力者』になります

「皆おっはよ〜！遅れてごめんね」

私は少し遅れて着く。準備に手間取っちゃったよ…

「あつ！優しいお姉ちゃん！おはようですっ！」

「おはよ〜。葉月ちゃんも来たんだね」

「えへへ〜」

頭を撫でると気持ち良さそうにする葉月ちゃん

「さて、皆揃ったな。早速着替えるとするか。女子更衣室の鍵は翔子に預けてあるからついていってくれ。着替えたらプールサイドに集合だ」

男女に分かれて更衣室へ向かう。こっちは私と美波と瑞希と翔子。つてあれ？

「葉月ちゃんはこっちでしょ？」

「えへへ。冗談です」

「木下もこっちでしょ？」

「美波、それは違うと思う…」

「でも、こっちで着替えると死人がでるよ」

確かに…

「じゃあ、秀吉は別のところで着替えたら？」

「ぬ、ぬう…。得心行かぬが、この際我慢じゃ…。水着姿を見せればきつと皆もワシの事を見る目が変わるはずじゃ…」

「よし。さっさと行こうぜ。時間が勿体ない」

「うん。そうだね」

私達はそれぞれの更衣室へと向かった

（30分後）

今私は秀吉と一緒にプールへ向かっている

特別問題その5 part2〜プールは天国？地獄？〜

「ねえ、秀吉？」 「何じゃ？」

「…その水着、女物だと思っただけど…」

「な、何じゃとっ!」

「いや、皆そう言っと思っ」

そんなことを話してる内にプールに着いた

「…何この状況…」

明久と康太は周りに鼻血の海を作っていたし、雄二はなにやら悶え苦しんでいた

「あ、遅かったわね秀吉にま…」

美波が固まる

「どうしたんですか？みな…」

瑞希も固まる

どうしたんだろう？

「わー、綺麗なお姉ちゃん達可愛いですっ」

「達？真琴はともかく、ワシは男じゃぞ」

「ふえ？でも、葉月はその水着、女の子用だと思っです」
「やっぱり…」

「な、なんじゃと!？」

さっきと反応が同じだよ…

「それもですけど…」

ん?どうしたんだろう

「真琴っ!」「ひゃいつ!？」

あ、裏返っちゃった

「何でアンタは胸もないのにそうなの!」「はい?」

そうって何?

「まこちゃんはずるいですっ!そんなにスタイルが良いなんて…」

ちなみに私の水着はビキニタイプである。…何か変かな?

特別問題その5 part2}プールは天国?地獄?}(後書き)

「2人共最高だよ」

「！」

「明久、ここ地球だからね」

「……………ここで死んでも本望」

「何?鼻血で出血多量?そんな死に方嫌でしょ!」

「目があっ目がああっ」

…「ここは地獄?」

「流石バカだね!」

真「感心してる場合?」

「次回はいよいよ前回の秘密が明らかに!」

真「絶対負けない!」

「次回もお楽しみに!」

『バカと天使と超能力者』通称・バカ天です。よろしくお願います

特別問題その5 part3 映画ペアチケットを巡って ヒーチバレー対決

「あの、明久君」

私流れに任せてプカプカ漂っていると、瑞希が明久に声をかけた

「ん？なに、姫路さん？」

「明久君は水泳は得意ですか？」

「あ、うん。まあ、人並みには……」

「？ 明久君。どうして目を逸らすんですか？」

瑞希がパレオを外してるからだと思うよ

「実は私、全然泳げないんです」

「あ、そうなの？」

「瑞希って水泳苦手？」

私が聞くと

「はい。恥ずかしいんですけど、水に浮くくらいしかできなくて……」
と答えた

「じゃあ、ウチと真琴で教えよっか？ね？真琴」と美波

「いいよ手伝わける」

3人で話していると、明久がこう呟く

「ーこうして見ていると、美波と真琴がAで姫路さんがFみたいだよね」

何だっ！

「私は（寄せて上げれば）Bくらいある）わ（よ！」

「ぐべあ！うっ！？」

なんて失礼なことをつてしまった！勢いで殴っちゃったよ！Yちゃんに怒られる…

「あ、明久君…。そういうことは、面と向かって言われると、その

…」

…乳牛め…あっ！つい本音が…

「よし、ビーチバレーやる！ビーチバレー」

特別問題その5 part3 映画ペアチケットを巡って ビーチバレー対決

「? 突然どうしたの?」

「いよいよやるのね…」 「負けませんよ…」

よし、タイトルコール!

「第1回!」 私

「映画ペアチケット争奪!」 瑞希

「ビーチバレー対決!」 美波

「at文月学園!」 美春

「「「「イエー」「」」」 皆

つて、あれ?

「美春!何でアンタがいるのよ!」

「勿論。お姉様方と映画に行くためのペアチケットを合法的に取る為です!」

…そういえばそんな子だったね…

「まあいいや。ルール!基本的には2VS2の対決です。3セット終了時の自分の取得点が一番の人にペアチケットが渡ります。勝つ

たチームの2人には5ptが入ります。これはチーム内での争いを防ぐためです。以上！」

「よし、チーム分けるよ。グーとパーで合った人っ」

私グー 瑞希パー 美春パー 美波グー

「私は美波とチームかぁ」「よろしくね真琴」

「始めますよ！」

- 第1セット - サーバー美春

ヒュー バシン ドオン

「.....」

ありえない。ボール、直角に曲がったよ...

「真琴。あの子、私達を本気で潰しに来てるわよ」「じゃあ1・2セットで勝ちを確定させて、3セット目で勝負しよう」「OK
！」

特別問題その5 part3 映画ペアチケットを巡って ビーチバレー対決

「なんだかんだで30分後」

「ま、負けた…」 「強すぎるわよあの子…」

真琴 & 美波

瑞希 & 美春

2 1 1 セット 1 6

1 9 2 セット 2 1

2 1 3 セット 2 3 (デュース1回)

ポイント

真琴 35 pt

美波 26 pt

美春 41 pt + 10 pt

瑞希 19 pt + 10 pt

「私の勝ちですね!」

「…はい」

私は渋々チケットを渡す

「ではお姉様方、明日行きましょうね!」

「美春、それペアチケットだから私達2人と行くのは無理だよ」

「ええっ!?!どちらかを選ばなければならぬのですか!?!」

「ぜひ美波（真琴）と一緒に行ってください！」

あ、同じ事考えてた…

「むう…。どちらかを選ぶなんて私には無理です！霧島さんにあげますっ！」

「…ありがとう」

…雄二、また連れて行かれるね

真「あの子滅茶苦茶だよ…」

美波「全くね…」

瑞「私、あんまり得点とれませんでした…」

美春「お姉様方の為なら何でもできるのです！」

「さて次回でプール編ラスト！さらにその次は新キャラ登場だあつ！」

特別問題その5 part 4〜己の命を賭けて ガチンコ水泳対決〜（前書き）

「お疲れ〜」

プールから出ると、明久に声をかけられる

「あのチケットどうなったの？」

無言で翔子達の方を見る

『…雄二、明日の映画何がいい？』

『じゃあMAMA2ママで（1時間半の物）』

『…MAMA2を16回ね』

『ちよつと待て！映画で1日が終わるぞ』

『…暇なら寝てていい』

「なるほど。よく分かったよ。アイツを異端審問会にかけよう」

「何でそうなるの？」

確かに私達の時はいろいろあったけど…

「あれ？真琴？何やってんの？」

この声は…

「愛子こそどうしたの？」

Aクラスの工藤愛子。ムッツリーニのライバルである

「ボク水泳部だからさ、練習あると思って来たんだけど今日は無いって着いてから気付いたんだ。そしたら、プールから声がしたから寄ってみたってわけ」

…意外と天然なのかな？

「じゃあ一緒に遊ぶ？」

「いいの？ありがとっ！じゃあ着替えてくるけど…」

立ち止まって

「覗くなら、バレないようにね」 と爆弾を落としていった

「…雄二。今動いたら捻り潰すから」

「明久君。余計な動きを見せたら大変なことになりますよ？」

プールに殺気が立ちこめた

特別問題その5 part 4〜己の命を賭けて ガチンコ水泳対決〜

「あ〜疲れた〜」 と呟く

「真琴遊び過ぎじゃない?」

「いいじゃん。たまには…」

などと話していると

「疲れたなら良い物がありますよ」 と瑞希が言う

「3つしかないんですけど…朝作ったワッフルがあります」

「第1回っ!」 雄二

「最速王者決定戦っ!」 明久

「ガチンコ水泳対決っ!」 明久& amp; 雄二

「イエーツ!」 秀吉& amp; 康太

「…明久君達、どうしたんですか?」

「さあ?3つしかないワッフルを賭けて水泳対決じゃない?」

嘘じゃないよね…

「ルール説明っ!この…」

「あっ！そうでした！」

明久がルールを説明している間に瑞希がそう言う

「まこちゃんの方はちゃんとありま「私も泳ぐっ！」えっ？突然ど
うしたんですか？」

「勝利した先に得たものの方が良いじゃない」

それっぽいことを言ってみる

「わ、分かりました」

雰囲気にはやられて瑞希も許可する

「じゃあボクが判定するよ」

愛子がスタートに立ち、私達も並んだ。

「はい、行くよ！」

生き残る策はただ1つ。負けること

特別問題その5 part 4〜己の命を賭けて ガチンコ水泳対決〜（後書き）

「位置についてー」

わざとゆっくり泳げばいいのだ

「よーい」

私は女だから怪しまれないはず。この勝負私の勝ちだっ！

「スタートっ！」

「くたばれええっ！！」

私の計画はバカ2人によって破綻した。何してんのよアイツら！
やばい、もう折り返しだ（現在3位）

「しまった！もう皆折り返してる！」

遅いよバカ！

「こつなったら真琴に1位を譲る！お前は秀吉を止める！」
「了解！」

…いらぬよその優しさ…

そのまま1位でゴールした。諦めながら後ろを振り向くと…

「……………死して尚、一片の悔いなし……………」

プールが血の海と化していた

」「プール編終わりっ!」

真「散々だったよ……」

」「次回はいよいよ彩華登場!お楽しみに!」

アンケートを締め切ります。たくさんの回答感謝です。
また、彩華のプロフィールも確定します

特別問題その6 妹襲来！ 大波乱の予感が……（前書き）

プールから明けた日曜日。久しぶりの和やかな朝

ピンポーン

「はい」

玄関にトタトタと走っていく

「（ガチャッ）どちら様で「まこ姉っ！」「うわっ！」

小柄な体が私に飛び込んでくる

「あ、彩っ？」

それは私の妹だった

所変わってリビング

先に説明をしておこう。彼女は水野彩華。私の双子の妹である。10年前、親に連れられてアメリカへ留学。理由は頭が良いからではなく、心配だから。体格は小柄で、高校生なのに小学生並の身長しかないという、超ロリツ子体型。成績は明久よりも悪いかもしい。その代わり運動は大の得意。見た目は子供、頭脳も子供という謎の組み合わせ。さらに天真爛漫を体言したような性格である。以上その妹はというと…

「まご姉のおいだあ」

今私の膝の上にいる。

「彩、何で日本に戻ってきたの？」

「私が行きたいって言ったんだよ！」

「え？母さん達、心配しなかった？」

「うん。1日じゅう説得したら許してくれたよ！」

…脅迫じゃないよね？

「まご姉は？明兄とうまくやってる？」

明兄とは明久のことである。明久と彩華は会ってすぐに仲良くなり、明兄と呼ぶようになった。同学年なのにね…

特別問題その6 妹襲来！ 大波乱の予感が…

「まあまあかな？それよりもさ、文月学園通うんだよね？」

「そっだよっ！」

「じゃあ転校届出しに行かなきゃね。私も一緒に行くから準備して」

「うん！部屋はまこ姉と一緒に良い？」 「うん。良いよ」

その後、私達は学園へと向かった

～翌日～

「ねえ真琴。今日転校生来るらしいよ」

「そっだね」

妹だし…

「女の子かなあ」

そっだよ

「楽しみだね」

なんだろう？複雑な気持ちなんだけど…

「お前ら、席につけ！転校生を紹介するぞ」

鉄人が言うと、扉が開きチヨコチヨコと妹が入ってくる

「えーと、みじゅ…あ、噛んじゃった水野彩華ですっ！」

さて問題です。次に皆が言う台詞は何でしょう？

『『『『『ロリキャラキターツツ！！！！！！』』』』』

大正解！

「ロリって…子供じゃないもん！」

彩華は子供扱いされるのが嫌いです

『水野って言ったぞ！』

『真琴の妹かつ！』 須川

『お持ち帰りしたい…』 横田

特別問題その6〜妹襲来！ 大波乱の予感が…（後書き）

「え？あれ？」

彩華は戸惑いながらも私の隣に座った

「あ、彩華ちゃんじゃないか！」

明久が驚く

「久しぶりだね明兄！」

彩華が返事をする

『『『『『吉井を殺せええつ！』』』』』

明久の処刑が始まった

転校初日からこれって…これからどうなるの？

」「祝！」

彩「私登場！」

真「おめでとー」

彩「明兄は何で襲われてたの？」

真「知らない方がいいよ」

」「次回、3巻突入！お楽しみに！」

第19問（強化合宿編スタート）〜隠し事をされると意地でもつきとめたくな

3泊5日ニューヨークツアーから帰還した次の日の朝。いつ行っただかって？先週末だよ。数が合わないって？時空間テレポーターだよ。時間だつて越えられる。どこの世界のかつて？ツイنزの世界だよ。（詳しくは『バカとテストと召喚獣〜ツイنز〜』の感想一覧へ）あ、これメタ発言じゃん！さて、話を戻そう

「うにゃ〜」

今、彩華が私の膝の上で（現在進行形で）コロコロしている。本人いわく、これが気に入ったらしい。

彩華が転校してから（こつちの世界の時間で）1週間が経った。私も驚く位に馴染むのが早い。周りの皆からは

『やっぱりロリは最高だ』 横田

『今までロリをバカにしてきた俺を許してくれ』 須川

『もちろんだ。異端審問会会長兼水野姉妹を慕う団団長よ』

『ありがとう副団長』

こんなんである。MSS団なんていつの間に作られたの？

「私、子供じゃないもん！」

立ち上がり、怒る彩華。

「ちっちゃくなんかないもん！（ヒュン）」

叫びながら縄を投げると

「かーとりっじ赤、電撃！」
ビリビリ

『『ぎいああっ！』』

絡みついて電流が流れ、2人が倒れた。ビリビリって…いい天？

「にゃは〜」

第19問（強化合宿編スタート）〜隠し事をされると意地でもつきとめたくな

満足そうな顔をしながら、とある友達からもらった投げ縄（改）を
しまっ彩華（詳しくはこの小説の感想一覧へ）

「彩華、私寝るから、盗撮阻止よろしく」

このおかげで安心して寝られてる

「いいけど、まこ姉寝不足？」

「うん。昨日徹夜で時空間トランサーを作ったからね（これも詳しくは感想一覧へ）」

「了解であります！」

言いながら敬礼する彩華。

窓辺に寄りかかって目を瞑ると

「最悪じゃあああっ！！」

と叫び声が聞こえたけど、私は眠りについた

「それじゃ、僕はムツツリー二に用があるから！」

私が起きて最初に見たのは、隅にいる康太達の方に走っていく明久
だった

「あ、まご姉おはようっ！」

「おはよう彩。何かあったの？」

「えーとね、明兄が脅迫されてるんだってさ」

脅迫？

「よく分からないんだけどね」

「大丈夫。これで確かめれるから」

そう言いながらMMネットワーク専用PCを取り出す

「座標を合わせてっと（ピッ）」

『……………雄二…結婚…近い…』

ノイズ混じりの康太の声が聞こえた

雄二？結婚？何の話だろう

『…没収して…捏造された…プロポーズ…』

…捏造プロポーズって、原因私じゃない？

第19問（強化合宿編スタート）〜隠し事をされると意地でもつきとめたくな

「ねえまこ姉、それ作ったのって…」 「静かに！」

座標を調整し直す

『……………明久は？』

今度はハッキリ聞こえた

『実は、僕のメイド服パンチラ写真が全国にWEB配信されそうなんだ』

……………マジ？

「ねえねえ、アキちゃん生み出したのまこ姉だよね？」 「そ、そうだね…」

2人はそれが原因で脅迫を？なんかもう……………罪悪感とかが……………

『それ、真琴には言ったのか？』

『いや。真琴には彩華ちゃんの世話もあるから、これは僕達だけで何とかしようよ』

『そうだな。ムツツリーニ、頼むぞ』

『……………任せろ』

これは…何というか…

「まこ姉、思われてるね」

「私達も犯人探し手伝おうか」

ダメって言われたことをやりたくなる。それと同じ感じだ

「強化合宿の間に見つけよう！」 「おおっ！」

この時は、強化合宿であんなことが起きるなんて思いもしなかった

」 「メタ発言多いよ！」

真「いつも言うけど、書いたのアンタじゃん」

彩「まこ姉を責めちゃダメだよ」

」 「…まあいいや。次回から大波乱の強化合宿始まります」

真「バスの中から何かあるの？」

第20問 part 1 ～心理テストとお弁当～（前書き）

日記は後からまとめて書きます

「（カタカタ）えーと、部屋がここだから…」

卯月高原へ向かう電車の中、私はPCをいじっていた

「まこ姉、何してるの?」

「館内のマップを見て盗聴機とか監視カメラの配置場所決めてる」

「今、あっさり凄いやったよ…」

「そう?バレないように協力するにはこれくらいしなきゃ」…
「そうなんだ」

彩華と話していると

「んゝ…順番に『緑・姫路さん、オレンジ・彩華ちゃん、青・真琴』
って感じかな」

と明久の声が聞こえてきて…

ビリッ！ という本を引き裂いたような音が聞こえてきた

「明久、何や」どうして真琴が青でウチが入ってないのか説明して

もらえる?」「…どうしたの?」「

「心理テストをやっていたら突然怒りだして…」

「じゃあ私にも同じ質問してよ」

「いいわ。『緑、オレンジ、青でイメージする異性を挙げて下さい』」

「えーと、緑が秀吉でオレンジが雄二、青は明きひ、ビリビリイッ! …美波?本が原型をとどめてないよ」

突然雄二が美波から本だったものを奪い

「どれどれ?緑は『友達』、オレンジは『元気の源』、青は『なるほどなあ』」

それを見てにやつく雄二

第20問 part 1 心理テストとお弁当

「ねえ、青つて「絶対に教えない」…何で？」

「あーっ！皆で次の問題行くよ！」

投げ槍だなあ

「『1から10の数字で、今あなたが思い浮かべた数字を順番に2つ挙げてください』だって」

雄「俺は5・6だな」

秀「ワシは2・7じゃな」

明「僕は1・4で」

彩「私7・5！」

瑞「私は3・9です」

真「私は4・9で」

皆が答えた後、美波がページをめくる

「『最初に思い浮かべた数字はいつもまわりに見せているあなたの顔を表します』だって。それぞれー」

雄「クールでシニカル」

秀「落ち着いた常識人」

明「死になさい」

彩「やんちゃで可愛い」

瑞「温厚で慎重」

真「滅びなさい」

…おい！

「何で私（僕）達だけ罵倒されてるのさ！？」

「それでー」 無視か…

「次に思い浮かべた数字はあなたがあまり見せない本当の顔だ
つて。それぞれー」

雄「公平で優しい人」

秀「色香の強い人」

明「惨たらしく死になさい」

彩「自己主張が激しい人」

瑞「意志の強い人」

真「跡形も無く滅びなさい」

「ねえ！私瑞希と同じ数選んだんだけど！？」

「はい次々」 また無視か…

そんなこんなで何問かやってみる

第20問 part1〜心理テストとお弁当（後書き）

「……………（トントン）」

「あ、ムツッリーニ。おはよう」

「……………空腹で起きた」

「あ、ホントだ。そろそろ食べよっか」

「あ、お昼ですねそれならー」

と言いながら鞆の中に手を入れる瑞希。嫌な予感しかしないよ…どうしよう？

「お弁当、皆でちよつとつず分けて食べない？」

私のバカっ！被害者増やしてどーするんだよっ！

「じゃあウチのお弁当も出すね」

美波も取り出す。その後渋々と私も取り出した

「おおっ！皆凄いや！>ありがとう！姫路さんのお弁当から遠ざけてくれたんだね<」

「本当だな>だが、それだと姫路の弁当ばかり残らないか？<」

「そうかなあ？>それも可愛そうね…<」

テキトーに話をしながらもテレパシーは必死だった

「じゃあアキ、私の食べてみて」

「それじゃ早速」

明久がシューマイを口に運ぶ

「あのね、勇気を出して言うけどね…。そのシューマイ、2つに1つは辛子を入れてみたの」

「君はバカかいつ!？」

…可愛そうに

「そうだっ!今なら!」

辛さにのたうち回りながら瑞希の弁当に手をのばす明久。なるほど。味覚が破壊されている今なら…

パタッ

口にした直後、明久は倒れた

第20問 part2 作戦開始と盗撮疑惑? (前書き)

「明兄達、大丈夫かなあ？」

「大丈夫だよ。明久だし…」

私達は今、合宿所の部屋の中にいる。この部屋にいるのは私と彩華の2人だけ。学園長に頼んでこうしてもらったのだ

「じゃあ彩、作戦開始だよ。この地図を見て盗聴機と監視カメラをつけてきて。ちゃんとサイコネシスでカモフラするんだよ」

「イエッサ」

彩華は敬礼してから部屋を駆け出していった
さて、私もやりますか！明久に付けておいた盗聴機を…

「……………明久。無事で何より」

あ、康太の声だね

「……………情報も無駄にならずに済んだ」

情報というと、犯人のことかな？

「……………明久と雄二の件の犯人は同一人物と断定できる」

ふむふむ

『それで犯人は？』

『……………すまない』

さすがにまだ分からないよね

『……………犯人は女生徒でお尻に火傷の痕があるということしか分かっていなかった』

…いったい何を調べたんだろう？

『……………それともう一つ』

『何だ？』

『……………俺達以外にも動いてる奴等がいる』

『『『何だつて（じゃと）！？』』』

私達じゃ…ないよね？

『……………校内に網をはった時、幾つかの監視カメラを見つけた。犯人の物とは考えにくい』

第20問 part 2 作戦開始と盗撮疑惑？

『つまり、他にもワシらを狙っている輩がおるのか？』

狙ってないよ、協力だよ

『注意しなきゃいけないってことだね』

「まこ姉っ！」

彩華が戻ってきた

「皆で明兄達の部屋行くから呼んでこいだってさ」

「何で？」

「お風呂の女子更衣室にカメラがあったらしいよ」

…更衣室にカメラ？

「私達のは？」

「絶対に見つからない場所に隠したから大丈夫！」

「カモフラは？」

「あ……忘れた」

全く……それにしてもアイツらがそんなことするとは思わないし……

「とりあえず行ってみようか」 「うん！」

私達は明久達の部屋へ向かった

「皆ストオオオッブ！」

部屋の前に集まった皆に叫ぶ

「な、何よ！」

「事情は彩に聞いたけど、やったのがアイツらだとは限らないんじゃないかな？」

「こんなことをするのはアイツらしかないじゃない！」

「だからそれが冤罪だったらどうするのよ！」

「水野さん、同じFクラスを守りたい気持ちは分かるけど、この子達も同じ考えみたいよ」

小山さんが指を指した先には、美波と瑞希がいた

第20問 part 2 作戦開始と盗撮疑惑? (後書き)

「真琴。悪いけど、他にそんなことをする人がいるの?」

「それに土屋君だっていますし…」

瞬間、私の何かが切れた

「康太がいるから何? Fクラスだから何? そんなのただの偏見じゃない! 美波に瑞希、アンタ達もアイツらの仲間でしょ? だったら少し位アイツらを信頼してやってもいいんじゃないの!?!」

皆静まる

「あとは好きにしていよいよ。私は部屋戻るから」

そう言って私は歩きだした

そして、アイツらの濡れ衣を晴らしてやろうと決意した

Side Ayaka

まこ姉が戻ったあと、皆も戻り初めて、残ったのは私と美波、瑞希だけになった

「ああ言われても仕方ないですよね…」

「アイツには敵わない…」

と2人が眩き、部屋へと戻っていった

「2人共…」

私も部屋へと戻ることにした

「何か気まずくなつたね…」

彩「まこ姉達、仲直りすると良いね」

「超機嫌悪そうだったもんね」

彩「私も何か気まずいし…」

「でも、次回大事件がつ！」

彩「ええっ!？」

第20問 part3 私に謝れえっ！ (前書き)

久々の紹介コーナー

1 バカとテストと召喚獣 Ryo Sugawa Story
ウツソ・エヴィンさん作。主人公はなんとあの須川君。視点を変えて見ると結構面白い

2 バカと雲雀と召喚獣
GAUさん作。通称『バカひば』 勝手に命名。支倉ひばりと明久達がくり広げる物語

部屋に戻ってきた私は、いろいろ考えていた

「ちょっと…言い過ぎたかな？仲直りしたいなあ」

とそんなことを言いながら、お尻に火傷の痕がある女の子を見つけた方法を考えていた

「まこ姉！お風呂行こう！」

…あ、お風呂。

「彩、ありがとう！」 「ふえ？どうしたの？」

そつだお風呂に行けば調べられるじゃん

「よし、じゃあ行こうか」

鞆から袋を取り出して歩き出す

「待つてよ〜」

少し遅れて彩華もついてきた

所変わって大浴場

「お尻に火傷、お尻に火傷」

彩華はキョロキョロと周りを見ている

「彩、それただの変人だから…」

「真琴お姉様〜！」

突然美春が駆け寄ってきた

「美春？何で抱きつくの？」

「そこにお姉様がいるからです！」

『そこに山があるから』みたいなノリで言われても…

第20問 part3 私に謝れえっ！

「あれ？美春ちゃんだ」

「？ お姉様の妹ですか？どこかで会いましたっけ？」

ああ、ニューヨークの時ね（詳しくはツインズへ）

「あぁっ！あんな所に美波ちゃんがあっ！」

彩華が言った瞬間、美春は駆けていった。ナイス彩華！

「あ…」 「どうしたの？」

「美春ちゃんのお尻に…火傷の痕が…」 「ええっ！」

犯人は美春？事件解決早っ！

「とりあえずもう少し調べてからだね」 「うん」

決めつけるの早すぎたね。美波達に自分で言っというて…

「ちょっと瑞希達のとこ行ってくる」

さっき視界の端に捉えた瑞希達の所へと歩いていった

「2人共！」

「何よ真琴？」

「さっきはゴメン！」　そう言って頭を下げた

「ま、まこちゃん！頭を上げてください」

「さっきは言い過ぎた。本当にゴメンナサイ！」

「いいの。うち達も悪かったし…」　「そうですね。もともとは私達が悪いんですから」

「2人共ありがとう…」

「仲直りしましょう。真琴」　「うん」

私達は手を握り合った

「仲直りして良かったね」

着替えながら彩華が言う

「心配してくれてたんだ…」

第20問 part3 〓 私に謝れえっ！〓 (後書き)

「当たり前だよ」

彩華が良い子で良かったよ…そう思いながら扉に手を掛けて開けると

「何してるんですか？」

鉄人がいた

「ん？水野か。あのバカ共が覗こうとしていてな…」

…覗き？盗撮疑惑が晴れたら今度は覗き？何それ？

「そこをどけ！てっじ…あれ？真琴？」

「彩…」 「…う、うん」

私が呼びかけると彩華は投げ縄(改)を投げて明久を縛る

「…鉄人先生。後は私に任せてください」 「お、おお。分かった」

バカ共を捕まえなきゃね

〓 10分後 真琴達の部屋にて〓

「…何か言うことは？」

「こ、これは雄二の提案なんだ！」 「その通りじゃ」 「……………」

(コクコク) 「てめえら、俺を売る気か!？」

「私が必死で皆を説得したの聞いてたよね？」

「う、うん」

スウ と息を吸って

「私に謝れえっ!」 と一喝

「瑞希達に信頼しろって言った私に謝りなさい!」

すると 「」「」「すいませんでしたあっ!」「」「皆土下座した

」」「1日目終了!」

真「このバカ!」

明「ち、違っただよ!これには深い事情が 真「問答無用!」 ぐ
わああっ!」

彩「自業自得とはいえ…夕季ちゃんに怒られるよ」

第21問 part1 愛子登場 波乱がおきる はお約束 (前書き)

「世界よ！私は帰ってきた！」

明「おお」

「学校のPCから皆さんの感想を見ていて、いてもたってもいられなくなり、父に必死に説得をして蘇ったのだ！」

「雄二。一緒に勉強できて嬉しい」

「待て翔子、当然のように俺の膝に「おい真琴、勝手に俺の声で気持ちを代読するな」…どう？新開発『複声薬』だよ」

「そういう問題じゃねえだろ」

「…でも似てた」

「だから違うだろっ！」

「真琴凄いなあ」

「聞けええええ！」

そんなこんなでただ今合同学習の真つ最中。昨日はもうしないと誓わせたし、きつともう覗きなんてしないだろう

「何やってるのかな？」

誰かが私達の近くの席に座った。この声は―

「工藤さん、だっけ？」

「そうだよ。キミは吉井君だったよね？久しぶり」

やっぱり愛子だ

「あれ？その子は？」

愛子が彩華を指さしながら言う

「私は水野彩華だよっ！まこ姉の妹。1週間前に転校してきたんだよ」

「へ〜真琴の妹なんだ〜じゃあボクも自己紹介するね。Aクラスの工藤愛子です。趣味は水泳と音楽鑑賞で、スリーサイズは上から78・54・79、特技はパンチラで好きな食べ物はシュークリームだよ」

第21問 part 1 愛子登場 波乱がおきる はお約束

余計な紹介があったような…

「せっかくだし、特技を披露してあげよっか？」

「愛子、あまり遊ばないように」

「……………明久、工藤愛子はスパッツを穿いている。期待しても無駄だ」

「そんなあつ！僕を騙したね工藤さん！」

「あはは。バレちゃったみたいだね」

「フツ。明久はやっぱりバカだな」

「この野郎！雄二だって反応したじゃないか！」

ちなみに雄二は翔子に目を潰されていた

「最近凝ってるのはコレだよ」

そう言って小型録音機を取り出して

ピッ 《工藤さん》 《野郎！》

と再生した。おいおい…

「わあああつ！僕はこんなこと言っていないよ！？」

「ね？面白いでしょ？」

ん？後ろから殺気が…

「…ええ。最つつ高に面白いわ」「…本当に、面白い台詞ですね

なるほど。この2人が

「2人共…」

「あつ！」「

一呼吸おいて

「今回は許す！」

と言うと2人は部屋を出ていった

ん？明久達が何か話してる。脅迫犯を愛子だとも思ったのかな？

「工藤さん」

「ん？何、吉井君？」

第21問 part1～愛子登場!! 波乱がおきる はお約束～(後書き)

何を言おうとしてるんだろう？

「キミがー僕にお尻を見せてくれると嬉しいっ！」

…どうした明久？

「今回は短めです」

真「お帰り〜」

「ただいま〜」

彩「お知らせって何？」

「えー。今回から、感想は次の日にコメントを返すようにします。例えば、この回への感想へのコメントは明日するってことだね」

真「それだけ？」

「もう一つ。僕がいない間にたくさん感想・メッセージを頂きました。皆ありがとうございます！これからもバカ天をよろしく！」

真・彩「よろしく願います！」

第21問 part2(まだまだ続く明久の受難)(前書き)

…コイツは何を言ってるんだろう？

「…ぷつ。あははつ。吉井君はお尻が好きなの？それともボクの胸が小さいから気を使ってお尻にしてくれたのかな？」

明久のセクハラ発言を笑って流す愛子。でも…

「録音機を前にそれを言う？」 「へ？」

「ごめんね。折角だから録音させてもらったよ」

ピッ 《僕にお尻を見せてくれると嬉しい》

「ひあああつ！？これは言ったことありのままだからダメージが大きいよ！？おねがい工藤さん！今は消して下さい！」

「吉井君って、からかい甲斐があって面白いなあ。つついじめなくなっちゃうよ」

ピッ 《ありのまま》 《の》 《工藤さん》 《を見せて》 《下さい！》

「うわあああんっ！何か僕が変態になっていく気がするよ！」

直後、明久の後ろから

「…今の、何かしらね？瑞希」 「…何でしょうね？美波ちゃん」

明久専用お仕置き人と必殺仕事人登場。無表情のまま石畳を設置し始める

「待ってよ二人共！僕は《お尻が好きって》だけなんだー待って！
今のは途中に音を重ねられたんだ！美波ストップ！腕がっ」

ちなみに明久の腕は間接を極められながら背中に回されている

「……………工藤愛子。おふざけが過ぎる」

第21問 part 2 まだまだ続く明久の受難

康太が立ち上がった

「ムツツリーニ！助けてくれるの!？」

「……………うまくやってみせる」

いや、この展開は…

「姫路さん。美波。よく聞いて。さっきのは誤解で、僕は《お尻が好き》って言いたかったんだ。《美波》《の》《何か(なんか)》よりもさってムツツリーニイーツ！後半はキサマの仕業だな!？」

やっぱりか…しかもこれ、明久死亡フラグじゃない？

「アキ…。歯を食いしばりなさい!」

「ストオオツプ！誤解なんだああ〜」

面白いなこれ

「>明久、フォローしてあげるから何か言ってく」

「>ホント？ありがとう真琴く美波も姫路さんもよく聞いてね。僕は《二人》《が》《ありのまま》《を》《見せてくれると嬉しい》《っておい！真琴》《見せて》よ！ちよつと！《美波も姫路さんも》《お尻》《見せて》うわあああん」

ミッシェンコンプリート

「凄い」「……………プロの業」

そんな誉めるなよ

「アキ…。こんなところで……………」 「大胆過ぎますう……………」

「うわぁぁん。違うんだよぉぉ」

「まこ姉凄いなあ」

と話していると突然扉が開き

「流石ですお姉様！」

美春登場！

第21問 part2 〳〵まだまだ続く明久の受難〳〵（後書き）

「何故ここに？」

「美春はお姉様に会いたくて、こっそり抜け出してきたんですよ！」
そう言っつて飛びついてきた美春に

「美波バリアー」 「なんの彩華ちゃんバリアー」 「うわっ須川君バリアー」

三人がお互いに防ぎ合い

「汚らわしいですっ！腐った豚にも劣る抱き心地ですっ！」
最後に盾にされた須川君は必死で涙を堪えていた

「君達、少し静かにしてくれないかな？」

そんな中学年次席の久保君の声が響くが

「美波、さっきはよくも彩華を盾にしたわね」

「真琴こそウチを盾にしないでよっ！」

私達は言い合っていた

鉄人が怒鳴り込んできたのはそれからしばらく後のことだった

明「うわぁぁん！真琴がいじめるよ〜」

」「よしよし。真琴には夕季ちゃんがお仕置きしてくれるから安心しな」

真「(ダッ)(」

彩「あ…まご姉…」

第21問 part3「バカ+バカ」やっぱりバカ（前書き）

部屋に戻ってきて、私は再びPCを開いた

「アイツら何してるかな〜まさかまた覗きなんか…あれ？」

映った映像には、明久達の他にもFクラスの皆がいた。どうしたんだろう？

『皆、女子風呂の覗きに興味はないか？』

『『『詳しく聞かせろ！』』』

…はい？仲間を増やしてまた行く気？全然反省してないじゃん！と
りあえず…

P r r r r ガチャツ 『水野（姉）か。どうした？』

「Fクラスのバカ共がまた覗こうとしています。先生方に配置につ
くように言ってください。すぐ私も行きます」 ピッ

よし。連絡完了

『全員気合を入れろ！絶対に理想^{アガルタ}卿へたどりつくんだ！』

『『『おっしやあ〜っ！』』』

「彩、行くよ」「う、うん！」

私達は渡り廊下へと向かった

「全員止まれ！」

「くそっ！もう真琴に逢っちゃまうとは……」

大勢の女子を引き連れて立ちふさがる

「さて、昨日誓ったはずなのにどういふことかな？」

「アキ、正直に答えなさい」

「くっ！皆、一気に行くぞ！」

「行かせないよ！試験サモン召喚！」

彩華が召喚獣を喚び出す

『Fクラス 水野彩華

化学 6点 』

「」「……」「」

第21問 part3「バカ+バカ」やっぱりバカ

「ち、違っただよっ！私、化学は苦手なだけなんだよっ！」

いやいや、苦手ってレベルじゃないだろ…

「何かね、鉛筆を持つとお絵描きしなくなっちゃってね…それで…」

「『『（ブシヤアアアッ）』』」

男子のほとんどが鼻血を吹き出して倒れた

「…えっと…ほら、皆も召喚しなよ！」

「さ、試験^{サモン}召喚」

『Fクラス 水野真琴

化学 2164点』

「うわあああん！まこ姉のバカ」

「え…彩？お〜い」

私が彩華を宥めてる間に鉄人達が来て皆を連れていった
…まあいいか。結果オーライ！

第21問 part3「バカ+バカ」やっぱりバカ（後書き）

「今回短っ！」

明「彩華ちゃん…6点って…」

雄「まさか明久以上の奴がいたとは…」

「えー。次は1日目・2日目の日記を書きます。ではでは」

水野姉妹の強化合宿の日記 part 1

1日目の日記を書きなさい

水野真琴の日記

『電車の中では突然明久が倒れて驚いた。おそるべし瑞希…これは速急に教えてあげた方が良さそうだね』

教師のコメント

『いたい電車の中で何があったのでしょうか？姫路さんが何かしたのですか？』

水野彩華の日記

『今からちようちよ捕ってくる』

教師のコメント

twitterですか？真面目に書いてくださいね

2日目の日記を書きなさい

水野真琴の日記

『Aクラスと一緒に勉強した。明久をいじるのは楽しいと感じた。とても有意義な時間だった』

教師のコメント

学んだことはそれだけですか？

水野彩華のtwitter

『ヘラクレスオオカブトget!』

教師のコメント

本当にtwitterにしないでください。というか、ヘラク

レスは日本にいるのですか!?!?

水野姉妹の強化合宿の日誌 part 1 (後書き)

「超駄文スミマセン！」

第22問〜彩華の点数up大作戦〜（前書き）

「んにゅ〜」

「ん…？うわっ！？」

目を開けるとすぐ目の前に彩華がいた
夜の間に転がってきたのかな？

「まこ姉〜」

抱きしめられた…これ、見方によってはちょっとアレな人に見えな
い？

「真琴〜朝だよ〜」 美波、タイミング悪いよ！

ガチャツ 「起きてくださ…まこちゃん？」

「えーと二人共、助けてもらえる？」

そんなこんなで三日目が始まった

「まこ姉〜眠いよ〜」

「だめだよ。少しでも点数上げなきゃ。せっかく皆も手伝ってくれ
てるんだから」

朝食を終え、合同学習の時間。私、瑞希、愛子、翔子の4人で彩華の勉強を手伝っている

「彩ちゃん。とりあえず、前回のテスト用紙見せてよ」

「う…うん」

愛子に促され、用紙を取り出す。結果は—

現国…3点 古典…2点 数学…9点 化学…6点 英語…5
点 e t c . . .
散々だった

「…予想以上」「まさかここまで…」「あはは〜」

皆苦笑いだね

「…まず反省会だね…」

「え〜過去を振り返るのは良くないよ〜」

「じゃあまずは反省点を自分で言ってみて」

「まさかの無視？うーん…えーと…無いよ」

「」「」「」「おい！」「」「」

自分に甘すぎる！

第22問〜彩華の点数up大作戦〜

「でも、私頑張ったよ!」

「嘘だ! ずっとお絵描きしてたじゃん」

「何で知ってるの!？」

いや、回答用紙落書きだらけだったし…

「いい? かの偉人、聖徳大使は言いました。『人間、反省無くして月9出演はありえない』と」

「絶対言っていないと思うよ」時代構想なんてどうでもいいの! 用は反省しろってこと!」最初からそう言おうよ…」

「じゃあ次、瑞希も反省点を挙げてみて」 「私ですか?」

同じFクラスだもんね

「特にはないですけど…」ほぐら無いでしょ?」でも強いて言えば…」あるの?」「」

「彩華ちゃんはもう少し考えてから行動した方が良いと思いますよ」

「…かの偉人エジソンは言っていた『ボスを倒しに行くなら十分レベルを上げてからにしろ』と」

「いや、だから言っていないと」要は何かをするならちゃんと準備し

なさいってことなの！」だったらそれならそうと「突っ込みに逃げないの！」「」

それにしても、流石瑞希に翔子。良いこと言うね

「あははは〜じゃあ次は「ウチよ！」「」

「あれ？美波？」

「ウチもFクラスだから言う権利はあるわよね？」

「確かに…じゃあ良いよ」

「ありがとうっ！」

指を鳴らしながら美波が言う

第22問〜彩華の点数up大作戦〜（後書き）

「今思ったんだけどこれイジメじゃない？ねえ？今イジメが行われてない？黙りなさい！」ひゃっ！「そういう甘えた精神がいけないの！」」

美波が続ける

「まずはそのお子様容姿ね」

「それ反省点？ただのひがみじゃない？」

「ち、違っわよ！かの偉人楊貴妃だっけって言ったよ『女たるもの、プロテインとジム通いは欠かしてはいけない』と」

「絶対言っていない上に楊貴妃のキャラまで変わって、突っ込みするしか能が無いの！？」ひえ〜「救いようがないわね」だからそれで終わらせないでよ！」

あ、そろそろ時間だね

「彩分かった？この反省点を活かして、次のテストはがんばるように！以上！」

「これで終わり！？」

「気づきましたか？今回は『生徒会の一存』とのコラボですよ」

彩「皆に勉強という名のイジメを受けたよ」

真「じゃあ紅葉さん、私ときたから次は夕季ちゃんのところ行って
で」

彩「え〜!？」

」「そして、彩華に勉強を教えたいって人は、感想に書いてくださ
い!」

彩「やめて〜」

第23問 part1 ～バカ×普通Ⅱバカなのだ～（前書き）

「前回の後書きに書いた彩華に勉強を教えたい人募集。思いの他集まり、彩華の勉強会シリーズとなりました。バカ天感想一覽やまあさんの『サドで邪悪な召喚獣』に書かれています。協力感謝です」

「（ヒュオン）やっと帰ってこれたよ」

「お疲れ様」

彩華は反省会の後、いろいろな世界の友達に勉強を教わっていたのである

「じゃあ早速補給テスト受けてくる！」

そう言いながら部屋を駆け出した。勉強会してるうちに少し積極的になったみたいだね

「さて、大食堂はっと（ピッ）」

予想通り、男子対女子の大混戦になっていた。ちなみに、待ち伏せを指示したのは私である。あ、須川君が抜け出した。行き先は…

「（ピッ）やっぱりアイツらの部屋か。さて、レポートっ！」

「ーとにかく出るぞ！」

「はい皆ストップ」 「真琴!？」

私は廊下にいた明久達の所へレポートしたのである

「あ、須川君は行ってて良いよ」 「あ、ああ」

須川君が行くのを見てから

「さて君達、何でこんなことをしてるのかな？正直に答えようね」

と聞く。まあ、知ってるんだけどね

「くっ！分かった。話そう。実は・説明中・というわけだ」

第23問 part1 〱バカ×普通〱バカなのだ〱

「なるほど。お尻に火傷の痕がある女の子なら知ってるよ」

「ええっ！？誰？」

「美春」

「美春って、清水美春か？」

「そうだよ。初日にお風呂入ったときに偶然見たんだよ」

「……………予想外」

「じゃあ事件解決したし、もう覗きはしない？」

「ああ。誓おう」

「よしok。じゃあD・E・Fクラスの皆にも言っといてね。それじゃあっ！（ヒュン）」

私は部屋に戻った。もう大丈夫だよな

〱Side Akihisa〱

真琴が戻った後

「ねえ。ああは言ったけど、皆を説得するの大変じゃない？」

「大丈夫だ。やめる気は無いからな」

「え？何で？」

「アイツらがこのまま素直に終わると思うか？」

「思わない」「確かにのっ」

「だからだ。明日も続けるぞ。」

「じゃが、それは真琴との約束を「問題ない。犯人探しではなく、単なる欲望のためにやったと言えば済む話だ」「」

「……………」ここまできたら最後まで」

「そついつことだな」

「よし。明日は警戒が甘くなってるはずだからやりやすいんだね」

「ああ。念のため、AとCのやつらも参加させるか」

「この会話を真琴は知りません」

第23問 part1「バカ×普通」バカなのだ（後書き）

「おいおい。まだやるのかよ」

明「ムツツリー二だっけって言ったじゃん。ここまできたら最後まで
つて」

「…まあいいや。」

次回予告。みなさん、アンケートを覚えていますか？彩華誕生
のキツカケとなったあのアンケートです。その1の質問。明久をど
うするか。その答えが次回で分かります。乞うご期待！」

第23問 part2 明久と波乱の夜・序章（前書き）

Side Akihisa

「それで、どうやって集めるつもり？」

「簡単だ。これを着せて写真を撮り、劣情を煽る」

浴衣を掲げながら話す雄二。何かいつもこんな感じだよね

「はい、秀吉」

「…またワシが着るのかのう…？」

僕が浴衣を渡すと、なんだか不満そうな顔をしていた

「安心しろ。姫路や島田、水野姉妹にも着てもらおう」

「いや、ワシ一人で着るのが不満だとかそういうワケではないのじやが」

つまり不満はないわけだ。良かった良かった

「それじゃ、明久。他の奴等に連絡を取ってくれ。ムツリーニはカメラの準備を」

雄二の指示に従って携帯を取り出し、メールの文章を作る

【ちょっと話があるんだけど、僕らの部屋に来てもらってもいいか

な？】

P i P i P i P i P i 返信が来た

f r o m 姫路さん

【わかりました。お菓子とか持って、後で遊びに行きますね】

f r o m 彩華ちゃん

【分かったすぐ行く！まこ姉は鉄人を脅して許可を得てお風呂に行ってるよ〜】

∴ 真琴、君はどれだけマイペースなんだ

P i P i P i P i P i また返信が来た

f r o m 美波

【別にいいけど、こんな時間にどうしたの？】

第23問 part 2 明久と波乱の夜・序章

あ、少し警戒しているみたいだ。それはそうだよな。美波達から見たら僕らは覗き魔だし…どう返事しようか

P i P i P i P i P i あれ？またメールだ

f r o m 須川君

【気になったんだけど、お前は何で覗きにそこまで必死なんだ？そもそも本当に女が好きなのか？坂本や木下の尻が好きだって言っていた気がするんだけど】

何だコイツ！バカなの？僕が女の子より雄二の方に興味があるわけ無いじゃん！
すぐに文章を打ち込む

【勿論好きだからに決まってるじゃないか！雄二なんかよりもずっと！】

よし。送信。やれやれ、僕の周りはバカばっか

【メール送信中… 美波】

ーあれ？

おかしいな？もう一回よく見てみよう

【メール送信完了… 美波】

「ゴゴっ」

送信先を見た瞬間、口からありえない音が出た。
待て待て。僕はなんて送ったっけ？

【勿論好きだからに決まっているじゃないか！雄二なんかよりもず
っと！】

凄く男らしい告白文じゃないか

「バカあつ！僕のバカあつ！ある意味自分の才能にビックリだよ畜
生！」

とりあえず訂正のメールを書かないと！

【突然変なメールを送ってごめんね。でもこれだけは伝えたいんだ。
君が好きだと】

第23問 part 2 明久と波乱の夜・序章 (後書き)

送信ボタンを押してしばらくして思った
僕、バカなんじゃないの？何で告白し直すの？
後悔しながらさっき送ったメールを見る

真琴への送信メール

【突然変なメールをー】

ん？あれ？今誰に送ったって書いてた？

水野真琴への送信メール

「ゲぼっ！」

またありえない音が出た

「何これ！？何やってるの僕！？」

もう一回訂正のメールをー

「どうした明き久？さっき何か悲鳴が聞こえたが」

「色々大変なことになっちゃったんだ！今は僕の邪魔をしないで
ー」

「大変なこと？それはーつとと」

ツルン (雄二がバナナの皮で滑る音)

ドタツ（雄二が僕を巻き込んで倒れる音）

バキッ（雄二が僕の携帯電話を踏み潰す音）

「明久。大変なこととは何だ？」

「たった今キサマが作った状況だ！」

くそう！どうすれば良いんだああああ

Side Out

「久々のずっと明久のターンでした。

明久、おめでとう！」

明「めでたくない！絶対二人に嫌われたよ」

「に、鈍すぎる…」

まあいいや。次回もお楽しみに！」

第23問 part3 明久と波乱の夜（前書き）

「ふう〜さっぱりしたあ〜」

私は部屋に戻ってきた。

あれ？彩華がいない。どうしたんだろう？

「あ、メール来てるじゃん」

t o 明久

【ちよつと話があるんだけど、僕らの部屋にきてもらっていいかな？】

これ、届いたの20分前じゃん。スルーして…あれ？もう1件来てる

t o 明久

【突然変なメールを送ってごめんね。でもこれだけは伝えたいんだ。君が好きだと】

…えーと、どういうことだろう？よし。落ち着いて考えよう

まず『突然変なメールを送ってごめんね。』

さっきの1件目のメールのことだろう

次に『でもこれだけは伝えたいんだ。』

うーん。これは…分かった！1件目のメールで私を呼び出したけど、やっぱりメールで伝えるってことだね

そして『君が好きだと』

これは言うまでもなく告白だね

つまり明久は、私を部屋に呼び出して告白しようとしたけれど、やっぱりメールで告白することにしたというわけだ。

ん？でも何かおかしい気が…えっ！明久が私に告白！？
…一度、直接話した方が良くもね

「たっだいま」

「（ビクッ）お、お帰り彩」

突然彩華が戻ってきた

「？　どうかしたの？」

「いや。な、何でもないよ！」

第23問 part3 明久と波乱の夜

「(ジー)「何やって」明兄から告白されたんだね」

…しまった…サイコメトリーか

「わくカップル成立おめで「してないよ!」?? 何で?」

「夜中に忍び込んでこれが本心かを聞くの!間違いだったら殴り飛ばす!」

あれ?私何言ってるの?

「本心だったら?」

「それなら付き合っただけでも…って彩!もう寝なさい!」

「ごまかさないですよ」

「いいから寝なさい!電気消すよ」

「はい(笑)」

…さて今10時。12時頃に行きますか

【11時頃、美波達が潜入しました】

「よし。行くぞ！テレポート！」

ただ今12時、私は明久達の部屋へと向かった

「（ヒュン）よし。皆寝てるね。明久の周りを歪めて…よし。」

【空間を歪める＝サイコキネシスを使って周りから見えなくする応用技】

「明久、起きて（ユサユサ）」

「もう鬼の補習は嫌だよムニヤムニヤ」

補習？さっきまでしてたのかな？

「おゝい。起きて〜（ペチペチ）」

「ん？誰？真琴？」

あ、目が覚めた

「次は真琴か…僕に明日はないんだね」

第23問 part3 明久と波乱の夜（後書き）

…何があっただらう？

「あのね。私はこのメールについて聞きに来たの」

そう言いながら液晶を見せる

「これは明久の本心？それとも何かのミス？」

「それは…僕の本心だ」

やっぱりか。じゃあ早速！

「でも！」

ーん？何だらう？

「僕の本心でもある」

上げていた拳が降りた

「…どういこと？」

「最初は完全に僕の本心で送ったんだ。でも、さっき彩華ちゃんと話して感じたんだ。僕は真琴の事が好きなんだって」

「…え？何？じゃあ…」

「好きだ真琴、僕と付き合ってくれ」

その時、私は心の中で感じた。私も明久に恋愛感情を抱いていたのだと
そして…

「うん」

…私はこう答えた

」「…やっでもうた…」

明久と真琴をくつつけてもうた…」

Side Akihisa

「どうしよう…」

真琴に告白しちゃった…そしてまさかのOKもらっちゃったよ…
皆にバレたら僕らの命はないよ…隠し通そう…

「…い！明久！おい！」

「うわっ！何？雄二？」

ずっと呼んでたのか…気付かなかった

「どうした明久。様子が変だぞ」

「何でもないよ！続けて！」

「…まあいいか。さて、じゃあこの写真を…」

その後の雄二の説明も耳に入ってこなかった

第24問 part 1 吉井明久の戸惑

カチツ カチツ もうすぐ8時だ。時計の音が大きく感じる

僕は本当にこの作戦に参加しても良いのだろうか？なんとなく、真琴を裏切っている気がする

「よし！さっき話した作戦通りに行けよ！」

そうだ！これは当然のことだと思えばいいんだ！彼女の裸を見るのは当然じゃないか！（注・当然ではありません）

ピピツ どこかで電子音が響いた。時間だ！

「よし。てめえら、気合は入っているか！」

「「「おうつ！」「」「」

「女子も教師も、AクラスもFクラスも関係ねえ！男の底力、とくと見せてやるうじゃねえか！」

「「「おうつ！」「」「」

「これがラストチャンスだ！俺達四人から始まったこの騒ぎ、勝利で幕を閉じる以外の結果はありえねえ！」

「「「当然だつ！」「」「」

「強化合宿第四夜・最終決戦、出陣^でるぞつ！」

「「「よっしやあーっ!!」「」」

ついに始まった。待ってるよ真琴。君の裸は僕が見る!

〈Side Out〉

「まこ姉、今日は参加しないの?」

「皆なら大丈夫だよ。高橋先生や鉄人もいるし」

本当はこんな状態で戦えないからだけどね

「だから彩、私を守って!」

「了解!」

彩華は更衣室を出ていった

第24問 part 2 吉井明久の猛進 (前書き)

Side Akihisa

「いたわっ！主犯格四人組よ！」

「長谷川先生！向こうの四人をやります！」

部屋を出てすぐのところにも女子部隊がいた。マークが厳しい。でもー

「「^{サモン}試獣召喚！」」

「Eクラス 古河あゆみ & amp; 源涼香 VS Fクラス
坂本雄二 & amp; 吉井明久

数学 83点 & amp; 77点 VS

224点 & amp; 135点」

「勉強してから出直しやがれっ！」

今の僕らの敵じゃない！

「くっ！」

長谷川先生が少し遅れて来たけど、須川君達に阻止される。皆、ありがとう！

「翔子たん！翔子たん！はあはあはああっ！！！」

『島田のぺったんこおーっ!』

『彩華たん好きだぁーっ!』 横田

『姫路さん結婚しましょおーっ!』

『真琴さんの裸っ!』 須川

前言撤回。全員やられてしまえ。特に須川君

「明久、なかなかの点数じゃねえか」

「この日の為に勉強したからね!」

言いながら二階に駆け降りる。その先には

『俺達の覗きの邪魔はさせない! 試獣召喚!』
サモン

『先生、覚悟してもらいます!』

『き、君達まで参加していようとは...!』

Cクラスの皆がいた

第24問 part 2 吉井明久の猛進

「Cクラス・Dクラスの野郎共、協力に感謝するっ！二階は俺達の背中はお前らに任せるぞ！」

雄二が叫ぶ

『協力なんざ、ったりめえだ！』

『女子風呂覗かなくて何の為の男でえっ！』

『てめえらこそしくじるんじゃねえぞ！』

これなら二階は大丈夫だろう。残るは―

「A・Bクラスは協力してくれているかのう？」

そう。それだけなんだけど…

『護してくれっ…』

『メだ！…倒的すぎる…！』

「大丈夫だよ！ちゃんと皆「いや、違う！何かおかしい！」

踊り場で止まり、階下を見渡す。そこには―

「…雄二。悪戯はそこまで」「明久君。そこは通しませんよ」

姫路さんと霧島さん。そして、周りにはたくさん
の戦死者が転がっていた

「Aクラスがおらんようじゃな…」

秀吉の言うとおりだ。周りはBクラスしかない

「オマケに随分と用心深い布陣だな、クソっ！」

絶体絶命だ。どうすれば…

『もうこれ以上は無理だ…。姫路に霧島に高橋先生なんて、勝てるわけがない』

『だいたい、姫路や霧島が入っていないのなら覗く価値がないじゃないか』

そんなBクラス二人の悲鳴を聞いて

「諦めちゃダメだっ！」

ふいに口が開いた

第24問 part2 吉井明久の猛進 (後書き)

「ここにいないってことは、木下優子さんや美波がお風呂に入っているはずだ！」

そうだ。僕の目的は真琴の裸を見ることなんだ。こんなので諦めるわけにはいかない！

「世間のルールなんて関係ないんだ！僕は僕の信念を貫き通す！」

僕がそう言った直後

『よく言った、吉井明久君っ！』

どこかで聞いたことのある声が廊下に響き渡った

Side Out

同時刻・大浴場

「るるるる」

「随分ご機嫌ね真琴」

「え？そっ？」

「うん。今外では男子達が覗こうとしてるんだよ？」

「…明久達も？」

「うん。そうだけど…って真琴？どうしたの？」

「い、いや。何でもないよ美波。」

「？ それなら良いけど…」

そうかそうか。明久達がねえ。ふん

」「ハア」

明「どうしたの？ため息なんかついて」

」「明久はバカだなあ」

明「え？突然何？」

」「はあ」

明「ええっ！何これ？」

第24問 part3 吉井明久の到達（前書き）

Side Akihisa

「だ、誰ですかっ！」

ふいに聞こえた声の主を捜す姫路さん

「待たせたね、吉井君。君の正直な気持ちは確かにこの僕が聞き届けた」

「久保君っ！来てくれたんだねっ！」

「君の言葉を聞いて決心がついたよ。今この時より、Aクラス男子総勢二四名が吉井明久の覗きに手を貸そう！皆、召喚するんだ！」

『『『おおおーっ！』『』『』

やった！これで文月学園第二学年男子全員が参戦したんだ！これなら行ける！

「明久、ムツツリーニ！階段へ向かって走れっ！」

雄二の言葉を聞いて走り出す

「高橋女史！ここは通させてもらっぜ！アウエイクン起動！」

干渉により、召喚獣がいなくなった。その間に高橋女史の脇を駆け抜ける

「明久！鉄人を倒して、俺達を理想郷アガルタに導いてくれっ！」

「任せとけっ！」

高橋女史がフィールドを消したため、再び召喚獣が現れ始める。ここから先は僕とムッツリーニだけで進むことになりそうだが階段を駆け降りて最後の一本道へと足を踏み入れた

「ムッツリーニ君。待ってたよ」

「く、工藤さん……」

ここは大島先生しかいないと思っていたのにまさか工藤さんまでいるなんて……

第24問 part 3 吉井明久の到達

「…………… 作戦に変更はない。ここは引き受ける」

「え？」

耳を疑い、ムツツリーニを見る。この目は本気だ。本気でこの二人に勝つつもりだ。それなら僕は―

「ムツツリーニ、ここは任せたよ」

そう言いながら工藤さんの横を通り過ぎる

―僕は、鉄人を倒す！

後ろでムツツリーニが戦闘を開始したみたいだ。
ここまで辿り着けたことを皆に感謝したい

「ここは通さないよ明兄。」

聞こえてきた声に見ると、彩華ちゃんが立っていた

「私はまこ姉に任されたんだ。ここは絶対に通さないよ!」

「僕だって皆の思いを託されたんだ。ここで諦めるわけにはいかな
い!」

「承認しよう」

いつのまにか鉄人がいて、フィールドを展開していた。なるほど。まずは彩華ちゃんを倒してみろってことか

「「サモン試獣召喚！」」

『吉井明久』

VS

水野彩華

147点

数学

135点』

二人の召喚獣が喚び出される

「彩華ちゃん。点数伸びたじゃないか」

「一杯勉強したんだもん！負けないよ！」

彩華ちゃんの召喚獣が手に持った短剣を振りかざしながら突っ込んでくる

横によけて切りつけようとしたところで、姿が消えた

第24問 part3 吉井明久の到達 (後書き)

「こっちだよ」

突然後ろから切りつけられた

『吉井明久 83点』

「ビックリした？私の召喚獣はね、超能力が得意なんだよ。さっきのはレポートだよ」

そうだったのか。レポートを召喚獣が使えるなんて…

「でも、負けるわけにはいかないんだあつ！」

今度はこっちから突っ込む。また姿が消えたところで、体を捻らせて後ろを切りつける

「うわっ」

『水野彩華 62点』

どうやら当たったみたいだ

「まだまだあ！」

再び切りかかると、今度は間に合わなかったらしく、レポートはしなかった

『水野彩華 0点』

彩華ちゃんの召喚獣が消える

「うにゆうく負けだよ」

彩華ちゃんが僕が来た方に戻っていった。

「ふむ。やはり俺に辿り着くか、吉井」

「勝負だ鉄人！この僕の本当の力を見せてやる！」

これが最終決戦だ！

く Side Out く

く 同時刻・大浴場 く

「（ガラッ）おや、アンタ達は防衛に参加しないのかい？」

「あ、ババ…学園長。どうしてここに？」

「この人が学園長？」

「ただの見物さね。二年がバカやってるって聞いたもんでね」

第25問 part 1 最終決戦！ 集中こそが勝利の鍵だ！ (前書き)

Side Akihisa

「先生！よく僕がここまで辿り着くと思いましたがねーっ」と

「ああ。貴様は阿呆だが、その行動力は並じゃないからな」

「それはまた、ありがとうございますーっ！」

鉄人の拳をつまきいなしながら話す。もう油断はしない

「それに、これだけの人数がいれば停学なんて怖くはありませんっ
！」

「いいだろう。覗きに参加した全ての生徒をリストアップしてやる
っ」

「ーぐっ！」

僕の召喚獣が壁まで吹き飛ばす。浅く当たっただけなのに、なんて威力だ

でも、決して諦めはしない！

「行くぞーっ！二重^{ダブル}召喚っ！」

僕が喚び声を叫ぶと、召喚獣がもう一体現れる

「ーぐっ！！白金の腕輪か…！」

鉄人の表情から余裕が消えた。よし、これなら

「先生、勝負はこれからです」

二体の召喚獣を挟み込むように攻撃させる

「ぬっ、くうっ…!!」

よし。今度は鉄人が劣勢だ。でも

「全然ダメージを与えられない…!!」

このバケモノめ！分厚い筋肉の鎧で攻撃が弾き返されている

「どうした吉井？焦りが顔に出ているぞ？」

くっ！二体を同時に操るのはキツイ。一つの脳でこれを続けるのは
厳しいだろう

第25問 part1 最終決戦！ 集中こそが勝利の鍵だ！

「だからって、負けるわけにはいかないんだよ！」

「動きが鈍っているぞ吉井！」

「くうっ！」

ダメだ。処理が追いつかない。ここまでか…

僕は苦しみに耐えかねて、廊下に背中から倒れた

「ここまでだな、吉井」

再び余裕の表情の鉄人

「所詮、下心の集中力なんてそんなものだ」

ゆっくりとこちらに近づいてくる

そうか。僕は集中力が足りなかったのか。明日からは集中力をーん？集中？

「分かったあっ！」

跳ね起きて鉄人を見る。その余裕の表情、苦痛に変えてやる！

「ほう。何が分かったんだ？」

「アンタを倒す方法だよ。アンタは僕にヒントをくれた！」

「ヒントだと？」

「今言ったじゃないか。『集中』って」

そうだ。簡単なことなんだ

「今から放つ全ての攻撃をーアンタの股間に集中させる……！」

「き、貴様、なんて恐ろしいことを考えるんだ!？」

「いくぞ鉄人っ！」

反撃開始だっ！

【この時、仲間達がある人物の手によって散っていつているなんて誰も知る由がなかった】

（Side Out）

第25問 part 1 最終決戦！ 集中こそが勝利の鍵だ！ (後書き)

「次回、決着！」

明久は理想郷アガルタを見ることができているのか？」

第25問 part 2 (強化合宿編ラストだ!) (決着と理想郷へアガルタ)

Side Akihisa

ローと見せかけて金的狙いに变化するキック。足元を狙ったと見せかけて股間を突きにいく木刀。鳩尾狙いから下腹部狙いに軌道を修正した拳

「こ、これほど執拗な急所攻撃をするヤツは初めてだ…!」

まだまだあつ!

脇腹狙いからの金的蹴り、肘を取ると見せかけて股間に肘鉄、ストリートに急所突き、僕の召喚獣達の攻撃が股間に突き刺さる。副獣の拳に力を入れて

「とどめだあつ」

「くーっ!」

僕の言葉を聞いた鉄人は股間のガードを固める

「なんて、嘘です」

主獣を副獣を踏み台にしてジャンプさせる

「しまっ」もらったああーっ!」「」

僕の召喚獣の手刀が首に当たり

「ぐう…っ！よ、吉井、貴様…」

鉄人は倒れた。やった、やったんだ。ついにここまでこれた！

「待ってるよ真琴。君の…食らうかつ！」

殺気を感じしてしゃがみこむ。直後、僕の頭上を何かが通っていった

「お姉様の操は渡しません…！」

立っていたのは、僕らを脅した張本人。清水さんだった。

「君のせいで…どんな辛い思いをしたと思ってるんだあ…っ！」

手に持っていたスタンガンを奪い取って当てる

第25問 part 2 (強化合宿編ラストだ!) (決着と理想郷へアガル夕)

「し、痺れますっ!」

清水さんは呆気なくその場に崩れ落ちた

「これで全部片づいた、かな？」

後は皆を待つて…

「おかしいな？誰も来ない」

皆どっしたんだろっ？

【その頃の雄二・秀吉】

「くそっ！何で大島先生が…」

「これでは通れないのっ…」

【再び明久】

「…まあいいや」

僕はゆっくりと扉を開けた

Side Out

【少し時は遡り…】

「や、ヤバいよ真琴。アキの奴、鉄人倒しちゃったみたいよ」

「あわわ…美波、ゴメンっ」

私は美波の頭を押さえつけてお湯の中に入れた
その直後、ゆっくりと扉が開いた

（Side Ayaka）

今私は夕季ちゃんと睨み合ってるんだけど…

「夕季ちゃん」「何？彩華ちゃん」

「明兄止めに行こうよ」「…あ、そうだった」

私達は大浴場へと急いだ

（Side Out）

第25問 part 2 (強化合宿編ラストだ!) (決着と理想郷へアガルタ)

Side Akihisa

扉を開くと、学園長の艶姿があつた

「んぷっ…あの情報は本当だったのか…それよりもー」

僕は真琴の姿を捜す。するとー

「(プシャアアアツ)」

僕が見たのは、必死に何かを押さええている真琴の…裸だった
倒れながら僕は、裸の真琴の写真を一枚だけ撮っていた

Side Out

「やりやがったよコイツ」

真「うわ〜ん。裸見られたよ〜」

美波「真琴、私のために…ありがとう」

彩「ちなみにこの後、明兄は泣いていたまこ姉以外の全員に殺され
かけました」

「」では、また次回です。今回は番外編でも…と考えています

それともう一つ。明久が死の直前に撮ったあの写真、ほしい人は言ってるね
「ではでは」

水野姉妹の強化合宿の日記 part 2

三日目の日記を書きなさい

水野真琴の日記

『まさかアイツにあんなことを言われるなんて…私、これからどうしたら良いんだろう?』

教師のコメント

何かあったのですか?悩みがあるなら相談してくださいね

水野彩華の twitter

『地獄巡りツアーに行ってきたよ』

教師のコメント

あなた達二人に何があったのですか?

全体についてのまとめを書きなさい

水野真琴・彩華とその他の女子のまとめ

『吉井明久を殺したいと思った』

教師のコメント

なぜ全ての女子のまとめが同じなのですか?

全時空へのお知らせ

全時空のみなさん！こんにちは！JACKですよ！

前に告知した通り、次は番外編をやる予定です。

番外編の内容は、ズバリ王様ゲームです！

ということ、この王様ゲームへの参加者を募集します！

バカ天worldからは、真琴・彩華・明久・雄二・瑞希・美波・

翔子が参加します！

基本誰でもokですが、僕自身コラボが初めてなので、キャラ崩壊の可能性がとてつもなく高いです

それでも大丈夫だという方は、どしどし書いてください

期限は明日の午後五時までとします

たくさんさんの参加、お待ちしております

近況報告

今現在決定したメンバーを発表します

まずはバカ天worldの七人

レフェルさんworldより新条ありす、桃宮あかり、秋月終夜

abc井さん考案の大和香澄

バカひばworldより支倉ひばり

ヒョウガさんworldより海堂直哉

ツインズworldより吉井夕季

ソラさんworldよりルイージ

FOOLさんworldより風宮紅葉

RSSworldから『死神』須川亮、中川さくら、船草悟

以上の19名です

予想外に集まったため、参加者の募集は締め切ります

明日更新予定です

何話かに分けて書きますよ

応用問題その1〜王様ゲーム開幕！〜（前書き）

ついに完成しました！まずはその第一回です
会話だけになりますが、多分楽しめますよ！
では、スタートっ！

真琴「第一回！」

ひばり「全時空混合」

夕季「王様ゲーム！」

さくら「atバカ天world！」

All「イエ〜ッ」

明久「それにしてもいっぱいいるね」

雄二「そうだな。いくつの世界から集まってるんだらう？」

??「七つの世界だな」

紅葉「結構集まったんだね」

直哉「こんだけの人数で王様ゲームってのも楽しそうやな」

亮「ところでさ…さっきから気になってたんだが…」

あります「一人多いよね…」

??「ああ。自己紹介が遅れたな。俺は天崎神哉。あまなき しんやこの世界のJA
CKと考えられてくれればいい。」

彩華「…凄く自己中な作者だね。名前に神ってあるし…」

神「まあ、とにかく始めようぜ」

香澄「名前の表記、神になってます…」

真「それは置いていて…ルール説明。ここに1〜19までの数の書かれた紙と王と書かれた紙があります。王を引いた人が王様となり
『番は王様の肩を揉め』みたいに命令をだします。命令された人は必ずその命令に従わなければいけません。OK?」

All「OK!」

応用問題その1〜王様ゲーム開幕!〜

真「よし!じゃあ皆引いて〜」

ガサガサ

A11「王様だ〜れだ?」

明「やったああっ!」

美波「さいしよはアキね」

明「じゃあ命令。5番と8番が王様にキス!」

瑞希「ふえっ?本当ですか?」 8番

あかり「あっ!私もだ!」 5番

明「じゃあ二人共、早く」

真「新ルール!キスは禁止!賛成の〜人っ」

バカ天男子全員・彩・美・ひ・夕・亮・さ・神「(バツ)」

明「瞬殺!?!」

真「次いくよ〜」

ガサガサ

A111『王様だ〜れだ?』

神「俺だな」

彩「…仕組んでない?」

神「そんなことしねえよ」

命令!3番と18番は11番を殴れ!

明「ええっ!?何その命令!?!」 11番

雄・亮「(ニヤリ)OK!」 3番・18番

明「ちよつと待て作者!それ絶対にかふううっ」

〔命令執行中〕

翔子「雄二、あんまり吉井をいじめないように」

悟「すーちゃんもやりすぎだよ…」

雄「命令だからな…」 亮「仕方ないさ」

応用問題その1〜王様ゲーム開幕!〜（後書き）

終夜「明久、大丈夫か？」

明「らいほうふ…つふへて（大丈夫…続けて）」

真「じゃあ皆引いて〜」

ガサガサ

A11「王様だ〜れだ？」

ル「あ、僕だね。命令は…1番と4番と12番がトリオ漫才をすること」

ひ「私だ」 1番

さ「私も。あと一人は？」 4番

彩「私だね」 14番

亮「ふむ。ロリコンビかぎやあぁっ噛むなさくら!」

彩「私達ちっちゃくないよ!ね、ひばりちゃん」

ひ「そっだよっ!」

雄「この中で一番ちっちゃい奴が何をぐわぁぁっ!彩華、怪電波やめろぉおっ!頭があぁぁっ!」

ひ「真琴ちゃん。次行こう」

真「え？でもまだ命令を…」

ひ「真琴ちゃん？」

真「よし。次行こう」

ガサガサ

A111『王様だ〜れだ？』

香「私ですね」

夕「無難なのを頼みますよ」

香「分かりました。じゃあ…9番と19番は抱き合ってください」

明・雄「アウトーッ！」 9番・19番

真「勿論却下ね」

悟を除く女子全員「賛成っ！」

応用問題その2 明久はいつだっっていじられキャラ (前書き)

真「では第5ラウンド!」

ガサガサ

A11「王様だくれだ?」

夕「私ですね」

真「命令どうぞっ!」

夕「じゃあ、明兄じゃなくて14番の人は私に抱きつかせてください (ムギユウ)」

明「え?まだ僕番号言ってないよ!?何で分かるの?」 当然14番

夕「明兄ですう (スリスリ)」

明「でもこれはこれで…」

真・雄・美・瑞・ひ・亮・さ・神「次行くよ (ぞ)」

夕「うう…もう終わりですか…」

真「次っ!」

ガサガサ

A11『王様だ〜れだ?』

紅「僕だね。じゃあ1〜19番皆がひいおばあちゃんのクッキーを
…」

紅葉を除く皆『却下』

紅「ええっ!?!」

雄「紅葉、罰ゲームじゃないぞ?」

真「気を取り直して次!」

ガサガサ

A11『王様だ〜れだ?』

直「わいやな。ほな、16番と17番で漫才してくれや」

雄「俺か?もう一人は…」 16番

翔「…私」 17番

応用問題その2〜明久はいつだっっていじられキャラ〜

明「(グツ)」

雄「明久てめえ…」

神「ほら行ってこいよ」

雄「くそっ！」

〜漫才開始〜

翔「…どうも。仲良し夫婦です」

雄「おいコラ、誰が仲良し夫婦だ」

翔「…昨日、考えたんだけど…」

雄「漫才なのに俺無視かよ！…ったく。で、何を考えたんだ」

翔「…子供の名前」

雄「誰の…？」

翔「…私と雄二の」

雄「おい待て翔子。今ので観客席の奴等が…」

翔「…笑ってる」

雄「違う！あれは攻撃色だ！」

翔「…で、考えた名前が…」

雄「また無視か！で、名前は？」

翔「…おしようゆ」

雄「ちよつと待てええつ！」

（時間（文字制限）により漫才終了）

観客の皆「（パチパチパチパチ）」

雄「今のでいいのか？」

直「良かったでお二人さん」

翔「…照れる」

真「よし次っ！」

応用問題その2　明久はいつだっっていじられキャラ（後書き）

ガサガサ

A11 『王様だ〜れだ?』

悟「私だよ」

さ「さとちゃん命令は?」

悟「じゃあ、13番は6番のモノマネをして」

明「あ、僕だね。誰のモノマネすればいいの?」 13番

彩「私だよ!」 6番

真「ではどうぞっ」

明「（裏声）私が一番偉いんだよ!」

ひ「おおっ!」

香「結構似てますね」

彩「ええっ!皆から見た私、そんななの!?」

真「よし、どんどん行こう!」

ガサガサ

A11「王様だ〜れだ？」

ありす「私だね。じゃあ、10番は2番に7番が15番に抱きついて」

明「また僕だ！」 2番

紅「僕もだね」 10番

瑞・美「はうっ！」 「7番・15番

瑞「紅葉さん…番号、変えてもらえますか？」

紅「別にいいけど…」

美「ああっ！瑞希！ずるいよー！」

瑞「(ヒシッ)(はううう〜)」

〜瑞希トリップ中〜

真「よし、そろそろラストスパートね！」

応用問題その3〜王様ゲームファイナル〜（前書き）

真「第10ラウンド行くよ！あと4回だからね！」

ガサガサ

A11『王様だ〜れだ？』

雄「よっしやああっ！」

真「じゃあ命令をどうぞ」

雄「そうだな…。15番の奴に…」

亮「（ビクッ）」 15番

雄「（サラサラ）これに書かれていることを読んでもらおうか」

亮「なっ！？これを読めだと？」

雄「早くしろよ」

亮「くっ…俺は吉井が好きだって痛ああっ！噛むなさくらあああ
っ！」

悟を除く女子勢「（ジトー）」

亮「くそっ！覚えてろよ坂本。次だ！」

ガサガサ

A11 『王様だ〜れだ?』

亮「(ニヤリ) 17番の奴」

雄「(ダツ) 明「逃がすかあぁっ!」」

亮「(サラサラ) これを読め」

雄「ちっ…真琴、俺と付き合えみぎゃあぁぁっ! 翔子止めろおおっ!」

亮「これより異端審問会を開催する。吉井一級審問官、罪状を簡潔に述べる」

明「我らが天使を奪おうとしていました」

神「会長、この異端者にインフィニティサンダーの刑を執行しましよっ」

亮「それはどんな刑だ?」

神「プールに異端者を突き落とし、そのプールにスタンガンを入れます」

亮「承認しよっ」 明「異議無し」

応用問題その3 王様ゲームファイナル

ル「それやると坂本君死ぬんじゃない？」

亮「だからどうしたというのだ。議事録には自らスタンガンの入ったプールに飛び込んだと記せば良い」

直「思いつきり嘘やん」

雄「くそっ！許さねえぞ須川！」

亮「負け犬の遠吠えだな」

真「喧嘩しないで次行くよ」

ガサガサ

A11「王様だ〜れだ？」

真「私だよっ！命令！6番はこのくじを引いてください」

明「僕だけど…（ガサガサ）じゃあこれで」 6番

真「性転換薬だね。はい。飲んで」

明「…残りの二つは？」

真「超能力阻止剤と対立性別現実化薬。これは明久が二つに別れて、それぞれ明久とアキちゃんになります」

あり「それ、私達があげたやつだね」

あか「ホントだ」

明「逆にこれで良かったかも…」（ゴクッ）

A11「おおっ！」

真「さて、明久がアキちゃんになったところでラスト行くよ！」

ガサガサ

A11「王様だ〜れだ？」

ア「僕だね」

真「じゃあ最後の命令をどうぞっ！」

ア「命令！皆、また来るように！」

………

ア「あれ？僕何か変なこと言った？」

応用問題その3 王様ゲームファイナル (後書き)

ひ「ベタだねえ」

香「そうですねえ」

夕「でもアキ姉らしいですね」

ア「夕季ちゃん。明兄で良いんだからね」

彩「流石アキ姉」

ア「彩華ちゃんまで!？」

真「じゃあ皆、またいつかね」

紅「そうだね」

終「またな」

彩「では、これにて王様ゲーム」

ALL「終了!」

たくさんのご協力、ありがとうございました!

特別問題その7 明久と真琴（前書き）

「じゃあ行ってくるね」

「ひつへらっは〜い（いつてらっしゅ〜い）」

前代未聞の王様ゲームの翌日の朝。私はパンを頬張りながら彩華を見送った

なぜ私は行かないのかというと

通知

『一週間の間、第二学年男子生徒全員を停学とし、水野真琴の登校義務を免除する』

という通知が出たからである

私に対する学園側の配慮らしい。別にもう気にしてないんだけど…でも、せつかくの休みだし、楽しもうと思う

「さ〜て何するかな〜？」

私は普通の休みと同じ扱いなのだが、明久達男子は停学処分ともあって自宅謹慎をしいられている
あっ！そうだ

「私がアイツらの家に行くのはOKだよな？」

そうだ。その手があったじゃん

「明久は…まだ寝てるかな？まあいいか」

私は明久の家にテレポートした。この前の落とし前もつけてもらわなきゃね

所変わって明久の部屋。不法進入？気にしない気にしない

「明久〜。おい」

「む〜。まだ眠い…」

起きないな。それなら…

「（ゴクツ）起きないと、お嫁に行けなくなるようなキスをしますよ」
玲の声

「邪悪な気配!!」

明久は顔を抱えながら横に跳んだ。よく訓練されてるね

特別問題その7 明久と真琴

「あれ？姉さんじゃない？」

「真琴だよ」

「何だ真琴か。てっきり僕の貞操の危機かと思ったよ」

「作戦大成功だね」

二人でしばらく笑い合う

「不法進入だああっ！」

突然叫びだした

「うるさいよ明久。近所迷惑」

「そうじゃなくて、何でここにいるのさ!？」

「来ちゃった」

「そんな美少女ゲーム的なノリで言われても信じないぞ！鍵が掛か
つてたはずだ！」

「私、超能力者だよ？」

「テレポートか！道理で気付かないわけだよ！」

「まあまあ落ち着きなつて」

「う、うん。 そうだね。 で、何の用？」

「えーとね。 強化合宿四日目の「ゴメンナサイゴメンナサイゴメンナサイ……」」

早っ！まだ全部言っていないのに……

「明久、私の裸見たよね……？」

「ゴメンナサイゴメンナサイ……」

「いや別に見るなつて言ってるわけじゃないんだよ？」

「えっ！？それじゃあ……」

「見るなら死を覚悟しろと」「ゴメンナサイゴメンナサイゴメンナサイ
イ……」

だから早いつて！

「まあそれはもういいの。 見たのアンタだけだし、制裁も受けたし」

「それじゃ」「でも……何？」

特別問題その7 明久と真琴（後書き）

「撮った写真は寄越しなさい」

それが一番の目的である

「…はい」

「えらく素直だね。他にデータとかは？」

「ありません」

「誰かに渡したりとかは？」

「して…ません」

「瞬間があつた気が…」

「ならいいや」

「えっ？もう良いの？」

「？何が？」

「いや、てつきり本当に殺されるかと…」

「コイツバカだ…」

「あのね。仮にも私と明久は付き合ってるんだよ？浮気とかしない

限りは殺したりしないよ。でも…」

「でも？」

「ペナルティを与えます。目を瞑ってください」

「う、うん」

明久が目を瞑ったのを確認して…

「んっ」

静かに唇を合わせた

「えっ？」

明久が声を出すと同時に私はテレポートした

」「名前が戻りました！

明久・真琴仲直り＋ おめでとう！

次回、4巻突入！さらにハチャメチャに！？
ではでは」

第26問（ハートフルラブストーリー編開始！って長いよー！）〜早速裏切り〜

「大波乱のハートフルラブストーリー編開始です！」

バカテストからどうぞ（真琴・彩華の回答のみです）」

バカテスト英語

次の言葉を正しい英語に直しなさい

『ハートフルラブストーリー』

水野真琴の答え

『heartful love story』

教師のコメント

意外です。あなたはもう一つの方を書くと思いましたが…

水野彩華の答え

『hard fool rough story』

教師のコメント

hard…激しい

fool…愚か者

rough…荒っぽい

story…物語

一瞬、あなたを天才かと錯覚しました

強化合宿で確かに学力は上がったようですが、あと一歩といった所ですね

「まこ姉、早くしないと遅れるよ!」

「彩、走るの早すぎだよ…」

強化合宿から一週間たった朝。私は学園への道を走っている。原因は…寝坊である

「早くしないと本当に遅刻だよ」

「あ、彩」

再び走り出した。彩、運動だけは凄いなだね…

第26問（ハートフルラブストーリー編開始！って長いよー！！）〜早速裏切り〜

「なんとか…間にあったね…」

「そうだね…」

息を切らせながら扉を開ける

「…何があつたの？」

紐で縛られた明久と雄二が転がっていた

「真琴！助けて！」

いきなり助けを求められた。何があつたんだろう？

「須川君、15文字で説明！」

「島田が吉井にキスをしていた」

よし、ピッタリ15文字。流石須川君…ってはい？

「明久が…何だって」

「だから、今日の朝、吉井が島田にキスをされていたため、連行してきたんだ」

明久が…美波と…キスヲシタダト…

「真琴！事情が分かったんなら助けて！」

「アキヒサ」

「真琴？何か怖いんだけど？」

「アンタ、コンドハミナミトキスヲシタノ？ネエ、ホント？」

「真琴、本当に怖いよ……」

「スガワクン、コイツニバツヲクダセ」

「了解であります真琴特別審問長。何の罰を執行いたしますか？」

「ソウダナ、コイツニESSノケイヲシッコウシロ」

「了解であります！」

「？ ESSの刑って何？」

「おい、至急時空間トランサーを用意しろ！」

「ちょっと待って！僕、どこかに飛ばされるの？」

第26問（ハートフルラブストーリー編開始！って長いよ！！）早く早速裏切り

「ソウダヨ。キミハシヌマデソコニイルコトニナルンダヨ」

「止めて！本当に止めて！そんなこ」（ガラッ）「」

「あつ。美波」

あれ？記憶が飛んだよ？何があつたんだろう
何でこんなに静まりかえってるの？

「おはようございます皆さん。今日は諸事情により布施先生の代わりに私が授業を…どうしたんですか皆さん？」

先生がその様子を見て目を丸くしていた

565

「真琴暴走！修羅場必至！？のハートフルラブストーリー編、始まりました」

彩「ねえ、まこ姉が言ってたESSの刑って何？」

「知りたい人は感想へ！」

彩「ええっ！？」

第27問 part 1 怒りの果てに (前書き)

教室内に妙な雰囲気が漂っている

今までにない静かな教室の中、先生が黒板にチョークで字を書く音が響く

私は先生の話なんかそっちのけで空間認識サイコメトリーで明久の様子を伺っているところだ

「(ブツブツ)…明久の奴、美波と目で通じあってるよ…
どうにか合法的に制裁を加えられないか…」

「まこ姉、独り言怖いよ…」

そんなこんなしている間にいつの間にか授業が終わり、先生が教室を出ていった

あれ？美波が明久の所に向かっている。どうしたんだろう？

「あ、あのねアキ。お願いが二つあるんだけど、いいかな…？」

「お願い？な、なにかな？」

「えっと、ウチの卓袱台がね。使いにくくなっちゃったから、アキの卓袱台と一緒に使わせてほしいんだけど…」

美波の卓袱台を見る。確かにあれは使いにくいだろう

「アキ、ウチと一緒にでもいい？」

「あ、うん。いいけど」

「そう。ありがとっ！じゃ、す、座るわね……」

美波が明久の横に座った

「（ブツブツ）明久め……もうこれはBBの刑が必要ね……」

「だからまこ姉怖いって……」

再び空間認識をする

「ー良かったら、その……今日のお昼、一緒に食べない？」

第27問 part1〜怒りの果てに〜

「あ、そ、そうだね。それじゃ、お昼に水飲み場で…」

「ううん。そうじゃなくてね、ウチがアキの分も作ってきたからー」

ちょうどその時

「お姉さまっ！何をしているんですか！？そんなに豚野郎に密着して!?!」

美春登場

「み、美春！？ウチの邪魔をしにきたの!?!」

「当然ですっ！いくら卓袱台が狭いからといって、密着している姿を黙って見過ごせるわけがありません！姫路さんや真琴お姉さまの所でも良いはずです!」

「そっだよ美波。別に邪魔なんて思ってないから、こっちに来て座りなよ」

「気持ちは嬉しいけど…。でも、「別に邪魔だなんて思わないから、こっちに来なさい!」」

「そっですよ！席を移動してー」

美春が何かを言っている中、私は瑞希とアイコンタクトを交わす。よし、瑞希も同じ考えみたいだ

「待ちなさい美春！どうしてアンタが「これより、明純会を開催します」…ちよつと真琴？瑞希まで、どうしたの？」

「どうしたではない。美波会長よ。これより貴様は純弄者だ」

【水野彩華の用語辞典】

純弄者じゆんろうしやとは、純情を弄ぶ者の略である

「違つわよ！私は弄んでなんかいないわ！私はー」

皆が美波を注目する

第27問 part1 怒りの果てに (後書き)

「ただ純粹にアキが好きただけなの！」

「サイコキヤノ 畳返しっ!!」

シユカカカカツ ズゴオン

「畳が一瞬で灰に!？」

『『『チツ』』』

教室中から舌打ちが聞こえてくる
やっぱり皆も同じ考えのようだ

「お、お姉さま…？付き合ってー」

美春が再び話を始める中

「あっ！まこ姉！」

私は教室を飛び出していた

」「真琴が教室を飛び出しました！
次回をお楽しみに！」

第27問 part 2 真実を知って (前書き)

屋上。そこに私は座っている
現実から目を背けるために。

自分を好きと言ってくれたアイツが美波と付き合っているという現実から逃げる為に

いったいここに来てどれだけの時間が経っただろう？いつまでたっても気分は晴れないままだ

感傷に浸っていると、ふいに扉が開き

「真琴っ！」

アイツが飛び込んだ

アイツだけじゃない。美波も一緒にいる

「何の用？私、独りに「勘違いなんだ！」」

言葉を遮って、アイツが話し始める

「勘違いなんだよ。僕は美波と付き合ってたなんかいないんだ」

…え？付き合ってたない？朝、キスマでしたのに付き合ってたない？

「本当なの？美波」

私が聞くと、美波は頷いてこう言った

「うちの勘違い。アキが須川に送ろうとしたメールを間違えてウチに送ったの。そのメールを勝手に告白のメールだって思いこんじゃ

つて…」

それじゃあ…

「私に送ったメールは？」

「それも僕の間違い。美波に弁解するつもりで書いたメールを間違つて真琴に送っちゃったんだよ」

え？それっておかしくない？

「なんで弁解のメールが告白なの？」

「いや…なんでだろうね？何とかしなきゃって思ってたらああなつたんだよ」

第27問 part2 真実を知って

ということは何？二重に間違えたの！？

「（クスツ）」 「笑ったな真琴！僕だって間違えたくて間違えた訳じゃないよ！？」

「そ、そうだね。ゴメンゴメ…あぁっ！」 「ど、どうしたの？」

重大なことを忘れていた…

「この話…して良いの？」 「あ…」

やっぱり忘れてたんだね…

「ところでアキ」 「な、何かな？」

気付かれた？気付くな気付かないで気付いちや駄目！

「もしかしてだけど…真琴と付き合ってるの？」

気付かれた！

「な、何のこと？」

「しらばっくしても無駄よ！なるほどだから真琴はあんなに怒ったのか？」

「いや、だから違」正直に言いなさいアキ。付き合ってるの？付き

合っていないの？」「

明久が私を見る。私が小さく頷くと、明久は美波に

「そっだよ。僕と真琴は付き合ってる」

と言った。その直後

「……何だと（じゃと）（ですって）！？」」「」「

扉の方からお馴染みの皆が現れた

第27問 part2 真実を知って (後書き)

「まこちゃん！本当なんですか!？」

「う、うん。そうだよ」

「明久てめえ！真琴と付き合ってるだと!？」

「酷いのじゃ！これは裏切りじゃ!」

「…………… 異端審問会は貴様を絶対死刑台に送る」

「そ、それより皆、Dクラスに狙われてるって件はもう良いの!？」

「ああ。あれは清水に誤解だったと伝えれば良いだけだ。それより

「

「…………… 今は処刑が先決」

「ちよっ！待って皆!」

「真琴、覚悟は良いんだよね?」

「純弄者はまこちゃんの方ですよ!」

「いや、だから皆落ち着いて…」

私達が処刑を覚悟していると

「皆ストオオOPP!」

彩華が現れた

「えーと。まこ姉と明兄のお付き合いを邪魔したら、問答無用で制裁を加えます!以上!」

そう言つて彩華は立ち去つた
その数秒後

『すみませんでしたっ!』

と皆に謝られた

J「わーい!真琴と明久が公認カップルに!おめでとう!」

真・明「「ありがとう!」」

J「さて、今回はあのクラスが襲ってきます!それでは」

A11「また次回!」

第28問 part1 ～一難去つてまた一難～（前書き）

私達が公認カップル（？）になってからしばらくたった昼休み
雄二達の話によるとDクラスは試召戦争の準備を取りやめたらしい。
今美波は瑞希と一緒に座ってるし、誤解が解けて本当に良かった

「明久～お弁当あるけど食べる？」

「お弁当！？本当！？じゃあありがたくもら…あ、先に美波から貰
う約束してたんだ」

「ああ、そういえばそんなこと言ってたね。じゃあ貰ってきなよ」

「うん。ちょっと行ってくるね」

そう言つて美波の方に走つていった

『美波！』

『何よアキ。ウチに何か用？』

『えつとき、今朝言っていたお弁当なんだけど…』

『真琴と食べれば良いじゃない。せつかく彼女がお弁当作ってきて
くれたんでしょ？瑞希、行きましょ』

『あ、美波ちゃん、待つてください。そ、それじゃ、明久君。また
後で…』

しばらくして明久が戻ってき

「真琴…やっぱりお弁当ちょうだい」

と言った

「はいどうぞ」

私が差し出すと明久は「ありがとう」とか「おお」とか言って食べ始めた。それを見て私も食べ始める
食べ続けることしばし

「よう明久。仲睦まじいな」

雄二がお弁当を持ってやってきた。後ろには秀吉もいる

第28問 part 1 ～一難去つてまた一難～

「あ、そうだ。明久にお弁当あげちゃって良かったのかな？また美春来ない？」

「大丈夫じゃろう。この教室の監視カメラや盗聴機は全てムツリーニが回収しておったからの」

「そのムツリーニはどうしたの？姿が見えないけど」

「そういえば彩もないわね」

「ああ。さっき何か妙な情報を掴んだみたいで、チビツ子をつれて確認しに行ったぞ」

確かに彩の運動能力は凄いからね…

「誰がチビツ子だっ！」 「……………ただいま」

二人が戻ってきた

「……………情報を掴んだ。今朝よりもさらに良くない状況になっている」

言いながら小型録音機を卓袱台に置き、再生ボタンを押す

『あ、あのっ、土屋君っ。明久君のセーラー服姿の写真を持っているって本当ですかっ？』

『…………一枚100円二次配布は禁止』

『二次配布は禁止ですか…。残念です…。でも、私個人で楽しむだけでも充分に』 プツッ

「…………再生するファイルを間違えた」

「ねえ何！？今の会話は何！？僕にとっては今の会話こそが「康太…？」十二分に「……………何だ？」良くない「売上げの4割をちようだい」状況って聞いている！？「……………交渉成立」ちよつと！勝手に交渉しないでよー！」

第28問 part 1 ～一難去つてまた一難～（後書き）

「……………本当はこつち」

明久をとことん無視してポケットからもう一台の録音機を出す康太。いったいいくつ持つてるんだろう？

『Fクラスの様子はどうだ？』

『何かまたバカなことをやっていたようで午前中は点数補充もしていないみたいだ。あの様子だと、こつちの意図に気付くこともないだろうな』

『そうか。それならいい。当面は俺達も点数補充をして、向こうにこちらの動きが気取られたら即座に戦線布告を行おう。』

『了解』

「これってDクラス？だとすると、まだ誤解が解けてないだけなんじゃないの？」

「……………（フルフル）」

「Dクラスがおとなしくなっているのは確認済みだ。これは恐らく別のクラスー指示を出しているのが男子生徒ということから見ても、これは…………… Bクラスの会話」

Bクラス…というところあの卑怯者か。今度はどんな汚い手を使ってくるつもりなんだろう？

J「祝、連載1000回目！」

A11「おめでとう！」

明「凄いねえ。もう1000回も続いたんだ」

真「連載開始から約二ヶ月。最初と比べたら今は凄いよね」

彩「感想ももう少しで300みたいだよ」

J「皆さんのおかげです！ありがとうございます！」

第28問 part 2 美波・明久のラブラブ劇場テイク1 (前書き)

〽前回までのあらすじ〽by真琴

BクラスがFクラスを狙っている。Bクラス代表の根本の目的は私達への仕返しと自らの発言力の奪還。仕掛けられたら今の私達では負けてしまうだろう

それを阻止するべくDクラスをFクラスに攻め込ませることにした私達は、美波と明久をくつつけて美春を焚き付ける作戦を計画した。そのことを美波に伝えに来たのだが…

「それで、ウチにどうしろって？」

美波はまだ怒っていた。はたして私達の作戦は成功するのか？

「明久と付き合っている演技をしてもらいたい。それも周りで見ているヤツがムカついて血管が切れそうになるくらいベタベタな感じだな」

雄二が淡々と言う。そんなにスッパリ言ったら

「絶対にイヤ」

当然断るよね。別の人と付き合っている男の人と付き合ってる演技をするなんて…

「そこを何とかお願い！私も協力するからさ」

美波に頼み込む私。私は二人の仲を妬む役をやるらしい。私も美波も美春に好かれてるから万が一の為にとかなんとか言われて、了承したのである

「ウチはイヤよ。何でこんなバカと恋人の演技をしなきゃいけないのよ。別に相手が真琴でもいいじゃない。私が妬む役でさ」

と不満そうに言う

第28問 part 2 美波・明久のラブラブ劇場テイク1

「それはムリだよ。朝あんなことまでしておいて他の人と付き合ってるなんておかしいじゃん」

実際はそうなんだけどね

「ううーわ、分かったわよ。形だけでも協力してあげるわ」

よし。了承が得れたけど、突然何でだろう？

「そうと決まれば早速演技開始じゃな。三人共、これを受け取るのじゃ」

秀吉が差し出した物を受け取る

「これ台本だよな？いつの間にか書いたの？」

「殆どワシの持ってきた台本からの引用じゃからな」

だからって早すぎない？流石自称演劇バカだね

「お前等はそいつを持って屋上で演技開始だ」

ん？あれ？

「屋上にも盗聴機があるんだよね？朝の私達の会話聞かれてない？」

「……………問題ない。明久達に電波妨害装置を持たせてたから」

「あつ！私があげた奴か。ナイス康太」

あの会話を聞かれてたら元も子もないからね

「えーと、僕らは死角で演技すれば良いんだよね？」

「そつだ。それと島田、キスシーンとかはないから安心しろ」

雄二がまだ納得していないでいる美波に声をかけると

「わ、分かってるわよ！」

と言って慌てた様子で廊下に出ていった。私達も後を追う

第28問 part 2 美波・明久のラブラブ劇場テイク1 (後書き)

屋上についてドアを押し開ける。私は二人とは反対側の死角に移動する

さあ、演技開始だ

「…ねえアキ」

ついに始まった。頑張れ二人共(真琴はまだ台本を見ていません)

「ん？なに、美波？」

「今更なんだけど…あ、アキにきちんとウチの気持ちを伝えておこうと思うの」

「え？そんなの、今更言われなくても…」

「それでも聞いて欲しいの。………こういうことは、ハッキリとさせておきたいから」

あれ？今の間は何？えーとあそこの台詞は…(今初めて台本を見ます)

島田『それでも聞いて欲しいの。確かに気持ち先走ってキスはしちゃったけど、こういうことは…』
キスの部分かあ。それなら仕方ない

「う、うん。わかった。それなら聞かせて欲しい。美波の、本当の気持ち」

次はクライマックスかな？少し期待しながら美波を待つ

「わ、わざわざこんなところに呼び出してごめんねアキ…あのね、ウチはアキのことがー」

好きなのっ！とか言うのかな？

「アキのことがー嫌いなのっ！」

なんか違うー！わざわざ呼び出して何言ってるの！？

「美波…」 「アキ…」

「僕もずっと同じ気持ちだった」

直後、明久が殴りとばされたのは言うまでもない

第28問 part 3 美波・明久のラブラブ劇場テイク2 (前書き)

「まったく…何やってんのよ」

Fクラスに戻って、二人にそう言う

「だ、だって仕方ないじゃない！あんな台詞言える訳ないもの！」

「それでもやらないと演技にならないでしょ！」

美波と言い争いになった

「だったら真琴がやってみてよ！」

あれ？おかしな方向に行っていない？

「そうですね。まこちゃんやってみてください」

瑞希まで！？

「うう…分かった。やってみる」

そう言っつて明久の手を握る。さて、本気で行くよ

「わざわざこんなところに呼び出してごめんね、アキ…。あのね、ウチは…アキのことが好きなのっ！」

明久がとてつもなく驚いている

「初めて会った時からずっとアキのことが好き！あれからただの友達として傍にいただけなのがずっと辛かった！本当はただの友達でいるなんて、我慢できなかつたのに！」

明久が処理落ちしかけてるのが分かる

「アキ……。あんなことしちゃった後で今更だけど、改めて…貴方のことが好きです。ウチと、付き合ってください！」

終わった！（注・真琴は万能です）

「どうだっ！」

ちよっと自慢気に言う

「負けたわ」「凄いです…」「うむ。流石真琴じゃ」

秀吉に誉められた

第28問 part3 美波・明久のラブラブ劇場テイク2

「よし。これで文句はなしだよ！テイク2の用意！」

「「う…」」

「よし。二人共腕を組むのじゃ」

あれ？

「腕、組むんだ…」

「うむ。先ほどの失敗を挽回するためにもやってほしいのじゃ」

それなら仕方ないけど…

「美波、間接技はダメだよ」

「わ、分かってるわよ！」

慌てて返事をする美波。本当かなあ？

「じゃあ、行ってくるわ」

そう言つて二人は廊下を出ていった。私も遅れて後を追つて思いつきり間接極まつてるじゃん！

「ねえ美波」「うん？なあに、アキ？」

「美波は僕のどこが好き？」

おおっ！ナイス明久！

「そんなの決まってるじゃない」

「頭の天辺から眉毛まで全部好き！」

そうそう。そう言って…違う！おでこフェチ！？

「うん。僕と同じだね」

「アキったらホントに可愛いわね…えっ！」

間接からイヤな音がするよ…
そんなこんなで屋上についた

「ほら、アキ。こっちだよ」

なぜ死角に行かないの？明久の腕青くなってるけど！？
そろそろ私が出た方が良いね

第28問 part3 美波・明久のラブラブ劇場テイク2 (後書き)

「ほら、そんなに汗かいてるなら「あぶ…何してるの二人共!」」

『脂汗だよ!』って突っ込むとこだった…危ない危ない

「しかも腕まで組んで…すぐに離しなさい!」

間接が危ないから…

「良いのよ。ウチとアキは付き合ってるんだから」

腕を離せえええつ!

「ほ、ホントなの?」

「本当よ。ね、アキ?」

明久に振るなよ、苦しそうだし

「二人共、僕のために争うのは止めて!」

ゴキーンッ 今のは自業自得だと思う

「そうなんだ…明久が認めた相手なら仕方ないね」

「え?真琴、それじゃあ…」

「うん。もう攻めないよ。明久と仲良くね!」

そう言っつて屋上から走り去った。明久の腕が大変なことになってたのは嘘だと信じよう

「ちよつとアキ!どこ行くのよ!？」

「ゴメン!僕、行かなくちゃ!」

え?明久?何で?演技は?

そう思つてるうちに明久は私を追い越していった。ああ。保健室ね
私も明久を追つて保健室へと向かった

あれ?何か大変なことをしでかしちゃったような…

第29問 part 1 起死回生の裏技と生命の危機!?? (前書き)

〽前回までのあらすじ〽by真琴

私と明久・美波による美春焚きつけ作戦。明久の脱走(腕の治療)により、それは見事に失敗に終わってしまった
皆に攻められ、美波に嫌われることを覚悟した私達に

「安心しろ。まだ策はある」

と告げる雄二。果たして、雄二の秘策とは…?

「でも雄二。最後に明久がやったことを見たら、もう付き合いしてると思わないんじゃないの?」

あんなものを見せられて美波と付き合いってるなんて思わないだろう

「ああ。清水には真琴を追いかけていったと見えるだろうな」

うん。それはそうだけど…だから何?

「雄二。お主まさか…」

「そのまさかだ。真琴を追った明久が実は真琴が好きだったという設定でもう一度やる」

「ええっ!?!」

嘘！？そんなことするの！？

「それに、お前等は実際に付き合ってるんだから（グサツ）演技はしやすいだろ？」

君には見えないのかい？皆が畳にカッターを突き刺してる姿が…

「でも、そんなことしたら美波が…」

「そうだよ。美波にとっては悪影響でしかないよ！」

「その辺は安心しろ。明久の脱走はこの為の布石だったと言えば説得できる」

確かにそうだけど…

第29問 part 1 起死回生の裏技と生命の危機！??

「なんか…美波を騙してるみたいで気が引けるよ」

「いいか？明久に真琴、この作戦が失敗すればBクラスに宣戦布告されるのは目に見えてるんだ。そうなったら確実に負ける。元のござとミカン箱に戻るぞ？それでもいいのか？」

うう…確かに。しかもそうなったらまた瑞希が転校しちゃうかもしれないし…やるしかないか
横を見ると、明久も同じ考えに至ったようだ

「「分かった（よ）。やろう！」」

「よし。よく言った二人共。秀吉、早速台本を頼む」

「うむ。承知した」

「ムツツリーニはBクラスに偽情報を流してくれ。Dクラスが狙っているとな」

「……………了解」

万が一の時の保険ってことかな？相変わらず用意周到だね

「それと姫路」「は、はいっ！」

ん？何故この流れで瑞希？イヤな予感が…

「悪いが、コイツ等に食わせる食べ物を作ってくれ。演技の後に軽く食べられる物を頼む」

的中したっ！

「ゆ、雄二？私達はさっき昼ご飯食べたばかりだからいらないよ」

「分かってないなお前等。演技するのは結構疲れるものなんだぞ。な？秀吉」

「そ、そうじゃな。結構大変じゃよ」

事情を知らない相手にふらないで！秀吉戸惑ってたよ！

第29問 part1 起死回生の裏技と生命の危機!?? (後書き)

「そういうことなら任せてください!何を作りますか?」

こうなったらあまり手が込んでない料理で

「じゃあおにぎ」「ゼリーがいいだろう」「」

ゼリー!?!この子何入れるか分からないよ!?!?

「分かりました。頑張ってみます!」

「宜しく頼む。ドリンクゼリータイプの容器に入れてくれ。運動部の物があるはずだ」

「分かりましたっ!行ってきますね」

雄二から鍵を受け取って瑞希は出ていった

「雄二は私達を殺す気なの?」

「やめろっ!?!涙目+上目遣いは!罪悪感がわいてきた」

身長が雄二より低いから自然にそうなるだけなんだけど...
皆もどうしたんだろう?」

「安心しろ。あれも万が一の為の布石だ。お前等が食うことは...多
分ない」

「多分って何さ雄二！断言してよ！」

あれの致死率半端じゃないんだよ！？」

「お前等は演技に集中しろ。秀吉、台本は出来たか？」

「うむ。これだけあれば十分じゃろう」

渡されたのはさっきより少し薄めの台本。相変わらず早いね

「図書室に行った真琴を明久が見つけて告白するという設定じゃ。よろしく頼むぞい」

「島田は俺が説得しておく。二人共頼んだぞ」

仕方ない。クラスの為に腹をくくろう！

第29問 part2 フタリノホンネ (前書き)

〽前回までのあらすじ〽by真琴

雄二が考え出した起死回生の策、それは私と明久でもう一度演技をするというものだった

いざ作戦開始と思ったところで

「やべえ。これは計算外だ」

と雄二が呟く。果たして演技は成功するのか!?

「ゆ、雄二?やばいって…何?」

「図書室に…死角がねえ」

「どづいつこと?」

「監視カメラの死角がねえんだよ!」

「つまり…隠れて台本見ながらの演技は出来ないってこと?」

私の問いかけに頷く

「ええっ!それじゃあ出来ないじゃないか!?!」

確かにこの短時間で台詞を全て覚えるのは無理だろう

「くそっ！こんな時に…ん？真琴」「何？」

突然どうしたんだろう？

「時空間トランサーを見えなくすることは可能か？」

「うん。うん。一応出来るけど、どうし」「よし！いけるぞ！」「」

どういうこと？時空間トランサーを見えなくして何を…あっ！

「「これ（それ）を付けて演技するんだね（しろ）！」「」

やっぱりか。なるほど。それならやれるかもしれない

「え？どういうこと？」

「つまり、時空間トランサーを付けながらやれば、台本が無くてもやれるってこと！」「なるほど！」

流石元神童だね

第29問 part2 フタリノホンネ

「よし。真琴、俺の分はあるか？」 「うん！はいどうぞ」

雄二に予備の時空間トランサーを渡す

「明久、時空間トランサーを出して」 「はい」

念じると私達のトランサーは見えなくなった

「よし。準備完了だ！早速持ち場についてくれ！」 「おおっ！」

私達はそれぞれの場所に移動した

所変わって図書室

『よし、いいぞ。明久』

スピーカーから明久が走っている音が聞こえてくる。いよいよ演技が始まる

「（バンツ）真琴！」 「あ、明久？」

「どうしたの？彼女と一緒にいなくてもいいの？」

「自分に…自分に嘘は…つきたくないんだ」

「えっ？それってどういう「好きだ真琴！」…明久？」

「僕は…ずっと君の事が好きだったんだ！幼稚園の頃からずっと！」

「……………」

「その頃はそれが何なのか分からなかったけど、美波に告白されて
気付いたんだ。あれが好きっていう気持ちだったんだって」

「……………」

第29問 part2 フタリノホンネ (後書き)

「今更なんだけど、真琴、僕と付き合ってほしいっ！」

「ううっ…うう…(グスン)」

「真琴…?」

「ずっと…叶わない夢だと思ってた…でも…他の人を好きになる」となんて…私には無理だった…」

「真琴…」

「私も好きだよ…ずっと…好きだったよ…明久」

「真琴、ありがとう。今まで気付いてあげられなくてごめんね」

「(ギュッ)(ギュッ) 抱き合う」

「素晴らしかったのじゃ！」

教室に戻ると、秀吉に大絶賛された。なんか照れる

「よくやった。これで清水は少なからず明久に敵意をもっただろう。Bクラス戦は防げそうだ」

「そうだ！保険で流したあの情報はどうするの?」

「ん？ああ。それも皆が戻ったら説明する。お前等は休んでろ」

「じゃあそうさせてもらおうよ。なんか疲れちゃったしね」

その時の私の頭からは、瑞希のゼリーのことなんて無かった

明久・真琴の演技は作者オリジナルのものです
おかしい点があったら教えてください

第29問 part3 明久の謝罪と根本の策略 (前書き)

演技を終えた私達は

「康太達が来るまで待機だねえ」

教室で時間を潰していた

「ねえ真琴、姫路さんの料理見に行かない？」 「パス」

「何で？もしかしたらそれを食べるかもしれないだよ？」

「大丈夫。食べさせられそうになったら誰かと入れ替わるから
特に雄二とね」

「あっさり凄いこと言ったよ…真琴」

「それより明久」 「何？」

「美波に謝らないの？」 「あ…」

忘れてたんだね

「ちょっと行ってくるね！」

明久は美波の方に歩いていった
話を聞くのも野暮だし…そうだ。MMNのチェックするかな
ん？メール来てる

ネットワーク

f r o m 匿名希望

『初めまして。僕は水野さんと同じ文月学園2年のとある男子生徒です』

実は、水野さんの持っている薬を売っていただきたいのです
このメールをご覧になりましたら返信をお願いします』

誰だろう？私の薬が欲しいなんて…とりあえず返信

f r o m 管理人

『分かりました

どの薬ですか？』

送信つと…あ、もう返事来た

f r o m 匿名希望

『ありがとうございます

欲しいのは催眠導入剤（改）という薬です

よろしかったら返信して下さい』

第29問 part3 明久の謝罪と根本の策略

ああ。前に夕季ちゃんから貰ったヤツだね。別に良いけどさ

from 管理人

『了解しました

受け渡し日時はどうしますか?』

送信…ええっ！もう来たよ!？

from 匿名希望

『ありがとうございます

では、5分後に新校舎の階段に来て下さい

よろしく願います』

5分後かあ。今授業中のはずだけど…まあいいや
あ、明久が帰ってきた

「お帰り〜。どうだった?」

「美波が…許してくれた…」 「へ?」

これは予想外だ。激怒してるかと思ったのに…

「勘違いしちゃったのは私だし、真琴と付き合ってるのだからアキから告白したんでしょ? だったらウチがなんだかんだ言っても仕方ないじゃない。ってさ」

珍しく素直だ。いや、素直すぎる!何かあるねこれは…ってヤバイ

！時間だ！

「明久、私ちょっと行ってくるね」「あ、うん。いってらっしゃい」

私は教室を飛び出して新校舎へと向かった

～Side Akihisa～

真琴がどこかに行つてしばらくして

「さて、これで心おきなく殺れるぞ」

と、雄二が呟いた。どうしたんだ？

『やっとこの時が来たか』

『水野姉妹がない今』

『俺らを止める者はいない』

第29問 part3 明久の謝罪と根本の策略 (後書き)

何だろう？この異様な空気は…

『『『吉井狩りだあっ！』』』

殺気っ！

シユタタンッ

避けた直後、無数のカッターが床に突き刺さった

『吉井い。ここがお前の墓場だ。俺らのプリンセス達を奪ったことを地獄で後悔しやがれ！』 須川 「アキ？まさかあの程度で許されたとは思ってないわよねえ？」 明久。今日こそはてめえを殺す」

囲まれた。万事急すか？

と思った直後、突然扉が開いた

Side Out

【少し前、新校舎階段】

「まさか依頼人があんだだったなんて思わなかったわ…根本」

「どうしたんだ水野さん？そんなに驚くことじゃないだろうっ？」

「この薬を買う目的は？」

「従わせたい女がいてね」

「ああ。Cクラスの小山さん？」

「ご想像にお任せするよ。じゃあ、薬を渡して貰おうか」

「…はいどうぞ。500円ね」

「どうも。えーと財布は…」

と言いながら私の後ろに目をやる根本。後ろを振り返

「（ガシッ）」

った直後、腕を掴まれた

「ちよっ！どっいつつもむぐううっ」

根本に向き直ると同時に、口に何かを入れられて

「言っただろう？従わせたい女がいるって」

意識が途絶えた

第30問 part1〜プリンセス奪還作戦開始!〜（前書き）

あれ？ここは？

「起きたか水野真琴」

誰？この声？

「これからは俺の言うことを聞いて貰う」

言うことを聞く？…ダメだ考えると頭が痛くなる。この人に従おう

（Side Akihisa）

「皆っ！」

僕が殺されそうになっていると、急に扉が開き彩華ちゃんが入ってきた

「まこ姉が…まこ姉が…」

珍しく彩華ちゃんが取り乱してる。どうしたんだらう？

「まこ姉が…連れ去られたの！」

……

『『『何だとおおおっ!』『』』』

「整理しよう。真琴は根本に連れ去られたんだな？」

「……………（コクリ）」

雄二の言葉にムツッリーニが頷く

ちなみに、彩華ちゃんはまだ泣いていて、さっき戻ってきた姫路さんや美波に介抱されている

「それで、今真琴はどこにいるの？」

「……………今はBクラスで、洗脳状態にある」

「「は？」」

洗脳状態って…操られてるってこと？

「……………真琴が異様に大人しかった。普段の真琴なら抵抗するはず」

確かに…いつもの真琴なら無理矢理にでも逃げ出すだろう

第30問 part1〜プリンセス奪還作戦開始!〜

「これは一度実際に見た方が良いかもしれないな」

「……………でも、近づくのは危険」

「ああ。近づいたら根本に無駄な警戒心を抱かせるかもしれないな」

「でも、現状を確認しておきたいよ……」

心配だし……

「私に任せて」「彩華ちゃん?」

いつの間にか彩華ちゃんが後ろにいた

「まこ姉のMMNのPCの予備、私持ってるの。もしかしたら、まこ姉はこうなることを分かったのかもしれない」

「彩華ちゃん……」

「いつもは助けられてばかりだったけど、今度は私達が助けあげたいの。皆、協力して!」

それは彩華ちゃんの決意の証明だった

「言われなくとも」

「もちろん協力する」

「大事な仲間じゃ。見過ごしてはおけぬ」

「……………真琴は仲間だ」

「ウチももちろん協力するわ」

「私もですっ！」

『『『Get back our princess!』』』

「皆、ありがとう！」

「よし。プリンセス奪還大作戦。開始だ！」

『『『おっっ！』』』

待っててね真琴。君は絶対に取り戻す！

〈Side Out〉

第30問 part1〜プリンセス奪還作戦開始!〜 (後書き)

感想をくれた皆様、ありがとうございます!

こんな展開にしてしまい、申し訳ありません!

根本には必ず制裁を下しますので、もうしばらくお付き合いください!

ハートフルラブストーリー編改め、プリンセス奪還編。よろしくお願います!

第30問 part2 突撃のFクラス (前書き)

Side Akihisa

それは異様な光景だった

モニター越しに見た真琴の顔には表情がなかったのだ

「まこ姉…」

彩華ちゃんがまた泣きそうになっている

『調子はどうだ？水野真琴』

あれは…根本か！アイツが真琴を…

『まあまあだね』

真琴が口を開く。でも、それは今までに聞いたことのない声だった。全く感情がこもっていないのだ

「くそっ！根本め…真琴に何をしたんだ!？」

横では雄二が卓袱台に拳を叩きつけていた

「催眠導入剤(改)…」

唐突に彩華ちゃんが呟く

「今まこ姉は、催眠術にかかったみたいになってるの。多分、根本

君に『俺に従え』とか命令されたんだと思う」

「それって真琴が持つてる薬のはずだよな？何で根本君が!？」

「……………根本に売った直後にその薬を使われた可能性が高い」

根本と取引したってこと？

そんなのいつの間に…あつ！

「あの時か！」

「あの時とはいつのことじゃ？」

「僕らが演技を終えて戻ってきた時だよ！皆に僕が処刑されてるときにいなかったじゃん！」

「そうか！あのタイミングで…」

雄二が下唇を噛んでいる

「彩華ちゃん、真琴を元に戻す方法は？」

第30問 part 2 突撃のFクラス

「薬のせいでああなってるのなら対処法は一つ、リセット薬を飲ませることだよ」

確か全ての薬の効果を打ち消す薬だよな？確かにそれならー

「いけるかもしれない！」

「ああ。薬を飲ませるだけで良いなら、今すぐにも仕掛けるぞ！野郎共、準備はいいか？」

『『『つたりめえだ！』』』

よし！これだけの人数がいればきっと助け出せる！
僕らはBクラスへと走った

（Side Out）

「（ガラッ）根本おっ！」

突然誰かが入ってきた

「どうしたんだ？Fクラス総出で来るなんて」

「しらばっくれんじゃねえよ！真琴を返しやがれ」

赤髪の男が根本君に怒鳴りつける

「何を言っているんだ？水野真琴は望んでここに来たんだぞ」

「違う！君が催眠導入剤（改）で命令したんだろ！？」

「ますます訳が分からないな？真琴、コイツらは皆敵だ。追い払え」

敵？追い払う？

「この人達を追い払えば良いんだね？」

「ま、真琴？僕達分からないの？」

「アナタ達は敵。だから追い払う。サイコフィールド」

【サイコフィールド：時空を歪め、自分と敵しか入れない空間を作り出すサイコキネシスの応用技】

「真琴！正気に戻るのじゃ！」

第30問 part2 突撃のFクラス（後書き）

「サイコキャノン」

「ぐわっ！」

エネルギー弾は赤髪の顔を掠めた。次は当てる

「ホーミングキャノン発射用意」

「真琴！ウチらのこと思い出してよー！」

「発射」

「ふぐっ！」 「明兄！？」

今度は当たったようだ

「思い出してください！私達のことを！」

「サイコブレイク・チャージ」

【サイコブレイク…その空間にある全ての物を破壊する】

「もう止めてよー！ー！」

私に似ている小さい女の子が叫ぶ。私に似てる？この人は…誰だ？

「思い出してまこ姉！まこ姉はFクラスの仲間なんだよ！」

姉？この子は私の妹？Fクラス？仲間？

「分からない」「へ？」

「私は自分が何なのか分からないの」

「…やっぱり記憶も無いのか…」

「教えて。私は何？」

「これを飲むんだ。そうすれば全て元に戻る」

差し出された手の上には薬があつた

私はそれを受け取り、飲む。瞬間

「（バタリ）」

私は気を失った

第30問 part3 反撃のFクラス+ (前書き)

Side Akihisa

「真琴っ！」

薬を飲んだ途端に真琴が倒れ、周りにあったサイコフィールドも消えた

「くっ！何故……」

根本君がとても驚いている。僕らが生きていることに驚いているんだろう

「さあ根本。覚悟は出来てるな？」

雄二が一步前に出て言う

「ワシらから」「………プリンセスを奪ったこと」「後悔させてあげるわ」「絶対に許しません」

いつもは優しい姫路さんまでもが怒っている。皆も許せないようだ

「くそっ！全員かかれっ！奴等をただで返すな！」

Bクラスの皆が指示を聞いて一斉にーかかってこない？

『てめえにはもうウンザリだ！』

『真琴ちゃんを利用するなんて酷いわ!』

『MSS団Bクラス分会会長としててめえを地獄に送ってやる!』

どうやらBクラスの皆もこの作戦に反対だったみたいだ
ていうか、MSS団ってBクラスにもいるんだね

「まさに四面楚歌だなあ根本」

「(ダッ) やられてたまるか!」

突然窓に向かって走り出す。まさか窓から? ヤバい。逃げられる

「止まれ」

根本君前に女の子が立ちふさがる。彼女は―

「夕季ちゃん!？」

ツインスwordの僕の妹だ

第30問 part3 反撃のFクラス+

「くそっ！そこをどけ！」

「消えるクズが」

手にした掃除機を構えて吸い込もうとする。って、それやったら他の皆まで入っちゃうよ!?

「ストップタ季ちゃん」

再び声が響いて

「（スタッ）アキくん久しぶり！」

「ひばりちゃんまで!?!」

バカひばworldでの僕の幼なじみ。この二人がいるなら、他にも...?

「」（パリーン）根本おおおっ!」「」

窓を割ってヒーロー登場。彼らはー

「ルイージ君達！」

「根本をぶっ飛ばしにきたぞ！」

何か前会ったときとキャラ変わってるような...あ、ヒーローだから

かな？

「覚悟してね根本。『CYCLONE JOKER!』」

「では、物理的に黙らせる」

「『死にさせ根本!』」

ああ、異世界の皆が根本をボコボコにしてるよ…

『…はっ！総員突撃だ!』

『『サイエツサー』』

忘れてたんだね須川君…

【R15位のグロ映像が流れています。しばらくお待ちください】

「報復完了」

うん。やりすぎな気もするけどこれで十分だろう

第30問 part3 反撃のFクラス+ (後書き)

「じゃあ俺達は帰るぜ！じゃあな！」 「じゃあな！」

「ありがとうルイージ君達」

ヒーローは去っていった(詩的表現?)

「では明兄、私も帰ります。真琴ちゃんを大事にしてくださいね」

「うん。ありがとう！」

夕季ちゃんも帰っていった

「じゃ…じゃあアキ君、私も帰るよ」

「あっ！ひばりちゃん待って！」

「何？」

「あつちのことはよく分からないけど、あつちの僕もひばりちゃんのことを好きはずだよ。まだ気づいてないだけでさ。だから、思い切って告白しちゃうなよ。そうすればきつとー」

「アキ君…」

「あつちの僕もひばりちゃんにとって何いってるんだろっ僕？ごめんね。ひばりちゃん」

あんまり他の世界のことには首をつっこんじゃだめだよ

「ありがとうアキ君。真琴ちゃんと仲良くね」

そう言ってひばりちゃんも帰っていった

「さて、あとは真琴が目を覚ま」ん？ここは…？」「

「真琴！」「ふえ？どうしたの？」

良かった。いつもの真琴だ

「お帰り！真琴！」

「『お帰り（）じゃ（）なさい（）。真琴（まこと）プリンセス（）ま
ご姉（）』」

「ただいま、皆！」

（Side Out）

「まこ姉…うう、本当に良かったよお (グスン)」

「そんなに泣かなくても…」

今私は彩華に抱きつかれている

「でも本当に良かったよ。根本に変なことされてない？」

「へんなことって？」

「【ピー】とか【ズギューン】とか」

「されるわけないでしょ！？変なこと言わないでよ！？」

「だって聞いたの真琴だろ？」

「やっぱり仲が良いのう」

秀吉、今言うべき台詞は違うでしょ？

「まあ。真琴がいなくて一番悲しんだのは明久かチビツ子だしな」

「チビツ子じゃない！同年！」

うん。何かいつもの光景が久しぶりに感じるよ

「改めてありがとう。皆のおかげだよ」

『『『 You're welcome, princess! 』』』

どういたしまして王女様？何その返事

「皆お前が帰ってきてきて嬉しいんだろ。気にするな」

と、雄二が言った直後

「（ガラッ）…雄二」

翔子登場

「どづした？」

「…浮気してない？」

「は？」

「…してないなら良い（ガラッ）」

…何だったんだろ？

「何なんだアイツは…?」

「さ、さあ?」

これも日常風景…かな?

「…ねえ、真琴」「何?美波」

「ちよつと一緒に来てもらえる?」

と言つて美波が教室を出る。私も少し遅れて歩きだした

Side Akihisa

「修羅場か?」「そうかもしれんのか」

雄二達がおかしな会話をしている。修羅場?何が?

「あつ!わ、私もいきます!」「駄目だ!」

姫路さんが教室を出ようとしたのを雄二が止める

「今回の件はアイツ等の問題だ。お前は今は気にするな」

「づう、はい…」

「一体何の話なんだ？」

〔Side Out〕

屋上にて

「大事な話があるの」

私は美波と話をしている

「アキのことなんだけど…付き合ってるって、本当なんだよね？」

「う、うん。そうだよ」

「アキも真琴のことが好きで、両思いなんだよね？」

「そつなるね」

「アキがウチのことを好きだったって可能性は？」

「え？何でそんなこと」「いいから答えて！」

「…あると思うよ」

「本当？」

凄い剣幕だ

「うん。友達として、だけどね」

「でもウチは…男だと…」

「思われてるわけないよ！」

「え？」

「じゃなきゃ明久があんなに素直になるわけないもん」

「素直？」

「うん。明久が本音で語り合える数少ない友達だと思うよ。美波は
きつと明久もそう言うはずだ

「ありがとう。真琴」

「うん。頑張りなよ」

特別問題その8 part1 真琴・明久のFM壊滅プロジェクト (前書き)

あの事件の翌朝

私は今、明久と登校している

「明久」 「何？」

「何か言うことは？」

「その…」

現在時刻8時30分。完璧な遅刻である

原因は明久の寝坊。きつと昨日も遅くまでゲームでもしてたんだろう
もうHR終わってる時間だよ…

「あ、着いたよ」

私達は校舎へと入っていった。この後何が起こるかなど全く知らず
に…

「待ちなさい真琴！」

『吉井！素直に罰を受けろ！』

ただ今全力逃亡中

理由は…

『てめえ学校に遅刻してまで真琴さんと何してた!?!』
というわけである

「真琴、どつする?」

「じゃあとりあえず…テレポート!」

私は明久の手を掴んでテレポートした

「どつ?真琴?」

「誰もいないよ」

Fクラス横の空き教室。よりによってFクラスのすぐ隣に来なくて
も…

「どつ、どつする?」

「どつするも何も…隠れてるしかないでしょ?」

出たらまた逃亡劇が繰り広げられるだろう

特別問題その8 part1 真琴・明久のFM壊滅プロジェクト

「全く…せっかく公認カップルになれたのに…」

「仲良くしてる分にはいいけど、イチャイチャするのは駄目ってことなのかな？」

「多分そうだろうね」

これは厄介だ。下手すれば一緒に登校してくるたびに逃げることになる

「異端審問会なんてなければいいのに…」

なければいい…あっ！

「それだ！」 「え？突然どうしたの？」

「異端審問会も明純会も無くしちゃえばいいんだよ！」

「それってどついついこと？」

「だから、あの二つが無くなれば私達は平和な学園生活が遅れるでしょっ？」

「おおっ！そっだね！」

「よし。FM壊滅プロジェクト！やる？」

「FM異端審問会」

「もちろんさ」

「私達《僕等》の平和の為に！」

よし。早速作戦開始だ！

楽しくなってきたぞ！

特別問題その8 part1 真琴・明久のFM壊滅プロジェクト (後書き)

J「どうも！とある事情（RSS感想一覧参照）により臨死体験してきた作者です」

明「弔い合戦に負けた明久です」

真「作者さんを殺そうとした真琴です」

J「お前のせいで！俺はっ！」

真「私の写真広めたのが悪いでしょ!？」

J「そもそもそんな写真を撮ったのが悪いんだよ!」

真「確かに（チラッ）」

明「何で僕を見るの!？それより今回の話のこと話そうよ!」

J「そうだな。」

FM壊滅プロジェクトだっけ？」

真「そうだよ」

J「きつと無理だ。止めとけ」

明「え？なんでさ?」

J「ていうか、お前等そんなことしてまでイチャイチャしたいのか

？変態だなんて真琴？またか？また俺を殺す気なのか？」

明「落ち着いて真琴」

真「平和の為！あのままにしといたら私達は不便なの！分かる？」

」「という建て前で実は……」

真「違うわよ！」

明「真琴とイチャイチャ……（ブシヤアアツ）」

真「アンタ何想像したのよ！？」

」「ではでは」

特別問題その8 part2 仲間を集めていざ行かん (前書き)

キーンコーンカーンコーン

「時間だね」「うん」

「じゃあ戻ろうか」

私達は空き教室からFクラスへと戻る
入った瞬間

『『『ちっ』』』

と舌打ちが聞こえてきた

ギリギリに戻ってくれば皆は追ってこれない。我ながら良い作戦だ
でも、この時間が終わるとまた逃走劇が始まるだろう。そうなる
とまた大変になる

だから私達はこの授業と次の間に仕掛けることにした。そのために、
仲間を集める必要があるんだけど…

「(ガラッ)皆いるな?授業を始めるぞ」

誰に言えばいいだろう?

女子で私の味方になってくれる人…彩華しかないか

「>彩、聞こえる?<」

「>何?まこ姉?<」

ちなみに、この間ずっと真面目に授業を受けている

「>FFF団と明純会って分かるよね？<」

「>うん。分かるよ<」

「>その二つをね、潰したいの<」

「>理由は分かるからいいとして…どうやってやるの？<」

「>え？理由分かるの？<」

「>明兄とイチャイチャしたいとかそんな感じでしょ？まこ姉の考えはお見通し<」

「>違うからね！？どうだって顔してるけど違うからね！？<」

きつと今私の顔は真っ赤だろう

特別問題その8 part2 仲間を集めていざ行かん

「>じゃあそついでにとにして、どうやるの？」

「>二つを争わせて共倒れさせる」

「>…詳しく教えて」

「>うん。FFF団の皆は男子、私達女子と付き合いたいと思うよね？」

「>そうだね」

「>でも女子側には明純会があつて付き合えない」

「>うんうん」

「>それを理由に戦いを挑ませる。負けた方の団体は解散してルールをつけてね」

「>それで片方を解散させるの？」

「>いや。引き分けにして両方を解散させる」

「>でも、引き分けになる確率って低いよ」

「>その為の私達だよ。明純会側に私と彩、FFF団側に明久と雄二。この4人のサクラがいれば何回勝負になるかと引き分けにできる」

「>おおっ！すごい考えだね！いいよ。協力する<」

「>ありがとう！彩<」

よし。こっちはOK

「>明久、そっちはどう？<」

「>雄二も手伝ってくれるってさ<」

よし。これなら行けるね！

キーンコーンカーンコーン

「よし。今日はここまでだ」

もう時間か。結構早かったね

『『『吉井いいい！』『』』

「ストップ皆！話を聞いて！」

『話とは何だ？言い訳は聞かんぞ』

特別問題その8 part2 仲間を集めていざ行かん (後書き)

「そうじゃなくてさ。皆、女子と付き合いたくない？」

『『『詳しく聞かせろ!』』』

わあ。凄い食いつき。これなら大丈夫かな？私は時間稼ぎでもして
ようか

「美波に瑞希！」

「何よ真琴」「何ですかまこちゃん」

話しかけたは良いけど何話そうか…

「明久のことなんだけど…」

私のバカっ！何で明久の話なのよ!？

「明久君がなんですか？」 「付き合いってることの自慢じゃないわ
よね？」

えーと…えーと…付き合い…明久…

「いつそのこと、三人とも明久と付き合いっちゃわない？」

バカあつ！私バカあつ！何言っちゃってんの私？

「え…皆で明久君と付き合いって…」 「ま、真琴はそれで良いの

「？」

あれ？以外と好印象？

「皆がそれでいいのなら、私もいいよ」

とりあえずその場しのぎの答えを…

「うう…考えてみるわ」「わ、私もそうします」

しのげてない！？これだと本当に明久がハーレム状態になっちゃうよ！？何か言わなきゃ…

「お前等、ちよつと話があるんだが」

タイミング悪いよ雄二！

「何？坂本？」

美波が返事をする

「俺達FFF団とお前等明純会で勝負しろ！」

まあいいや。今は作戦に集中しよう

特別問題その8 part3 対決開始！ (前書き)

「目的は何なの？須川」

「はつきり言っただ邪魔なんだよ明純会が。俺達男子の妨げにしかないからな」

現在、明純会代表である美波とFFF団代表の須川君の交渉が行われている

「まあいいわ。こっちにとっても好都合だし。ね？真琴？」

「うん。そうだね」

何でそんなに乗り気なんだろう？もう少し警戒すると…あっ！私のあの言葉のせいかな！

「OK。だったら話は早い。召喚獣同士の5vs5バトルで勝負だ！負けた方が解散な」

「でも、こっちには4人しかいないのよ？」

あ、確かに。でもそれなら

「誰かが二回やったらどうかかな？」

「そうだな。真琴さんと姫路さんはないとして…彩華ちゃんあたりが二回やれば」

「私？別にいいよ！ね、美波ちゃん？」

「うん。それでいいわ」

これはラッキーだ。上手くいけば5戦すべての勝敗を握れる

「よし。じゃあ早速やろう！」

「え？でも召喚フィールドは？」

「それなら私ができるよ」

知らない人のために効果の説明。私の持つ黄昏の腕輪・改は起動や
ダブル二重召喚の白金の腕輪の効果に加え、融合や複写などのオリジナル
の効果も使える腕輪なのだ

特別問題その8 part3 対決開始！

「教科の選択権だけど、明純会が3つ、FFF団が2つでいいかな？」

「別に構わないぞ」

「よし。じゃあ最初は誰が出る？」

「じゃあ最初はウチが出るわ。科目はすうが「なら僕が相手だ！科目は古典で！」

ナイスフォローだよ明久！私と瑞希は絶対勝つだろうから、ここは負けさせないとね

「よし。古典セツト選択、アウェイクン起動！」

「サモン試獣召喚！」

「ええっ！古典！？うう…サモン試獣召喚」

『Fクラス	吉井明久	VS	島田美波
古典	103点	VS	9点

明久の召喚獣の木刀が叩き込まれ、美波の召喚獣が消えた

「FFF団1勝だよ」

『『『『よっしやああっ…』』』』

FFF団側にかかる歓喜の声

「戦死者は補習だ！」

こっちでは美波が鉄人に連行されていった

「じゃあ二戦目は私がいくよー！」

「…棄権させてもらおう」

うん。予想通りだ

「じゃあこれで1対1だね。次は？」

「私がいくよっ！」

彩か。えーと…残りは瑞希と彩の二回目だからー

「>彩、こっちは負けてく」

「>了解！<」

特別問題その8 part3 対決開始！ (後書き)

「……………俺が出る。科目は保健体育」

相手は康太か。これなら普通にやっても負けちゃうね

「分かった。保健体育選択、セット起動！」

「サモン試獣召喚！」

『Fクラス 水野彩華 VS 土屋康太
保健体育 261点 VS 692点』

彩も保健体育高いじゃん！愛子みたいに実技タイ…忘れよう
そうこうしてるうちに彩の召喚獣が切られて消滅した

「これで2対1だよ。次は？」

「私ですね」

もちろん瑞希だよ

「じゃあ俺が出よう」

相手は雄二。うん。ナイス雄二。次にしちゃうと引き分けに出来な
いからね

「ただいま」

「あ、美波。補習は終わったの？」

「うん。模擬試召戦争中だから早めに切り上げてくれたってさ。彩華ちゃんは二回でるから補習はまだしないようになって言ったよ」

「ありがとう」「で、今どうなってる？」

「今1対2で負けてる。でも次は瑞希だからまた同点になるはずだよ」

「じゃあ最終戦に勝負は持ち越してことね」

「おい！もう良いか？」

「あ、ごめんごめん。科目は？」

「家庭科のクイズ形式の勝負で頼む」

え？今なんて…？

特別問題その8 part 4 まさかまさかのクイズ対決!?? (前書き)

「ゆ、雄二?今なんて...?」

「ああ。家庭料のクイズ対決。ジャンルは料理で頼む」

...何?何で?ここにきて雄二の裏切り!?

「でも...最初に言ったよね?召喚獣同士の戦いって...」

「それなら、召喚獣を使えば問題ないだろう?そうだな...正解したら相手の召喚獣に一撃加えられるとかどうだ?」

「吉井。何で真琴さんはあんなに焦ってるんだ?」

「実はね...姫路さんって(ゴニヨゴニヨ)なんだよ」

言ったね。絶対言ったね

『『『賛成だあっ!』『』』

やっぱり!明久のバカあつ!今更しまつたって顔しても遅いよ!

「あの...まこちゃん。私は別に良いですよ」 「そうよ。瑞希なら大丈夫よ」

そうか...二人は分かってないんだ...

「ほら。選択権は今こっちにあるんだし、そっちもOKなんだろ?

「じゃあ始めようぜ」

「分かったよ…家庭科選択、セット起動」
アウェイクン

「サモン試獣召喚！」

二人の召喚獣が喚び出される
点数は同じくらいか…

「じゃあ、私が口頭で問題出すから。正解した方は一回攻撃できる。
どっちかが倒れるまで続くよ。良い？」

「OKだ」「分かりました」

「ここはあえて簡単な問題で…」

特別問題その8 part4 くまさかまさかのクイズ対決!??

「第1問。りょうりのさしすせそ、』さ』は何?分かったら手を挙げて」

「はいっ!(スッ)」

「どござ瑞希」

「酢酸ですか?」

違うよ!ぜんぜん違うよ!

「違うよ。雄二は?」

「砂糖だな」

「はい。正解ね」

やっぱりこの勝負、無謀な気がするよ...周りの皆若干引いてるし...

「じゃあ雄二。攻撃どうぞ」

雄二の召喚獣が瑞希の召喚獣を殴りとばす

うわ。半分減ったよ...あと1回ってとこかな?

「第2問。食塩(塩化ナトリウム)の化学式は?」

「(スッ)(NaCl)です!」

「正解！一撃どうぞー！」

よし。こういう問題ならいける！お互いにあと一撃かな？

「じゃあ多分最後の問題。しょっぱいお味噌汁があったとします。これを甘くするにはどうしたら良いですか？」

瑞希、砂糖を入れるとかでも良いよ！だからお願いっ！

「（スツ）アルカリ性の薬品を加えて中和させると良いと思います」

…予想の斜め上をいったね…

「じゃあ雄二…」

「砂糖を入れるは…流石にまずいから…」「もうそれで良いよ…」（泣）
「そうか？それならー」

無情にも瑞希の召喚獣が消え去り

「これで3対1。俺達の勝ちだ！」

私達の敗北が決定した

特別問題その8 part 4 〱まさかまさかのクイズ対決！？〱（後書き）

「瑞希にあんな弱点があったなんて…」 「だから止めようっていったのに…」 「あつ…ごめんなさい…」 「あんなに酷かったんだ…」

葬式ムードの私達に

「さあ俺達の勝ちだ。明純会は解散だな」

須川君が淡々と告げる。まあ、片方解散っただけでも私の目的は達成なんだけど…まさか雄二が裏切るとは…仕方ない。アイツには拷問の異世界バージョンを受けてもらおう

「分かったわ。明純会は今日で解散よ」

潔い美波の返事。あれ？何でそんなに平気そうなの？

「「アキ（明久君）っ！」「」

「何？美波に姫路さん」

「「ウチ（私）と付き合いなさい（付き合いってください）！」「」

ああっ！そういうこと！？縛り付けるものが無くなったから！？

「いいよ」

明久あっ？何で？私だけじゃ駄目なの！？

「「本当なの（ですか）！？」」

「うん。買い物とか映画ぐらいなら。それ位なら良いよね？真琴？」

「もちろん！私もいくけどね！」

良かった。バカで良かった

「アキのバカっ…」 「明久君らしいといえばらしいんですけど…」

うん。二人には悪いけど、これで一件落着だね！

特別問題その9 part1〜何であなた達がここに…?〜 (前書き)

「明久〜(ユサユサ)」

週末。私は今明久の部屋にいる。理由はデートに行くためである。もちろん待ち合わせはしてるけど、あえて一緒に行くことにしたのだからなみに、彩華は美波の妹の葉月ちゃんと遊んでいる。きつとあの二人の精神年齢は同じくらいだろう。それにしても起きないな…また複声薬でー

「吉井っ！早く起きんか！」 鉄人ボイス

「(ガバツ) 起きましたっ！起きたから鉄拳は止めて！ってまた真琴!?!」

効果は抜群だ

「さっさと支度して！待ち合わせまで時間無いよ!」

「うわっ！本当だ!」

只今9時40分。待ち合わせは10時である

「ちょっと顔洗ってくる!」

そう言って部屋を飛び出していった。さて、家宅捜索でもしようか

【注・犯罪です。絶対に真似しないでください】

「9時50分 待ち合わせ場所へ向かう道にて」

「明久？」 「何？真琴」

鞆から何冊かの雑誌を取り出しながら

「これな」（バツ）どうしたの？真琴？」

光の速さで奪われた

「で、今の本はな」あ、姫路さん達だ！おい！」

とことん逃げるつもりね…あとでお仕置き確定

特別問題その9 part1〜何であなた達がここに…?〜

「あ、明久君に…まこちゃん?」 「ちよつと真琴!何でもう一緒にいるのよ!?!」

「それは朝真琴がしんにゆ」家が隣だから一緒に来ただけだよ」

「それより皆。今日はどこいく?」

「ROUTE2は?ちよつと遠いけど」

【現実世界のROUND1だと思ってください】

「もちろん賛成よ!二人は?」

「僕もOKだよ」 「私も良いですよ」

いざ、ROUTE2へGOー!

〜10分後〜

「着いたあぁっ!」

「はしやぎすぎだよ二人共…!」

だつて楽しみだもん

「まずはどこに行くんですか？」

「カラオケ（よ）」

今日は美波と気が合うなあ…

「え？カラオケ！？」「カラオケですか？」

「もちろん。皆歌うからね！」

「ええっ！！」

では、カラオケルームへ！って…見覚えのある人が…

「（ヒソヒソ）美波ちゃん。あの人達、何をしてるんでしょうか？」

「さあ？でも、近づかない方が良いわよ」

ゆっくりと一つの部屋の前に集まっている人達に近づき―

「何やってるんですか？ルイージにフォックスに冬美さん？」

「真琴ちゃん！？」「おや、アンタが真琴ちゃんかい」

特別問題その9 part1〜何であなた達がここに…?〜 (後書き)

「真琴?この人達は?」

「紹介するね瑞希に美波。この二人が左からルイージとフォックス。この方が紅葉君のお婆さんの冬美さんだよ」

「「紅葉(君)の!?!?!」」

男三人が驚いてる。皆紅葉君がらみで嫌なこととかあったのかな?

「とにかくよろしくね」

「「「よ、よろしくお願いします」」」

結構緊張してるねえ

「それで、何してたの?」

私が聞くと、フォックスが無言で中を指さす中を覗くと…

「あなた追って出雲崎〜悲しみ〜の日本海」

あれは…クリスマスちゃん!?もう一人は…

「おーっ!凄いなクリスマスさん!」

須川く…いや、RSSの須川君か!?

「須川あつ！」

ええっ！？明久！？何で突入？

「よ、吉井！？」「やあアッキー！でえとかなん？」

何でRSS須川君とクリスマスちゃんが一緒に…あ、まさか！

「（カチカチ）」「何をしてるんだ真琴さん？」「メールだよ」

from真琴 toさくら

『そっちの世界の須川君がバカひばのクリスマスちゃんを無理矢理連れ回してるよ』

送信中

「な、なんてことをするんだ！？」

「クリスマスちゃん。どうしたの？脅迫された？」

なぜこの二人が！？

特別問題その9 part2 クリスと須川でクリ須川 (前書き)

「須川、脅迫は犯罪よ?」 「今ならまだ間に合います。自首してください!」

「なぜ俺が犯罪者のように!?!」

本当に、何で全く接点のない(はずの)2人がこの世界でデートしてるんだろっ?

「ちっちっちっ、まこりん違うんだよねい、脅迫じゃないんだよね
」

「じゃあ何?」

「実はお姉さんはすがっ…キングに奴隷のような扱いを「
須川(君)つつっつ!」「
」

「酷いよ!酷すぎるよ!」 「自分のことをキングって呼ばせるなんて…」 「見損ないましたよ!須川君!」 「貴様を地獄に送つてやる!」 「異議なし!」

「(ポン) 須川や、悪いことは言わないよ。止めておきなさい」

「違うぞ!違うからな!冬美さんも同情止めて!」

「あはははっ!すがっちおもしれー!あはははっ!」

あれ?今の嘘?

「本当に弱み握られてないんだね？」

「んむ、そういう事実はないよん」

良かった。でも、クリスちゃんに握られて困る秘密なんてあるのかな？

「秘密ならいっぱいあるけどねい」

なんで分かったの！？

「およ？前にもこんなことあったりなかったり？既視感デジャヴって奴かねい？」

特別問題その9 part2「クリスと須川でクリ須川」

「で、本当は？」

「んむ。今から3日前のことだよん」「3日前!?!」「」

そんなにこっちの世界にいたんだ…

「まこりんの後をつけていたすがつちを」「」「」「須川(君)つつつ!」「」「」「」

え?私、つけられてたの?

「」「真琴まこりんをつけてただと(ですって)「?」「」「」「コスモス!」「変身!」「」

「クリスっ!誤解を招く言い方をするなっ!そしてその2人!変身するな!」「

「うはははっ!は、腹いてっっ」

「もう俺が説明する。事の始まりは真琴さん達がFM壊滅プロジェクトを始めたことだ」

「Side RSS Sugawa」(回想)

「くそっ!もう終わっていたか…!」

「ウチ（私）と付き合いなさい（付き合いってください）！」

何！？吉井め、真琴さんがいるというのに姫路や島田と付き合いだ
と！？許すまじ吉井！

Today's morning

「吉井に制裁を加えるにしても、どうするか…」

「おやおやん？そこにいるのはRSSのすがつちかなん？」

「君は、バカひばのクリスマスさん？」

「にゅふふ、クリスマスで良いよん すがつちは何してるのかなん？も
しかしてストーカーなのかなん？」

特別問題その9 part2 くりスと須川でクリ須川 (後書き)

「違うぞ！俺はただ吉井をどうやって殺そうかと」

「ふむ。よーするに暇なのかなん？ならば！おねーさんとデートしようぜ」

「え、いや、俺は…」

Side Out

それで今に至るわけか…

「クリスちゃん？」 「何かなん？」

「クリスちゃんは何しに来たの？」

「すがつちとデートだよん」

「最初からそれが目的か!？」

うん。クリスちゃんはそういう人だよ…

「どつする真琴？このままクリリン達と一緒に遊ぶ？」

「クリリンってクリスちゃんだよね…?」

「そうだけど、クリリンは？」

「おねーさんはおーけーだよ。おふこーすだよ」

君はアメリカにいただろ…？

「じゃあ私もいいよ。2人は？」

「私はいいですよ」「ウチも」

「本音は？」

「「どうせ2人つきりになれないから」ので「皆で遊ぼうと思ったの」(思いました)」「」

予想通りだね。まあ楽しむか

そして、2時間後

「今日はなかなか楽しかったよ」「完全に当初の目的と変わってたけどな」「それは言いつこなしたよ」

「ありがとう3人共。私も楽しかった」

冬美さん・ルイージ・フォックスを見送る

「クリスマスにRSSの須川君、もうデートは良い？」

「ああ。ありがとう真琴さん」「また来るよん」

「うん。またね」

2人も見送る

「真琴、帰るよ」

「今行くよ」

私もいつもの日常へと戻ることにした

都合により、part3を削除し、後書きに追加しました

第31問 part 1 嵐はいつも突然に (前書き)

デートが終わった翌日の日曜日。私は研究室にこもって新薬を開発中
彩華は再び葉月ちゃんと遊びにいったから、暇なのである
これを加えて…

「よし。完成」

ピンポン

ん？誰だろう？明久かな？

「はい。どちら様で…」

バスローブ姿の女の人を立ていて

「メイド服を貸していただけませんか？」

そう言われた

Side Akihisa 10分前

真琴達とデートをした次の日

「よっ！ほっ！とっ、と」

僕は今ゲームをしている

一昨日の放課後、雄二とこのゲームをやってボロボロに負けた
アイツに負けるなんて納得できない。次こそは勝つ！

ピンポン

あれ？宅配便かな？

「せっかく今いいところなのに……」

この後どうするかで勝負が変わってくるんだけど
仕方がない。一時停止してと

「はい。どちらさまですかー？」

……この人は……

「……ね、姉……さん……？」

「はい。お久しぶりですね、アキくん」

そう言って、僕の姉は微笑ん……って

「なんでバスローブ姿なのさーっ!？」

第31問 part 1 嵐はいつも突然に

僕の目がおかしいのか？違うよね？それは絶対にバスローブ姿だよね？なんで外から来た人がそれを身につけてるの？

「まさかアキくんは姉さんの頭がおかしくなっただと思ってませんか？」

それ以外に何があるというのだろうか？

「まったく…そんなに大声まで出して、非常識ですよ」

「姉さんの方がよっぽど非常識じゃないかあっ！」「と叫ぶのをこらえて

「何でそんな格好で来たの？」

と聞いてみた

「いいでしょう。今日は暑かったこともあって、姉さんはたくさん汗をかいてしまいました」「うん」

「途中でふと気づいたのです。1年ぶりの再会が汗だくの姿で良いのだろうか」「うんうん」

「いくら会つのが肉親とはいえ、身だしなみには気を使うべきです」「そうだね」

「そこで、全身の汗を何とかする為に姉さんはバスローブに着替え

ました」

「ダウトッ!」

思わず叫んでしまった

「嘘ではありません。真実です」 「突っ込むところそこ!?!」

「とにかく、中に入れてください。姉さんは母さんにアキ君の生活をチエックせよと命じられているのです」

…生活チエック?

「姉さん、あれは何だ?」

「何ですか?」

バタン ガチャッ

第31問 part1 嵐はいつも突然に (後書き)

ピンポーン 「アキくん開けてください。姉さんはまだ家に入って
ませんよ?」

母さんめ…やり方が卑怯すぎる

ピンポーン 「どうしたのですか?バスローブが気に入りませんで
したか?」

突っ込んだじゃだめだ突っ込んだじゃだめだ…

「分かりました。アキくんを納得させてあげます」

? どういう意味だろう?

ピンポーン

隣の家から聞こえてくるチャイム音…ってまさか!

「その家はダメだあつ!」

真琴がいるんだよ!?

Side Out

神「神哉と」 彩「綾華の」

神・彩「戦後対談！」

彩「また空気…」

神「ツインズに出たからいいだろ？」

彩「まこ姉に何か言われた？」

神「三途の川を見てきた」

彩「お疲れさま」

神「さて、次回、玲と出会った真琴はどうなる？ 次回もお楽しみに」

彩「今回の話のことに触れてないじゃん」

第31問 part2 まさかまさかの展開!?? (前書き)

「あら?まこちゃん?」

「え...?玲さん?」

なぜ玲さんがここに?

「姉さん!その家はダメだ!」

あ、明久。何をそんなに慌てて...あ...

「そういえばまこちゃんは隣に住んでいましたね。お久しぶりです」

「お、お帰りなさい玲さん...」

何で慌てているかって?メイド服を貸せって言われたことじゃない。私と明久が付き合ってることが問題なんだよ

「ちょうど良かったです。お話したいことがありますから、私達の家に来ていただけますか?」

「ね、姉さん?ダメだよ!真琴にだって予定が...」何をそんなに慌てているんですかアキ君?別に家が散らかっていても怒りませんので、大丈夫ですよ」「

違いますよ!明久が心配してるのは、あなたとの約束のことですよ!

「さて、行きましようか」

玲さんは自分勝手なところがあるからなあ…

所変わって吉井家

明久のゲームが消されたけど今の私達にとっては些細な問題だ
私達が付き合ってることがバレたら…

「まず私が戻ってきた目的ですが、アキくんの生活チェックをする
為です」

「そうなんですか。でも、明久はごく普通の生活を送ってますよ」

「ここは明久を守っておこう」

第31問 part 2 ～まさかまさかの展開！～

「そうですか。まこちゃんが言うのなら間違いないでしょう」

明久、これでマトモな生活を送らなくちゃダメになったよ

「では、アキくんの異性関係はどうですか？」

やはりそれを聞くか…

「アキくんが私との約束を守れているのかの確認です」

約束の一つ、不純異性交遊の禁止。私達のコレはそれを破っているだろう

「姉さん。その約束、忘れたって言ったらどうする？」

「骨を叩き折ります」

あれ？この人ならお嫁に行けなくなるほどのチュウをするとか言いそうなのに…

「ではアキ君。私が出した条件を言ってみてください」

「う、うん。『ゲームは一日30分』、『不純異性交遊の禁止』だよね？」

「所々間違っていますよ」

「「へ？」」

「良いですか？私が出した条件は『ゲームは一日30分』、『まこちゃん以外との不純異性交遊の禁止』、『まこちゃんを泣かせない』ですよ」

…私、凄く擁護されてない？

「何で真琴以外なの？」

「貴方のように情けない上に生活力もなく、頭も悪くてブサイクな男の子を相手にしてくれる女の人は、姉さんの他にはまこちゃんしかいないからです」

明久、言われまくってるなあ

第31問 part2 まさかまさかの展開!?? (後書き)

「それで、どうなのですか?一つ目は先程守れていないと分かりましたが、残りの二つは守られていますか?」

私以外の異性交遊…美波とのキスかな?私は…覗きの時に泣いた気がする

「ま、守れています」「どうやら守れていないようですね」「…え?」

「まこちゃんが良いよどむのは、嘘をついている証拠です」

…ドンマイ明久

「仕方ありませんね。後で減点しておくしましょう」

減点?

「ところで、アキくんはまこちゃんと付き合っているのですか?」

…あれ?なぜバレた?

「ね、姉さん?突然何を「嘘をつかなくても良いですよ。私にとっても喜ばしいことですし」「…うぐう」

「で、どこまで進んでいるのですか?もう一緒に寝ましたか?」

「」「何てことを言うんですか(のさ)!!」「」

わ、私と明久が…一緒に…プシュウ…

「わわっ！真琴大丈夫？」

ピンポーン

「明兄〜！」

この声は…

神「神哉と」 彩「彩華の」

神・彩「戦後対談！」

神「玲さんは大胆だなあ」

彩「そうだねえ」

神「でもってこのタイミングでモゴモゴ」

彩「言っちゃダメだよ」

神「それでは、また次回」

第31問 part3 驚愕の新事実 (前書き)

「明兄〜！」

「お客さんみたい。ちょっと行ってくるね」

そう言つて部屋を出る明久。今の声…まさか…

「まご姉〜」

やっぱり彩華か！

「どうしたの彩？葉月ちゃんと遊んでたんじゃないの？」

「遊んでたよ 隠れんぼとかして」

隠れんぼ…って

「アンタまさか！」

「家に隠れに来ましたっ！」

「「ええええっ!?!」」

葉月ちゃん困ってるよ…絶対に…

「まご姉、あのお姉ちゃん誰？」

「あ、紹介するね。この人は明久のお姉さんの吉井玲さん

玲さん、この子は私の妹の彩華です」

「玲…?」 「彩華…?」

ん?どうしたんだろう?

「アッキー(アカちゃん)!?」

…え?

「アッキーだあゝ 久しぶりゝ」 「アカちゃんはまこちゃんの妹
だったんですね。お久しぶりです」

「「どういこと?」」

あ、明久とハモった

「私とアッキー(アカちゃん)は、同級生なんだよ(なのです)」

「それってもしかして…」

「ハーバード大学だよ(です)」

「嘘!?!」

第31問 part3 驚愕の新事実

「彩華ちゃんもあつちでハーバードに通ってたの？」 「うん そ
うだよ飛び級で」

「でも彩、頭あんまり良くないはずだよね？」 「アカちゃんは授
業中寝てるか絵を書いているかでしたもんね」

これは驚きだ。まさかあつちで通ってたのがあのハーバード大学だ
つたなんて

「二人共、知らなかったの？」

「まこ姉アキくんのことで頭が一杯だった(でした)」 「」

あ…そうですか…

「どうやって入ったの？」 「母さんが毎日学長にお願いしてたよ
入学したのは10歳の時」

彩がアメリカに行ったのが10年前で7歳の時だから…母さん3年
も説得し続けたの!?

「彩華ちゃんは真琴のお母さんに似たのかもしれないね」 「そう
ですね」

あの頑固な所は母さん譲りか…
どうしよう? またややこしいことになりそうだぞ

「では、アカちゃんも来たことですし、そろそろ夕飯の準備を「僕
がやるよ!」「私も手伝うよ!」「」

「姉さんは彩華ちゃんと思いい出話でもしてて!」「」

「>彩、よろしく<」「>よく分からないけど了解!<」「>

まずは目先の問題をどうにかしよう

第31問 part3 驚愕の新事実 (後書き)

神「神哉と」 瑞「瑞希の」

神・瑞「戦後対談!」

神「出たな必殺料理人2号」

瑞「1号は誰ですか?」

神「お前だよ」 瑞「ええっ!?!?どうしてですか?」

神「野菜の洗い方は?」

瑞「えーっと、まずタワシにクレンザーを付けて… 神「お前は絶対に料理するな!」 ええ!?!?」

神「つたく…話を戻すが、彩華はハーバードに通ってたんだな。7年も…あれ?おかしいな?」

瑞「計算が合いませんね」

神「ずっと1年で留年してたんじゃないの?」

瑞「ありえますね…」

神「次回・第31問突入。明久はどう動くのか?」

瑞「次回もよろしく願いします!」

〈彩華・玲のアメリカ年表〉

10年前	彩華（当時7歳）	玲（当時1
3歳）		
9年前	アメリカに移住	中学校入学
8年前	母による学長の説得	
7年前		中学校卒業・高校
入学		
6年前		
5年前	ハーバード大入学	高校卒業・ハーバ
ド大入学	この時初めて会う	
4年前	（母の説得により）	
3年前	（＃）	
2年前	（母の説得もむなしく）留年	ハーバード大卒業・
社会人に		
昨年	（＃）留年	
	〈今に至る〉	

真「母さん凄いなっ！」

彩「凄くないよ！私、卒業できなかったんだよ！」

真「いや、大学3年までいけただけで凄いや…！」

第32問 part1 噂というものは広がるのが早い (前書き)

Side Akihisa

「姉さんが来てしまった…」

姉さんが来た次の日の朝。僕は今一人で登校している

「このままだと…社会的な死を迎えることになっちゃっよ…」

今朝も僕の部屋に姉さんが入り込んできていた。おはようのチュウを迫られたり、減点されたりして、朝から散々だった

この減点っていうのは、僕の生活に悪い所があると減っていくもので、次のテストではこの減点の分を取り返さなくちゃいけない。さもないと姉さんがこっちにずっと居座ることになってしまう

「それだけは何としても避けなければ！」

姉さんにまともな生活を送っていると思わせるために僕は泣く泣くゲームを売り、こうしてまともな格好で登校している。でも、流石に長くは持ちそうにない。どうすれば…

「そつだ！真琴に助けてもらえば良いんだ！」

よし。早速真琴にメールを…

from 明久 to 真琴

『お願いがある。今日、真琴の家に泊まってもいいかな？理由は言えないけど…』

よし、送信。真琴は理由を知ってるはずだから、これで分かるだろう

Side Out

初めてのキスはやっぱり

あ、メールだ。明久？どうしたんだろう？

第32問 part1〜噂というものは広がるのが早い〜

『お願いがある。今日、真琴の家に泊まってもいいかな？理由はいいないけど…』

明久が！？家に！？

え、何で？どうして？理由は言えないけどって、何で？確かに付き合っではいるけど、まだ早いっていうか…なんていうか…

「まこ姉〜誰からメール？」

そう言っつて彩華が後ろからメールを見て…

「ええっ！？明兄が家に泊まりに来るの！？」

と叫んだ。教室中に響きわたるほど大声で…

『何だ（じゃ）とおおおお（何ですつてえええ）！』

私達と明久を除く皆が怒鳴り声をあげた

「皆ダメだよ！まこ姉と明兄は付き合っつて『そんなの知るかあああああっ！』…あれ？」

彩華の説得も、FFF団の声によってかき消された

「もう我慢ならん。吉井が来た瞬間に殺す」

「須川、今回は俺も参加させてもらっつ」

「もちろんだ坂本。協力してアイツを殺ろう！」

変な友情が芽生えていた

「真琴、アンタ何をしたの？」 「返答次第ではただじゃ済みませんよ」

「何もしてないよ！アイツが突然…」（ガラツ）皆おはよ〜っ」「
そんな最高のタイミングで明久がやってきて…

『吉井を殺せえええっ！』

すぐに地獄に墮とされた

第32問 part1〜噂というものは広がるのが早い〜（後書き）

神「神哉と…」 彩「彩華の…」

神・彩「戦後対談…」

神「カオスだな…」

彩「そうだね…」

……

彩「ていうか作者！約2週間ぶりだね！何してたの！」

神「突然怒られた!？」

彩「今までほったらかしにして、何してたのよ！」

神「理由は2つあるんだけど…1つ目、受験勉強が忙しいんです」

彩「……………」

神「（何故黙る…？）2つ目、原作の5巻が消えました」

彩「言い訳だね」

神「一言で片づけられた!？」

彩「とにかく、なるべく早く書くようにしなさい！分かった？」

神「は、はいっ！（こんなキャラだっけ？）」

彩「何か言った？」

神「せ、宣伝です！ヒヨウガさんの『バカとテストとサーヴァント』に、真琴・彩華が登場いたしました。ぜひご覧ください！」

彩「さっきこんなキャラだっけって思ったでしょ？」

神「で、ではまた次回！」

彩「……………」

第32問 part2 女の子の部屋って凄い！by明久（前書き）

神「受験終了！バカ天再始動です！」

真「お帰り作者！」 彩「おかえり」

神「久々なのでまずは前回のあらすじからです。明久よろしく！」

〽前回のあらすじ〽by明久

それは突然の出来事だった

僕が教室に入った瞬間、FFF団の皆が血相を変えて僕に襲いかかってきて…僕は意識を失った

そして気がついたら、僕はベッドに横たわっていた。たくさんの人形に囲まれながら…

神「ではスタートっ！」

第32問 part2 女の子の部屋って凄い！by明久

Side Akihisa

「……………え？」

この状況はなんだろう？保健室？いや、それならこんな大量の人形は置いてないはずだ
だとしたら…ここは誰かの部屋の中か？でもいつたい誰の…？

「あ、目が覚めた？」

考えているうちに誰かが部屋の中に入ってきた。背が高く髪が長くて胸が…

「Fか…」

「ほえ？確かにあつちの世界ではFクラスだけど…」

はっ！つい思ってたことが口に…でもまあ勘違いしてるみたいだし大丈夫かな？

「え…つと、君は誰？」

「私は相沢綾菜。レフェルの世界から来たの。よろしくね バカ天世界の明久君」

「う、うん。よろしく…」

ちょっと待て僕、何でドキドキしてるんだ？こんな初対面の女の子

に…

「どうかしたの？」

体を屈めながらそう聞いてくる。角度的に……

「煩惱退散！煩惱退散っ！（ガンガン）」

「ちょ、ちょっと!？」

「はあはあ…落ち着いた…」

僕には真琴がいるじゃないか！こんなこと考えちゃだめだ！

「ところで、綾菜ちゃんだっけ？ここはどこなの？」

周りにある人形を見渡しながらそう聞く

可愛い人形が多いから、女の子の部屋かな？

「え〜っと、真琴ちゃんの部屋だよ」

「真琴の!？」

「うん。真琴ちゃんから、私が帰るまで寝かせててちょうどいいって頼まれたの」

そっか…気絶した僕を心配してくれたのか

「そろそろ帰ってくる時間のはずだけど…」

ん？そろそろ帰ってくる？
壁にかけられた時計を見る
もうこんな時間！？

「僕、そんなに寝てたの？」

「うん。満身創痍だったからね」

言われて自分の体を見ってみる
見ると、腕や足に包帯が巻かれていた

「これ…綾菜ちゃんか？」

「うん…一応ね」

巻かれた包帯を改めてみると、不器用ながら必死で巻いたのが分かった

「何とというか…ありがとう」

「これ位なんともないよ」

なんていい子なんだろう。真琴にも見習っ

P r r r r

「あ、真琴ちゃんから電話だ」

そう言っつて綾菜ちゃんは部屋を出て行った
それにしても…噂をすれば何とやらって本当なんだね

「真琴の部屋かあ…」

改めてあたりを見渡す。いかにも女の子って感じの部屋だなあ

「そうだ！」

ふいに頭のあの写真の映像が蘇った

強化合宿の時の、裸の真琴を写したあの写真の映像が…

この部屋のどこかにオリジナルの写真があるはず…

「…も、元々僕が写した写真だから、探す権利はあるよね？うん、
そうだよ」

頭の中でそれを正当化して、そつと立ち上がる

あるとしたら、机の中だろうか

ゆっくりと近づいて、引き出しを開けてみる

中には、大量の紙の束

「アンナコトイイナ？それにマジホレールEX？」

何かの暗号だろうか。難しい資料だなあ

そんなことを思いながら、引き出しを閉める

他にあるとしたら、タンスとかかな？

再びゆっくりと移動して、引き出しを開ける

中には…可愛い下g

「（パタン）……………」

危ない方向に思考が行くところだった…せ、セーフ

「ここにもないとなると…真琴自身が持ってるのかな？」

それだったら探しても無駄じゃないか
少し落ち込みながら布団に戻る
その直後

「か、隠れて！」

綾菜ちゃんがあわてて戻ってきた

「ど、どうしたの？」

「真琴ちゃんが、こーちゃん達を連れてここにむかっているって！今電話で！」

「なっ！！」

ムツツリー二達が！？ということは雄二や姫路さん達もっ！

「と、とにかく早く隠れてだって！見つかったら大変なことになるって言ってた！」

「わ、分かった！」

そう言って僕は部屋を飛び出した
綾菜ちゃんがムツツリー二こーちゃんって呼んでたことに気を止めないほど焦りながら…

〈Side Out〉

第32問 part2 女の子の部屋って凄い！by明久（後書き）

神「…この回の案、受験前から考えてたよね？あのころの俺…バカか？」

彩「おい作者く勝手に始めないでよ」

神「ああスマンスマン。神哉と」 彩「彩華の」

神・彩「戦後対談！」

彩「まったく明兄は…何やってるの？」

神「何だろうな？女の子の部屋の空気にも当てられたか？」

彩「あとでまこ姉に…」

神「言うなよ。物語が崩れるから。それに…」

彩「それに？」

神「アイツにはどの道制裁が下るさ」

彩「…確かに」

神「さて、綾菜の紹介」

名前)

あいざわあやな
相沢綾菜

身長)

186cm

容姿)

文月最強のバストサイズ。

髪はミルク多めのミルクティーのような色で、ふわふわした癖のあるロングヘア。

少し眠そうな表情が特徴的な美人ではあるものの、どこか幼い童女のような印象を与える。

性格)

純真無垢で、赤ちゃんはキャベツから産まれてくると本気で信じている。

備考)

小さい頃は小柄で体が弱かったが、どんどん成長して頑丈な体と誰にも負けない健康体を手に入れた。

なぜか、とんでもない怪力の持ち主で、鉄筋をアメ細工のようにグニャグニャに曲げたり出来る。

性知識は完全にゼロで説明されても理解できない。

将来の夢は、『こーちゃん(ムッツリーニのこと)のお嫁さん』と笑顔で言い切る。

ムッツリーニを抱きしめるのが大好きで、スキあらば抱きつこうとするが、生命の危機に直結するため、よく避けられている。

あまりやられると、子供のように泣き出して、手が着けられなくなる。

学力はCクラスレベルだが、保健体育だけは低い。

文月では珍しい零点をとることもあるレベル。

前日にどうやったらこーちゃんと同じクラスになれるか悩みすぎて、

知恵熱を出し、そのままフラフラの状態を受けて点数が低かった。召喚獣は笑顔を浮かべた天使だが、なぜか武器は釘バット。

彩「なんか凄いな」

神「お前のお子様容姿ほど凄く…謝るから睨むな…」

彩「つたく…で、お知らせは？」

神「そうだったそうだった。次回の戦後対談からは、異世界の人々を交えての対談にしたいと思います。出てみたいって人は感想に」

彩「お待ちしてまゝす」

神「さて、次回はいよいよ雄二達がやってくる！そしてあの人は…？」

彩「次回もよろしくね！」

第32問 part 2裏 脅威の新薬とシステムリセット (前書き)

神「第32問の裏。つまり明久が部屋で寝てるころの真琴たちの様子です」

真「やっと出番か…」 彩「私も出るよ！」

神「では再びあらすじから。真琴っ！」

（前回（第32問 part 1）のあらすじ）by 真琴
それは突然の出来事だった

明久が教室に入った瞬間、FFF団の皆が血相を変えて襲いかかったのだ

私は空き教室から家に居候させている綾菜ちゃんに気絶した明久を送り、適当な部屋に寝させるように頼んだ
さて、アイツらにはきっちり仕返ししないとね

神「…あらすじじゃなくて殺人予告になってない？」

彩「は、はは…とにかくスタートだよ！」

第32問 part 2 裏々脅威の新薬とシステムリセット

「さて…」

空き教室から戻り、再び教室に戻った私は

「皆、少し頭冷やそうか？」

と、きつと過去最高であろう笑顔で言った

【このなのはの台詞怖いよな〜ホント】

「ま、真琴？さつきはやり過ぎた。謝るから懐からデバイスを取り出すのは…ッ！ん？あれ？薬？」

叫ぶ雄二をよそに私はその薬を一粒とって飲む

「あ…あの薬は…」

「ち、チビツ子…あれは何だ？」

「私チビツ子じゃないよ！」

「いいから答えろ！あれは何だ!？」

「う、うん。あれは超能力進化剤だよ」

「進化？何だそれ？増強じゃなかったか？」

「うん。それをもとにして作者が作った薬。』とある魔術のなんちやらかんちゃら』って奴の超能力の幾つかを使えるようになるんだって」

「い、インデックス禁書目録だと…?」

【バカ天の雄二はこんな知識が豊富です】

「ちょ、ちょっと待って。それは反則じゃないか?」

「ん?雄二君は知ってるの?」

「あ、ああ。あれは…」

「スキルチョイス能力選択、エレクトロマスター電撃使い」

「生きる凶器だ…」

雄二がそう言うつと同時、私の周りにいた人たちが吹き飛ば

「……………」

口をパクパクさせる生き残った7人(雄二、秀吉、康太、瑞希、美波、亮)とやれやれといった顔をしている彩華を見て、私は

「標的・坂本雄二、須川亮」

と呟いた

Side Yujii

「死ぬ気で逃げる須川！じゃねえと…ッ！」

ドゴオンと背後から爆音が響く

「消し炭じゃすまねえぞっ！」

俺たちは今、廊下を全力疾走している
理由は…あの怪物から逃れるためだ

「二人とも怒ってないから止まりなよ」

「嘘だ！そんな体中からバツチンバツチン電気を出して何を」

電撃の槍のようなものが須川の顔を掠める

「言つて…いるのですか？」

ア然とする須川

「あんまり挑発すんなよ須川！今のコイツには逆効果だ！」

くそっ！このままじゃ追いつかれる！どうす………

「じゃあどうすんださかも………」

一瞬、須川と目が合う。こいつも同じことを考えてやがるな
() () コイツを生け贄にすれば生き延びられるか…？ () ()
いや待て、ひとまず生き延びられてもいずれやられる。なら

「協力してこいつを迎え討つぞ！」

「おうよ！」

瞬時にやるべきことを判断し、実行する。いくぞ

「アウェイケン
起動！」

「サモン
試獣召喚！」

俺が作り出した召喚フィールドに、召喚獣が…現れない？

「おい坂本どういうことだ！」

「俺が知るか！とりあえず手近な教室に逃げ込むぞ！」

「そんなんで防ぎきれるのか!？」

「知るかそんなもん…ん？学園長室だ！あそこなら…ッ！」

言いながら俺は学園長室に入る。すぐさま須川も滑り込んできて、俺は扉を閉めた

「わ、悪いながくえ…妖怪だと!？」

「いきなり妖怪呼ばわりかい?たく、ここは防空壕じゃないんだ
よ」

しまった。つい本音が口に…

「ん？防空壕？外で何が起こってるのか知ってるのか？」

「あれだけ騒いで気づかないほうがおかしいさね」

そんな話をしていると、突然須川が口を開く

「真琴さんには…処分とかが下るんですか？」

流石MMS団団長だ。こんな状況でもアイツを心配するんだな

「ん？ああ、黙認さね」

「「はあ!？」」

思わず叫んでしまった…。それにしても黙認だと？

「いや、天崎の奴から、『水野姉妹を退学とかにしたら一生出番なくすぞ』コリア』と言われてね…」

作者の野郎か…ってこのババア、そうまでして出番が欲しいのか…？

〈Side Out〉

「してやられたわ…」

私は、学園長室の前で攻めあぐんでいる

「アイツら考えたわね。作者の交渉（脅し）があるとはいえ、中で暴れるのは流石にまずいし…」

直後、スウ…と力が抜けていく感じがした。薬の効果が切れたみたいだね

「それにしてもアイツら、出てくるの遅いなあ。何話してるのかなあ？」

扉に耳を当てて聞き耳を立てる

『つまり、期末試験の結果次第では俺らの装備がまともなものになる可能性があるってことだな』

『ああ、そういつこった』

ん？結果次第で装備がまともにも？

「（ガチャッ）お邪魔します」

「ま、真琴（さん）！？」「」

私が入ると、二人が少ししたじろぐそんな二人を無視して

「さっきの話、詳しく聞かせてくださいますか？」

説明中

「なるほど。そういつことですか」

これはいいことを聞いた

次の試験の結果次第で装備がグレードアップする。しかもその試験は明久にとって結果次第で玲さんを追い返すことができる大事な試験だ

つまり明久のモチベーションをさらに上げることができるということになる！

これは明久に伝えてあげなきゃね

「さて、用が済んだならさっさと出ていきなジャリ共」

「はい。失礼しました」

そう言っただけ私は学園長室後にする。少し遅れて二人も出てきた

「ま、真琴？」

「ん？何？」

雄二が恐る恐るといった感じで声をかけてくる

「もう怒ってないのか…？」

ああ、そういうばこいつらを追っかけてたんだね。いつの間にか怒りがどっかいつちゃってたみたいだ

「ん？怒って欲しいなら怒ってあげるけど？」

「い、いや。遠慮させてもらおう」

「ははは。冗談だよ。」

言っですたすと教室に走っていった

＼Side Yuji＼

真琴が走り去った後

「なあ須川、何でアイツ嬉しそうなんだ？」

「さあ？」

＼Side Out＼

第32問 part 2 裏 脅威の新薬とシステムリセット (後書き)

裏なので戦後対談はお休み

第33問 part 1 幼馴染みだからって何やっても許されるわけじゃない

神「今回からは異世界のゲストを交えての前書き・後書きになります」

彩「賑やかになるね」

神「今回のゲストは、『バカとテストと召喚獣』ツインズ』『Worldの主人公で、明久の双子の妹の吉井夕季です。どうぞっ！」

夕「こんにちは」

真「夕季ちゃん久しぶり！」

夕「はい。お久しぶりです真琴ちゃん。それに彩華ちゃんも」

彩「うん。夕季ちゃん久しぶり！」

神「さて、では前回のあらすじを…夕季ちゃんよろしく！」

夕「私ですか!？」

（前回（第32問 part 2 & part 2裏）のあらすじ）
明兄が真琴ちゃんに送ったメールのせいで、Fクラスに混乱が!?
怒った真琴ちゃんは、復習の鬼と化してFクラスの皆を襲います!
でもシステムリセットの話聞いた途端態度が一変し上機嫌に…。
明兄が喜ぶことは自分も嬉しいみたいです。私と一緒にです
一方そのころ、気絶した明兄は真琴ちゃんの家送到られて綾菜ちゃんの手当てを受け、さらには真琴ちゃんの部屋で写真探しという名

の家宅捜索をしてしまいます。まったく何をやってるんですか……
そして、そんな二人に更なる悲劇が！雄二君たちが真琴ちゃんの家
にやってくる！？二人の運命はいかに！

神「…心の声混じってない？」

真「とにかくスタート！」

神「前回と始まり方向じ！？」

第33問 part1 幼馴染みだからって何やっても許されるわけじゃない

「ねえ、本当にいないんだって。信じてよ」

「だあっ！しつこいぞ真琴！それにいないなら行ったって別に構わないだろ？」

「う…それはそうなんだけどさ…」

どうしよう…？このままじゃ本当に家に来ちゃう…
とりあえず綾菜ちゃんに伝えたからアイツは隠れられるだろうけど…
見つかったら終わりだし…

「まこちゃん？」

「何…？」

「もし嘘だったら、承知しませんから…」

黒い！黒いよ瑞希！

「そつね。骨の100本位当然よね」

美波…単位おかしいよね？

「……………いたら処刑は確定」

「ああ。異端審問会もMSS団も総力を上げてアイツを殺^やろうとす
るだろつね」

ダメだ…いるの前提で話してるよ…
頼りは秀吉しか…？

「あやつ絶対に許さん。真琴と同棲など…（ブツブツ）」

こっちはこっちで何か言ってる！？何で秀吉まで怒ってるの！？

【真琴も明久並に鈍いです】

「まこ姉、そろそろ着くよ」

彩華に言われ、あわてて前を見る。すると私の家がすぐ目の前に迫ってきっていた

「さ、真琴。鍵を開ける」

「ぬ…わ、分かったよ」

しゅしゅと鍵を開ける

頼むよ明久。ちゃんと隠れててよ！
祈りながら扉を開けると…

「おかえり〜」

綾菜ちゃんが迎えてくれた
それを見て固まる雄二たち

「え〜と、誰だ？」

そんな雄二の質問を無視して

「こっちゃん!!」

綾菜ちゃんが急に康太に抱きつ…って、ええ!? 綾菜ちゃん? 突然何してるの?

その疑問は私だけじゃないらしく

「む、ムツツリーニ?」 「それは反逆とみなしていいのか…?」

雄二や須川君はもちろん、

「……………何が起こっている?」

抱きつかれた本人、康太も驚いていた

「よかったあ〜こっちの世界でこっちゃんと会えた〜」

「……………」

啞然とする一同と

「……………悔いは…ない(ガクッ)」

一人あの世へ行きかける康太を順に見て、私はこう言った

「え〜と、皆とりあえず入って。自己紹介はその後ね」

Side Akihisa

一方そのころ

「もう…少し…」

僕はベランダ乗り移り作戦を決行していた

『おかえり〜』

この声…綾菜ちゃん！？という事はもう来たの！？

「やばい。急がない…とっ！」

隣のベランダに向かって跳ねる

「よっ…と。う、うわっ！」

やばっ！少し飛距離が足りない！
慌てて手を伸ばして手すりを掴む

「……………危なかったあ〜」

中吊り状態のままそう呟く

何とか落ちなかったけど…これからどうしよう…？

「あ、明兄！？何やってんの！？」

「あれ？彩華ちゃん！？」

見上げると、ベランダに彩華ちゃんが立っていた

「明兄！もう皆帰ってきたよ！早く！」

そういつて手を差し伸べてくる

僕はそれに掴まって…

「…ッ！？」

釣り上げられた（比喻じゃないよ？）
ゴソツと壁に軽くぶつかる

「あ…明兄大丈夫？」

「ど、どこにそんな力が…？」

「ん？能力使ったんだよ？」

ああなんだ能力か…

「いいなあ、超能力って…僕も使ってみたいよ…」

思わずそう呟いた
すると

「…使ってみたい？」

彩華ちゃんがそう問いかけてきた

「え？まあ…うん」

「いいよ？使わせてあげる」

そう言いながら、彩華ちゃんが僕の額に手を当てる

「自分で望んだことだからね？」

直後、僕は意識を失った

（Side Out）

「私は水野彩華。まこ姉の妹だよ。よろしくね」

「うん。よろしくね彩華ちゃん」

場所を私の部屋に移して、私たちはお互いに自己紹介をし合っている

「…で、真琴」

「ん？何？」

「この部屋で明久は寝てたのか？」

「そんなわけないよ。私の部屋に寝せるわけないじゃん」

「いやなんか布団もぐちゃぐちゃになってるし…その引き出しもあいてるが…？」

……………え？

「え〜と…真琴ちゃん？なんかまずかった？」

不意に綾菜ちゃんからテレパシーが送られてくる

【真琴へのテレパシーは誰でもできます】

「…この部屋に…寝せたの？」

「…で、適当な部屋に寝せてって言ったから…とりあえずここに…」

「あ、明久ん家ち、いつてみようか…」

とりあえず状況の説明をしてもらわないとね…

〈Side Akihisa〉

「…ん？あれ？」

気がつくくと、僕はベランダで倒れていた
え〜と、皆から隠れるためにベランダから家に戻るうとして…

「そっだよ！隠れなきゃ！」

とりあえず無難な場所に…台所かな？
ベランダから居間の中に入る。そこには

「姉さんのコットンパフ!?」

気付いてよかった。見つかったら姉さんがいることがばれちゃうもんね…

コットンパフを戸棚に隠し、今度こそ台所に向かう

「今度は女性向けの弁当!?なんでこんなのが放置してあるの!?!」

それを冷蔵庫の中に入れて、ふと考える

あの姉さんのことだ。まだ何かとんでもないものを放置していないか…?と

「あの姉さんならやりかねないよね…!」

なんせバスロープ姿で帰ってきたような人だ

そんなことを考えながら廊下に出る。僕の視線の先、玄関のあたりに…

「姉さんの下着じゃないかあつ!?!」

なんであんなものを普通に吊るしてるんだよ!姉さんがいることがばれる前に僕が変態だと思われちゃうじゃないか! さっさと片付けちゃわないと…

〈Side Out〉

「で、気絶した明久をとりあえず家に送ったと」

「う、うん」

「そしたらアイツはお前の部屋に寝て、部屋の中を引っ掻き回したと」

「……………うん」

「その…ごめんね？」

「いや、綾菜ちゃんは悪くないよ」

私の説明不足だし、と付け足しながら思う

アイツが開けた引き出しは研究書類が入ったのと下着が入ったのと二つ。研究書類のほうは分からないだろうからいいとして…下着見られちゃったよ…

「さて、仕置きの時間かのか？」

「……………骨の髄まで砕く」

「全身の間接を逆にするだけじゃ済ませられないわね」

「ちよつとキツめにお説教しなきゃいけませんね…」

「殺^{ちや}つちやうヨク。永遠に世間に出られないような姿にしちやうヨク

」
注・須川です

「あわわ…皆怒ってるよ…須川君にいたっては狂戦士化してるし…」

そんな皆チラリと見て、ゆっくりと明久の家の鍵を開ける

【真琴は玲に合い鍵を持たされています】

そこにあっただのは……女物の下着の中に埋もれた明久の姿だった

Side Shinya

「くそっ！手遅れだったか……」

「策を考え直しましょう。奴が勉強会後に行動を起こすなら、まだ時間はあります」

「ああ……分かつてる。文月学園に行くぞ。夜御ちゃんの入学手続きをしなくちゃいけない」

「分かりました」

ヒュオンと、二人は風のように姿を消した」

Side Out

第33問 part1 幼馴染みだからって何やっても許されるわけじゃない

彩「彩華と」　夕「ゆ、夕季の」

彩・夕「戦後対談特別版！」

夕「何で神哉さんがいないの…？」

彩「ん〜何でだろう？二人でがんばって置手紙あるけど…まあ、とりあえずやるうか」

夕「うん。そうだね」

彩「今回は私たちの家に雄二君たちがやってくる話だけど…明兄、何やってるの…？」

夕「ねえ、彩華ちゃん」

彩「ん？何？」

夕「今、ものすごく明兄にお仕置きしたいんだけど…いいかな？」

彩「ダメだよ！？夕季ちゃんがやると明兄死んじゃうよ！？」

夕「むう…まあ雄二君たちがやってくれるから…我慢します」

彩「ふう。これで一あんし…じゃないよ！？どっち道お仕置き確定！？」

夕「じゃあ彩華ちゃんは許せる…?」

彩「もちろん許せ……あ、そろそろ時間だ!」

夕「強引に話戻したね…」

彩「さて次回、明兄の運命はいかに!？」

夕「え」と。次回のゲストは『バカとテストと召喚獣 Ryo
Sugawara Story』より、須川亮君、泉こなたさん、イカ
ロスさんです」

彩「次回もお楽しみにね」

第33問 part2 やっぱり玲さんはおかしいよ〜 (前書き)

彩「え〜と、今回も異世界の人を交えての前書き・後書きです。今回のゲストは『バカとテストと召喚獣 Ryo Sugawa Story』の須川亮君、泉こなたさん、イカロスさんです!どうぞ〜!」

三人『こんにちは〜』

彩「皆ようこそ〜」

須「彩華ちゃん一人なのか?」

彩「うん。作者はどっかいつちゃってるし、まご姉は…その…」

こ「真琴いないの!?!? よっしやぁラッキー!」

彩「こなちゃん? あぁ、あの件で…」

【あの件についてはRSSの感想一覧を見てください】

イ「それより…マスターの…処刑?」

須「安心しろ。違う明久の話だ」

イ「そうなの?」

彩「うん。そうなんだけど… (止めてくれないかなあ?)」

「彩華ちゃん？」

彩「じゃ、じゃあスタートっ！」

第33問 part2(やっぱり玲さんはおかしいよ！)

明久宅、居間

「で、さっきの下着は姉のものであって、決して真琴の部屋を漁ったりはしていないと言いたいんだな？」

「う、うん」

そこは裁判所と化していた

「……………」

「……………」

長い沈黙が訪れる

「判決、今日のところは無罪！」

「今日のところは！？」

「何か不満でも？」

「い、いえ……ありません」

「よし。ならばこれにて閉廷とする」

緊張した空気が緩む

それにしても玲さんのだったとは…相変わらずだね

「その…明久君」 「えっと…アキ」

「ん？何？二人とも」

「誤解してすみません（ごめん）！」

「いいよ別に。同じ状況だったら僕も誤解しちゃうし」

あはははと笑い合う3人。仲直りできた用で何よりだね

「ん？ちよつと待ってくれ吉井」

唐突に須川君が口を挟む

「なんで姉の存在を隠そうとしてたんだ？」

「……………」

あ、明久が固まった

「そついえばそうですね」

「たしかにおかしいのう」

「……………」

「何かまだ隠してるのかしら？」

須川君の台詞を聞いて皆も疑問を持ち始めたようだ

しょうがないなあ

「明久、もう言ってもいいんじゃない？」

私が促すと、明久はこくりとうなづいた。腹を括ったみたいだね

「実は…僕の姉さんは、かなり、その…珍妙な人格をしているというか…常識がないというか…。だから、一緒にいると大変で、色々減点とかもされるし、それで家に帰りたくなくて…」

うん。よく言った明久。でも…

「あ、アキが非常識って言うなんて、どれだけ…？」

「むう…。恐ろしくはあるが、気になるのう…」

「……………是非会ってみたい」

「そうですね。会ってみたいです」

…皆余計に会いたがると思うよ？

そんなことを思っていると、それまで黙っていた雄二が

「あー…なんだ。お前ら、そういう下世話な興味は良くないぞ。誰にだって、隠したい姉とか母親とか、そんなんがいるモンなんだから」

珍しく明久に助け舟を出した。妙に母親を強調したけど、隠したい母親でもいるのかな？

「ゆ、雄二…！ありがとう」

まあ明久が喜んでるからよしと

『あら…？姉さんが買い物に行っている間に帰ってきていたのですね、アキ君』

どうやら玲さんが帰ってきたようだ。なんて素晴らしいタイミングなんだろう

「うわわわわっ！か、帰ってきた！皆、早く避難を」

「明久…？皆会う気満々だよ？」

「なんだって！？」

何か両手を組んで祈り始めたけど…この世界の神（作者）はそんなに甘くないと思うよ？

でも今度はどんな格好で登場する気なんだろう？

少し期待しながら待っていると、扉が開かれ、玲さんが入ってきた。「あら。お客様ですか。ようこそいらっしやいました。狭い家ですが、ゆっくりしてってくださいね」

以外にも、玲さんは7分丈のパンツに半袖のカッターシャツ、その上に薄手のベストという普通の格好をしていて、ごく普通の挨拶をしていた

そんな玲さんを見て

「…………お、お邪魔します……………」

雄二たち訪問者一同は拍子抜けしていた

「失礼しました。自己紹介がまだでしたね。私は吉井玲といいます。皆さん、こんな出来の悪い弟と仲良くしてくれて、どうもありがとうございます」

そういつて深々とお辞儀をする。すごいよ。完璧な立ち振る舞いだよ玲さん。これなら誤魔化しきれるかも!?

「ああ。どうも。俺は坂本雄二。明久のクラスメイトです」

我に返った雄二が慌てて頭を下げる

「俺は須川亮。同じく吉井のクラスメイトです」

「……………土屋康太」

続いて須川君、康太と続き

「はじめまして。雄二君、亮君、康太君」

玲さんが笑顔で返す

すごい。玲さんがまともなやり取りを…!

「明久。凄いよ。普通の姉みたいだよ！」

「うん。このままいけば雄二たちを追い返せるかも」

そんな話をする二人をよそに、挨拶は続く

「ワシは木下秀吉じゃ。よしなに。初対面の者には良く間違われるのじゃが、ワシは女ではなく」

「ええ。男の子ですよね？秀吉くん、ようこそいらっしやいました」

「……………っっ！！」

それを聞いた秀吉が、驚いたように玲さんを見上げる

「わ、ワシを一目で男だと分かってくれたのは、水野姉妹と主様だけじゃ…！」

なんか秀吉がめちゃくちや感動してるんだけど…スルーしところか。うん

「勿論分かりますよ。だって」

微笑みながら玲さんが答える

「うちのバカでブサイクで甲斐性なしの弟に、まこちゃんアカちやん以外に女の子の友達なんて出来るわけありませんから」

そんな理由なの！？

ツッコむべきかと悩んでいると、玲さんは瑞希と美波の方を向いて

「ですから、こちらの二人も男の子ですよね？」

こう言った

「ちょ、ちょっと姉さん！？ 出会い頭になんて失礼なことを言うのさ！ 三人ともきちんと女の子だからね？」

「明久！ ワシは男で合つとるぞ！？」

前言撤回。やっぱり玲さんは玲さんだったね…

すると、明久の台詞に反応して、玲さんがゆっくりと明久の方を向いた

「……………女の子、ですか……………？ まさかアキくんは、家に女の子を連れてくるようになっていたのですか……………？」

玲さん怒ってるよ… やっぱり女の子を家に呼ぶのはまずかったみたいだね
うん。私が弁明してあげたほうが良いのかなあ？

「あ、あの、姉さん。これには深い深い事情があつて」

「……………そうですね。女の子でしたか。変な事を言つてごめんなさい」

「実は…って。あれ？」

あれ？ 素直に謝ってる。玲さんなら怒ると思つただけど…

「どつつかしましたか、アキくん？」

「あ、いや… 姉さん、怒ってないのかな、って思つて」

「？ あなたは何を言っているのです？ どうして姉さんが怒る必

要があるのですか？」

玲さんは怒らないのが当然といったように平然としている
んゝ取り越し苦労だったのかな？それならいいんだけど…

「ところで、アキくん」

「ん？何？」

「お客様も大勢いらっしやるようですし、アキくんが楽しみにして
いたお医者さんごっこは明日でもいいですよね？」

玲さんが笑顔のまま爆弾を落とす
なるほど。明久を自殺に追い込むつもりか

「お医者さんごっこ？」

「彩？どうかしたの？」

「昔はまこ姉と三人でやってたよね？またやるの？わ〜い！」

「ちよ、ちよっと彩！？今それ言う必要がある！？？」

「そつだよ！今それを言ったら…ッ！」

「へえ〜まこちゃん。明久君とお医者さんごっこなんてしてたんで
すか…」

「後でじっくり話を聞かせてもらおうからね？」

死神と阿修羅が…彩のバカ…なんで今それを言うのよ…
横を見ると、明久も同じように悪意のある視線を受けていた

「それとは別に、浮気の現行犯で200点減点します」

「う、浮気！？そもそも僕は付き合ってたんで…」

「明久酷い！付き合ってたと言ってくれたのに！」

「あ……………」

「……………300に変更します」

「ふぎやあああつ！ちょ、ちょっと待って！今のはほら！突然のこ
とに頭が回らなくて！」

今のは自業自得だと思う

「…明久、すまん。本当に凄い姉だな」

「うん…。ありがとう雄二…。」だが！「…え？」

「今のは明らかにお前が悪いぞ？」

「……………そうだね」

なんか雄二と明久が話してるけど、自己紹介続けなくちゃ

「瑞希に美波も自己紹介しなよ」

「じゃあ俺もご馳走になりますね」

「ワシも相伴にあずかるのかな」

「ウチもご馳走になるのかな」

「じゃ、じゃあ、私も…」

「まこ姉、どうする？」

「ん〜家に綾菜ちゃんいるしな…玲さん。私の友達を呼んでも良いでしょうか？」

「まこちゃんのお友達ですか？一人位なら増えても良いですよ？」

「アッキーありがとうございます！まこ姉行こう！」

「うん！ちよつと行ってきますね！」

そう言っただけ私達は明久の家を後にした

「へえ〜ここの明久君の家って真琴ちゃんの家隣にあるんだね」

「うん。そうだよ」

そういえばアイツはすぐ隣の私ん家に止まるつとしてたのか…すぐ
バレるだろ…

「お邪魔します」

あれ？なんかリビングから声が…皆あそこかな？

「（ガラッ）今戻ったよ…何やってるの？」

中では瑞希、美波、秀吉がアルバムらしきものを眺めていた

「あ、まこちゃん。今、明久君のアルバムを見てる所ですよ」

アルバム？どれどれ…

「これが十歳のときのお風呂の写真で…」

「ちょ！お風呂の写真!？」

慌ててアルバムの中を覗き込む

これ本当にお風呂の写真だよ…

『良かった真琴！君なら止めてくれると信じてる!』

遠くからなんか聞こえるけど今はそれどころじゃない！

お風呂の写真なんて…これは復讐のチャンス！（黒笑

「え？明兄の写真!？」 「それは面白そうですね…」

彩綾コンビ（勝手に命名）も寄ってきて中を覗き込む

「…では、次が昨晚のアキくんのお風呂の写真です」

「「「「「……………（ゴクリ）」「「「「「

『ちよつとおおお！？なんでそんな写真があるのさ！っっていうか真琴！君まで興味津々！？違うよね！？君なら止めてくれるよね！？』

（Side Shinya）

学園長室にて

「で、神哉。これは何のつもりさね？」

「見ての通りだ。この子、夜御美零の転入を認めて欲しい」

「アンタの事だ。どうせまたなにか企んでいるんじゃないのかい？」

「いや。むしろこれは企みを止めるための行動だ」

「？ どういうことだい？」

「詳しくは後で話す。他の世界の皆も集めてな」

「だから何を言って…」

「世界の危機だ。それも全世界のな」

「……………あんたがそこまでするなんてよっぽど大変なことみたいだねえ。いいだろう。認めてやるさ。その子の転入を」

「ありがとうございます」「ありがとうございます」

「その代わり、後できっちり説明するんだよ」

「ああ。分かってる」

再び二人の姿が風のように掻き消えた

第33問 part2 やっぱり玲さんはおかしいよ〜 (後書き)

彩「彩華と」 須「亮、」 こ「こなた、」 イ「イカロスの」

4人「戦後対談特別版！」

こ「いや〜やっぱり真琴は不幸の子だね〜」

須「許すまじ吉井！真琴さんとお、お医者さんごっこなど！」

彩「え〜と…二人とも？そろそろ止めないと」

？「ごおおなああああああ、すうううがあああわあああ」

彩「ひいっ！来た！」

？「スキルチヨイス能力選択、エレクトロマスター電撃使い！」

須「イカロス！防御を！」

イ「分かりました。Aegis展開」

？「レールガン超電磁砲、発射！」

こ「(バチイイイ)イ、イージスが砕けちゃった!？」

イ「ここはArtemisで迎撃を…」

彩「だ、駄目だよイカロスさん！まこ姉が死んじゃう！」

こ「まこ姉！？あれ真琴なの！？」

須「気付かなかったのか！？」

真「コロス。フタリトモコロス」

彩「じ、次回のゲストは、レフェルさんworldより新条ありすちゃん、桃宮あかりちゃんです！次回もお楽しみに！って誰か止めてえええっ！」

天崎神哉より全世界へ

皆さんこんにちは

バカ天作者のJACKこと天崎神哉です

今回皆さんにお伝えするのは、全世界の危機です

作中でも少し触れています、今この世界を中心として危機が迫ってきています

簡単に説明しますと、漆黒と純白の世界の住人、亜死気鬼勇によって、この世界の明久を闇化させる計画が進められています

この計画が成功してしまうと、超能力を振るえるようになった闇明久によって、全世界が破壊されてしまいます

私達はこれを全力で止めなければなりません
ですが、既に鬼勇の手によって、闇化のナノデバイスが組み込まれてしまいました

そのため、もう明久の闇化を止める術は^{すべ}ありません

ですが、明久が闇化した後でも、世界を破壊される前に明久を止めれば、まだ間に合います

そこで皆様をお願いします

闇化した明久を止めるために、力を貸してください

この計画はもはや、我々バカ天世界の力だけでは止められないところまで来ています

皆様の世界を守るためにも、皆様のお力添えをお願いいたします

PS：バカ天世界の住人には、まだ他言しないよう、お願いいたします

第33問 part3 なんだかんだで勉強会！〜（前書き）

彩「皆さんこんにちは！今回も異世界の人がゲストとしてきています！レフェルさんの『俺と彼女と召喚獣』worldより、新条ありすちゃん、桃宮あかりちゃん！どうぞっ！」

あか「彩華ちゃん久しぶり〜」

彩「うん。二人とも久しぶり」

あり「こっちの世界の清涼祭以来だっけ？」

彩「そうなるかな？あの時はウエイトレスとして働かされたけど…」

あり「割と乗り気だったじゃん」

彩「まこ姉がだよ。薬につられて…」

あか「でも彩華ちゃんも結構楽しそうだった」

あり「うんうん」

彩「え〜そんなことないよ〜」

あり「実は私の手に彩華ちゃんのウエイトレス姿の写真が…」

彩「ちよつとありすちゃん!？」

あか「いつの間に…」

彩「ありすちゃんそれ返して！」

あり「そんなことより本編始めなよ」

彩「そんなことじゃないよ！康太君に渡ったら大変なことに……」

康「……………呼んだか？」

彩「こ、康太君！？」

あり「ちようど良かった。彩華ちゃんのウエイトレス姿の写真、欲しい？」

康「……………！（コクコク）」

彩「止めて〜！」

あか「え〜と、本編スタートです！」

第33問 part3 なんだかんだで勉強会！〜

あれから少し時間が過ぎて

「皆待たせたな。夕食ができたぞ」

「ありがとうございます。お客様なのにアキくんのお手伝いまでして頂いて」

「いや、気にしないでくれ。料理は嫌いじゃないからな」

リビングに夕食が運ばれてくる

「あ、ありがとうございます……………」(ポッ)

「お、美味しそうね……………」(ポッ)

「さ、流石だね……………」(ポッ)

「あ、明兄たちの料理、楽しみだな……………」(ポッ)

「……………」(ポッ)

「ねえ皆！どうして僕の顔を見て顔を赤らめるの？」

だって…明久の昨日のお風呂の写真だよ？ちょ、ちょっとあれは…
ねえ？

「アキくん、少し落ち着きなさい。キッチンからここまであなたの

大声が聞こえてきましたよ？」

「それは姉さんの行動が原因なんだからね？」

あ、明久の裸が…お湯とか煙とかで隠れているとはいえ…見えて…な、何考えてるの私！？煩惱退散！煩惱退散！

「ほら。またそうやって大きな声を出して…。カルシウムが足りないではありませんか？」

あれ？玲さんが明久の目の前のパエリアをよけて深皿を置いたよ？なんだろう？

「皆さん、貝の殻はこのお皿に入れてください」

「何それ！？僕の夕飯は貝の殻だけなの！？カルシウム不足とか言ってるけど、これってただの苛めだよね！？」

うーん。玲さんなりの気遣い…なのかな？

「姉さん…。もしかして、姉さんは僕のことを嫌いな…？」

恐る恐るといったように明久が尋ねる

それに対して、玲さんは「心外です」と前置きをしてから答える

「何を言っているのですかアキくん。姉さんがアキくんを嫌うわけがないでしょう？」

その割に扱いが酷いと思うんだけど…

でも玲さんが明久が好きだってことは知ってるんだけどね

「寧ろ、その逆です」

「え？嫌いの逆ってことは」

「無論、大好きです」

「そ、そうなんだ…」

「はい。姉さんはアキくんのことを愛しています」

予想通りだったね。でも、玲さんの場合は

「一人の異性として」

やっぱりか…

「最後の一言は冗談だよな！？それなら寧ろ嫌いであってくれた方が嬉しいんだけど!？」

うん。スルースルー

「日本の諺にはこういうものがありますね」

「何！？また余計な事を言うの!？」

「バカな子ほど可愛い、と」

それは言えてるかも…

「諦める明久。世界でこの人ほどお前を愛している人はいないぞ」
む…

「待つて！それは世界で一番バカだつて「そんなことないよ！」真琴？助けしてくれるの？」

「私も玲さんと同じ位。いや、それ以上に明久を愛してるよ！！」

「真琴…」

しばしの静寂

「はっ！それは真琴も僕が世界一バカだと思ってるってことじゃないか！」

「そ、そんなことないよ…だつて…」

「だつて？」

「世界一のバカは彩華だもん！」

「ちよつとまこ姉！？姉としてそれは酷くない！？」

「まあ、そんなどうでもいいことは置いていくとして」

「「」どうでもよくないよ！？」「」

明久と彩華の声が見事に被ったね…

「とにかく、冷めないうちに頂きましょう」

確かに折角の料理が冷めちゃうのももったいないよね。今は夕食が優先だ

「……………頂きま〜す」「……………」

手を合わせて目の前の料理に取り掛かる

「む。これはまた、美味いもんじゃな」

「そうか。口に合ったようで何よりだ」

「そう言ってもらえると作った甲斐があるよ」

「……………（こくり）」

「まあ、俺は盛り付けただけなんだけどな」

「でも盛り付け方も美味しいと思うよ？」

ホントに美味しい。流石明久たちだね

そんな私たちとは対照的に、砂を噛んだような表情をしている瑞希と美波

「二人ともどうしたの？パエリア苦手？」

「う……。いや、嫌いじゃないし、凄く美味しいんだけど……」

「だからこそ、落ち込むと言いますか……」

ああなるほど。予想以上に美味しくて複雑なんだね
分かるよその気持ち。私も最初はそんな感じだったもん。今はもう
慣れたけどね

「ねえ、真琴。アキつて昔からこんなに料理上手いの？」

「うん。一人暮らしを始めたころから上手だったよ。私も最初は
驚いたけどね」「そうなんだ…負けていられないわね」

「そうですね。これに勝つ為にも、もっとオリジナルの味を出し
て…！」

「え〜と、瑞希？」

「はい。何ですか？まこちゃん」

「あのさ、オリジナルの味も良いけどさ。素材の味を引き出して
勝負してみなよ」

「素材の味…ですか？よく分かりませんが、分かりました。やっ
てみます」

危なかった…これで必殺料理人も少しは丸くなるかな？

「あ、そうだ明久。今日ね、学園で面白い話を聞いてきたよ」

「面白い話？」

「うん。実は」

説明中

「へえ〜システムリセットか。これは俄然やる気が出るね」

やったあ！やっぱりやる気になったみたいだ。学園長ナイス！

「うん。それでなんだけどね、この後皆で勉強会しない？定期テストに向けてさ」

これは玲さんが来たときから明久と計画していたことだ
玲さんを追い返すために協力して欲しいって頼まれてね…

「うん。僕は良いんだけど、他の皆は？」

「ん？別にかまわんぞ？半分はそのために来たようなもんだしな」

半分は明久の搜索だけどね…

「あれ？その為にとって…」

「私が皆を誘ったんだよ。多いほうが良いからね」

学園でシステムリセットの話聞いたときから、私は皆を誘っていた
皆二つ返事でokしてくれた。皆テストがよっぽど大事らしい。私もその一人なんだけどね

「ありがとう真琴。姉さん、この後勉強会しても良いよね？」

「ええ。勉強を止めるつもりはありませんよ。どうぞ存分に勉強し

「行ってください」

「だってさ。じゃあこの後頑張って勉強しようか！」

話がスムーズに進んでくれてよかったよかった

あれ？なんか雄二たちが小声で話してるよ？

「（明久の奴がかなり積極的なんだが…何があったか分かるか？）」

「（ただ単にシステムリセットが目的とは考えにくいし…これは裏に何かあるぞ）」

「（姉からの褒美でも期待しているのではないかの？）」

「（……………その可能性は考えにくい。むしろ逆だと考えるのが妥当）」

「（ということとは点数が低かったときに罰でもあるのか？）」

「（さっきの減点というのも気になるのう…）」

なんか仮説がどんどん展開していったるけど…スルーして問題ないよね？

その後、後片付けを終えて皆が再び集まる

「さて、そろそろ勉強会を始めようか」

「そうですね。あまり帰りが遅くなっても困りますし」

まだ7時だから勉強する時間はたっぷりある。さて、頑張ろうか

「ワシも教えてもらおうとするかの。よろしく頼むぞい」

「……………同じく」

皆が各々の勉強用具を取り出して、勉強を始める
ああ。この姿を鉄人先生に見せてあげたい

「お勉強なら、私が見て差し上げましょうか？」

「え？お姉さんが、ですか？」

玲さんの提案に瑞希が目丸くする
確かにあの姿からは想像できないけど…

「玲さんはハーバード大学を卒業したんだよ？」

「……………ええっ!?!?」

うん。驚くのも無理はないよね

玲さん、勉強だけは異様にできるし…

「なるほど、出洩らしか…」

「雄二。その言葉の真意を聞かせてもらえないかな」

雄二、哀れむような視線浴びせるの止めてあげなよ…

「あ、ちなみに私もハーバードに通ってたんだよ？」

「「「「「.....」」」」」

「そういうことなら教えてもらおうぜ。本場の英語とか、こっちの教師には教えてもらえないようなことまで色々知ってそうだしな」

「.....頼もしい」

「ちよつと！？なんで無視なの！？まこ姉もなんか言ってるよ〜！」

ややこしくなりそうだから言わないほうがいいと思う

明久や玲さん、それにこのことを知ってるはずの綾菜ちゃんも何も言わないし

「わかりました。まずは英語あたりから始めましょうか」

「「「「「よろしく願います」」」」」

「ちよつと！聞いてっつてば〜！」

結局、10時ごろまで玲さんの講義を聞いて、その日は解散となった
彩華は途中から寝てたけどね...

Another Side

とある時空の秘密基地にて

「くそっ！神哉の呼びかけによって思いのほか敵が増えたな……。おい、敵のリストを出せ！」鬼勇がそう言うと、手下と思われる少女がリストを手渡す

「こ、これは…！？」

それを見て鬼勇が驚きの声を上げる

「く、くはははっ！これは嬉しい誤算だ！わざわざ異次元からお前を連れてきた甲斐があるってもんだ！なあ？」

その呼びかけに答えるように少女が声を出す

「そうですね、とミサカは同意を示します」

第33問 part3 なんだかんだで勉強会！〜（後書き）

彩「彩華と」 あり「ありす、」 あか「あかり、」 綾「綾菜と、」 神「神哉の」

5人『戦後対談特別編！』

神「え〜今回は『俺と彼女と召喚獣』のゲストが来ているというところで、綾菜ちゃんにも来て貰っています」

綾「どうも〜」

彩「ねえ作者さん？」

神「なんだ？彩華」

彩「戦後対談とかあったらかしてどこ行ってたのかなあ？」

神「いや、ちよおと野暮用でな。すまんすまん」

彩「問答無用だよ？」

神「ちよ！待て！今は戦後対ギヤアアアアアッ！」

あか「え〜と、お二人さん？」

あり「無視して進めましょ？」

綾「う、うん。いいのかなあ？」

あり「今回は勉強会の話だったね」

あか「そうだね（うわぁ。始めちゃったよ）」

あり「綾菜どうだった？勉強会は」

綾「うん。凄くためになったよ。流石ハーバード卒だね」

あか「そういえば彩華ちゃんも行ったって言ってたけど……」

あり「ことごとく無視されてたね……」

綾「仕方ないっていえば仕方ないんだけどね……」

3人「……………」

あり「え〜と、次回のゲストは鳴神ソラさんworldよりマリオさん、ルイーダさん、フォックスさんだそうです」

あか「終わらせる気!?!」

あり「では次回もお楽しみに〜」

綾「え〜と、お楽しみに〜」

あか「はぁ……」

あか「そういえばウェイトレスの写真はどうなったの?」

あり「あれは無事に引き渡したよ？」

あか「はぁ・・・」

第34問 part 1 転校生と『協力者』 (前書き)

神「今回も異世界からゲストを呼んでいます。鳴神ソラさんworldよりマリオ、ルイージ、フォックスです。どうぞ！」

マ「邪魔するぞ」 ル「神哉さん久しぶり」 フォ「俺も久しぶりになるな」

神「ルイージにフォックス、久しぶり。マリオもバカ天worldによっこそ！」

マ「そういえば彩華ちゃんはいないのか？」

神「アイツはRSSworldに行ってるよ」 詳しくはRSS感想一覧を見てください

ル「そうなんだ…」

神「ああ。代わりに…」

フォ「代わりに？」

神「あれ？夜御ちゃんどこ行ったんだ？」

ル「夜御ちゃん？それって」

夜「(ヒュン)遅れました。夜御美零です。初めまして」

ル「おわっ！ビックリした」

マ「そういえば今日から文月学園に入るんだっとな」

夜「はい。今日からは、より明久さんたちの近くで護衛に徹することになります」

神「よろしく頼むよ。夜御ちゃん」

夜「はい！お任せください！そ、そうではなくて、至急お耳に入れてたいことが…！」

フォ「何か掴んだのか？」

夜「はい。鬼勇の協力者の正体が掴めました…！」

4人「何だつて（だと）！？」

神「あ、本編スタート！」

第34問 part 1 転校生と『協力者』

「これよりHRを始める」

明久宅での勉強会を終えた翌朝、私たちはいつものように登校してきた

明久は朝から減点を言い渡されたらしく、ちょっとブルーになってたけど：

まあ明久なら大丈夫だよ。この調子で勉強会続けていけばきっと上がるはず

さて、勉強会の前にまずは授業頑張らないとね

「だがその前に、転校生を紹介する」

鉄人先生の言葉を聞いてクラスの皆がざわつく

転校生かあゝテスト前のこんな時期に、珍しいなあ。どんな子だろう？

「お前ら静かにしろ！では夜御、入ってこい」

扉が開き、女の子が入ってくる

「皆さん始めまして。夜御美零です。よろしくお願いします」

黒髪のロングストレートヘアで、金色の目の少女は、そう名乗った

「よし。皆仲良くするように。夜御の席はあのバク…吉井の後ろだ」

「ちょっと先生！？今バカって言いかけましたよね！？」

「……………まあ、座れ」

「今言い淀みましたよね!？」

「では出席を取るぞ」

「今度は無視ですか!？」

そんな明久をよそに夜御ちゃんは席に着き、HRが進んでいく

HR終了後

『ねえ。夜御ちゃんってどこから来たの!？』

『可愛いねえ』

『夜御ちゃんって何かのキャラに似てるよな!えーと、刀語の』

『えっと、その…』

あの光景、転校初日のお約束って奴だよな?周りが男子なのは置いとくとして…

とりあえず、助けてあげようか

「皆ストップ!止めてあげなよ!その子困ってるじゃないか!」

おお。流石明久。横で平然と寝てる雄二とは大違いだね

『なんだよ吉井！別に良いじゃねえかよ！』

『お前のせいでクラスの女子には手を出しにくいんだよ！』

『誰のせいだと思ってやがるんだ！』

「え？手を出しにくい？何の話？誰のせいなの？」

……明久、君はやつぱり鈍いよ

でもこのクラスの男子なら秀吉も女の子扱いしそうなんだけど……
なんで除外されたんだろう？

【しつこいようですが、真琴も鈍いです】

とりあえず、止めに入ろうか

『秀吉も真琴さんが……』「はいストップ！つて、今なんて言いかけたの？」真琴さん！？い、いえ、なんでもないですよ！？』

秀吉も私が？なんだつたんだろう？

まあそれは置いといて……

「ダメだよ。転校したての子を質問攻めにしたら。明久も、止めるならちゃんと止めなよ」

「はは……ごめん真琴」

『……すみませんでした』

集まっていた男子たちがしぶしぶと引き下がっていった。ずいぶんあつさりだね……

『あの子も吉井勢力に入るのか……』

『ああ。そうなるだろうな』

……

「吉井勢力って…何？」

「さあ？」

明久を好きな人って意味だろうけど…これ以上ライバルが増えるのは困るなあ…

あ、それより夜御ちゃんだよ！

夜御ちゃんを見ると、さっきの男子たちの方をじっと見ていた

「どうしたの？」

「い、いえ。何でもありません。それより、お二人とも、ありがとうございます」

「いや、感謝されるほどのことはしてないよ。えっと…」

「夜御美零です」

「そうそう夜御ちゃん！」

明久、名前くらい覚えようね

「え〜と、僕らは」

「明久さんと真琴さんですよね？」

「あれ？何で僕らの名前を…？」

「い、いえ、先程名前を呼んでいるのを聞いて…」

そんなに慌てなくても…

それと明久、少しは見習おうね

「流石真琴に明久じゃのう。早速仲良くなったのじゃな」

「……………流石」

「アキは誰にでも優しいからね〜」

「確かにな」

「まこ姉も負けてないよ〜」

「まこちゃんや吉井君は馴染みやすいですからね〜」

見ると、周りから皆が近づいてきていた。そうだ紹介しとこう

「夜御ちゃん。紹介するね。左から、秀吉、康太、美波、すが…亮君、彩華、瑞希だよ」

「真琴さん、今…亮君って…」

「あ、いや、なんか割と仲いいのに一人だけ苗字だなぁって思ってたね」

「真琴さんが…俺の名前を…」

何か感動されてるなぁ…まあいいけど

「あ、忘れてた。そこで寝てるのがクラス代表の雄二ね」

いい加減起きなよ雄二…

「夜御美零です。美零でいいですよ。よろしくお願いします」

「「「「「よろしく（ね）（な）（頼むぞい）（お願いしますね）」

キーンコーンカーンコーン

あ、チャイム鳴ったね

皆各々の席に戻っていく

「じゃあ夜…じゃなくて美零。また後でね」

Side Mirie

昼休み

「美零！お弁当一緒に食べようよ！」

「あ、はい！」

やっぱり皆さん優しいですね…

皆さんを守るためにも、早く鬼勇の協力者を見つけないと…

それにしても明久さんに恨みを持っている人物ですか…

朝のあれを見る限り、結構多そうですね…

「ちょっと、先にお手洗いに行つてきますね」

「うん。分かった」

こういう時間の間に調べておかないと…

「はい。分かっていますよ鬼勇さん。大丈夫です。計画は順調に進んでいますよ」

え？今の声…鬼勇って…

私は声のした方向、階段に近づいて息を潜める

「それよりミサカスベックスSPEXはどうですか？いろいろ異次元の兵器積んどいたんですけど…」

ミサカって…間違いないですね。この人、鬼勇の協力者のようです

「そうですね。それは良かったです。わざわざ改良した甲斐があったってもんですよ」

やっぱり…さて、どうしましょうか？ここで捕らえた方がいいでし

ようか？

「あれ？何してるの？」

慌てて後ろを振り向きます。するとそこには、真琴さんの妹、彩華さんが立っていました

「彩華さんこそ、ここで何を？」

足音が遠ざかっていきます。私だということは気付かれていないようです…逃がしてしまいましたね

「私は皆の分の飲み物を買いに来たんだよ。私ジャンケン弱いからさ。美零ちゃんは？」

「私は、その…お手洗いに向かおうとしていて…」

「あ、場所が分からなかったんだね。教えてあげる。ついてきて！」

「あ、ありがとうございます」

なんとか誤魔化せました…

それより、一刻も早くこのことを伝えないと…

〈Side Out〉

放課後

「さあ雄二。今日も楽しく勉強会をしよう!」

素早く帰り支度を済ませた明久が雄二にそう言う

「…明久。似合わない台詞が気持ち悪いぞ」

今は体裁を気にしてる余裕はないんだよ雄二…今朝も減点が追加されたらしいしさ

「また減点か?」

「そうなんだよ…もう370 点も減点されてさ。かなり厳しいんだよね…」

ほとんどは昨日の余計な発言のせいだけだね…ヤバイ。思い出したらムカついてきた

「あ、あの、真琴さん」

「何?美零」

「勉強会、なさるんですか?」

「うん。今度テストがあるからね。その対策」

「そうですか。あの…」

「ん?何?」

「その…私も参加させていただいても…よろしいでしょうか?」

ふむ。やっぱりか

前の高校がどんなところは知らないけど、Fクラスに回されて嬉し
いはずがないよね

少しは挽回したいって気持ち、分かるよ

「私は構わないんだけど…他の皆に聞いて」「まこ姉、美零ちゃん
！雄二君から許可得たよ！」 だってさ。美零」

彩華ナイス！流石私の妹だね

「水野姉妹に夜御！行くぞ！今日は俺ん家だからな！」

「うん。りょーかい」「今行くよ！」

「あ、ありがとうございます！」

第34問 part 1 転校生と『協力者』 (後書き)

夜「協力者の名前は三雲春彦^{みくもはるひこ}。文月学園2年Bクラスに所属していて、趣味は機械いじり。動機は、過去に真琴さんに振られたことだと思われます」

神「なるほど…。夜御ちゃんありがとう。よく調べてくれた」

夜「いえ…明久さんたちを守るためです…」

マ「どうでもいいが、俺たちのこと忘れてないか？」

ル「兄さん！そこは突っ込んじゃダメだよ！」

神「いや…すまん。忘れてた」

フォ「それにしても…夜御さん、明久たちと仲良くなるの早くないか？」

ル「確かに…」

マ「勉強会参加も決定したしな」

夜「え〜と…こういうのには慣れてますので…」

神「まあ。そこは流石夜御ちゃんていいんじゃないか？」

マ「…まあいいか。危なくなったらいつでも呼んでくれよ」

ル「いつでも力になるよ」

フォ「この世界がなくなるのは俺も嫌だしな」

神「ありがとう。三人とも」

夜「ありがとうございました」

5人「次回もお楽しみに！」

第34問 part2 常識外れな家族ってメジャーなのかな？ (前書き)

綾「おい作者さん」

神「綾菜ちゃん？どうしたの？」

綾「ちょっと事情があってね、レフェルの世界に帰らなきゃダメになっちゃったんだ」

神「え！？もう帰っちゃうの？」

綾「うん。ごめんね作者さん。じゃ、またね」(ヒュン)」

神「……………行っちゃった…事情ってなんだろう？」

あ、本編スタートです！」

第34問 part 2 常識外れな家族ってメジャーなのかな??

歩くこと15分。私たちは住宅街の一角にある雄二の家に到着した

「…………お邪魔します…………」

靴を脱いで中に入る

私や明久のマンションと違って雄二の家は一軒家。きつと勉強もしやすいだろっ

「そついえば雄二。家に誰もいないの？」

「ああ。親父は仕事で、おふくろは高校の同級生たちと温泉旅行らしい。だから何も気兼ねせずゆっくりしてくれ」

「そうなんだ。あれ?この前明久と来たときも留守じゃなかったっけ？」

「ああ。その方がいいからな。色々と」

昨日も思ったけど、コイツは隠したい家族でもいるのかな?

そんなことを考えてるうちに、雄二がリビングのドアを開ける

「……………………!!!(ぶちぶちぶちぶち)」

「…………………………………………」

部屋の中には、一心不乱にプチプチを潰している女の人の姿があった

パタン

何にも言わずに戸を閉める雄二

「え〜っと、雄二……？今の人って」

「……………赤の他人だ」

「雄二君のお母さん？かなりの量のプチプチを潰してたけど……」

「確かに。あの量を潰すのにはかなり時間がかかりそうだね」

「凄い集中力じゃのう」

「坂本君のお母さんはそういうお仕事をされているのでしょうか？」

「プチプチをひたすら潰す仕事って……」

「……………珍しい」

「珍しいというか……いないだろ……」

さまざまな憶測が飛び交う。今のは何だったんだろう？

「恐らく、精神に疾患のある患者が何らかの手段でこの家に侵入したに違いない。なにせ、俺のおふくろは温泉旅行に行っているはずだからな」

珍しいね。雄二がこんなに苦しい嘘をつくなんて。ちょっと意外かもそんなこんなで私たちが部屋に入れずにいると、精神疾患の患者（雄二談）の聲が中から聞こえてきた

『あら…？もうこんな時間。さつき雄二を送り出したと思ったのに』
え…？朝からもう8時間はたつよね？そんなに続けてたの？

『続きはお昼を食べてからにしましょう』

しかもまだ続けるつもりなの！？

「おふくろっ！何やってんだ！？」

ついに雄二が部屋に踏み込んだ。耐え切れなくなっただんだね…

「あら雄二。お帰りなさい」

「おかえりじゃねえ！なんで家にいるんだ！？今日は泊りで温泉旅行じゃなかったのかよ！？」

「それがね、お母さん日付を間違えちゃったみたいなの。7月と10月って、パッと見ると数字が似てるから困るわね」

「どこが似てるんだ！？数字の形どころか文字数すら合っていないだろ！？」

「こら雄二。またそうやってお母さんを天然ボケ女子大生扱いしてっ」

「さらっと図々しい台詞をぬかすな！アンタの黄金期は10年以上前に終わっているはずだ！」

「あら、雄二のお友達かしら？」

「だから人の話を聞けえっ！」

……………なんか、凄いな。玲さんや私のお母さん並に

「皆さんいらっしやい。うちの雄二がいつもお世話になってます。私はこの子の母親の雪乃と言います」

やわらかく微笑みながら私たちに挨拶をする雪乃さん

…本当に雄二と血が繋がってるのかな？ 雰囲気はぜんぜん違うんだけど…
ていうか

「さ、坂本の母親って…若すぎない!？」

「むう…。とても子を産んでいるとは思えん…」

「……………美人」

「まるでお姉さんみたいですわ」

「そっだな」

お母さんには見えないよね? うん。皆もそう思ってるみたいだ
でも、実際いくつなんだろう?

「み、皆、とりあえずおふくろは見なかったことにして、俺の部屋
に来てくれ…」

「あ、うん。分かった。お邪魔しますね」

頭を下げてから雄二の部屋に向かう

『皆さん。あとでお茶を持っていきますね』

今からそんな声が聞こえてくる

なんだ。いいお母さんじゃないか。ちょっと変わってるけど…

「ここが俺の部屋だ。入ってくれ」

言われたとおり中に入り、ぐるっと見渡してみる
以外に片付けられてるみたいだね。部屋も広いし

「うーん。やっぱりこの人数で俺の部屋は狭すぎるか。参ったな…」

確かに、10人で勉強するにはちょっと狭いかもしれないね…

「居間じゃダメなの？」

「ダメじゃないが、おふくろがいるからな。勉強にならない可能性が高い」

雄二。翔子以外にも弱点あったんだね…

「もう！ダメですよ坂本君。お母さんを邪魔者扱いしてっ」

「それは言うがな姫路。お前はあのおふくろと一緒に暮らしてないからそんなことが言えるんだ。四六時中一緒にいるとツッコミどころが多すぎて」

P r r r r r P r r r r r

雄二が反論していると、突然電子音が鳴り響く。誰かの着信音かな？

「あ、ウチの携帯ね。ちょっと「コメン」

何の電話だろう？急用なのかな？

「もしもし？あ、Mut お母さん。どうしたの？………うん。…
………うん。そう。わかった」

一分もしないうちに通話が終わり、携帯電話がポケットにしまわれる

「美波、何かあった？」

「うん……。今週は仕事が休みだからって母親が家にいるはずだったんだけど……ちょっと急な用事が入って家にいられなくなったみたい」

「あ、そうなの？それじゃ、葉月ちゃんが家に一人ってこと？」

「そうね。だから、悪いけどウチは帰るわ。勉強はまた今度ね」

そっか。なら仕方ないね。小学生を一人にしておくのは可哀想だし

「まこ姉……」

「何？彩」

「今私、すべてを殴り捨ててでも葉月ちゃんと遊びたいんだけど…」
またこの子は…

「お、彩華。それは名案だな」

「え？名案って…遊ぶこと？」

「違う違う。島田の家に行くことだ。それなら問題ないだろう」

「え？ウチの家？」

おお。それは名案かもしれない

「それは良いのう。島田の妹とは須川と夜御以外の全員が顔見知りじゃし、丁度雄二の部屋は手狭だったところじゃし」

「葉月ちゃんとも会えますしね」

「そうだね。亮君たちはそれでいい？」

「ああ。別にかまわないぞ？」

「じゃあ美零は…って、あれ？」

「真琴？どうしたの？」

改めて周りを見回す。やっぱり…

「美零がない…！」

「『『『『ええ!?!?!?!』』』』」

〈Side Mirie〉

『夜御ちゃん。ホントに良かったの？真琴たちと勉強会しなくて』

「問題ありません。私の役目は真琴さんたちを守ることですので…。」

屋根の上を飛び移りながら通話をする

電話の相手は天崎神哉さん。このバカ天世界の神ともいえる人物です
今回私に依頼されたのは真琴さんたちの家の護衛

以前のように、留守を狙って研究品を盗む可能性もありますし…

「では、また何かあれば連絡します」

『うん。よろしく頼むよ』

通話を切り、真琴さんの家の前に降り立ちます
扉を開けようとして近づくと、ふいに扉が開き

「あれ？夜御ちゃん？どうしたの？」

中から、真琴さんの友達、相沢綾菜さんが出てきました

〈Side Out〉

「私は美零を探してくるから、皆はさきに美波ん家行つて！」

「じゃ、じゃあ私も…」

「彩は大丈夫だよ。しっかり勉強してきな」

「う、うん…分かった」

「じゃあ、なるべく早めに行くから！」

そう言つてテレポートする。行き先は文月学園。そこからならサーチも簡単だろう

「（ヒュン）よし、スキルチョイス能力選択、電撃使い《エレクトロマスター》！
生体電気サーチ開始！」

【真琴オリジナルの技です】

「……………あれ？見つからない？」

おかしい…この町にいるならサーチにかかるはずなのに…
もしかして、町の外？それとも…

（Side Mirrei）

綾菜ちゃんに案内されて居間に通されます

おかしいですね…綾菜さんは少し前に戻ったはずなのに…

「どうしたの夜御ちゃん。怖い顔して」

「い、いえ……」

少し、探りを入れてみますか

「綾菜さん。自分の世界のことは……はうっ……」

「夜御ちゃん！？どうしたの!？」

今一瞬、体が痺れました……

あの感じは……電気系の能力でしょうか？サーチされたような感じでしたね……

ハッキングで居場所を隠しておいたほうがいいかもしれませんね

「えくと、夜御ちゃん？」

「あ、すみません。あの、自分の世界のことはいいのですか？」

「私の世界？別に問題ないよ。今はこの世界が大変みたいだし、力になってあげたいんだよ」

嘘をついているって感じはなさそうですね。じゃあ……本物なのでしようか？

「あ、飲み物もって来るね」

そう言っつ綾菜さんは部屋を後にします
今のうちに荒らされてないか調査を……ッ!

「誰ですか!？」

私の顔すれすれのところを刃物のようなものが通過しました
敵…なのでしょうか？

「流石ですね、とミサカは感嘆の声を漏らします」

この話し方…妹達ですか…

やはり敵が来ていたようですね

「姿を現したらどうですかミサカさん。それが礼儀というものでしょう？」

「ミサカは既に姿を見せたはずです、とミサカは確認します」

もう姿を見せたって…まさか…

「綾菜さんに、変装しているのですか？」

「正確には肉メタモルフォーゼ体変化です、とミサカは補足説明しながら再び顔をだします」

目の前を見ると、中学生くらいの背丈の少女が姿を現した

「姿は他の妹達と同じようですね」

「はい。姿かたちは他のミサカと寸分違いありません、とミサカは説明します。ですが…」

「戦闘力は遥かに高い…ですか」

「その通りです。ミサカはマスター三雲の手によって、多種の能力や異次元の兵器を用いることができます、とミサカは自慢げに語ります」

マスター三雲：やはり、製造者は三雲晴彦で間違いのないようですね

「あなたの役目は何ですか？私を殺しに来たのですか？」

「いえ。忠告しにきました、とミサカは懇切丁寧に説明します」

「忠告？」

「はい。ミサカたちは宣言どおり、あなたたちの試験の翌日に行動を起こし、吉井明久を手中に収めます、とミサカはここに宣言します」

「……………」

「また、それに伴い、この町への攻撃も開始します、とミサカは続けます」

「この町への攻撃…ですか？」

「はい。ミサカたちは既に、パワードスーツ駆動鎧軍の製造を開始し、準備を進めています、とミサカは手の内を明かしながら言います」

「パワードスーツ駆動鎧ですか…。神哉さんが前に言っていましたね」

「忠告は以上です、とミサカは肩の力を抜きます」

「……………」

「どうしたのですか？今ここでミサカを倒そうとはしないのですか？とミサカは挑発します」

「いえ、無駄でしょう。私一人の力では、あなたを倒すことはできませんよ」

「賢明な判断ですね、とミサカはあなたを褒め称えます」

「ですが、こちらにはあなたたちを倒す手段があります。そちらも覚悟しておいてください」

「そうですね。伝えておきましょう、と言いながらミサカは空間移動を開始します。では、また会いましょう」

「そうですね…」

さて、このことを神哉さんにお伝えしないと…

Side Out

第34問 part 2 常識外れな家族ってメジャーなのかな?? (後書き)

神「神哉と」 彩「彩華の」

神・彩「戦後対談!」

彩「夜御ちゃんがなくなっちゃった…」

神「そうだな。でも、真琴が探してるみたいだし、大丈夫じゃないか?」

彩「うん。それなら良いけど…」

神「で、彩華、お前ちゃんと勉強してるか?」

彩「う、うん。当たり前じゃん。な、何言ってるのさ!」

神「ふ〜ん」

彩「信じてないよね?絶対信じてないよね!??」

神「では、次回をお楽しみに!の前に、ウツソさんの短編の真琴、彩華サイドを書く予定です」

彩「聞けえええええ!」

第34問 part3 勉強会と一つの疑惑 (前書き)

彩「……………言いたいこと、分かるよね？」

神「正直悪かったと思っている…」

彩「何がGWは一気に投稿するよ！全っ然できてないじゃない！」

神「本当に…すまなかった…」

彩「謝って済むなら警察は要らないの！分かる!？」

神「ぶ…部活が予想以上に忙しくて…」

彩「言い訳しないの!」

神「……………」

彩「全く…とりあえず、本編はじめるよ」

第34問 part3 勉強会と一つの疑惑

Side Ayaka

まこ姉が夜御ちゃん捜索に出かけてから30分が経過した

私は言い付け通り葉月ちゃんを交えて勉強会をしているんだけど…

「遅すぎる…」

まこ姉の捜索能力は天下一品だ。超能力を使ったサーチで、何でもすぐに見つけてしまう。その凄さは妹の私が良く知っている

そのまこ姉が、夜御ちゃんを探すことにこんなに時間をかけるなんて…ありえない…何かに巻き込まれたとしか考えられない…
なら、私が助けてあげないと！

「皆！私ちよつと出かけて…駄目だ！」

「何で！？雄二君はまこ姉が心配じゃないの？」

「心配に決まってるだろ！」

雄二君の剣幕に押されそうになる

「だ、だったら…」

「お前のほうこそ良く考えてみる！真琴が何かしらの事件に巻き込まれていた場合、お前が行って助けられるという保障はあるのか？」

「う…でも…」

「彩華ちゃん。真琴を信じよう」

「明兄まで……」

「彩華よ、考えてもみるのじゃ。真琴がいなくなつて、お主と同じか、それ以上に心配している者は誰じゃ？」

そっか……。明兄も……

「……………」

場が静まる

この空気嫌だよお……。まこ姉……。早く戻つてきてよ……
そんなことを考えた直後

「え〜と、入つてもいいのよね？お邪魔します」

玄関から、そんな声が聞こえてきた

〈Side Out〉

少し時は遡り

超能力を使ったサーチを諦めた私は、町の中を走り回っていた

「ホント……。どこ行つちやつたんだろっ？やっぱり何かに巻き込まれちやつたのかな……」

早く帰らないと彩華たちに心配かけちゃうし……。急いで探さないと……

「あっ！真琴さん！」

不意に、後ろから声が聞こえてきた

「み、美零！？」

「すみません…ご心配をおかけしたようで…」

「よかったあ…何事もなかったみたいね…」

「別の用事があって、何も言わずに抜け出してしまいました。申し訳ありません…」

「いいのいいの。無事戻ってきたんだしね。さ、皆のところに戻るっ」

「あ、はい！」

それにしても…何で突然後ろから声が…？

そして現在

「良かったああ！まこ姉無事だったあああ！」

さつきから彩華が抱きつきながら泣きじゃくってるんだけど…そんなに心配かけたっけ？

「すみません。私が勝手に抜け出したばかりに…」

「無事に戻ってきたんだし、そんなに気に病まなくてもいいよ。夜御ちゃん」

あ、明久の奴、私と同じこと言ってる…

「で、結局何で抜け出したんだ？」

須川君が質問をぶつける

「え〜っと、引越し作業の手伝いを…」

「引越し？それなら無理に参加しなくても良かったんだぞ？」

「いえ…不意に呼び出されたもので…神哉さんに…」

「……ああ…なるほど……」

葉月ちゃんを除いた全員が納得する。アイツならやりそうだな…と

「ま、まあ。二人共戻ってきたんだし、勉強会続けようよ」

「うん。そうだね」

その後1時間程度、皆でわいわいと勉強して、注文していたらしいピザを食べて再び勉強。と、何も滞りなく時間は進み…

「ん？もうこんな時間か。そろそろ今日は終わりにするか」

見上げると、時計は9時半を指していた。集中して気付かなかったよ…

「もう真っ暗だよ」

今回は私、雄二、瑞希で別れて勉強したんだけど、サクサク進んで何よりだね

明久も調子が良さそうだったし、玲さんを追い返すことだってできるんじゃないかな？

「あとはまた今度にするとして、今日は帰ろうぜ」

「そうですね。美波ちゃん、今日はありがとうございました」

「あ、ううん。こっちこそ色々ありがと。ほら葉月、お礼を言いなさ 葉月？」

「ZZZZZ……」

「あはは。疲れちゃったみたいだね」

葉月ちゃんは、いつの間にか明久の膝の上で眠ってしまっていた

「葉月ちゃん、明兄のシャツしっかり握ってる…これじゃあ動かさないね」

「あ、ホントだ」

これじゃあ明久は帰れないね…

「こら葉月、起きなさい。アキが帰れないでしょ？」

美波が葉月ちゃんの肩を叩く

「んう……」

すると葉月ちゃんは少しだけ目を開けて、

「帰っちゃ、嫌です……」

そう言つて更に強くシャツを握りしめる

「葉月。あんまり我儘言つと、お姉ちゃん怒るからね」

美波の口調が少しだけ強くなる
しっかりと姉だなあ……と思った。私も見習いたいなあ……葉月ちゃん以上に頑固な妹がいるわけだし……

「……お姉ちゃんには、わからないです……」

「え？何が？」

「お姉ちゃんは、いつも一緒にいられるからいいです……。でも、葉月はこういう時しか、バカなお兄ちゃんと一緒にいられないです……」

「……」

葉月ちゃんの本音に、私たちは顔を見合わせる。葉月ちゃん、そこまで明久を慕つてるんだね

「あのさ、美波。良かったら、僕はもう少しここで勉強していつてもいいかな？」

「え？」

「だな。今のチビツ子の台詞を聞いたら、明久は残るべきだよな」

「そうじゃな。明久よ、モテる男は辛いのが」

「……………人気者」

「今回は処分を見逃してやらんでもないぞ」

明久からかわれまくってるなあ

「そ、それじゃあ、悪いけどもう少し葉月に付き合ってもらえる？」

「うん」

美波の許可も下りたみたいだし、明久はもう少し勉強を続けていくみたいだね。さて、私は…

「ヤダヤダ〜！私も残る〜！」

コイツをどうにかしないとね…

「彩。アンタには残る理由はないでしょ！」

「ちゃんとあるよ！葉月ちゃんと遊ぶっていう大事な目でk」後にしなさい…」「」

「え〜と…明兄とあゝ「後にしなさい!」「」

「え〜と…う〜んと…」「諦めなさい、彩!帰るわよ!」「」

「う…分かったよ…」

よしっと、説得完了!

「雄二〜そつちは?」

「ああ。姫路の説得も完了した」

うん。オツケー

瑞希もたまに頑固になるからね〜

「それじゃあ美波に明久。また明日ね〜」

「大勢で押しかけてすまなかったのう」

「……………ありがとう」

「ありがとうな」

「ありがとうございます。島田さん」

「美波ちゃん、ありがとうございました…」

「うう…ありがとうね…」

どこか納得できていない様子の瑞希や彩華も含め、皆がお礼を言つて玄関に向かう

「じゃ、また明日。皆」

明久が座ったまままで挨拶する

「待って、外まで送るわ」

美波も立ち上がって玄関までついてきてくれた

「それじゃ、また明日ね」

「うん。また明日」

玄関で軽く挨拶を交わし、私たちは美波の家を後にした。さて…

「美零、ちょっといい？」

「はい？なんでしょう？」

「うん。ちょっと聞きたいことがあるの…」

第34問 part3 勉強会と一つの疑惑 (後書き)

彩「彩華と」 神「神哉の」

二人『戦後対談!』

彩「まこ姉が無事で良かったよ……」

神「そうだな……」

彩「ていうか、アンタのせいだったのね……」

神「人聞きの悪いこと言うな〜ちょっと手伝ってもらってただけじゃないか」

彩「む〜。…まあいいや。キリないしね……」

神「それでは、また次回です!次回は早めに投稿したいな……」

第34問 part 4 ～もう一人の超能力者～（前書き）

皆さんお久しぶりです。『バカ天』作者JACKこと、天崎神哉です
まずは、私事でこの小説の更新が停止してしまったことを、謝罪い
たします。申し訳ありませんでした

一年もの間、物書きをしていなかったものですから、文才がかなり
落ちてしまっているかもしれません

しかし、この小説を読んでいる皆様方に満足していただけるよう、
頑張っていきたいと思っております
よろしければ、再びよろしくお願いいたします

それでは、本編開始です

～Another Side～

「美零、ちよつといい？」

「はい…なんででしょうか？」

「ちよつと、聞きたいことがあるの…」

そう言って、一呼吸置く

今ここにいるのは、二人の少女だけ

そんな状況で、彼女 水野真琴はとある疑問を口にした

「貴女って…何者なの…？」

…
…
…

静寂…

夜の静かさに反響して、セミたちの鳴き声が響く

その静寂を打ち破るように、もう一人の少女 夜御美零はゆっくりと

「私は」

ゆっくりとこう言った

「私は…超能力者です」

と…

第34問 part 4 一人の超能力者

超能力者。読んで字の如く、超能力 常人には実現不可能な能力を
使用する者のことである

それを踏まえた上で、彼女は

「やっぱり……」

と呟く

彼女にとって、これは予想していた答えだったし、何より、彼女自
身が超能力者だからである

「何で隠してたの……？」

「隠そうとしていたわけではありません……ただ、それを伝える必要
がないと、判断したまでのことです」

「何か目的があって近づいたの……？ 私たちに……」

いつも通りの優しい口調で、彼女は尋ねる

「はい……」

それに対し、美零は淡々と答える

「私は……真琴さん。貴女と、明久君を守るために来ました」

Side Out

Side Mirie

誤算だった…まさか保護対象である真琴さん本人に気づかれてしま
うなんて…

あの時、真琴さんの自宅でミサカSP EXと対峙した時、体に不思議な電流が走った。今思えば、あれは真琴さんの能力だったのだ。阻害してしまったのは失敗だったかもしれない

こうなってしまったのも、私の責任だ

神哉さんからは、『もし正体がばれたら、変に誤魔化さなくていい』
と言われている

だから私は、あえて目的を明かすことにした
もちろん。一週間後に迫った計画のことを除いてだが…

Side Out

「守りに来た…？」

「はい…」

私と明久を守るため…美零はそう言った
でも…

「守るって…何から…？」

自慢ではないけど、私も超能力者の一人だ

自分の身くらい自分で守れるつもりでいる
それは美零も、美零を送り込んだ誰かも…分かってはいるはずだ

「……………お二人を狙っている者がいます…」

「狙っている…?」

「はい……………」

そう言つて、美零は黙つてしまふ

「それつて」

「あれ?真琴と夜御さん…?」

「明久?」

私が聞くより早く、明久が家から出てくる

「明久君、もういいのですか?」

「うん。もう大丈夫だよ?」

「……………」

何事もなかったように話しかける美零

「真琴…?」

「さ、明久。帰ろ?」

「え…？あ、うん」

ともかく、明久に心配をかけるわけにはいかない
まだ聞きたいことはたくさんあるけど、今日はもう引いておこつ

「じゃあ美零、またね」

「また明日」

「はい。また明日…」

美零も同じ考えらしく、それ以上何も言わず、そのまま手を振って
別れた

「ねえ、真琴？」

帰り道の途中、明久が話しかけてきた

「何？明久」

「いや。夜御さんと何かあったのかなあ？つて」

「……………」

流石明久だね。お見通しってわけか…
でも

「何でもないよ…?」

「ごめんね? 教えるわけにはいかないの…」

「そう? ならいいけど…」

「……………」

「……………」

気まずい沈黙

「真琴……………」

「ん…?」

「何か困ったことがあったら… 言ってね? 話を聞くくらいなら… してあげられるから…」

明久……………」

「ありがとね……………」 (ボソツ)

「ん? なにか言った?」

「ん? 別に?」

本当に… 心強いよ… 明久

第34問 part 4 ～もう一人の超能力者～（後書き）

彩「彩華と」 神「神哉の」

彩& a m p ; 神『戦後対談!』』

神「改めまして皆さんお久しぶり バカ天作者の天崎神哉です」

彩「復活回に出番がなくてちょっとしょんぼりな、水野彩華だよ」

神「しょんぼりしてたんだ…（ - - ; ）」

彩「うん…」

神「…ごめん」

彩「分かればいい…」

～しばらくお待ちください～

神「読者の皆さんにお願いです

もしこの回を読んでいて、『前の時の方がよかった』とか、『文章下手くそ』とかありましたら、教えてください」

彩「なんでそんなにネガティブなの…?」

神「ついでに、ご意見・ご感想もどんどん下さい!」

彩「ついでなんだ…」

神「また、『こんな話を書いてほしい』なども、多少受け付けます」

彩「……………」

神「ではまた来週、お会いしましょう」

彩「またね」

P・S・新しい小説を書こうと思ってたり無かったり…

第35問 part1 真琴の真琴によるとあるバカのための勉強会 (前書き)

神「皆さんこんにちは こんにちは おはようございます 完全復活を果たしたJACKこと天崎神哉です」

真「テンション高いね？作者」

神「いや、前の回のアクセス数が5000突破だよ？たったの二日です」

真「すごい変化だね…最初と比べると…」

神「皆さん、本当にありがとうございます…！」

真「作者？浮かれてないで本編始めるよ？」

神「りょくかい では、ごゆっくりお楽しみください」

原作の部分はほとんど原作通りだったりする

第35問 part 1 真琴の真琴によるとあるバカのための勉強会

翌日の昼休み。僕らは皆で卓袱台をくつつけてお弁当を食べていた。ちなみに、僕のお弁当は真琴が作ったものだ。姉さんのせいでおかげで、真琴にお弁当を作ってもらえることになったんだけど、僕としては万々歳だ。生まれて初めて姉さんに感謝したかもしれない

「ねえ、姫路さん」

「はい。何ですか？」

「昨日はありがとね…？」

あの後、真琴と合流して家に帰る途中に、先に出ていたはずの彩華ちゃんと鉢合わせた。彩華ちゃんによると、姫路さんと二人で、僕らを心配して待っていてくれたらしい

「ほえ？何の話ですか？」

「彩華ちゃんから、あの後ずっと待っていてくれてたって聞いたからさ。そのお礼だよ」

「あ、その話ですか…／／／／／」

言うと、姫路さんが少し顔を赤らめた

「…おいちびっ子」

「チビっ子言うなっ!!」

「お前、明久たちになんて説明したんだ？」

「え？瑞希ちゃんが、雄二の反対を押し切ってまで明兄を待ってたって…」

「……………美化しすぎだ…バカ…」

「なっ！？バカって言う方がバカなんだよ!？」

「別にバカで構わんぞ？だが、俺がバカならお前は大バカだがな」

傍らで雄二と彩華ちゃんが怒鳴り合ってるけど…いつものことだからスルーしておこう

「でも瑞希。あんな時間まで残ってて、大丈夫だったの？」

「それが……………」

真琴の言葉に、少し言葉を詰まらせる姫路さん。もしかして

「怒られたりした…?」

「はい……………週末まで、学校以外で外出禁止って…」

やっぱり怒られちゃったか…。やっぱり、大事な娘が二日も連続で遅くまで帰ってこないとなると、怒られちゃうよね…

「あれ？雄二も残ってたんだよね？」

まだ喧嘩してる雄二に向かって声をかける

「ん？ああ。そうだが？」

「大丈夫だったの？」

「ん？俺の親は特に何も言わないから平気だぞ？」

「そうじゃなくてさ」

「なんだよ」

「二日連続で女の子と夜遅くまでいた上に、昨日は夜道で彩華ちゃんや姫路さんといたんでしょ？霧島さんは怒らないの？」

「……………」

「ここまで『やってもらった』って表現が似合う表情はなかなかないと思う」

Side Out

「雄二、やつちやったね……」

ぼそりと……世界の終わりみたいな顔をしている雄二に向かって呟く

「い、いや。大丈夫だろう。バレなければなんの問題も」

雄二、それ…フラグだからね…？

「……………雄二。今の話、向こうで詳しく聞かせて」

やっぱり…

「ま、待て翔子。お前は勘違いをしている。お前が考えているようなことはなにも起きていないし、そもそもお前に俺が責められる謂れはないと」

「……………うん。言い訳は向こうでゆっくりと聞かせてもらう」

そう言つて、ずるずると雄二を連れて立ち去る翔子

ああ。売られていく子鹿みたいな目つてこんな感じなんだね。初めて見た

Piiiiii

すぐさま、私の携帯にメールが届く。えくと、なにになに？

E-mail from 坂本雄二

頃れる

……………ごめん雄二。きつと『殺される』って打とうとしたんだよね…？ホントに悪かったと思うよ…

「ふむ。そうなると放課後の勉強会は厳しそうじゃな」

「そうね。教えてくれる人が真琴だけになっちゃうし」

「……………（じくり）」

確かに。私だけじゃこの人数に教えるには大変かもしれない
でも、明久の…皆のためにも勉強会を中止するわけにもいかないし…

「……………真琴」

「っ！？」

不意に声をかけられ、思わず身構えてしまう

「しよ、翔子…？どうかしたの？」

「……………困ってる？」

「へ…？」

「……………勉強に困ってる？」

「え〜と、私が困ってるわけじゃないんだけど…」

思わず翔子のシャツに目がたって、言葉が途切れてしまう

「……………？」

「いや、皆の勉強…どうしようかになって…」

あれって血だよね…？雄二の返り血だよね…？

「……………それなら、私も協力する」

「え？協力？」

「……………週末に、皆で私の家に泊まりに来るといい」

皆と泊まり……………？翔子ん家に？

「いいの……………？翔子」

「（こくり）……………真琴たちにはいつかお礼をしたいと思っていた」

助かったよ翔子！！

流石に私だけが教えるわけにもいかないし、かといって勉強会を中止するわけにもいかない。でも翔子も参加してくれるなら願ったり叶ったりだ

「霧島さん。皆でつてことは、僕たちもいいの？」

「……………勿論」

「週末つてことならウチも行けそうだし、お邪魔しちゃうかな。皆は？」

「うむ。ワシも問題はないぞ？」

「わ、私もたぶん大丈夫です。ダメでも、説得してみせます！」

「……………参加する」

明久を筆頭に、他の皆も参加が決定
あとは…

「美零は…？」

この世界での三人目に当たる異世界の超能力者。夜御美零
私と明久を助けるためにこの世界にやってきたと宣言した彼女は、
昨日までと何ら変わらず、私たちと机を並べていた

「残念ですが…遠慮させてもらいます…。まだやらなければいけないことがあるので…」

そう言つて、ちらりと私を見る

あれから一日が過ぎたけど、私は未だに美零を信じ切れずにいた
私たちが狙われてるなんて、全然実感がわかない

「そう…分かった…」

だから、その返事を聞いて…少しだけホッとしている私が出た

「真琴…？」

「え？な、何？明久」

明久に呼ばれ、我に返る

「どうしたの？>また夜御ちゃんのこと？<」

皆に聞こえないよう、テレパシーで心配してくれる
明久には…ちゃんと話しておくべき…だよな？

「ん…？何でもないよ？>後で話すね…？ありがと。明久<」

「そう…？>分かったよ<」

やっぱり、明久は優しいな…

「ところで霧島さん。雄二は参加できるの？」

明久が話を逸らしてくれた

そういえば…アイツ、生きてるかな？

「……………大丈夫」

「あ、そうなの？」

よかった。生きてはいるみたいだ

「……………その頃には、きつと退院してる」

「そっか。それはよかった」

皆で頷き合っ

そっかあ…皆参加できてよかったよ

【あれ？ツツコまないの？】

うるさい作者！…今必死にスルーしてるんだから！！

【そうですね……】

Side Akihisa

その日の放課後

いつものように僕、真琴、彩華ちゃんの三人で帰っていると

「そうだ。二人とも」

不意に真琴が話しかけてきた

「ん？なあに？」

「いいこと思いついたんだけどさ……」

いいこと……？

「彩華ちゃん、ちょっと……」

「あ、明兄……何かな？」

「今、すっごく嫌な予感がしてるんだけど……」

「奇遇だね……わ、私もだよ」

二人で目を見合わせ、頷き合う

「私たち三人だけでも勉強会を」

「バイバイ真琴っ！！（ダッ）」

「私も後でねっっ！！（ダッ）」

「やろっかな…って二人とも!？」

せつかく週末に霧島さんの家で勉強会できるんだ！！

別に今勉強会なんかしなくても良いじゃないかあっ！！

その後、一瞬で僕が捕まり、超能力を使って全力逃亡を図った彩華ちゃんまでもがものの10分程度で捕まったのは…もう言うまでもないと思う

〈Side Out〉

第35問 part1 真琴の真琴によるとあるバカのための勉強会 (後書き)

神「神哉と」 彩「彩華の」

神& amp ;彩『 戦後対談! ! 』

神「災難だったな…?」

彩「完全に人事だね…作者」

神「だって人事だもん!!」

彩「はあ…」

神「それで彩華。お前…どうやって逃げたんだ？」

彩「まずはまこ姉に認識阻害かけて私がたくさんいるように思わせ
てから、レポートでいるんなどに移動して、それから」

神「もう良い分かった。常人には理解できないって事が分かった」

彩「……………」

神「でも、それを捕まえた真琴って…」

彩「流石としか言いようがないよ…」

神「まあ、勉強会頑張れ」

彩「うぐ…」

神「それではこの辺で戦後対談を終わります。
次回は、真琴によるスパルタ学習塾です」

彩「いやだあああっ!!」

神「それではまた」

くとある超能力姉妹のプロフィール・改く（前書き）

二人のプロフィールの改訂版です

今まで詳しく書いてませんでしたね（汗）

くとある超能力姉妹のプロフィール・改

水野真琴

身長：165cm

体重：-----

血が滲んで読めない

学力：全てにおいてAクラスレベル

さらに能力を使った身体強化により点数を底上げしている
平均点は800くらい

能力無使用で500くらい容姿：紅い髪で紅い瞳

生粋の日本人だが肌は白く、ハーフのようにも見える

召喚獣：デフォメされた真琴に、蒼い甲冑を纏った姿をしている

Fate/Zeroのセイバーみたいな姿

能力は幻獣召喚

消費する点数に応じて、鳳凰や龍などを喚び出し、戦わせる

この他にも、点数を消費して超能力を使うことができる

明久、瑞希の幼馴染みで、明久と同じマンションの隣の部屋に住んでいる

強化合宿にて明久と付き合い始めて、現在に至る

某ヒーローのような不幸体質でにみまわれており、度々不幸に巻き込まれる

水野彩華

身長：130cm

体重：-----

自主的に書かなかった

学力：2年Fクラスで最下位の成績

勉強が大嫌いで、教科書を見ると頭がいたくなる(らしい)
平均点は100に満たない

容姿：真琴と同じく、紅い髪に紅い瞳をしている

肌の色も、真琴に似て白い召喚獣：デフォルメした彩華そのままの姿
要するに武器はなく、防具も制服だけ
能力は不明

300点をとったことがないため

真琴と同じく、超能力を使うことができる

ただし、点数を消費することがないため、超能力だけで戦うことも
できる

強化合宿を参照

水野真琴の実の妹

10年の間母親と共にアメリカへ留学していた

重度のシスコン（ブラコン）で、真琴や明久を傷つける人には容赦
しない

天真爛漫を絵に描いたような性格

第35問 part2 どうしてこうなった… (前書き)

皆さんこんにちは 天崎神哉です

サブタイトルを見てはあ…?とか思った人も落ち着いて下さい。す
ぐ分かります

早速ですが、本編開始です

第35問 part2(どうしてこうなった…)

Side Akihisa

ある日の夕暮れ時。僕は自宅で正座させられていた
何でこんな事になっているのかというところ

「うん…。やっぱり…(ぶつぶつ)」

僕の幼なじみであり、恋人の真琴との鬼ごっこ(彩華ちゃん談)
に負けたからだ

「明兄…私たちどうなるのかなあ…?」

「きっと死んだ方がマシって思うほどの拷問を…」

「しないからね…?」

「…!?!?」

どうやら聞こえていたらしい
でも拷問じゃないとなると…一思いに死刑とかならうか…
でも真琴に限ってそんな

「うん。よし。そうしよう」

「「悪魔ああっ!?!」」

「…え?」

まさか本当に殺されるとは思わなかったよ畜生!!

「真琴の裏切り者おっ!!」

「まこ姉のバカあああ…」

「え……………?何これ…」

（Side Out）

「落ち着いた…?」

「「なんとか…」」

あれから5分。突然錯乱しだした二人を宥めるのは…正直言って結構疲れた

「で、ホントは何をする気なの…?」

「だから勉強会だって…」

こいつらは本気で私が殺したりすると思ってるのだろうか…?

「いい?説明するよ?」

「うん…」

「ありがと。考えてたんだけど…試験まで一週間もない今、苦手科

目の克服なんて難しいと思うの。そういうのは…まあ翔子の合宿でやると思っし」

二人の頭にクエスチョンマークが見えるんだけど…あれ、どうやってるの？

「だから、今私たちがすべきなのは苦手科目の克服じゃなくて得意科目の底上げなの。意味…わかる？」

「さっぱり…」 「ぜんぜん」

こいつら……

完全に理解してもらえるまでどのくらいかかるんだろう…？

「つまり…僕の場合は世界史を重視して勉強するって事だね？」

「まあ…そんなとこね…」

結局、30分もかかってしまっていた
もう真っ暗なだけ…？

「まご姉、私は？」

「彩は………」

はて。彩華に得意教科なんてあったらどうか

「数学？」 「数字見るのもイヤ」

「古文…」 「勉強する意味がないと思う」

「英語…？」 「アトムジャパニーズ！」

「……………」 「……………」

ダメだ…。彩の場合、根本から育てないと…

「彩、暗記は得意？」

「苦手かも…」

文系は除外…と

「そつだ。彩、科学は？」

彩華も超能力者なんだ。少しくらい科学に興味があっても…

「うーん…」

予想通り、そんなに嫌いって訳でもないみたいだ
それなら、興味を持たせてやれば…

「科学を極めたら能力のレベルが上がるかもだけど…」

「え…っ！？」

「どっしするっ？やってみない？」

「まご姉に追いつける…?」

「ん…まあ。頑張れば…」

「やるっ!!」

そう言つて元気に立ち上がる。現金だなあ…全く何はともあれ、興味を持ってもらえてよかった

「さて、方針も決まつたし、明日から早速始めようか」

「え?明日?」

「何?明久。今から徹夜でやるつもり?」

時計の針は夜の9時を差していた
どうしよ…まだご飯も食べてないよ…

「ていうか明久。こんな時間までここにいて、玲さんに怒られな」

ピンポーン

噂をすれば…だね

「ま、ママ…真琴!…!どうしよっ!…!」

「落ち着きなさい。あ、明久!」

「あわわわわ…」

と、とりあえず応対を…

「はい。どちらさまですか？」

インターフォンに向かって話しかける

『まこちゃんですか？こんな夜中にすみません。家の愚弟がお邪魔
していませんか？』

「……………」

『まこちゃん？』

「>あ、明久どうすんのよ！！<」

「>ぼ、僕に聞かれても困るよ！！<」

「>ま、まこ姉。へ、返事しなきゃ！！<」

「>そ、そうね…<い、いえ…。アイツなら来てませんよ…?」

『そうですか…』

「ごめんなさい玲さん…」

『では、アキ君にこつお伝え下さい…』

え……………？

『まこちゃんに迷惑をかけないように…それと、減点50です…』と

.....

『それでは……』

.....

「ま、真琴……？」

「は、ハメられた……？」

「え……？」

「明久のバカあああつ……！」

「ええ……！！……？」

つまり明久をここに泊めてってことだよね……？

食事とかお風呂の準備とか何より心の準備が……ああ……っ……！！

「……まこ姉……？」

「何よ……？」

「ドンマイっ……！」

そう言うてにこやかにサムズアップ

心を読んだな……こいつ……

人事だと思っ……

「ね、ねえ二人とも…何があったのさ」

「明兄、あのね？」

「ん…？」

「玲さんがね。今日はここに泊まってきたさいだってさ」

「……………え？」

明久…そんな目で私を見られても困る…

「あと、減点50だって」

「そんなあああつ…！」

ホントに…どつしよ…

第35問 part2(どうしてこうなった...) (後書き)

彩「彩華と」 神「神哉の」

彩& amp ;神「戦後対談! !」

神「今回は短めです。というのも、冬休みに入ったので更新頻度が上がるからです! !」

彩「おお! ! !」

神「今後ともバカ天をよろしくお願いします! !」

神「さて、戦後対談だが...」

彩「明兄がお泊まりだって」

神「ホントに気楽だな...」

彩「これでまご姉と明兄がもっと仲良くなれば...」

神「なれば?」

彩「ふふ 秘密だよ」

神「ええ! ?」

彩「じゃあ、今回はここまで。また次回だよ」

神「勝手に締めるなあっ!!」

第35問 part3 幻想と現実の崩壊 (前書き)

新年明けましておめでとございます!!

冬休み開始からインフルエンザで寝込んでいたJACKです
皆さん今年もよろしくです!!

書き方を少し変えました

では本編へ…

新年早々、少しシリアスです

第35問 part3 幻想と現実の崩壊

Side Akihisa

「どうする…?」

「私に聞かれても…」

とある夕下がり。僕と真琴は困惑していた

「お泊まりお泊まり〜!!」

相変わらず、彩華ちゃんは無邪気だなあ

「部屋は私と彩の二つしかないし…ここに寝せるわけにもいかないし…」

そして相変わらず真琴は優しい

そういうところが良いんだけどね…?

「ちよつと明久?聞いている?」

「う、うん。聞いているよ?」

半分くらいは…

「じゃあさ。まこ姉と明兄が寝たら?」

「それは無理だ(よ)!!」

あ、ハモった…

「え…?何で?」

「僕(私)の命が危ないから…」

実際。一緒に寝たいのは山々なだけ

「バレなきゃ良いんじゃないの?」

「……………」

流石彩華ちゃんだ…。こつこつ簡単に僕の意志をねじ曲げようとするなんて…

「で、でも…そういうのはまだ…」

と、こつこつは煮え切らない様子我真琴

あ、それなら…

「真琴と彩華ちゃんが一緒に寝れば良いんじゃないかな?」

Side Out

「……………」

「あれ？僕なんか間違ったこと言った！？」

いや…間違っではないんだけど…ねえ？

それだと明久が泊まる意味がないって言うか…なんと言うか…

「ああもう！！明兄はまこ姉と寝たいの！？寝たくないの！？」

「い、いや…。ね、寝たい…けど…」

明久…私と寝たいって…

「まこ姉は！？」

「わ、私は…」

確かに私も…だけど…でも…

「まこ姉が寝ないなら、私が一緒に寝ちゃうよ！？」

「ええ…！？」

「あ、彩華！？本気…！？」

「もちろんだよ…！」

そう言った彩華の顔は少し赤みがかかっていた

「ぼ、ぼぼ…僕が…彩華ちゃんと…！？」

「明兄は…イヤ？」

「い、嫌なんかじゃ…ないけど…っ…！」

明久も困惑して…

私も…何が何だか分からなくなっていて…気付いたら…

「か、勝手にしたらいいじゃない…！」

部屋を…飛び出してしまうていた…

＼Side Ayaka＼

「真琴!？」

明兄の制止を振り切つて、まこ姉は部屋を出て行ってしまった
ちよつとふざけすぎた…かも…

「あ、彩華ちゃん…どうする…?」

でも…これはむしろチャンス…かも…

「あ、明兄…」

「ん?なあに?」

「私も…ね?」

「うん…?」

「明兄のこと…ね?」

「僕のことか…?」

「す、好き…なんだよ?」

直後、部屋の外で物凄い音が響いた

「ま、まこ姉!？」

＼Side Out＼

知らなかった…

いや、知っていたけど…知らないふりをしていた…

彼女は私の味方だと思っていた…

でも…違った…

私は無理をさせていただけだった…

彼女は、自分の我が儘に付き合ってくれてくれたただけだった…

ごめん…

彩華、本当にごめんなさい…

Side Akihisa

「まこ姉!!まこ姉っ!?!」

あの後、真琴は自分の部屋に閉じこもってしまった…

彩華ちゃんが呼びかけても…僕が呼んでも、返事はなかった…

「ごめん…なさい…」

「彩華ちゃん…?」

「あんな事…言うんじゃないかった…」

「……………」

少し前。居間でのあの告白…

それは、真琴にしか好かれていないと思っていた僕には、十分すぎるほどの衝撃だった…

「明兄…ごめん…なさい…」

目に涙を浮かべながら、彩華ちゃんが呟く

その声は弱々しくて…

「まこ姉にも…迷惑かけて…明兄にも…」

今にも折れてしまいそうで…

「うう…っ……………」

でも僕には…どうにもできなくて…

「ホントに…ごめんね…?」

僕は…それを止めることができなかった…

第35問 part3 幻想と現実の崩壊 (後書き)

神「後書きコーナー！今回は俺だけでいきます

まず…新年早々ごめんなさい！！

彩華の気持ちをハッキリさせなきゃいけないというつもりが…こんなシリアスで訳が分からない話になってしまいました…」

夜「……………」

神「夜御ちゃん…?」

夜「いえ……………」

「反対意見も覚悟です…」

感想・ご意見どんどんください

第36問 part 1 少女たちの追憶と少年の決意

Side Akihisa

いつの間にか、眠ってしまったらしい…

僕は、朝日に目を細めながら目を覚ました

いつの間に寝ちゃったんだろうか…？

水野家は、昨日までと打って変わり、静寂に包まれていた

「そういえば…真琴は…？」

今まで背中を預けていた扉に目をやる…

「真琴？」

返事はない…

「真琴…！！」

少し強めに呼びかけてみる

それでも、返事はなかった

「……………」

少し考え、ドアノブに手をかける

少し捻って押すと、あっけなく扉は開いた

部屋の中には…誰もいなかった…

「え…？真琴…？」

思わずそう呟く…けど、返事はなかった…

周りに目をやる。一度入ったことのあるその部屋に、一際目を引く

ものがあつた

「…手紙？」

いかにも女の子らしい真琴の机…その上に、一枚の手紙のようなもの

があつた

「まさか……………」

嫌な予感がして、慌ててそれを取る

そこには、真琴の字で、こう書かれてあつた

『これを見てるのが、明久なのか彩華なのかは分からないけど、これだけは言わせて

ごめん

ごめんなさい

私は、彩華の気持ちを踏みにじってしまった

私はそれを知って、何もできなかった

違う。しなかつたんだ

本当にごめんなさい

私は、姉として最低のことをしてしまった

明久へ

悪いけど、朝ご飯と弁当の用意はしておいたから、勝手に食べてちょうだい？

あと、戸締まりもよろしくね？私は少し、家を空けます』

「そんな……………」

真琴は…昨日からずっと…一人で抱え込んでいたんだ…

それなのに…僕なんかの心配をしてくれて…

「あれ…？二枚目…？」

見ると、裏にもう一枚紙があった

恐る恐る、それを見る

『彩華へ

明久と

』

見ると同時に、僕は部屋を飛び出していた

「彩華ちゃん！！彩華ちゃん…っ！！」

力一杯扉を開く

何故かこちらも、返事がなかった

「彩華ちゃん!!入るよ!?!」

嫌な予感がして、扉を開ける

案の定、扉はあっさりと開き…

中は、空っぽだった…

「彩華ちゃん…まで…?」

予想はしていた…

でも…現実になってしまっているなんて…

「そうだ…。置き手紙…」

真琴みたいに、彩華ちゃんも何か手がかりを残してくれてるかもしれない…

そんなことを考えながら、部屋を見回す

予想に反して、手紙はどこにもなかった…

「……………そうだ。居間とか…」

慌てて一階へ降りる

それは…すぐに見つかった

真琴が用意したであろう朝ご飯とお弁当の横に、ちよこんと置いてあった

可愛らしい…いかにも彩華ちゃんらしい可愛い便箋

僕はそれを手に取り、開いた

『まこ姉、明兄。ごめんなさい

二人はお似合いのカップルです

そんな二人の間に割って入るような真似をして、本当にごめんなさい』

こっちも…謝罪ばかりだった…

そして、こう締めくくられている

『少しだけ家を出ます
最後まで心配かけてごめんなさい
まこ姉、明兄 』

終わりは、全く一緒だった
二人とも…自分のせいだと背負い込んでしまっている
しかも、二人とも同じ気持ちを抱いている…
自分の感情を押し殺している…

それから10分経った
真琴の用意してくれた食事を食べ、簡単な身支度をして、家を出た
僕は…二人のために、僕ができることをするんだ…

〔Side Out〕

〔Another Side〕
とあるマンションの1室の前
そこに少女は立っていた
軽くボタンを押す
ピンポーンと軽快なチャイムが鳴り響く
少し待つと、インターフォンから声が響く
「はい。どちら様ですか？」
1拍置いて、彼女は答える
「水野真琴です…。玲さん…入れていただけますか…？」

ちょうど同じ頃、とある公園に、もう一人の少女はいた
もうとつくに学校の登校時間だ

そんな中、一人公園に佇む少女は、一際目を引いていた
しかし、誰も彼女に近づこうとする者はいない

そんな中、一人の少女が彼女に近づき、声をかける

「どうかしましたか？彩華さん。こんなところで……」

その声に顔を上げ、彼女は呟く

「夜御：さん……？」

少女 水野彩華は泣いていた

「どうしてこんなところで泣いているのですか……？」

もう一人の少女 夜御御零は尋ねる

その問いに、彩華は弱々しい声でこう答えた

「助けて………」

と

〈Side Out〉

第36問 part 1 少女たちの追憶と少年の決意 (後書き)

神「こんなシリアスの連続で大丈夫かなあ…

こんにちは。JACKです

今回は、1話丸々シリアスな内容でしたが、いかがだったでしょうか？

私自身、シリアスな話を書くのは慣れていないのですが…

書き方も安定しませんね…明久のキャラも原作とは離れてきてますし…

まあ、こんなダメ作者ですが、今後とも『バカ天』をよろしくお願ひします

「次回、明久が大活躍…？」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0301n/>

バカと天使と超能力者

2012年1月6日13時48分発行